

私たちへの福音



千田俊昭 著

「私たちへの福音」

千田 俊昭・著

目 次

- 「まえがき」 … 4
- 推薦のことば … 5
- 書評・竹村竹生 … 5
- 1.「恐れから喜びへ」(ルカ1・8-25) … 7
- 2.「平和の主の誕生」(ルカ2・1-22) … 11
- 3.「神の時が満ちる」(ルカ2・21-38) … 14
- 4.「神の子の平安」(ルカ2・40-52) … 17
- 5.「我ら何をなすべきか」(ルカ3・1-38) … 20
- 6.「荒野の試みの時に」(ルカ4・1-13) … 24
- 7.「イエスの招き」(ルカ5・1-11) … 28
- 8.「癒しときよめ」(ルカ5・12-26) … 32
- 9.「新しいぶどう酒と皮袋」(ルカ5・27-39) … 35
- 10.「安息日は誰のため？」(ルカ6・1-11) … 39
- 11.「主から選ばれた人々」(ルカ6・12-16) … 43
- 12.「幸いな人は誰？」(ルカ6・20-49) … 47
- 13.「裁く心からの解放」(ルカ6・37, 38) … 50
- 14.「敵を愛する？」(ルカ6・35, 36) … 52
- 15.「ただ御言葉を下さい」(ルカ7・1-10) … 55
- 16.「安心して行きなさい」(ルカ7・36-50) … 58
- 17.「四つの土地のたとえ」(ルカ8・1-15) … 62
- 18.「湖上の嵐」(ルカ8・22-24) … 65
- 19.「癒し、生かすキリスト」(ルカ8・40-56) … 68
- 20.「旅路の必需品」(ルカ9・1-6) … 71
- 21.「人生の荒野にて」(ルカ9・10-17) … 74
- 22.「ペテロの信仰告白」(ルカ9・18-27) … 77
- 23.「誰が一番？」(ルカ9・37-48) … 82
- 24.「敵か、味方か？」(ルカ9・49-56) … 86
- 25.「弟子の覚悟」(ルカ9・57-62) … 89
- 26.「私の隣り人とは？」(ルカ10・25-37) … 92
- 27.「なくてはならないもの」(ルカ10・38-42) … 94
- 28.「天のアバ」(ルカ11・1-13) … 97
- 29.「神の指」(ルカ11・14-28) … 100
- 30.「奇蹟にまさるもの」(ルカ11・29-32) … 104
- 31.「光の中を生きる」(ルカ11・33-36) … 107
- 32.「生きた信仰」(ルカ11・37-54) … 110
- 33.「パリサイ人のパン種」(ルカ12・1-10) … 114

- 34.「本当の富」(ルカ12・13-34) … 117
- 35.「平安の基い」(ルカ12・35-59) … 120
- 36.「実を結ぶ神の木」(ルカ13・1-21) … 123
- 37.「狭き門より入りなさい」(ルカ13・22-35) … 126
- 38.「安息日への祝福」(ルカ14・1-11) … 129
- 39.「神には何でもできる」(ルカ14・25-35) … 132
- 40.「迷いからの解放」(ルカ 15・1-32) … 135
- 41.「良い管理人」(ルカ16章) … 138
- 42.「赦し、赦されて生きる」(ルカ17・1-10) … 141
- 43.「神の国はいつ、どこに」(ルカ17・20-37) … 144
- 44.「針の穴を通るラクダ」(ルカ18・18-30) … 147
- 45.「ザアカイ物語」(ルカ19・1-10) … 150
- 46.「さあ、やってみなさい」(ルカ19・11-27) … 154
- 47.「祝福される祈りの家」(ルカ19・29-48) … 157
- 48.「キリストの権威」(ルカ20・1-26) … 160
- 49.「生きている者の神」(ルカ20・27-40) … 164
- 50.「感謝の献げ物」(ルカ21・1-4) … 166
- 51.「終わりへの備え」(ルカ21) … 169
- 52.「最後の晩餐」(ルカ22・1-20) … 172
- 53.「挫折の先を見通すイエス」(ルカ22・21-34) … 176
- 54.「ゲッセマネの祈り」(ルカ22・39-46) … 180
- 55.「人が神を裁く？」(ルカ22・63-23・25) … 183
- 56.「パラダイスへの門」(ルカ23・26-49) … 187
- 57.「よみがえりの命」(ルカ23・50-24・43) … 192
- 58.「未完の福音書」(ルカ24・36-53) … 196
- 「あとがき」 … 199

まえがき

イエス・キリストの生涯は、新約聖書の四つの福音書に書かれています。私たちはその中でも、特に「ルカによる福音書」を中心にして、公生涯と呼ばれる最後の三年間をご一緒に辿りたいと思います。なぜルカ福音書なのかといいますと、著者ルカが旧新約聖書六十六巻中、唯一のユダヤ人ではない異邦人著者だからです。

「異邦人」というのは、あまり聞き馴れない言葉かもしれませんが、「異邦」とは「外国」という意味ですが、聖書の中で「異邦人」という言葉は単なる外国人とは違う意味合いで使われています。辞典によれば「ユダヤ人が神の選民であるという誇りから他民族・他国民を区別して呼んだ言葉」と説明されています。ですから、日本人も異邦人に当たるわけですが、この言葉には「神の選民であるというユダヤ人の誇り」との語感が加わるのです。聖書の民ユダヤ人は、自分たちが特別に神様から選ばれた民族であって、他の外国人はそうではないという見方をしていました。しかし、イエス・キリストがそのような民族区別の障壁を取り除いたのです。

ルカ伝は「テオピロ閣下」への献辞で始まっています。この人がどのような人物だったのかは学者の間にも様々な意見があって、よく分かっていません。ただ「閣下」という称号があるのでローマの高官であったらしいことは分かります。もしかしたら、この人がルカによる福音書の出版を援助した人ではなかったかと考える人もいます。

ルカ伝には、他のマタイ伝、マルコ伝、ヨハネ伝にはない記事や異邦人が多く登場します。たとえば、当時ひどく差別されていたサマリア人や、帰ってきた放蕩息子の譬えなど、全体の四割以上にルカだけが伝える記事があるのです。また、パウロの書いた「コロサイ人への手紙」4章14節に「愛する医者ルカ」と言われているように、ルカは医者でした。しかもパウロが「愛する」と言っていることからもうかがわれるように、パウロの伝道によってクリスチャンになった異邦人医師だったと言われています。ルカ伝には、一方で当時の医学用語も使われていますが、他方、病気などで苦しむ人々についての描写には、ルカの優しい眼差しと配慮が随所に表れています。

それでは、異邦人による異邦人のための「ルカ福音書」を導き手として、イエス・キリストという、神様からの良き知らせをご一緒に読み始めることにいたしましょう。

2010年6月 千田 俊昭

推薦のことば

大阪聖書学院長 岸本大樹

敬愛する千田俊昭牧師が、『私たちへの福音』を出版されました。千田牧師は仙台にお住まいですが、スカイプを通じて大阪聖書学院の朝のチャペルでメッセージを届けてくださっています。そこにはいつも神の御言葉の新鮮な発見と福音の豊かな励ましがあります。この『私たちへの福音』を一読して、チャペルで接する千田牧師のメッセージに触れたような思いがしました。

日本でも福音書の説教集や解説書はたくさんありますが、『私たちへの福音』はその中でも非常にユニークで、親しみやすく、読みやすい一つとなっています。千田牧師のやさしさが滲み出ているような語り口で、豊富な例話が用いられていて、しかも福音の要点はしっかりと押さえられています。

日本基督教会富士見町教会牧師であった植村正久が説教者として心がけたことの一つは、キリストを紹介することであったと言われてしています。救いを上手に説明することよりも、キリストご自身を紹介し、その恵みを真正面から伝える説教です。『私たちへの福音』においても、独善的な信仰の押し付けなどがなく、キリストご自身が紹介され、その恵みが真正面から伝えられています。皆様に千田牧師の『私たちへの福音』を推薦させていただきます。これを読んで、キリストの恵みを味わってください。

◆『私たちへの福音』に触れて…

「御言葉に押し出されて…」 竹村竹生

私は今回の出版を千田先生ご夫妻の長年の知人として、また主にある友人として心より喜んでおります。

本書の企画の趣旨はどういうものか。それは「あとがき」にもあるように、本書が「学究的専門書や釈義よりも、具体的で身近な事柄として福音を読みたいとの切実な思いからの要望」に応えるために著されたことです。平易な解説に加え、ウィットに満ちた例話が豊富な本書は、聖書の御言葉が今を生きる私たちへの生きた福音となっていることを捉え、福音の核心を余す所なく解き明かしています。その意味で本書の企画の趣旨は十分に達せられ、題名の『私たちへの福音』に相応しい内容の書籍となっているでしょう。

と同時に、私はこの『私たちへの福音』が、千田牧師ご本人だけでなく、彼を支え続けて共に歩んだ奥様祥子姉のお二人の生きた信仰の証の書となっていることをどうしても見逃す事が出来ません。例話の多くにもその生きた信仰の証が用いられています。

私にはどうしても忘れられない思い出があります。それは私たち夫婦が千田牧師と初めてお会いしたときの事です。上巻「3、神の時が満ちる」には神学校を卒業し、一年のインターンシップも終えて、次にどこに行ったらよいでしょうかと主に祈り求めていたとき、「今あなたと、この全ての民とは、共に立って、ヨルダンを渡り、私がイスラエルの人々に与える地に行きなさい。」(ヨシュア1・2)との聖書の御言葉に押し出されました。

(一行の空白)

ひとまず仙台にある私の母教会に行ったところ、…(以下本文続く)と書かれていますが、実はただ漠然と仙台を目指して出掛けて行ったのではなく、一行の空白部分には九州を発ち、途中あちら

こちらの教会、知人、友人を訪ねて、伝道地を探し、御心を訊ね求める旅があったのです。

そして千田牧師ご夫妻は私たちの所にも訪ねて下さいました。牧師夫人の祥子姉と私たち夫婦は同じ教会に所属した間柄、また彼女は私の家内を信仰に導いて下さった方でもあります。千田牧師ご本人とはこのとき初めてお会いしました。千田牧師ご夫妻から今までの経緯をお伺いしたところ、「伝道地を求めて、九州から北上してこの京都まで来ました。このまま旅を続け、どこにも開拓伝道する任地が見つからなければ仙台まで行くことになると思います。」とのことでした。「どこに行くか知らないで、出掛けるってまるでアブラハムそうですね。」とお応えしつつ、御言葉に押し出され、ただひたすら神様に従い歩む姿に深い感銘を受けたものでした。

時に主はアブラムに言われた、「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。」創世記12・1(口語訳)

「39、神には何でも出来る」の中での証は圧巻で、神様への全き信頼をおいたお二人の歩みの記録として燦然と輝きを放っていると思います。これらの証を読む誰もが、「確かに主は今生きて働いておられる」ことへの大きな感動を覚えるのではないのでしょうか。そのような証の数々が、この著作を大きく引き立てています。

宣教地を求める千田ご夫妻が京都に住む私たち夫婦を訪ねてくださった時、祥子姉が言いました。「一緒に祈りましょう。出来たら、みんなの手をつないで。」私たち四人は手をつないで、開拓伝道の任地が与えられるようにと一人ずつ真剣に祈り合いました。正直言って後にも先にもこのように手をつないで祈った経験は私にはありません。神様に全信頼をおきつつも、将来の不安があるいはあったのかも知れません。その後、千田牧師がきっぱりと言われました。「ここは私たちの目的地ではないと思います。私たちはもう少し先に進みます。」確かに私たちの住んでいる所(宇治市)には歩いて通える教会だけでも四つもあり、ここでの開拓伝道を進言出来る状況にはありませんでした。そして、千田ご夫妻は車で次の目的地に向かわれたのです。その後もきつと多くの祈りが全国各地で持たれた事と思いますが、何日かして仙台から連絡が入りました。「導きも与えられたので、たぶんこの仙台で開拓伝道を始める事になると思います。」とのことでした。千田牧師の故郷の仙台ならば、何かにつけて好都合かも知れないと私たちは安堵の胸を下ろしたものです。あれからもう20年が経過したのですね。感慨深いものがあります。「3、神の 때가満ちる」では、神様は仙台に、まるでアンナのような方を備えて下さり、開拓伝道の礎となって下さったことが記されています。まさに「主の山に備えあり」の御言葉の通りであります。

それでアブラハムはその所の名をアドナイ・エレと呼んだ。

これにより、人々は今日もなお「主の山に備えあり」と言う。(創世記22・14)

私はこの書が多くの方々に愛読される事を心から願ってやみません。実はこの『私たちへの福音』上下巻を千田牧師から私たち夫婦はプレゼントされた時、こんなメッセージが添えられていました。

「OBS出版から私の書いた『私たちへの福音』が出ましたので差し上げます。楽しんでいただければ幸いです。」そうなのです。この本はしかめ面して読む本ではなく、楽しんで読む本なのです。

「それでは異邦人による異邦人のための『ルカ福音書』を導き手として、イエス・キリストという神様からの良き知らせを御一緒に読み始めることにいたしましょう。…」(著者まえがきより)

1. 「恐れから喜びへ」 (ルカ 1:8-25)

クリスマスは、イエス・キリストの誕生をお祝いする喜びの時です。このキリスト聖誕を巡る人々に共通するのは、意外なことに喜びではなく、恐れなのです。たとえば、御使いは祭司ザカリヤに「恐れるな」と呼び掛けましたし(ルカ1:12)、キリストの母となる乙女マリヤにも「恐れるな」と言って受胎が告知されました(ルカ1:30)。また羊飼いたちに救い主の誕生を告げる時にも御使いは「恐れるな」と呼び掛けました(ルカ2:10)。さらに、時の王、ヘロデは新しい王誕生の噂を聞いて「恐れ惑った」とあります(マタイ2:3)。このように「恐れるな」という言葉がたくさん出てくるのがこの聖誕前後なのです。

私たちが毎日の生活で様々な恐れや不安をいただきます。たとえば健康のこと、お金のこと、仕事、家庭、将来のこと、人間関係、事故、災害、老後等々。悩みや不安、恐れの種類は尽きることがありません。キリストの誕生を聞いた人々も、まず恐れをいただきましたが、その多くはやがて真の喜びを知ることになります。この聖書箇所を通して、私たちはどのようにすれば恐れではなく、真の喜びに生きることができるのかということについて、主イエス・キリストの先駆けとなった、バプテスマのヨハネの両親、ザカリヤとエリサベツ夫婦に起きた出来事を通して学びましょう。ザカリヤとエリサベツ夫婦について、簡潔に紹介されています。

「ふたりとも神のみまえに正しい人であって、主の戒めと定めとを、みな落度なく行なっていた」(ルカ1:6)

これはすごいことです。なぜなら、自分の胸に手を当ててみて、「私は神様の目から見て正しい生き方をしている」とか「私は神様の戒めと定めとを、みな落度なく行なっている」と、いったい誰が言えるでしょうか？しかしザカリヤ夫婦はそうだったと聖書が書いているのですから、二人の信仰がどんなに素晴らしいものだったかがうかがわれます。さぞかし祝福された人生を送っていることだろうと思うと、次の節にはこう書かれています、

「ところが、エリサベツは不妊の女であったため、彼らには子がなく、そしてふたりともすでに年老いていた」。

子宝に恵まれないことは、古来、洋の東西を問わず神様に祝福されていないことと思われてきました。

さて、夫の祭司ザカリヤは籤でその年、神殿で香を焚く当番に当たったと書かれています(ルカ1:9)。これは生涯に一度あるかないかの機会です。この当番に当たった人は、民のために神殿で祈りをすることが定められていました。その公の祈りは民数記6:23-27 に主なる神からモーセに伝えられた言葉として、どう祈るべきかが定められていました。

**「アロンとその子たちに言いなさい、
『あなたがたはイスラエルの人々を祝福して
このように言わなければならない。
「願わくは主があなたを祝福し、あなたを守られるように。
願わくは主がみ顔をもってあなたを照し、あなたを恵まれるように。
願わくは主がみ顔をあなたに向け、あなたに平安を賜われるように」』
こうして彼らがイスラエルの人々のために、
わたしの名を唱えるならば、わたしは彼らを祝福するであろう」。**

ザカリヤの心は複雑な思いだったのではないのでしょうか。なぜなら、祝福されていないと思われてい

た自分が人々のために祝福を祈る当番に当たったのですから。しかし、この祈りの時に御使いが現れ、驚くべき預言を告げるのです。

**「恐れるな、ザカリヤよ、あなたの祈りが聞き入れられたのだ。
あなたの妻エリサベツは男の子を産むであろう。その子を
ヨハネと名づけなさい」**（ルカ1・13）

ここで御使いは三つのことを告げています。一つ目は「恐れるな」ということ、二つ目は「あなたの祈りが聞き入れられた」ということ、三つ目は「この子をヨハネと名付けなさい」ということです。

この御使いの言葉には豊かな意味が含まれています。まず、「恐れるな」という言葉から、ザカリヤが御使いを見て恐れたことがわかりますが、人はどのような場合に恐れるのでしょうか？

人生には三つの坂があるということを聞きました。上り坂と、下り坂、それにマサカだというのです。なるほど私たちの人生にはこのような坂がたくさんあります。下り坂やマサカの時、たとえば突然の事故や災難、病気、不幸などの時に私たちは恐れます。そして、キリスト聖誕の時は、まさしくこのマサカの連続でした。ザカリヤへのヨハネ誕生預言、マリヤの処女懐胎、ヘロデ大王にとって寝耳に水の新しい王の誕生、羊飼いたちにキリストが馬小屋で生まれたとの御告げ。このような時に人がいぶかたり恐れたりするのは当然です。では、上り坂ではどうでしょうか。実は、物事が順調に行っている時でさえも人は恐れるのです。なぜなら失敗を恐れるからです。そうすると私たち人間は人生のあらゆる局面で、いつも恐れていることになります。

なぜ人間はこんなに恐れるのかということについて、十七世紀フランスのモラリスト、ラ・ロシュフーコーは言っています。「我々は生涯の様々な年齢に全くの新参者としてたどり着く。だから、多くの場合、いくら年をとっても、その経験においては経験不足なのである」。人生は未経験の事柄の連続だから人は恐れるというのです。なるほどと思わされますね。ただ、だからと言って「人間とは恐れる動物だ」と悟ったようなことを言ったとしても、それで襲い来る恐れや不安の念から解放されるわけではないでしょう。何しろ、よい知らせを告げる御使いに出会った時でさえ、人々は恐れ惑ったのですから。だから御使いは、まず最初に「恐れるな」と告げなければならなかったのです。

次に、二つ目の「あなたの祈りが聞き入れられたのだ」ということ。ザカリヤが何を祈っていたのかというと、先ず公けの勤めとして人々のために祈りをしたはずですから、この御告げがその祈りに対するものであるなら、民への祝福の祈りが聞かれたということで、ザカリヤは驚きはしても、別に恐れることはなかったでしょう。それなら、これまで長い間祈り続けてきた、「子供が与えられますように」との祈りではないかと思う人がいるかもしれません。でもどうでしょうか、ザカリヤ夫婦は既に老年になっていたとあり、子供が生まれるはずのない年齢になっているのです。だからここで御使いに「あなたの祈りが聞き入れられたのだ」と言われた時、まさか自分たちへ、子供のことを言われるとは思ってもよらなかったのではないかと思うのです。むしろ長い間祈ったにもかかわらず、もうその祈りをある時からやめてしまっていたのではないのでしょうか。「エリサベツ、この祈りは聞かれなかったんだ。もう祈るのをやめよう」と言って、とうの昔にやめていた祈りだったはずですが。しかし御使いは言いました、

**「恐れるな、ザカリヤよ、あなたの祈りが聞き入れられたのだ。
あなたの妻エリサベツは男の子を産むであろう。」**

これは驚くべき宣言で、まさしくマサカです。しかも「その子をヨハネと名づけなさい」と命名すべき名前まで告げられているのです。ここに見ることができるのは、人は諦め忘れたとしても、神様は私たちの祈りを決して忘れないということです。

13節にザカリヤ、エリサベツ、ヨハネという三つの名前が挙げられていますが、それぞれの名前の意味を調べてみると、興味深いことが分かってきます。ザカリヤという名には「神は覚えている」という意味があり、エリサベツという名には「私の神の誓い」という意味が、そしてヨハネには「神の慈しみ」という意味があります。これら三人の名前を組み合わせると、「私の神は誓いを覚えて忘れず、慈しみをもたらず方」という一つのメッセージが浮かび上がってきます。この家族の名前は神様がどのようなお方かということを表しています。そしてこれこそ、神様がまさに実現しようとしていることだったのです。

生まれて来るヨハネについては三つのことが預言されています。第一は15節の言葉で「彼は主のみまえに大いなる者となり、ぶどう酒や強い酒をいっさい飲まず、母の胎内にいる時からすでに聖霊に満たされている」。第二は16節で「イスラエルの多くの子らを、主なる彼らの神に立ち帰らせる」。第三が17節で「彼はエリヤの霊と力とをもって、みまえに先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に義人の思いを持たせて、整えられた民を主に備える」。生まれてくる子に、こんなにすばらしい三つのことが預言されたのです。預言とは神様の誓いであって、確実な約束だということです。ところがザカリヤは、18節に書かれているような、とんでもないことを言うてしまうのです。

**「どうしてそんな事が、わたしにわかるでしょうか。
わたしは老人ですし、妻も年をとっています」。**

それに対する御使いの言葉が19節です。

**「わたしは神のみまえに立つガブリエルであって、
この喜ばしい知らせをあなたに語り伝えるために、
つかわされたものである。時が来れば成就する
わたしの言葉を信じなかったから、あなたは口が
きけなくなり、この事の起る日まで、ものが言えなくなる」。**

その途端に、ザカリヤは口がきけなくなってしまう。

いったい何が起きたのでしょうか。本人も、また民衆も分からなかったということが21節以下からわかります。このザカリヤの言葉は一見すると、御使いから受胎告知を受けたマリヤの言葉と似ています。マリヤはこう言いました、

**「どうして、そんな事があり得ましようか。
わたしにはまだ夫がありませんのに」**(ルカ1:34)。

似たような言葉なのに、どうしてザカリヤだけにこのようなことが起きたのでしょうか。ここで聖書はとても大切なことを私たちに伝えているのです。ザカリヤの言葉の意味に最も近いのは、塚本虎二訳です。

**「(子をさすかる)『その証拠は何でしょうか。』
わたしは老人で、妻ももう年を取っております。」**

つまり、ザカリヤは御使いの言葉だけでは信じられなかったため、証拠を求め、その結果、言葉を信じなかったザカリヤは言葉を失うという証拠を与えられたのでした。これに対してマリヤの言葉を直訳すると「どのようにしてそのことは起きるのでしょうか」、つまり、マリヤは御使いの言葉を信じ、それが、夫のない自分にどのようにして起きるのですかと尋ねたのです。御使いの答はこうです。

**「聖霊があなたに臨み、いと高き者の力があなたをおおう
でしょう。それゆえに、生れ出る子は聖なるものであり、
神の子と、となえられるでしょう。あなたの親族エリサベツも
老年ながら子を宿しています。不妊の女といわれていたのに、**

**はや六か月になっています。神には、なんでもできないことは
ありません」。(35-37 節)**

そこでマリヤはこうお答えしたのです。

「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように」

マリヤはまず御告げを信じ、御使いの言葉に平安を得たのです。このマリヤの言葉「お言葉どおりこの身に成りますように」は、やがて主イエスが十字架の前にゲッセマネの園で捧げた祈りの言葉「しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください」(ルカ22・42)が思い合わせられます。

マリヤとザカリヤの言葉の違いは微妙に見えますが、実はとても大切なことを私たちに告げています。マリヤは戸惑いながらも全能の神を見上げて信じました。しかし、ザカリヤは全能の神ではなく、惨めな自分を見て、御告げを信じることができずに証拠を求めてしまったのです。自分を見たら私たちは神様を信じられなくなります。しかしそこで、マリヤのように主を見上げてその御言の約束を信じていくことが大切なのだということを心に留めたいと思います。

主の御心と御言に私たち自身をゆだねていく時、私たちが恐れから解放され、主の栄光の御業を目撃してその喜びにあずかることができるのです。なぜなら私たちの神様は「誓いを覚えて忘れず、慈しみをもたらす方」だからです。



2. 「平和の主の誕生」 (ルカ2・1-22)

そのころ、全世界の人口調査をせよとの勅令が、皇帝アウグストから出た。これは、クレオパトラがシリアの総督であった時に行われた最初の人口調査であった。人々はみな登録をするために、それぞれ自分の町へ帰って行った。ヨセフもダビテの家系であり、またその血統であったので、ガリラヤの町ナザレを出て、ユダヤのベツレヘムというダビテの町へ上って行った。それは、すでに身重になっていたいいなづけの妻マリヤと共に、登録をするためであった。ところが、彼らがベツレヘムに滞在している間に、マリヤは月が満ちて、初子を産み、布にくるんで、飼葉おけの中に寝かせた。客間には彼らのいる余地がなかったからである。

この聖書箇所は12月のクリスマスに読まれることが多いのですが、近年の研究で、キリストの誕生は十二月ではなく九月頃だったのではないかとされています。その理由の一つは、8節に「この地方で羊飼たちが夜、野宿しながら羊の群れの番をしていた」とありますが、パレスチナの十二月も寒い季節で、すでに羊たちは秋の高原から麓の牧場に移されており、この時期に羊飼たちが野宿していたはずがないからです。それでは、キリストが誕生された時の時代状況から見ましょう。

「そのころ、全世界の人口調査をせよとの勅令が、皇帝アウグストから出た」(1節)

この皇帝の名前は英語の8月(August)になっています。ローマ帝国は彼以前には七百年、彼以降は四百年続きますが、ローマ千百年の歴史の中で、その黄金時代を築いた皇帝です。アウグストは自分の養父であるジュリアス・シーザーの名前を七月(July)にして、自分自身を八月に置いています。元の名をオクタビアヌスと言いましたが、「崇高なる者」という意味のアウグストの称号を元老院から贈られ、それまでの共和制に終止符を打ち、帝政をしいて初代のローマ皇帝(在位・紀元前27～紀元14)となります。

当時、地中海世界の中心地でこのような事が起きていたときに、その片隅のパレスチナでは、ヨセフとマリヤのもとにキリストが生まれようとしていました。二人は婚約中でしたから、マリヤが聖霊によって身ごもったのであるにもかかわらず、事情を知らないその土地の人々からは、未婚の妊娠として冷たい視線の中に辛い時を過ごしていたことでしょう。その上、二人はアウグストの出した勅令のために、直線距離でも百キロメートル以上ある南部のベツレヘムという町へ、住民登録のために長旅をしなければならなかったのです。身重のマリヤにとって、これはどんなにか辛い旅だったと思いますが、ヨセフはマリヤを守るために一緒に連れて行くことに決心したのでしょう。

ところが、ベツレヘムに着いてみると、折からの帰郷者でどこもいっばいで、泊まる場所がありません。マリヤは家畜小屋で臨月を迎えたのです。誰でも子供の出産にはできるだけ快適な場所を確保しようとするはずですが、天の父がご自分の御子をこの世に送るに当たって選ばれた場所が、なんと家畜小屋であり、また、動物の飼葉桶が揺り籠代わりでした。人間的に見れば、実に貧しい状況の中で、救い主が生まれてきたのだということを聖書は伝えています。

さて、御子イエスが生まれた時、羊飼たちに御使いが現れ、このように言いました。

**「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、
あなたがたに伝える。きょうダビテの町に、あなたがたのために
救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである」**(10、11 節)

当時、羊飼たちは社会的にさげすまれていました。というのは、その職業が、言わば3K(きつい、きたない、くさい)だったからです。しかしそのような彼らの所に救い主の誕生を告げる御使いが訪れて、この喜ばしい知らせを伝えたのです。御使いの言葉は更に続きます。

**「あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見
るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである」**(12 節)。

神の子キリストの誕生の場としてはあまりにも不似合いな、家畜小屋の飼葉桶の中に救い主が生まれた、と告げるのです。

この御告げにはどのような意味があるのでしょうか？ある聖書学者はこの時に現れた天の軍勢が神を讃美した歌の中の「平和」という言葉が鍵になると言います。

**するとたちまち、おびたしい天の軍勢が現れ、御使と一緒にあって
神をさんびして言った、「いと高きところでは、神に栄光があるように、
地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」**(13-14 節)。

「平和」には三つの意味があります。第一は社会的平和であり、戦争のないこと、言い替えれば「和平」ということです。確かにアウグスト皇帝によって有名な「ローマの平和」がもたらされました。ラテン語で「パックス・ロマーナ」と呼ばれる平和は約二百年間も続きました。これは人間の歴史が始まって以来、かつてなかったことです。

ではパックス・ロマーナとはどのような平和だったのでしょうか。アウグストは三つのことを遺言したといえます。一つは、ローマ市民権を簡単に売るなということ。つまり市民権取得を制限し、奴隷を簡単に解放するなということでした。二つ目は、領土をこれ以上拡張しようとするなということ。三つ目は、官吏に登用するときは身内の者ではなく、有能・優秀な者だけにせよ、ということでした。

さすが賢帝の言葉だと思われるでしょうか。しかしこれは神の国では正反対なのです。なぜなら、神の国の市民権は制限すべきものではなく、すべての人に開かれています。また、領土についても、神の御支配が全地に及んでいることをむしろ全ての人々に知らせる必要があります。そして、有能・優秀な人だけが救われるのであれば、神の国に入る人はきわめて限られた数になることでしょう。アウグストによってもたらされたパックス・ロマーナは、このように自分たちが今持っている利益を独占することによってのみ実現され維持されるものだったのであり、神の国の平和とは全く異なっていたことがわかります。

二番目の平和は、心の「平穏さ」です。衣食住が満たされると、人の心はひとまず平穏になります。しかし、それで私たちは本当に平和を得ていることになるのでしょうか？衣食住はそのままでは、やがて尽きる時が来ます。そうならないようにと、ともすれば人間は奪い合います。このように、物質的に満たされただけの平穏さは一時的なものであって、永続的なものではありません。

私たちには第三の平和、つまり魂の「平安」が必要であり、それこそ、いま私たちの世界に来られ

イエス・キリストがもたらそうとしておられる平和なのです。この魂の平安は罪の赦しによってのみ得られるのであり、これこそ天の軍勢が讃美した歌の中にある「平和」なのです。

**「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、
み心にかなう人々に平和があるように」(13-14 節)**

しかし実は、私にはこの「罪の赦しによる魂の平安」ということが、長い間の謎でした。私が初めて教会の礼拝に行ったのは中学校に入った年のことですが、それは通っていた英語塾が教会だったからです。思春期の様々な悩みが私の心を暗闇のように覆っていて、教会に行けばそれが吹き払われるのではないかと考えたのです。塾で英語を学ぶ生徒の数は多かったのですが、礼拝出席者はほとんどの場合私一人で、牧師と私のマンツーマン礼拝でした。

中学・高校と6年間教会に通った結論は、十字架も復活もナンセンス、神様は罪を罰する恐ろしい方だ、ということでした。だから進学のため故郷を後にしたときの思いは「恐ろしい神様、もう結構！」でした。ところが入学したミッション系大学の図書館の壁にかけてあった聖句は「**主を恐れることは知識のはじめ**」(箴言1・7)でした。「また『恐れる』かぁ…」とショックを受け、チャペル礼拝が毎朝あったのに、在学中ほとんど出席することはありませんでした。

やがて卒業して就職し、6年が過ぎました。近くの教会で礼拝後、無料語学教室があるということを知り、礼拝に再び出席するようになりました。2年が過ぎようとする頃、大変な苦悩に直面しました。ギックリ腰を患って歩けなくなり、風邪と借金苦、さらにひどい精神的落ち込みが一挙に襲ってきたのです。もがけばもがくほどズルズルと奈落の底に落ちていくような、まるで蟻地獄の苦しみが続きました。そのとき「**何事でもわたしの名によって願うならば、わたしはそれをかなえてあげよう**」(ヨハネ14・14)という主イエスの言葉が思い出されました。藁をも掴む思いで「神様、助けて下さい。イエス様のお名前によってお願いします」と祈った途端、あのズルズルと落ちる感覚が止まって平安が与えられたのです。その平安の中で、今度は自分がそれまで犯してきた様々な罪が走馬燈のように思い出されました。「今となっては償えない！」という息苦しさがいっぱいになったとき、十字架の主イエスの言葉が響いてきたのです、「**父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです**」(ルカ23・34)。

初めて十字架が分かった瞬間でした。そして、私の罪のために身代わりとなって下さった主イエスが復活したということこそ、この方がキリストであることの比類無い証拠であり、この全ての事を為してくださった神は愛の方だと信じる事が出来たのです。主イエスは言われました。

**「健康な人には医者はいらない。いるのは病人である。
わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を
招いて悔い改めさせるためである」(ルカ5・31、32)。**

イエス・キリストは暗闇をさまよう思いで生きている私たちに、真の平和と平安をもたらすために、この世に来られたのです。

3. 「神の時が満ちる」 (ルカ2・21-38)

八日が満ちて幼子に割礼を施す日となり、幼子はイエスという名で呼ばれることになった。胎内に宿る前に御使いがつけた名である。さて、モーセの律法による彼らのきよめの期間が満ちたとき、両親は幼子を主にささげるために、エルサレムへ連れて行った。——それは、主の律法に「母の胎を開く男子の初子は、すべて、主に聖別された者、と呼ばれなければならない」と書いてあるとおりであった——また、主の律法に「山ばと一つがい、または、家ばとのひな二羽」と定められたところに従って犠牲をささげるためであった。(ルカ2・21-24)

「時が満ちる」という表現は聖書全体では24回ほど出てきます。これはルカが好んで使った表現です。というのは、そのうちの22回が「ルカによる福音書」と、ルカ作とされる「使徒行伝」の中に出てくるからです。たとえば、今回の聖書箇所では2章21節にあります。

「八日が満ちて幼子に割礼を施す日となり、幼子はイエスという名で呼ばれることになった。胎内に宿る前に御使いがつけた名である」

どうして彼はこの表現を好んだのでしょうか？ それはルカが医者だったことと関係があるように思われます。なぜなら、病気を治すのは医者ではなく、神様だということを医者自身がよく知っているからです。私はこのことをあるお医者さんから聞きました。その方は医学部で勉強を始めた頃に、「医者は痛みを抑えたり、薬を使って治るのを手伝えることはできるが、治すことはできない。治すのは神様だ。このことをよく心に留めておくように」と教授から言われたと話しておられました。「伝道者の書」には、神の時について伝道 3・1 以下に次のような言葉があります。

**天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある。
生るるに時があり、死ぬるに時があり、植えるに時があり、
植えたものを抜くに時があり、殺すに時があり、いやすに時があり…**

そして22 節にも「満ちる」という言葉が使われています。

**さて、モーセの律法による彼らのきよめの期間が満ちたとき、
両親は幼子を主にささげるために、エルサレムへ連れて行った。**

このようにして神の時が満ち、両親に抱かれた幼な子イエスが神殿に上ったとき、二人の老人、シメオンとアンナに出会いました。生まれてまだ四〇日ほどの主イエスを見たとき、彼らは聖霊によってこの幼子こそ救い主キリストだということを告げられたのです。聖霊の語りかけを聞くことのできた二人はどのような人だったのでしょうか？ シメオンについては次のように紹介されています。

**その時、エルサレムにシメオンという名の人が出た。この人は
正しい信仰深い人で、イスラエルの慰められるのを待ち望んでいた。
また聖霊が彼に宿っていた。そして主のつかわず救主に会うまでは
死ぬことはない、聖霊の示しを受けていた。(ルカ2・25、26)**

シメオンの人となりについて、3つのことが書かれています。第一に「正しい」人だったとあります。完全な人だったとか、人格が高潔だったとかではなく、正しい人だったとはどのような意味でしょうか。聖書が「正しい」と言うとき、それは人間的な眼から見てのことではなく、神との関係が正しいという

ことを意味しています。ですから、いつも主なる神と共に歩んでいた人だったということです。第二に、「信仰深い人」でした。優秀であるとか、頭がいいとか、高い地位にあるというのではなく、全知・全能・全愛の神を信じ、いつも神を仰ぐ人だったということです。第三に、「イスラエルの慰められるのを待ち望んでいた」人だったとあります。自分だけが平安であれば良いというのではなく、国中のすべての人に平安が来ることを心から待ち望んでいた人だったということがわかります。次に女預言者アンナが紹介されます。

**アセル族のパヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。
彼女は非常に年をとっていた。むすめ時代にとついで、
七年間だけ夫と共に住み、その後やもめぐらしをし、
八十四歳になっていた。そして宮を離れずに夜も昼も断食と
祈りをもって神に仕えていた。**（ルカ 2・36-37）

彼女がしばらくの結婚生活後に寡婦となり、神殿に住むようになるにはどんな事情があったのか、また84歳になるまでどんな苦労があったのかを、ルカは語りません。きっと筆舌に尽くしがたいものがあつたでしょうが、その人生のほとんど終わりに彼女が体験した大きな喜びと、果たした大切な役割が短く述べられているだけです。

**この老女も、ちょうどそのとき近寄ってきて、神に感謝を
ささげ、そしてこの幼な子のことを、エルサレムの救を待ち
望んでいるすべての人々に語りかさせた。**（ルカ2・38）

ここで「感謝を捧げ」と訳されている言葉は、「～の前で告白する、～と同意する」という特別な語が使われています。アンナはシメオンが幼な子イエスについて捧げた讃歌に心から賛意を表し、神様に感謝したのです。シメオンはどんな讃歌をささげたのでしょうか。

**「主よ、今こそ、あなたはみ言葉のとおりこの僕を安らかに
去らせてくださいます、わたしの目が今あなたの救を見たの
ですから。この救はあなたが万民のまえにお備えになったもので、
異邦人を照す啓示の光、み民イスラエルの栄光であります」。
シメオンは彼らを祝し、そして母マリヤに言った、
「ごらんささい、この幼な子は、イスラエルの多くの人を
倒れさせたり立ちあがらせたりするために、また反対を
受けるしるしとして、定められています。——そして、
あなた自身もつぎで胸を刺し貫かれるでしょう。それは
多くの人の心にある思いが、現れるようになるためです」。**（ルカ2・29-35）

この中の「異邦人を照す啓示の光、み民イスラエルの栄光」に注目してください。自分自身が異邦人であるルカはこの言葉を大きな喜びをもって記したのではないのでしょうか。なぜなら、「ルカによる福音書」は異邦人著者による異邦人への福音宣言を目的として書かれたものだからです。つまり、ここで宣言されている「救い」はイスラエル人のためだけではなく、全世界の異邦人の救いでもあるということなのです。そしてこの「異邦人」の中には、世界の東の涯てに住む私たち日本人も含まれます。このように、全世界の人々のための救い主がお生まれになったということが「啓示」、つまり神様から示されたと言ったのです。この讃美と感謝がシメオンの讃歌であり、アンナも「ほんとうにその通りです」と心から御子を礼拝したのでした。

この箇所を読んで思い合わせるのは、私たち夫婦が二十年前にお会いし、仙台で開拓伝道を始めきっかけになった、当時八四歳のご婦人のことです。神学校を卒業し、一年のインターンシップも終えて、次にどこに行ったらよいでしょうかと主に祈り求めていたとき、

**「今あなたと、このすべての民とは、共に立って、
このヨルダンを渡り、わたしがイスラエルの人々に
与える地に行きなさい」**（ヨシュア1・2）

との聖書の御言葉に押し出されました。

ひとまず仙台にある私の母教会に行ったところ、玄関に張り紙がしてあり、教会堂が二週間前に売却されていたことを知りました。それで親しくしていた八四歳の教会員のご婦人に電話をしたところ、「私、どこにも行く教会ないんだよ。早く礼拝始めてください(ください)」と言われました。伝道地を祈り求めていた私たちにとって、この言葉は「ここが私の指し示す地だ。ここで福音を宣べ伝えなさい」と主がおっしゃっているように聞こえたのです。主はこのご婦人が歩いて通える所に借家を備えて下さり、私たち夫婦と三人での礼拝が始まりました。

その御婦人は七年後、主が新しく会堂を備えて下さったのを見届けるようにして、天に召されていきました。若くしてご主人と死別した後も信仰を守り続け、私たちがこの地で福音を伝える働きを始めるために主が備えていて下さった、アンナのような方でした。時が満ちて主が御業をなさるために、私たちはそれぞれが為すべき働きを与えられているのです。



4. 「神の子の平安」 (ルカ2・40-52)

主イエスはどのような少年時代を過ごしたのでしょうか。「公生涯」と呼ばれる三十歳から三年間の言動は福音書から多くのことが分かるのですが、それ以前のことはクリスマスとして祝われる誕生の時の様子以外はほとんど知られていません。新約聖書に含まれなかった「外典」や「偽典」と呼ばれる文書の中には、イエスの少年物語と呼ばれるものも見られます。ただそれは、人々の想像や希望・願望から書かれた小説のようなもので、「正典」としては伝わっていません。たとえば、誰かが聖書物語を書いたとき、それは文学作品ではあっても、聖書そのものとはみなされないのと同じです。だから、主イエスが十二歳の時に起きたことを伝えるこの箇所は貴重な資料なのです。

ルカによる福音書2章40節から52節までを一度読んでみてください。みなさんがもしここを映画化するとしたら、どのようにするでしょうか。私は母マリヤの回想シーンで始めたいと思うのです。というのは51節に「母はこれらの事をみな心に留めていた」とありますが、この表現はこれまでも出てきているからです(ルカ1・66、2・19)。

この記事は少年イエスが迷子になったという、多くの人にも経験がある出来事で、実際、私たちの教会でもありました。ある日の礼拝後、てっきりほかの子供達と遊んでいると思っていた二歳の子供が迷子になり、みんなで捜した結果、夕方暗くなってから、遠くの交番に保護されているのが見つかりました。必死に捜した親が泣きそうになって迎えにいったのに、本人はむしろ、交番でもらったお菓子を食べながらニコニコしていたということがありました。

さて、主イエスも迷子になったのでしょうか。このことが起きたのは41節にあるように、「過ぎ越しの祭」の時だったとあります。お祭りの時に迷子になるというのはよくあることですが、これはどんな祭だったのでしょうか。ヘブル語でベサハと呼ばれる「過越祭」はユダヤ暦のニサンの月(太陽暦の三月から四月にまたがる月)の十日に準備が始まり、先祖がエジプトから解放されたことを記念する春の祭です。紀元前1450年頃、神様がイスラエル人をエジプトでの奴隷状態から解放するとき、エジプト王にその許可を与えるようにと十の災害を送りました。その十番目の災害は死の使いがエジプト中の初子を撃つというものでしたが、玄関の鴨居に子羊の血を塗ったイスラエル人の家だけは、死の使いが過ぎ越したということに由来します。一週間にわたるこの祭のクライマックスは、14日の夕暮れに一家族ずつ一頭の子羊をほふることです。おびただしい数の子羊の血が流され、その家族が一年間に犯した罪の身代わりとして神に捧げられました。その時の出来事をルカは次のように伝えています。

さて、イエスの両親は、過越の祭には毎年エルサレムへ上っていた。

イエスが十二歳になった時も、慣例に従って祭のために上京した。

ところが、祭が終わって帰るとき、少年イエスはエルサレムに居残って

おられたが、両親はそれに気づかなかった。そして道連れの中にいる

ことと思いこんで、一日路を行ってしまい、それから親族や知人の中を

捜しはじめたが、見つからないので、捜しまわりながらエルサレムへ引返した。

(ルカ2・41-45)

自分の子供が迷子になっているのに気づかないというのは、ずいぶんのんきな両親だと思うでし

ようか。実はそれには無理もない事情があるのです。彼らがいつも暮らしていたのは直線距離でも百キロはある北のガリラヤ地方、ナザレ村で、過越祭を祝うエルサレムへの往復には「ナザレ村組」とか「～町組」というように、キャラバン隊を組むのが恒例だったようです。そして女性や子供達を先に出発させ、しんがりや男達がつとめたのです。それで両親はそれぞれ自分たちのグループの中に少年イエスが見あたらなくても、他のグループにいるのだろうと思っていたらしいのです。途中の宿泊地に着いてから、「イエスがいない！」ということに気づいたというわけです。一日で歩いて来た道を、必死になって捜しながら、三日もかかってエルサレムに戻ってみると、少年イエスはまだエルサレム神殿にいて、こんな事をしていました。

**そして三日の後に、イエスが宮の中で教師たちのまん中にすわって、
彼らの話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。**

聞く人々はみな、イエスの賢さやその答に驚嘆していた。（ルカ2・46-47）

少年イエスの神童ぶりがうかがわれる箇所ですが、両親はようやく見つけたことにホッとして喜ぶながらも、イエス少年にどんな口調でこう言ったのでしょうか。

**「どうしてこんな事をしてくれたのです。ごらんなさい、
おとう様もわたしも心配して、あなたを捜していたのです」。**

その時にイエスが言われた言葉をリビング・バイブルでみてみましょう。

**「なぜ捜したの。ぼくがお父さんの家（神殿）にいるって、
わからなかったのかなあ」**（ルカ2・49）

ここを英語のジェームズ王欽定訳(KJV)は次のように訳しています。

**How is it that ye sought me? Wist ye not
that I must be about my Father's business?**

「どうして僕をさがしたの？ 僕は僕のお父さんの仕事に
取りかからなければならぬって知らなかったの？」

ここでは他の訳に見られる「家」のかわりに「**business**仕事」という訳がなされています。実は原文には「家」や**business**に当たる言葉がなく、単に「僕のお父さんの」としか書かれておらず、翻訳する上で何かを補う必要があるのです。こうした違いが出てきているのです。書かれていない以上、どちらの訳も可能なのですが、次節の「しかし、両親はその語られた言葉を悟ることができなかった」という言葉の意味を考えると、単なる「家」よりも「父の仕事・業」のことをさしていると福音書記者ルカは伝えたかったのではないのでしょうか。

そうとすれば、「父の仕事」とは何を意味しているのでしょうか。時は過越です。おびたしい数の子羊が神殿で屠(ほふ)られ、そのたくさんの血が流される光景を少年イエスも目撃したはずです。しかしどんなに犠牲が捧げられても、なお赦されない人間の罪の現実を、決定的に解決する御業である十字架への道が、既にこのとき始まっていたということが暗示されているのかもしれませんが、ただ、それが十二歳の少年に既に分かっていたのでしょうか。でも、ルカは次のように続けているのです。

「しかし、両親はその語られた言葉を悟ることができなかった」(50節)

ルカは十二使徒の一人ではありません。本人も福音書冒頭で言っているように、のちに集めた多くの資料や人々から伝え聞いたことを元にして、この福音書を書いたのです。そうすると、この時のことを直接イエスの母マリヤから、次のような回想として聞いたのかもしれませんが、「あの子が十二歳の時に言った言葉に、まさかそんな意味があったとは…。あの時、私達夫婦には思いもよらないこと

でした。でもあの子は確かにこう言ったんですよ」

「僕は僕のお父さんの仕事に取りかからなければならぬって知らなかったの？」

少年イエスのこの言葉には微塵も不安が感じられません。むしろ「僕のお父さん」の元において、その仕事を共にしているのだという大きな喜びと安心感、あるいは、父なる神との個人的で親しい関係の中であって守られていることの大きな平安が伝わってきます。

ただ、そう言いながらも、イエスは両親と一緒にナザレに下って行き、彼らにお仕えになったことをルカは伝えています。

それからイエスは両親と一緒にナザレに下って行き、彼らにお仕えになった。

母はこれらの事をみな心に留めていた。イエスはますます知恵が加わり、

背たけも伸び、そして神と人から愛された。

福音書には主イエスの父なる神に関する言葉がたくさん書かれていますが、それらを綴り合わせてゆくと、主イエスがどんなときにも覚えていた限りない平安の秘訣を見ることができます。

「わたしと父とは一つである」（ヨハネ10・30）

「もしだれでもわたしを愛するならば、わたしの言葉を守るであろう。そして、わたしの父はその人を愛し、また、わたしたちはその人のところに行って、その人と一緒に住むであろう。わたしを愛さない者はわたしの言葉を守らない。あなたがたが聞いている言葉は、わたしの言葉ではなく、わたしをつかわされた父の言葉である」（ヨハネ14・23-24）。

父なる神との強い一体感と絆への確信が語られています。そしてこの平安に、私たちも招かれています。

5. 「我ら何をなすべきか」 (ルカ 3・1-38)

「我ら何をなすべきか」とは、いづいぶん堅い表現ですが、ルカ3・10の文語訳です。私たちの普段の言葉なら「どうしたらいいんでしょうか？」であって、これは教会に来る人や電話相談で一番多い質問です。それに対するアドバイスを受け入れる人もいれば、受け入れない人もいます。この違いは勿論アドバイスの適否もあることは確かですが、それだけでは割り切れない思いをし続けていました。

ある時、こんなことを聞きました。『どうしたらいいんでしょう』と聞く人の心には既に何らかの答がある。アドバイスがその答えに合っていれば、『ああ、やっぱりそれでいいんだ』と受け入れるが、合っていないと受け入れない。自分の答と合っていないでも受け入れるには、それ相当の信頼関係が出来ていなければならない』というのです。なるほど、と思いました。「どうしたらいいんでしょう？」と聞かれると、私は意見を求められたように思って、相手の立場を良く理解しないまま、自分の体験や考えなどを語りがちでした。しかしこのことによって、聖書の言葉が伝わるほどの信頼関係が出来るまで、その人の状況や思いに傾聴することの大切さを知りました。傾聴とは、人に聴き、神に聴くことなのですね。

そして、この「どうしたらいいんでしょうか？」は今回の聖書箇所にも3回出てきています。

群衆が彼に、「それでは、わたしたちは何をすればよいのですか」と尋ねた。

彼は答えて言った、「下着を二枚もっている者は、持たない者に分けてやりなさい。食物を持っている者も同様にしなさい」。

取税人もバプテスマを受けにきて、彼に言った、「先生、わたしたちは何をすればよいのですか」。彼らに言った、「きまっているもの以上に取り立ててはいけない」。

兵卒たちも尋ねて言った、「では、わたしたちは何をすればよいのですか」。彼は言った、「人をおどかしたり、だまし

取ったりしてはいけない。自分の給与で満足していなさい」(ルカ3・10-14)

それぞれの質問に対して、バプテスマのヨハネは異なった答え方をしていますが、その根底にあるのは同じメッセージ、彼の開口一番「悔い改めなさい」なのです。これは質問をした人々にどう受けとめられたのでしょうか。

もし皆さんが何かの問題、たとえば自分の子供のことなどで「どうしたらいいんでしょうか？」と誰かに相談したとします。それに対する答が、「子供さんではなく、あなたが悔い改めなさい」と言われたらどう思いますか？「問題は私ではなく、子供なんですよ。なぜ私が悔い改めなくちゃならないんですか？」と、反発するかもしれません。それほどにヨハネのメッセージは衝撃的だったのですが、その意味を見る前に、今回の聖書箇所のあらましを見ましょう。

冒頭の「皇帝テベリオ在位の第十五年、ポンテオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの領主…」とあるのは、だいたい紀元二八、九年の頃、主イエスが公生涯を始める直前のことと推定されています。私たちは前にザカリヤとエリサベツ夫婦に生まれた男の子を見ましたが、あの赤ん坊が成人し、

キリストの先駆けであるバプテスマのヨハネとして登場しているのです。ヨハネの活動とメッセージは3節が簡潔に要約しています。

彼はヨルダンのほとりの全地方に行って、罪のゆるしを得させる悔改めのバプテスマを宣べ伝えた。

そして、これは既に旧約聖書に預言されていた出来事だったのです。

それは、預言者イザヤの言葉の書に書いてあるとおりである。

すなわち荒野で呼ばれる者の声がある、『主の道を備えよ、

その道筋をまっすぐにせよ』。すべての谷は埋められ、すべての

山と丘とは、平らにされ、曲ったところはまっすぐに、悪い道はならされ、

人はみな神の救を見るであろう』(ルカ3・4-6)

このヨハネはイエスの十二弟子のヨハネと区別するために「バプテスマのヨハネ」と呼ばれますが、彼のメッセージはこのように「悔い改めよ」でした。マタイによる福音書3・2にはもう少し詳しく「悔い改めよ、天国は近づいた」と書かれています。これは「神の国はもう来てしまった」という表現ですから、言い替えば「今から準備しようとしても遅い。神の国はもう来てしまったのだから、あなたは今そのまま直ちに悔い改めなさい」という呼び掛け(calling)なのです。これに対して人々がどのように応答したかについてマルコは、驚くべき事に「**そこで、ユダヤ全土とエルサレムの全住民とが、彼のもとにぞくぞくと出て行って、自分の罪を告白し、ヨルダン川でヨハネからバプテスマを受けた**」と伝えています(マルコ1・5)。しかし、19 節以下にはこのヨハネが逮捕されたことが書かれています。

領主ヘロデは、兄弟の妻ヘロデヤのことで、また自分がした

あらゆる悪事について、ヨハネから非難されていたので、

彼を獄に閉じ込めて、いろいろな悪事の上に、もう一つこの

悪事を重ねた。 (ルカ3・19, 20)

やはり悔い改めの勧告を受け入れることができず、かえってバプテスマのヨハネに対して暴力的に反発した人のいたことがわかります。このあとヨハネは、こともあろうに祝宴の余興に斬首されてしまったことが伝えられています(マタイ14・1 以下、マルコ6・19以下)。ヨハネが命懸けで説いた「悔い改め」とは、一体どのようなことだったのでしょか。

「悔い改め」と混同されがちなのが「後悔」です。「後悔」というのは自分の犯した失敗や罪を思い返して「あんなことをしなければよかった、こんな事を言わなければよかった…」と悔やむことであり、その目は過去に向けられています。これに対して「悔い改め」は全く異なるものです。聖書で「悔い改め」と訳されている言葉の本来の意味は「方向転換」を表す言葉で、「向きを一八〇度変える」というのが本来の意味なのです。

自分の罪や失敗を悔やむことは大切ですが、いつまでもクヨクヨと目を過去に向けるのではなく、向きを一八〇度変えて、そのようなあなたを愛(いと)おしんでくださっている主なる神を見上げることはもっと大切です。まず神様に自分の罪を告白し、赦しを求めることが「悔い改め」なのです。

後悔も悔い改めもせずに、到来した神の国に入ろうとすることは全くの見当違いです。だからバプテスマのヨハネが「悔い改めなさい」と人々に呼び掛けた(calling)のでした。つまり「あなた方がこれまで生きてきたその生き方の先に神の国の入り口があるなどとは思うな。方向をまったく逆にしなければ、既に到来した神の国に入ることは出来ないのだ」と宣言したのです。

ヨハネは、彼からバプテスマを受けようとして出てきた
群衆にむかって言った、「まむしの子らよ、迫ってきている
神の怒りから、のがれられると、おまえたちにだれが教え
たのか。だから、悔改めにふさわしい実を結べ。自分たち
の父にはアブラハムがあるなどと、心の中で思ってもみるな。
おまえたちに言うておく。神はこれらの石ころからでも、
アブラハムの子を起すことができるのだ。斧がすでに木の
根もとに置かれている。だから、良い実を結ばない木はこと
ごとく切られて、火の中に投げ込まれるのだ」(ルカ3・7-9)

これは聞く耳を持った人々にとって、衝撃的な知らせでした。しかし、方向を一八〇度転換してどうすればよいのでしょうか。実はそれこそバプテスマのヨハネが指し示した事でした。ヨハネには「悔い改めよ」のほかに、もう一つのメッセージがありました。それは、自分は救い主・キリストではなく、その先駆けにすぎないということです。

**「わたしは水でおまえたちにバプテスマを授けるが、
わたしよりも力のあるかたが、おいでになる。わたしには、
そのくつのひもを解く値うちもない。このかたは、聖霊と火
とによっておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう」(ルカ3・16)**

ヨハネはこの救い主・キリストの先駆けとして、人々に方向転換を呼び掛ける(calling)ために来たのだと言いました。人間を見るのではなく、方向転換して神の子キリストを見よ。救い主・キリストはあなた方に聖霊によるバプテスマをお授けになり、新しい人生を与えてくださる、ということの人々に示したのです。このヨハネのバプテスマは「悔い改めのバプテスマ」と呼ばれています。古い罪の生き方をしてきた自分に死に、聖霊によって新しい命に生まれる神の業だからです。

ところが、主イエスもヨハネからバプテスマを受けたと福音書は伝えています。罪の生き方をしていなかったはずの神の子が「悔い改めのバプテスマ」を受けたのはなぜなのでしょう。実はこの疑問はヨハネ自身も覚えたものであることがマタイ伝に書かれています。

**そのときイエスは、ガリラヤを出てヨルダン川に現れ、
ヨハネのところにきて、バプテスマを受けようとしてされた。
ところがヨハネは、それを思いとどまらせようとして言った、
「わたしこそあなたからバプテスマを受けるはずなのに、
あなたがわたしのところにおいでになるのですか」。イエスは
答えて言われた、「今は受けさせてもらいたい。このように、
すべての正しいことを成就するのは、われわれにふさわしい
ことである」。そこでヨハネはイエスの言われるとおりにした。(マタイ3・13-15)**

天の高みにおられた神の子イエスが私たちの世界に来られ、ヨハネのバプテスマを受けることによって、罪の人間と共に父なる神を仰いだということです。主イエスは罪の中を歩んでいませんでしたが、確かに罪の世の中を歩まれたお方です。御自身は罪を犯されませんが、罪びとと同じ立場に立って、父なる神を見上げる者の姿をお示しになったということを意味しているのです。そしてこの事を神が心から喜ばれたというのが、ルカの伝える天からの声なのです。

**さて、民衆がみなバプテスマを受けたとき、イエスもバプテスマを受けて祈っておられると、天が開けて、聖霊がはどのような姿をとってイエスの上に下り、そして天から声がした、
「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」(ルカ3・21-22)**

私は三〇歳で信仰に導かれました。初めに、イエス様が救い主キリストだと信じることはできたのですが、バプテスマということが良く理解できませんでした。だから、「バプテスマって、どうして必要なんだろう？主イエスをキリストと信じているだけで充分ではないのか？」というのが、バプテスマ(浸礼による洗礼)を勧められたときの私の率直な疑問でした。牧師に質問したところ、丁寧に説明していただきましたが、いくら聞いても理解できません。水の中に入って上がるだけなら、毎日の入浴でしている事じゃないかと思ったのです。それならと、コンコルダンス(聖書語句辞典)で「バプテスマ」が出てくる聖書箇所を片っ端から調べていきましたが、なかなか納得できません。やがてマルコ伝16・16に「**信じてバプテスマを受ける者は救われる。しかし、不信仰の者は罪に定められる**」とあるのを見つけたとき、「あなたは救われたいのか、それとも救われたくないのか」との主イエスの強い迫りを受けたように思いました。私は「救われたい！」とあって、バプテスマの意味はよく理解できないものの、救い主と信じる主イエスの御言だから信頼して受けようと決心して受洗しました。それは、自分の理解力よりも主の言葉を信じようと思った初めてのことでした。

水から上がった私に牧師が「千田さん、あなたの人生、変わりますよ」と語りかけて下さった時、私は心の中で「変わるもんか。これまでの三〇年間、何も変わらなかったんだから…」とつぶやきました。間違っていたのは私の方でした。それから本当に一八〇度変えられたのです。受洗後、神学校に行きたいとの思いが湧き起こってきて、二年間の準備の後にその道が開かれて神学校に入り、やがて献身の思いが与えられて牧師となりました。聖書はバプテスマを、古い自分に死に、新しい命に生きることだと教えていますが(ローマ6・1-11)、あのとき主イエスの御言葉に従って本当によかったと心から思うのです。

向きを一八〇度変え、それで「我ら何をなすべきか」いや「私はどうしたらいいんでしょう」とお尋ねになるでしょうか。とても大切な質問です。それはあなたと主との間の個人的な召命(calling)の問題です。向きを一八〇度変えて主を見上げたとき、主があなたに示して下さること(calling)について他人は口出しをすることが出来ません。大切なのは、まずあなたが向きを変えること、そして人を見る者ではなく、主を見上げる者となることです。

6. 「荒野の試みの時に」 (ルカ4・1-13)

「あなたはテストが好きですか？」と聞かれたら、多くの人は「嫌いです！」と答えるのではないでしょう。テストはそれがどんなものであれ、自分の現在の状態を容赦なく評価するものですから、しり込みするのは当然です。それでは同じくテストでも、学校のテストと人生のテストでは、どこに違いがあるでしょうか？いろいろなことが考えられるでしょうが、ひとつには、学校のテストには答があっても、人生のテストには模範解答がない、とすることができると思います。人生のテストは「試練」とも呼ばれますが、その多くの場合、なかなか答がみつからず、この試練には本当の解決の時が来るのだろうか、と長いあいだ悩み苦しむ場合もあります。思いがけず襲ってくる試練に打ち勝つためには、どのようにすればよいのでしょうか。

今回の聖書箇所は「荒野の誘惑」と呼ばれるところです。「誘惑」よりも「試み」とか「試練」のほうが原意に近いと思います。ここには主イエスが受けた三つの試練が書かれています。

聖書を理解する時の助けになる方法の一つは5W1Hの読み方です。5W1Hというのは、英語の **When・Where・Who・What・Why・How** の頭文字を取ったもので、「いつ」「どこで」「誰が」「何を」「なぜ」「どのように」を読みとっていくことです。これを、「荒野の試み」の箇所に当てはめてみましょう。

「いつ」(1節)「イエスは聖霊に満ちてヨルダン川から帰り」
(バプテスマの直後で、3年の公生涯が始まる直前)
「どこで」(2節)「荒野」で
「誰が」(1節)「イエスが」
「何を」(2節)「悪魔の試みにあった」
「どのように」(2節)「荒野を四十日の間、御霊にひきまわ
され…その間何も食わず、その日数がつきると空腹になった」
「なぜ」???

こうしてみると「なぜ」ということがはっきりとは書かれていませんが、それは三つの試練の意味を考えてゆく中で明らかになってくることです。

私たちの人生でも、理由の分からない試練に遭遇することがあり、それは信仰者も例外ではありません。救われて神様を信じるといことは、祝福と平安の中に導き入れられたということではないのか、それなのになぜこのような試練に遭わなければならないのか、と思うことが往々にして起きるものです。人間はそうだとしても、なぜ神の御子である主イエスが？と思わされるのが、今回の聖書箇所です。

私達の毎日の生活には誘惑や罪との戦いが不断にあり、そういう意味ではいつも戦争状態にあるということもできるでしょう。この戦争の喩えを借りるなら、祖国にどんなに強大な軍備があつたとしても、それで前線の兵士が武器も持たず、安穩としていて良いはずはなく、戦いは常に勝ち取っていくべきことと似ています。強力な軍備を所有していること自体は、日々の平和を完全に保障するものではありません。戦いの前線にいる私たちは武器を活用する必要があります。

イエス御自身もそのように前線に立ち、誘惑に対して神の武具を身につけ、戦われたというのが今回の聖書箇所です。主イエスが遭った三つの試練は単純化された描写がなされているので、それ自体は理解に困難を覚えるようなものではありません。では一つずつ見てゆきましょう。

さて、イエスは聖霊に満ちてヨルダン川から帰り、荒野を四十日のあいだ御霊にひきまわされて、悪魔の試みにあわれた。そのあいだ何も食べず、その日数がつきると、空腹になられた。そこで悪魔が言った、「もしあなたが神の子であるなら、この石に、パンになれと命じてごらんなさい」（ルカ4・1-3）。

第一の誘惑は四十日の断食の後に来たとあります。これは、人間の限界を超える断食で、肉体を極限の飢餓状態におくものです。旧約聖書でもモーセが神様から十戒を授かる時に四十日四十夜の断食をしたと書かれています（出エジプト24・18）。ここでの悪魔のささやきは次のようなものだったのではないのでしょうか。「バプテスマの時に『あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である』と言われた愛の神が、どうしてあなたを今こんなに苦しめているのか。あの言葉は空耳だったのではないか。それでもあなたが神の子だと言うなら、石をパンに変えてあなた自身を救いなさい。それぐらいできなくて神の子と言えるのか。誰も見ていない荒野で一人淋しく死んでしまっただけは、何のための神の子か。さあ石をパンに変えて食べ、生きるのだ。」この誘惑に対して主イエスは申命記8・3の御言葉をもって答えられます。

イエスは答えて言われた、「『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」（ルカ4・4）。

マタイ4・4にはさらに詳しく書かれています・

イエスは答えて言われた、「『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである』と書いてある」。

主イエスはこう言っていると思うのです。「いま私はこの場で死ぬのかもしれない。しかし、もし父なる神が私にここで死ぬと言うのであれば、私は父を信じて死のう。父の御心に反することを私は一切しない。私が死のうと生きようと神は神である。」

私達も、ただ鼻から息をし、食物を食べて動き回っているだけであれば、それで真に生きていることにはなりません。主イエスは極限状態の中で、主なる神の御言葉に生かされる人生こそ真の命に溢れた生き方なのだと、命懸けで言われたのです。最初の誘惑を御言葉によって勝利した主イエスに悪魔は二つ目の誘惑を試みます。

それから、悪魔はイエスを高い所へ連れて行き、またたくまに世界のすべての国々を見せて言った、「これらの国々の権威と栄華とをみんな、あなたにあげましょう。それらはわたしに任せられていて、だれでも好きな人にあげてよいのですから。それで、もしあなたがわたしの前にひざますくなら、これを全部あなたのものにしてあげましょう」。（ルカ4・5-7）

口語訳で「だれでも好きな人に」とある箇所を、新改訳・新共同訳は「これと人」と訳しています。悪魔が自尊心をくすぐろうとした媚びるような意図が良く表れていますが、主イエスはこのような誘惑にも動じません。即座に申命記6・13の御言葉をもって一蹴します。

イエスは答えて言われた、「『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある」（ルカ4・8）。

二度も失敗した悪魔は必勝を期して三度目の誘惑をもって挑みます・

それから悪魔はイエスをエルサレムに連れて行き、宮の頂上に立たせて言った、「もしあなたが神の子であるなら、ここから下へ飛びおりてごらんなさい。『神はあなたのために、御使たちに命じてあなたを守らせるであろう』とあり、また、『あなたの足が石に打ちつけられないように、彼らはあなたを手でささえるであろう』とも書いてあります」(ルカ4・9-11)

ここで悪魔が引用しているのは、確かに詩篇91篇にある御言葉です。

まことに主は、あなたのために、御使いたちに命じて、すべての道で、あなたを守るようにされる。彼らは、その手で、あなたをささえ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにする(詩篇91・11、12、新改訳)。

これまで聖書の御言葉を楯に誘惑をはねのけてきた主イエスに対して、それを逆手にとり、御言葉をもって誘惑しようとするのです。しかも、ここで「もしあなたが神の子であるなら」と言っているのは、これまでのように、神の子であることに疑念を差し挟む表現ではなく、「確かにあなたはおっしゃる通り神の子なのですから」と畳みかけています。悪魔は非常に巧妙な論法を使って、何としても神の子・イエスを亡き者にしようとしていることが分かります。

悪魔がわざわざ宮の頂上に主イエスを連れて行ったのは、そこが多くの人々が集まっているエルサレム神殿だからです。そこから飛び降りても怪我ひとつしないというような奇跡を皆が見ている前で行うことによって、人々に自分が神の子であることを証明するのがよいと言うのです。しかしこのような誘惑を、主イエスは申命記6・16の御言葉を以て一言のもとに斥けます。

イエスは答えて言われた、『主なるあなたの神を試みてはならない』と言われている」。(ルカ4・12)

以上が主イエスの受けた三つの誘惑だったと福音書記者たちは伝えています。ここに難しい表現は使われていないのですが、少し考えていくと、これら三つの「誘惑」がどうして試練になるのだろうかと思われてきます。というのは、もしあなたが「石をパンに変えろ」と言われたとしたら、それがあなたへの誘惑になるでしょうか？ また、「全世界をあげるからサタンにひざまづけ」と言われてひざまづくでしょうか、あるいは「天使が助けて下さるから高い所から飛び降りてみよ」と言われて、あなたは飛び降りるでしょうか？ こう考えてくると、これらの「誘惑」がどうして神の子イエスにとって試練になったのか、と疑問に思われてきます。しかもこの試練はイエス自らが進んで受けたのではなく、御霊の導きによるものだったとあります。一体これら三つが誘惑の試練と呼ばれる理由はなぜなのでしょう？

様々な理解が可能だと思いますが、この試練が公生涯の最初に起きたということに目を留めたいと思います。公生涯の目的は私たち人類を救うことにありました。主イエスはこの目的のためにサタンが提示した三つの道をすべて拒絶しました。その三つの道とは、第一に自己保身や自己実現を優先する生き方をしないということ、第二に大義のために小さく見える不義をしないということ、第三には衆目を驚かすために神様を利用しないということだったと思います。そして主イエスが最終的に取られたのは父なる神の示して下さった十字架を負う道でした。伝道開始に当たって、サタンがした

三つの提案は誘惑的でしたが、主はそのいずれをも聖書の御言葉を以て斥け、この試練に打ち勝ったのです。

イエス・キリストの開口一番は「悔い改めよ、天国は近づいた」であったとマタイ4・17は伝えています。これはバプテスマのヨハネのメッセージと全く同じであり、ヨハネは人々に悔い改めを迫りました。それは向きを一八〇度変えて、主なる神を見上げよという意味であることを私達は既に見ました。主イエスの公生涯はこのメッセージ後半「天国は近づいた」にかかるものと言うことができます。「天国」とは救われた者の住む世界であり、救いがキリストによってもたらされる時が近づいたということです。その救いは公生涯の最後に起きる十字架と復活によってもたらされるのです。この救いは父なる神の言葉によって予め預言され、御言葉の体現者イエス・キリストによって成就したのです。このように、聖書の言葉に従うことが御心に従うことなのだということを、主イエス御自身が極限状態の中で身を以て宣言されたのです。ここに、私たちに与えられている最大の武具が聖書に書かれている神の言葉だということが示されています。エペソ人への手紙には次のような言葉があります。

悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武具で身を固めなさい。わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである。それだから、悪しき日にあたって、よく抵抗し、完全に勝ち抜いて、堅く立ちうるために、神の武具を身につけなさい。すなわち、立って真理の帯を腰にしめ、正義の胸当てを胸につけ、平和の福音の備えを足にはき、その上に、信仰のたてを手に取りなさい。それをもって、悪しき者の放つ火の矢を消すことができるであろう。また、救のかぶとをかぶり、御霊の剣、すなわち、神の言を取りなさい。（エペソ6・11-17）

7. 「イエスの招き」(ルカ 5・1-11)

職業の選択ということは誰にとっても難しい問題ですから、転職を考えたり、経験した人は多いと思います。そういう意味で、イエスの十二弟子となった人たちは「転職」して「天職」を得た人々だったとすることができます。

「転職」といえば思い合わせることがあります。私は教会と一般会社勤務の、いわゆる二足草鞋わらじを履く牧師ですが、会社では長年、学生アルバイトと一緒に仕事をしてきました。その中に卒業後、一旦就職したものの、しばらくして転職相談に来た元アルバイトがいました。私は三年間忍耐して待つことを勧めましたが、数年後に再び相談に来たので「よく我慢したね。それで今度は何をしたいと思うんだい？」と尋ねました。しかし、彼は「それが分からないんです」と言うので、「君のこれからの人生は、少なくとも50年あるとして、やりたいことを50書き出してみたらどうかな？」とアドバイスしました。しばらくして「50は無理ッス」と言うので、取りあえず書き出したものを二つに分類してみるように言いました。一つ目は「自分の為にしたいこと」、二つ目は「他人の為にしたいこと」。やがて彼がやって来たので「どうだった、他の人の為にしたいことは何個あった？」と聞くと「ゼロッス」との答えでしたが、彼はいま高齢者介護の仕事に就いてイキイキと働いています。あとで聞くと、「他の人の為にしたいこと」がゼロだったことは大きなショックだったと語ってくれました。

さて、今回の聖書箇所がイエスの弟子となった人々の回心と、彼らの場合に伴った転職について書かれているところだと見ると、次の記述には驚きを覚えます。

彼らはすぐに網を捨てて、イエスに従った。(マタイ4・20)

彼らは舟を陸に引き上げ、一切を捨ててイエスに従った。(ルカ5・11)

「すぐに」、「一切を捨てて」とあります。一体、彼らは何も悩まなかったのでしょうか。先ほどの元アルバイト学生は少なくとも三年は悩みました。まして、ガリラヤ湖の熟練した漁師だった彼らが悩まないはずはありません。漁師にとって網や舟は大切な道具ですから、それら一切をすぐに捨てて主イエスに従ったというのは、彼らにとってよほどの決断だったはずです。

また、ルカ4章38節には「シモンのしゅうとめ」という言葉がありますから、シモン・ペテロは結婚しており、妻や子供のほかに親も一緒に住んでいたと思われます。それに、ペテロはようやく成人したばかりの年齢だったとは思われません。そうとすれば、「これまで積んだ漁師としての経験や技術は全部無駄になるのか」とか「家に残す家族はどうなる」ということなどについて、ずいぶん悩んだのではないのでしょうか。それにもかかわらず「いっさいを捨てて、すぐに従った」と書かれているのには驚きを覚えます。四つの福音書を総合すると、ペテロの回心は次のような順序で起きたようです。

1. イエス受洗の翌日、洗礼者ヨハネの弟子たちがイエスの元を訪ねて一泊した
2. その一人アンデレは自分の兄であるシモン(ペテロ)をイエスに引き合わせた
3. イエスはシモンとアンデレの家に行き、しゅうとの熱病を癒した
4. ペテロたちは夜通しの不漁から帰り、岸辺でイエスに会った
5. イエスはペテロの舟に乗って、そこから人々に説教した
6. 説教が終わって、沖に漕ぎ出して漁をするように言った
7. 大漁に驚くペテロにイエスは弟子となるよう招いた

十二弟子の一人ヨハネが伝える、ペテロと主イエスの出会いの様子は興味深いものです。

イエスについて行ったふたりのうちのひとり、シモン・ペテロの兄弟アンテレであった。彼はまず自分の兄弟シモンに出会って言った「わたしたちはメシヤ（訳せば、キリスト）にいま出会った」。

そしてシモンをイエスのもとにつれてきた。

イエスは彼に目をとめて言われた、「あなたはヨハネの子シモンである。

あなたをケパ（訳せばペテロ）と呼ぶことにする」。（ヨハネ1・40-42）

アラム語の「ケパ」はギリシャ語では「ペテロ」ですが、どちらも「石」を意味する言葉ですから、主イエスはシモンに「石頭」もしくは「頑固者」というあだ名をつけたことになります。普通なら腹を立てるところでしょうが、ペテロは怒った様子もなく、むしろ気に入ったらしく、それ以後はこの名前で通したようです。それほどに初対面で主イエスと親しくなったのでしょう。

それにしても、これら一連のことは明らかに一日や二日で起きたのではなかったはずで、四、五日、もしかしたら、ひと月位の間の出来事であって、決して即断即決ではなかったでしょう。いずれにしても、ペテロは主イエスに従っていくことに決心したのですが、その決断を引き出したものは何だったのでしょうか。主イエスが船上から説教したという言い伝えの場所は、入江になっています。その時の様子をルカは次のように伝えています。

さて、群衆が神の言を聞こうとして押し寄せてきたとき、イエスはゲネサレ湖畔に立っておられたが、そこに二そこの小舟が寄せてあるのをごらんになった。漁師たちは、舟からおりて網を洗っていた。その一そこの小舟はシモンの舟であったが、イエスはそれに乗り込み、シモンに頼んで岸から少しこぎ出させ、そしてすわって、舟の中から群衆にお教えになった。（ルカ5・1-3）

入江というのは、そこに注ぎ込む流れがあれば、魚の集まりやすい釣りのポイントの一つです。その場所に舟を浮かべて、神の国について語る主イエスの話を、網を洗いながら聞いていたペテロが「うーん、なかなかいいポイントをついているなあ」とうなずいていたかどうかは分かりませんが、この説教が終わってから言われた言葉は、ペテロにとって到底うなずけないことでした。主イエスはこう言ったのです。

話が終わると、シモンに、「深みに漕ぎ出して、網をおろして魚をとりなさい」と言われた。（ルカ5・4、新改訳）

原文を直訳すると「今すぐ深みに戻り、直ちに一網打尽にしなさい」となります。これは徹夜の漁から空しく疲れて帰ってきて、ようやく網を洗い終わったペテロにとって酷な言葉でした。そのうえ、魚獲りに詳しい人によれば、投網は浅い所には有効ですが、深みに下ろしたのでは魚は一網打尽どころか、一目散に逃げってしまうというのです。だからペテロのこれまでの全経験からすれば、「絶対無理！不可能！有り得ない！」はずのことだったのです。ペテロはこう答えました。

「先生。私たちは、夜通し働きましたが、何一つとれませんでした」

ペテロは精一杯自分の思いを抑えて、主にこう答えたのでしょう。そして次の言葉を発するまでどのくらいの間があったのか、ルカはそれを伝えていませんが、ペテロはハッキリとこう言ったのです。

「でもおことばどおり、網をおろしてみましよう。」

これはプロの漁師としての経験や勘、知識、プライドからすれば、絶対に言えない言葉だったはずで、

ところがペテロはそれらすべてを抑えてそう言い、疲れた体にむち打って沖に漕ぎ出し、今しがた洗い終わったばかりの網をおろしたのです。一体、ペテロにそうまでさせたのは何だったのでしょうか？もちろん、しゅうとめの熱病を癒してもらったことへの感謝や、舟の上で聞いた主の説教に心を動かされたということがあったかもしれません。しかし、主イエスの言葉にはそれら人間的な思いの一切を超えた、静かな権威があったのではないのでしょうか。ペテロは主の言葉に賭けることを選んだのです。その結果、有り得ないはずの事が起きました。

**そして、そのとおりにすると、たくさんの魚が入り、
網は破れそうになった。そこで別の舟にいた仲間
者たちに合図をして、助けに来てくれるように頼んだ。
彼らがやって来て、そして魚を両方の舟いっぱい
上げたところ、二そうとも沈みそうになった。
これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して、
「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間
ですから」と言った。それは、大漁のため、彼もいっしょに
いたみなのも、ひどく驚いたからである。(ルカ5:6-9)**

このペテロに、主は言われたのです。

「恐れることはない。今からあなたは人間をとる漁師になるのだ」

ここで「とる」と訳されているのは「生け捕る」という言葉であって、「釣り針で釣る」という言葉ではありません。釣り針を使うと魚を傷つけ、殺してしまいかねません。しかし網で「生け捕る」なら、傷つけることなく、むしろ、生かすためにとらえることができます。主イエスがペテロを招いたのは、このように、人々を本当の命に生かすための働き人にするためでした。



私は昔、イカ釣船に乗せてもらったことがあります。そこで知ったのは、意外なことにイカ漁にエサは要らないということでした。漁師が集魚灯で煌々と海面を照らすと、イカが群れをなして集まってきて、そこに巻き上げ式の針をおろすと、イカがドンドン釣れるのです。私は「魚も光に集まるんだ。人間だけじゃないんだ！」と、感動しました。

主イエスがペテロに言われた意味は、「あなたが漁師としてこれまでに積んできた経験、技術、勘、知識などはすべて無駄ではないばかりか、むしろそのまま生きる。あなたは漁師のままよい。しかし、これからは魚ではなく、人間をとる漁師になるのだ」ということにあると思うのです。これはペテロにとって心揺さぶられる招きの言葉だったことでしょう。

ペテロだけではないと思います。たとえば、自動車にガソリンを給油しているスタンド従業員が「あなたはこれから、車ではなく、人々の心に福音の命を注ぎ入れるのだ」と言われたらどうでしょう。また、道路を整備している人が、「あなたはこれから、神様の道を整える人になるのだ」と言われたら、それはさぞかし心震える招きの言葉でしょう。

ところで、主イエスは「恐れることはない」と呼び掛けておられますが、ペテロは何に恐れたのでしょうか。一つは家族のこれからの生活。二つ目は自分の罪深さ。しかし、三つ目として、ペテロは「聖なる恐れ」とも言うべきものを覚えたのではないかと思うのです。なぜなら、彼がいま目の前に見ているのは、自分の全経験・知識・プライドを以て「絶対に獲れない！」と断定したのと全く正反対の圧倒的漁獲です。このようなことを可能にする神の御業を見て、彼はいま聖なる恐れをもって主の前にひれ伏したのであるはず。今まで自分の力のみを頼りに生きてきたガリラヤ湖の屈強な漁師ペテロにとって、人間の力を遙かに超えた主との出会いが、彼に一切のものを捨てさせ、主に従う決心に導いたのだと思うのです。

しかし、この時の奇蹟は、三年後に起きる十字架・復活という、空前絶後の主の御業の序章でしかありませんでした。ペテロをはじめとする弟子たちはやがて、大いなる神の救いの御業を目撃して、主の業に生かされる者となるのです。

「イエスの招き」という主題でした。「招き」のことをキリスト教では「召命」とも言います。これは、「命を召す」のではなく、「命に召す」という意味の言葉です。ペテロだけではありません。あなたも主イエスにある、本当の命に招かれているのです。

8. 「癒しときよめ」(ルカ5・12-26)

こんな話を聞いたことがあります。

小さい頃はサンタクロースを信じていた。

いつの間にかサンタクロースを信じなくなった。

気がついたら、サンタクロースになっていた。

「なるほど！」と思いませんか。すると、これは色々な場合にも言えそうです。たとえば…

小さい頃は「親」を信じていた。

いつの間にか「親」を信じなくなった。

気がついたら、「親」になっていた。

これはブラック・ユーモアです。不信のまま、自分がその張本人になっているのですから。ところが…

小さい頃は「神」を信じていた。

いつの間にか「神」を信じなくなった。

気がついたら、自分が「神」になっていた。

こうなると、真の神を見失っている多くの現代人の心を表す深刻な問題提起ではないでしょうか。神でない者が神であるかのような言動をすることこそ神を^{とくしん}洗(けが)すことだからです。しかし、病に苦しんでいる人々を癒した主イエスに向けられたのが、この^{とくしん}洗神の非難でした。

今回の聖書箇所には二つの癒しが書かれています。ひとつ目は「重い皮膚病を患っていた人の癒し」(ルカ5・12-16)、二つ目は中風の男の人の癒し(ルカ5・17-26)です。

これらの出来事を見る前に、心に留めておきたいことがあります。それは、「重い皮膚病」はかつての聖書では誤って「らい病」と訳されていました。「らい病」は現在、病原菌発見者の名をとって「ハンセン氏病」と呼ばれていますが、それと聖書でのこの病気は全く異なるものであるということです。

私は以前に鹿児島で、何度かハンセン氏病の国立療養所を訪ねる機会があり、このことをきっかけに自分の誤解と無知とを知りました。「らい病」に関する従来の重大な誤解は「不治の業病」つまり「罪を犯したためにかかった病気で、人間の力では治すことができない」と考えられたことでした。このゆえに、日本でも古くからこの病気は迫害と弾圧の歴史を持っています。

しかし、一八七三年にノルウェーのハンセン博士がライ菌を発見し、この病気の実体が明らかになりました。それによりますと、らい菌の感染力は風邪よりも弱く、発症するのは濃密かつ長期の接触の場合であって、感染しても適切な治療によって半年から一年で完治すること。また聖書の記述に見られる「皮膚が白くなる」とか「痒(かゆ)い」といった症状は該当せず、「らい病」本来の「麻痺する」という症状の記述がないこと。しかも発症は人間にのみ見られ「家の壁、衣服のらい病」はあり得ないこと。こうしたことから、最近の聖書翻訳では「重い皮膚病」(新共同訳)、あるいはヘブル語そのままに「ツァラアト」(新改訳)と訂正されています。

それでは、主イエスに重い皮膚病を癒された人の出来事を見ましょう。

イエスがある町におられた時、全身重い皮膚病になっている人がそこにいた。イエスを見ると、顔を地に伏せて願って言った、「主よ、みこころでしたら、きよめて

**いただけるのですが」。イエスは手を伸ばして彼にさわり、
「そうしてあげよう、きよくなれ」と言われた。すると、
重い皮膚病がただちに去ってしまった。(ルカ5・12、13)**

ここで注目したいのは、この男の人が主イエスに「きよめ」を求めていることです。私達が病気で
お医者さんの所に行くとき、「直してください」とは言っても、「きよめてください」とは言いません。もしそ
んなことを言えば「来るところを間違っていますよ」と言われるに決まっています。この男の人の言葉
から、古代では重い皮膚病が「きよめ」を必要とする病気だと考えられていたことが分かります。そし
て主イエスが「そうしてあげよう、きよくなれ」と言われたところ、ただちに癒されたと書かれています。

これを書いているのは医者の子ルカですから、この出来事は彼の目から見ても大きな驚きだったの
でしょう。この出来事のあとで、主イエスの評判はますます広まっていて、多くの人々が集まってき
ました。しかし、主イエスは「だれにも話さないように」と彼に言い聞かせ(14節)、「寂しい所に退いて
祈っておられた」(16節)とあります。医者なら、病気の人がたくさん集まってくるのを喜ぶはずですが、
主イエスのこの行動は不思議です。しかし、その理由は15節にあります。

**イエスの評判はますますひろまって行き、おびたしい
群衆が、教を聞いたり、病気をなおしてもらったりする
ために、集まってきた。(ルカ5・15)**

このように、集まってきた人々の中には教を聞く目的の人もいましたが、「病気をなおしてもらっ
たりするために」とあるように、主イエスに「きよめ」よりも「癒し」を求める人が多かったからではない
でしょうか。これは主イエスが私達の世界に来られた目的である「きよめ」とは異なっていたのです。

では「きよめ」とはどのようなことなのでしょう？それは、ふたつ目に書かれている、中風をわず
らっている人の癒しの中で明かにされます。

**ある日のこと、イエスが教えておられると、ガリラヤやユダヤの
方々の村から、またエルサレムからきたパリサイ人や律法学者たちが、
そこにすわっていた。主の力が働いて、イエスは人々をいやされた。**

**その時、ある人々が、ひとりの中風をわずらっている人を床にのせたまま
連れてきて家の中に運び入れ、イエスの前に置こうとした。**

**ところが、群衆のためにどうしても運び入れる方法がなかったので、
屋根にのぼり、瓦をはいで、病人を床ごと群衆のまん中につりおろして、
イエスの前においた。イエスは彼らの信仰を見て、**

「人よ、あなたの罪はゆるされた」と言われた。(ルカ5・17-20)

おそらく、中風の人を運んできた人々の目的も癒しにあったと思いますが、主イエスは「人よ、あな
たの罪はゆるされた」と言われました。ここに「きよめ」とは罪の赦しであるということが示されています。
しかし、この言葉を聞いて怒った人々がいます。

**すると律法学者とパリサイ人たちとは、「神を汚すことを言うこの人は、
いったい、何者だ。神おひとりのほかに、誰が罪をゆるすことができるか」
と言って論じはじめた。(ルカ5・21)**

律法学者とパリサイ人たちが言ったことは間違いではありません。彼らの言うとおりに、神以外に、
だれも罪をゆるすことができないはずだからです。主イエスがただの人間であればこの批判は当た
っていますが、神の子イエス・キリストに対してこのように言うことは間違いなのです。しかし主イエス

がキリストであることを知らない彼らには無理もないことでした。だから、目に見える形で分かるようにと、主イエスは次のようにされたのです。

イエスは彼らの論議を見ぬいて「あなたがたは心の中で何を論じているのか。あなたの罪はゆるされたと言うのと、起きて歩けと言うのと、どちらがたやすいか。しかし、人の子は地上で罪をゆるす権威を持っていることが、あなたがたにわかるために」と彼らに対して言い、中風の者にむかって、「あなたに命じる。起きよ、床を取り上げて家に帰れ」と言われた。

すると病人は即座にみんなの前で起き上がり、寝ていた床を取りあげて、神をあがめながら家に帰って行った。みんなの者は驚嘆してしまった。そして神をあがめ、おそれに満たされて、「きょうは驚くべきことを見た」と言った。(ルカ5・22-26)

主イエスがこの世に来られたのは、すべての病気を「癒す」ためではなく、すべての人の根本問題である罪を「きよめる」ためでした。そしてこのことを成し遂げるために十字架に架かられたのですから、イエス・キリストには罪を赦す権威があるのです。

十字架で主イエスが私達の受けるべき罰を身代わりに受けて下さったことによって、私達の罪が赦されました。これは自分の罪の解決としてはあまりに簡単すぎると思われるでしょうか。しかし、重い皮膚病の人はどんな素晴らしいことをしてきよめられたのでしょうか？ また中風の人は何か良いことをして罪を赦されたのでしょうか？ いいえ、彼らは、ただ主イエスの所に来て求めただけです。そして主から戴いた罪の赦しの宣言をそのまま信じただけです。

キリストによる罪の赦しを信じるだけで救われるということは、次の様に言い替えることも出来ます。健康な体を持ち地獄に行く人もいれば、病を癒されなくてもキリストを信じて天国に行く人もいます。あなたは主イエスを救い主キリストと信じて、その救いをいただいていますか。

9. 「新しいぶどう酒と皮袋」 (ルカ5・27-39)

**「健康な人には医者はいらない。いるのは病人である。
私が来たのは義人を招くためではなく、罪人を招いて
悔い改めさせるためである」 (ルカ5・31、32)**

主イエスのこの言葉に似ているのが、「善人なおもて往生を遂ぐ、いはんや悪人をや」という『歎異抄』にある親鸞の有名な言葉で、「悪人 正機説」と呼ばれます。いろいろな解釈があるようですが、「善人と言われる人が往生するのであれば、自分は悪人だと思っている人を救うことこそ阿弥陀の本願だ」という意味に理解されています。「罪人でも救われる」というのではなく、「罪人だからこそ救われなければならない」というのです。仏教の到達した、すぐれた救済観です。ただし、悪人を救いの対象とするのだから悪事をはたらいてもよい、といった考えに対しては、解毒剤があるからといって、毒物を好んで飲む人がいないのと同様、悪事を好んではいけないとされたのです。しかし、この警告は親鸞の息子・善鸞によっても理解されず、誤解・濫用されて墮落を招いたということも知られています。

今回の聖書箇所は回心したマタイの開いた祝宴ひとの席で、主イエスがパリサイ人の質問に答え、四つの喩えを語っておられるところです。パリサイ人というのは民族の名ではなく、当時のユダヤ教の一派で、旧約聖書の掟(律法)を厳格に守ることを主義・主張とした人々でした。パリサイという名称の由来は「分離」を意味するヘブル語パラスから来ていて、特に汚れから自分たちを分離しようとしたことによると言われます。かつてはユダヤ教の宗教改革推進派として大きな役割を果たし、またそれゆえに多くの民衆から尊敬されて来たのですが、厳格で形式的・独善的な信仰だったために主イエスは彼らを糾弾しました。そして彼らはこの宴席に来て、「どうしてあなたがたは、取税人や罪人などと飲食を共にするのか」(ルカ5・30)とつぶやいていました。これに対して主イエスの言われたのが、冒頭に掲げた言葉です。

これはとても分かりやすい喩えです。なぜなら、私たちは病気で苦しいから病院に行くわけですが、もしお医者さんが「ウチにはなぜ病人ばかり来るんだ！」と言うならば、それは医者であることを自ら放棄するようなものです。よく「もう少しましな人間になったら教会に行きます」と言う人がいますが、それは「元気になったら病院に行きます」というくらいに的外れなことです。また、お医者さんの前で「私は何も悪くない。どこも痛くない。私は病人じゃない！」と言い張るならば、診察も治療も始まりません。お医者さんの前では正直であることが必要のように、私たちはありのまま主イエスの所に行っても良いのです。主イエスは、死に至る重病である罪から私たちを解放するために、ご自分の命を賭けてこの世に来られたのですから。親鸞の悪人正機説に先立つこと既に千二百年前に語られた主イエスの喩えは、果たして当時の知識階級であったパリサイ派や律法学者たちに正しく理解されたのでしょうか。彼らは次のような質問をしました。

**「ヨハネの弟子たちは、しばしば断食をし、また祈をしており、
パリサイ人の弟子たちもそうしているのに、あなたの弟子たちは
食べたり飲んだりしています」(ルカ5・33)**

それに対して主イエスは二つ目の喩えを語りました。

「あなたがたは、花婿と一緒にいるのに、婚礼の客に断食をさせることができるであろうか。しかし、花婿が奪い去られる日が来る。その日には断食をするであろう」（ルカ5・34、35）

私も牧師として結婚式の司式をすることがありますが、もしその喜びの席で「それでは、お二人の幸せな門出を祝って皆さんで断食をしましょう」と言ったらどうなるでしょう。せっかく御祝いしようとして集まってきた人々を幻滅させるばかりか、みんな怒って帰ってしまうことでしょう。取税人だったマタイが自分を本当の命に導いてくださった主イエスを喜び感謝して開いた祝宴の場であることをわきまえないパリサイ人の質問でした。

ユダヤでは伝統的に守られてきた国民的断食の日が年に三回ありました。第一はプリムの祭の前日（二月下旬）、第二は紀元前五八六年のエルサレム陥落を覚える悲しみの断食の日（七月中旬）、第三はヨム・キプールと呼ばれる「贖罪の日」（九月下旬）でした。パリサイ人は、このほか「週に二度断食して」（ルカ18・12）いましたが、それは月曜と木曜だったことが、『ミシュナ』という彼らの口伝伝承集に書かれています。なぜ、月・木なのかというと、それは市場が立つ日だったからで、パリサイ人の断食はこれ見よがしの意図だったことが明かです。このように、パリサイ人の断食は古くからの伝統的・独善的なものでした。

主イエスは御自身が公生涯の初めに四十日四十夜の断食をされたように、断食を禁止しなかったばかりか、むしろそのふさわしい仕方を教えておられます。

断食をする時には、偽善者がするように、陰気な顔つきをするな。彼らは断食をしていることを人に見せようとして、自分の顔を見苦しくするのである。よく覚えておくが、彼らはその報いを受けてしまっている。あなたがたは断食をする時には、自分の頭に油を塗り、顔を洗いなさい。それは断食をしていることが人に知れないで、隠れた所においてになるあなたの父に知られるためである。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いて下さるであろう。（マタイ6・16-18）

また、真の断食ということについて、イザヤ書には次のように書かれています。

見よ、あなたがたの断食するのは、ただ争いと、いさかいのため、また悪のこぶしをもって人を打つためだ。

きょう、あなたがたのなす断食は、その声を上に聞えさせるものではない。このようなものは、わたしの選ぶ断食であろうか。

人がおのれを苦しめる日であろうか。そのこうべを葦のように伏せ、荒布と灰とをその下に敷くことであろうか。あなたは、これを断食となえ、主に受けいられる日と、となえるであろうか。

わたしが選ぶところの断食は、悪のなわをほどき、くびきのひもを解き、しえたげられる者を放ち去らせ、すべてのくびきを折るなどの事ではないか。

また飢えた者に、あなたのパンを分け与え、さすらえる貧しい者を、あなたの家に入れ、裸の者を見て、これを着せ、自分の骨肉に身を隠さないなどの

**事ではないか。そうすれば、あなたの光が暁のようにあらわれ出て、
あなたは、すみやかにいやされ、あなたの義はあなたの前に行き、
主の栄光はあなたのしんがりとなる。** (イザヤ58・4-8)

「わたしが選ぶところの断食は、悪のなわをほどき、くびきのひもを解き、しえたげられる者を放ち去らせ、すべてのくびきを折る…」というのは、主イエスが公生涯において為されることを預言しています。ここで「自分の骨肉に身を隠さない」(58節)というのは、リビング・バイブルで「親族が助けを求めているのに姿をくらましてはならない」と訳されています。表面的・形式的な断食よりも、このようなことこそ主なる神が喜ばれる真の断食だということがイザヤ書にすでに示されているにもかかわらず、パリサイ派の人々は旧態依然の独善的断食することで自分たちの信仰を誇示していたのでした。それから主イエスはさらに二つの喩えを語られました。

**「だれも、新しい着物から布ぎれを切り取って、古い着物につぎを
当てるものはない。もしそんなことをしたら、新しい着物を裂くことになるし、
新しいのから取った布ぎれも古いのに合わないであろう。
まただれも、新しいぶどう酒を古い皮袋に入れはしない。
もしそんなことをしたら、新しいぶどう酒は皮袋をはり裂き、
そしてぶどう酒は流れ出るし、皮袋もむだになるであろう。
新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるべきである。」** (ルカ5・36-38)

新しい継ぎ当てには強さがあるって古い着物を破り、また新しいぶどう酒が発酵による炭酸ガスで古い皮袋を破ってしまうというのはそれ自体としては分かりやすい喩えですが、具体的にどのようなことを意味しているのでしょうか？

ここで興味深いのは「新しいぶどう酒は新しい皮袋に」と二回「新しい」という言葉が使われていますが、実は異なった単語が使われていることです。初めの「新しい」(ネオス)は《時間的に新しいこと》、後の「新しい」(カイノス)は《質的に新しい》という意味で、直訳すると「新鮮なぶどう酒は新品の皮袋に」となります。《時間的新しさ》を表す言葉は聖書ではここ以外にほとんど使われていませんが、質的新しさを表す言葉はたくさん使われています。3つだけ例を挙げましょう。

**食事ののち、杯も同じ様にして言われた、「この杯は、
あなたがたのために流すわたしの血で立てられる
新しい契約である」** (ルカ22・20)

だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。

古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。 (2コリント5・17)

わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。

わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。 (ヨハネ13・34)

主イエスは「新しい皮袋」という表現で新生を受けたクリスチャンを意味しているのです。なぜならクリスチャンとは、罪を赦すキリストの十字架という「新しい契約」により、全く「新しい人」とされ、「愛するという新しい生き方」を始めた者だからです。

キリストの到来によってもたらされた、罪からの救いと解放という新しいぶどう酒は新しい皮袋にこそふさわしいと言っておられます。断食や修行によって罪を赦されるのではなく、主イエスを救い主キリストと信じることによって救われ、罪から解放される新しい時代が来たのです。

聖書は何千年も前に書かれた古い書物ですが、その中に書かれている神の言葉はいつも私たちに新たに語りかけ、生かし、時に慰め、励まし、大きな平安と喜びのメッセージを今でもまたこれからも語り続けます。このような古くてもいつまでも新しい神の言葉に満たされ、常に新たに変わられてゆくことを経験すると、私たちは神の言葉の素晴らしさをより深く味わいたいと思うのです。主イエスの次の言葉はこのことを表しています。

**まただれも、古い酒を飲んでから、新しいのをほしがりはしない。
『古いのが良い』と考えているからである」(ルカ5・39)**

「悪人正機説」は人間の切実な願望ではありますが、「十字架の福音」は、罪を赦し、信じる人をまったく新しくするという神の宣言なのです。

10. 「安息日は誰のため？」 (ルカ6・1-11)

知り合いにナゾナゾ好きな年輩の方がいます。出題には幾つかのパターンがあるようなのですが、それがなかなか見抜けず、私は毎回引っ掛けられ、彼は意気揚々と引き上げていきます。この「ナゾナゾおじさん」に倣って、私もひとつ作ってみました。

野球のバットは「金属バット」。

イチローのバットは「特製バット」。

では、ユダヤ人のバットは？ (答)シャバット(安息日)

ナゾナゾおじさんの薫陶(?)を受けた者の作品としてはお粗末ですが、この設問では、まず相手に野球のバット《でなければならぬ》という固定観念を植え付けます。しかし、実は「バット」《であればよい》という言葉遊びの問題なので、意表をついた答で「ナーンダ」と笑いを誘うというパターンです。

ところで今回の聖書箇所には、主イエスとその一行が安息日(ヘブル語でシャバット)に行なって問題とされた二つのことが書かれています。私たちはここに《～でなければならぬ》という固定観念に囚われていた人々と、安息日の主旨に従っているの《であればよい》と解放されていた人々との対照を見ることができます。安息日の主旨とはどのようなことなのでしょう？ 聖書の記事は次のように始まります。

**ある安息日にイエスが麦畑の中をとおって行かれたとき、
弟子たちが穂をつみ、手でもみながら食べていた。すると、
あるパリサイ人たちが言った、「あなたがたはなぜ、安息日
にしてはならぬことをするのか」** (ルカ6・1,2)。

他人の麦畑で麦の穂を摘んで食べるのは盗みのように思われるかもしれませんが、聖書に次のように書かれているように、イスラエルでこれは許されていたのです。

**あなたが隣人の麦畑にはいる時、手でその穂を摘んで
食べてもよい。しかし、あなたの隣人の麦畑に鎌を
入れてはならない。** (申命記23・25)

そればかりか聖書には、むしろ麦畑の所有者に、刈り入れ時には落ち穂を残しておくようにとさえ定められています。

**あなたがたの地の穀物を刈り入れるときは、その刈入れに
あたって、畑のすみずみまで刈りつくしてはならない。
またあなたの穀物の落ち穂を拾ってはならない。貧しい者と
寄留者のために、それを残しておかなければならない。
わたしはあなたがたの神、主である。** (レビ23・22)

ミレーの有名な『落穂拾い』の絵を見たことがおありでしょう。また、ルツ記に書かれている出来事を思い合わせる方もおられるでしょう。聖書に書かれている隣人愛、貧しい人々への温かい配慮が愛の神から発していることが分かります。

このように、主イエスの弟子たちが麦畑で穂を積んで食べたことが、盗みにならないことは旧約聖書の専門家であるパリサイ人も充分知っていました。彼らが問題としたのは、そのことをしたのが安息日だったことでした。安息日とは何なのでしょう？

天地万物は完成された。第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なされた。この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なされたので、第七の日を神は祝福し聖別された。(創世記2・1-3)

安息日は、神が六日間の天地創造の御業を終えて七日目に休まれ、憩われたということに由来します。そして、モーセを通して十戒を授けた時にも神は次のように語られました。

**安息日を覚えて、これを聖とせよ。
六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。
七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。あなたもあなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、家畜、またあなたの門のうちにいる他国の人も
そうである。主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。
それで主は安息日を祝福して聖とされた。(出エジ20・8-11)**

安息日に通常の労働から解放されることは事実ですが、休息の仕方についても厳格に規定されていて、いくつかの禁止事項が例として挙げられています。たとえば、火をおこすこと(出35・3)、薪を集めること(民15・32-36)、食事を用意すること(出16・23-30)等々で、安息日を犯す者は殺されなければならないとまで定められていました(出31・14, 民15・32-36)。

こうした安息日規定が現代イスラエルでも国家的規模で守られているのを体験して驚いたことがあります。一九八八年にイスラエル旅行に行ったとき、ホテルに着いたのは金曜の午後でした。その晩の夕食を買いにエルサレムの街に出かけようとしたところ、先ほどスナリと9階まで昇ってきたエレベーターのボタンが利かず、どんなに押しても勝手に各階止まりで開閉し、ゆっくりと降っていくのです。私は故障しているのではないかと思ったのですが、後でユダヤ人ツアー・ガイドの答えを聞いて驚きました。彼は「ああ、それは安息日エレベーターだからですよ」と言って、次のように説明してくれたのです。

- ・エレベーターのボタンを押すということは、電気のスイッチを入れること
- ・スイッチを入れることは、発電用の蒸気タービンを回すこと
- ・蒸気タービンを回すには、石油を燃やさなければならない
- ・石油を燃やすのは、安息日に禁じられている「火を燃やすこと」に当る
- ・だから、エレベーターのボタンを押すことは、火を燃やすことになる
- ・しかし、自動エレベーターに乗る分には、あなたが火を燃やした事にならない

「安息日は金曜日の日没に始まり土曜日の日没で終わります。ところで、あなたは金曜の日没前に部屋に行ったが、日没後に街に出かけようとしたら、安息日エレベーターに自動的に切り替わっていたので戸惑った、というわけです。」

何たる「風が吹くと桶屋が儲かる」式の理屈であることか！と驚きました。しかし、これを現代のユダヤ人は大まじめに、しかも国家的規模で守っているのです。安息日律法が生活のこんな隅々にまで、今も生きているということを体験して、とても衝撃的でした。まして、二千年も前にはどんなに厳格に考えられ、また守られていたことでしょうか。そのような時代にあって、主イエスの次の言葉はまさに革命的だったはずで

そこでイエスが答えて言われた、「あなたがたは、ダビデとその供の者たちとが飢えていたとき、ダビデのしたことについて、読んだことがないのか。すなわち、神の家にはいって、祭司たちのほかだれも食べてはならぬ供えのパンを取って食べ、また供の者たちにも与えたではないか」。また彼らに言われた、「人の子は安息日の主である」。（ルカ6・3-5）

これは旧約聖書を良く知っていたパリサイ人には、まったく反論できなかつたほどの的確な答でしたが、現代の私たち日本人にその的確さがピンと来ないのは、旧約聖書の二つの故事に基づいているからです。

この故事は第一サムエル記第21章に書かれています。ダビデは神様に次の王に任命された青年でしたが、当時の王サウルにしつこく命をつけ狙われ、供の者たちと一緒にしばらく逃亡生活を余儀なくされました。主イエスが引用したのは、ダビデ一行が飢え渴いたある日の出来事です。その日は祭壇にパンを捧げたことから安息日だったことが明かなのに（レビ記24・8）、ダビデは安息日違反で殺されることなく、そのち王に即位しました。引用の趣旨は、マルコ2・27でさらに詳しく述べられています。

「安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない。それだから、人の子は、安息日にもまた主なのである」。

主イエスのこの答えにパリサイ人は二の句が継げなかつたのです。続いてルカは安息日に起きた、もう一つの出来事を伝えます。

また、ほかの安息日に会堂にはいって教えておられたところ、そこに右手のなえた人がいた。律法学者やパリサイ人たちは、イエスを訴える口実を見付けようと思って、安息日に癒されるかどうかをうかがっていた。

イエスは彼らの思っていることを知って、その手のなえた人に、「起きて、まん中に立ちなさい」と言われると、起き上がって立った。

そこでイエスは彼らにむかって言われた、「あなたがたに聞かす、安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」。（ルカ6・6-9）

この質問に正しく答えるのは小さな子供にもできることなのに、パリサイ派の律法学者たちは黙ってこくっていました。主イエスは彼ら一同を見まわして、その人に「手を伸ばしなさい」と言われると、その手は元どおりになったと書かれています。ところが、彼らはそれによって目を開かれるのではなく、逆に依怙地になり、硬直化した安息日観でますます心をかたくなにしたのです。

そこで彼らは激しく怒って、イエスをどうかしてやろうと、互に話し合いをはじめた。（ルカ6・10-11）

彼らとは対照的に、安息日でも穂を摘んで食べた弟子たちに見られる伸びやかな解放はどのようにしてもたらされたのでしょうか。その秘訣は「人の子は、安息日にもまた主なのである」という言葉にあります。主イエスご自分のことを指す時に「人の子」という表現を用いたので、これは「私は安息日の主なので」という意味になります。パリサイ人が激しく怒ったのはこの言葉にも原因があったと思われます。しかし、この点こそが解放と束縛の分かれ目となる重要なポイントなのです。

神が天地創造の御業を完成された時のことが創世記1:31 に記されています。

**神が造ったすべての物を見られたところ、それは、はなはだ
良かった。夕となり、また朝となった。第六日である。**

「すべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かった」という言葉に注目してください。芸術家が完成した自分の作品を満ち足りた思いで憩いつつ眺めている様子を彷彿とさせる言葉です。主なる神は御手の作品なる森羅万象とそこに生きる人間をも含めて、「はなはだ良かった」とされたのです。満ち足りた喜びと安息とがそこにあります。

ところで、コロサイ人への手紙1:15-17に、次のように書かれています。

**御子は、見えない神のかたちであって、すべての造られた
ものに先だって生れたかたである。万物は、天にあるものも
地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、
支配も権威も、みな御子にあつて造られたからである。これ
らいつさいのものは、御子によって造られ、御子のために造
られたのである。彼は万物よりも先にあり、万物は彼に
あつて成り立っている。**

聖書ではこのように、主イエスが天地創造にあたって、ご自分が父なる神と共にそこにおられ、創造の御業をなされたことが述べられています。そしてこのことこそ、弟子たちが主イエスと一緒にいて確信していたことだったのです。ヨハネによる福音書にもユダヤ人と主イエスとの会話が書かれています。

**そこでユダヤ人たちはイエスに言った、「あなたはまだ
五十にもならないのに、アブラハムを見たのか」。**

イエスは彼らに言われた、「よくよくあなたがたに言うておく。

アブラハムの生れる前からわたしは、いるのである」。

そこで彼らは石をとって、イエスに投げつけようとした。

しかし、イエスは身を隠して、宮から出て行かれた。(ヨハネ8:57-59)

「安息日は誰のため？」という主題でした。主イエスは「安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない」と言われ、硬直した《ねばならない》からの解放を宣言しました。それは「私は安息日の主なのです」と言われたように、誰よりも主御自身が私たちと共にいて安息の時を楽しまれる憩いの日なのです。クリスチャンは主イエスの十字架と復活を記念する日曜日の礼拝をもって感謝と憩いの安息日としています。この安息日を守る人への祝福の言葉をもって結びと致します。

**もし安息日にあなたの足をとどめ、わが聖日にあなたの楽しみを
なさず、安息日を喜びの日と呼び、主の聖日を尊ぶべき日と
となえ、これを尊んで、おのが道を行わず、おのが楽しみを
求めず、むなしい言葉を語らないならば、その時
あなたは主によって喜びを得、わたしは、あなたに地の高い所を
乗り通らせ、あなたの先祖ヤコブの嗣業をもって、
あなたを養う」。これは主の口から語られたものである。(イザヤ58:13、14)**

11. 「主から選ばれた人々」 (ルカ 6・12-16)

ある自動車整備士と話していると、その人は中古車の斡旋をしたこともあるというので、「整備士の立場から、良い中古車を選ぶコツは何ですか？」とお尋ねしたところ、「一目で車を判断するのは難しいので、一番いい方法は、良いセールスマンを選ぶことですね」という答えでした。「モノ選びは、人選びか。なるほど！」と思いました。しかし、良い人を選ぶというのなかなか難しいことです。

今回の聖書箇所で、主イエスはすでに数多くいたと思われる弟子たちの中から、特に十二人を選び出しています。どのようにして、またどんな人々が十二弟子に選ばれたのでしょうか？

**このころ、イエスは祈るために山へ行き、夜を徹して神に
祈られた。夜が明けると、弟子たちを呼び寄せ、その中から
十二人を選び出し、これに使徒という名をお与えになった。**

(ルカ6・12、13)

「夜を徹して神に祈られた」というのですから、弟子選びに真剣に取り組まれたということが分かります。自分ひとりの主観からではなく、父なる神との祈りの中で十二人が選ばれたのです。また、何のために選び出したのかということについては、「彼らを自分のそばに置くためであり、さらに宣教につかわし、また悪霊を追い出す権威を持たせるためであった」(マルコ3・14、15)と書かれています。

ところで、彼らに「使徒という名をお与えになった」とありますが、「使徒」と訳されているギリシヤ語「アポストロス」には「特命全権大使」という意味があり、国語辞典には次のように説明されています。

「特命全権大使」最高級の外交使節。外国に駐在し、自国元首の名誉と威厳とを代表し、本国政府の訓令に基づいて駐在国との外交および在住自国民の保護・監督に携わる。「大使」とも言う。

随分いかめしい説明ですが、日本の大使であれば、天皇の名で外国政府と交渉することのできる資格という大きな権限と責任を与えられた人物です。ですから、主イエスはご自分の名を用いて宣教と癒しを行う権威を「使徒」たちにお与えになったのです。では、どんな人々が選出されたのでしょうか。

**すなわち、ペテロとも呼ばれたシモンとその兄弟アンテレ、
ヤコブとヨハネ、ピリポとバルトロマイ、マタイとトマス、
アルパヨの子ヤコブと、熱心党と呼ばれたシモン、ヤコブの
子ユダ、それからイスカリオテのユダ。このユダが裏切者とな
ったのである。** (ルカ6・14-16)

ペテロというあだ名を主イエスからいただいたシモンはガリラヤ湖の漁師でした。彼の言動は聖書にたくさん記録されていて非常に興味深いのですが、思ったことをズバズバ言う、直情型の熱血漢だった印象を受けます。その弟アンテレも同じく漁師で、彼がペテロに主イエスを紹介したのでした。

ヤコブとヨハネも兄弟で、やはりガリラヤ湖の漁師でした。二人はボアネルゲ(雷の子)と呼ばれていたことから、話す時の声が雷のように大きかった様子がうかがわれます。ピリポは五千人給食の奇蹟の前に、「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリ分のパンでは足りないでしょう」と即座に計算できるほど頭の回転が早い人だったようです。ピリポの友人がバルトロマイと呼ばれたナタナエルで、紹介を受けたとき、最初「ナザレから、なんのよいものが出ようか」と言ったのですが、主イエ

スが「見よ、あの人こそ、ほんとうのイスラエル人である。その心には偽りが無い」(ヨハネ1・47) と言ったことから弟子となった人です。

マタイは当時、イスラエル同胞の裏切り者の職業と見なされていた取税人出身、トマスは何事も自分で確かめ納得しないと気の済まない懐疑派、シモンが属していた熱心党というのは極右の原理主義者集団だったと言われます。ユダヤアルパヨの子ヤコブについてはほとんど分かっていません。そしてイスカリオテのユダは「裏切り者」として余りにも有名です。このように、何組かの兄弟が含まれていますから、何かというとグループになって意見が分かれることもあったのではないのでしょうか。

こうして見ますと、十二人のキリストの「特命全権大使」たちの背景は種々雑多で、果たして使徒団としてまとまりがあったのだろうか心配になります。事実、この約3年後、主イエスは最後の晩餐の席で次のように祈っていることから、世を去るに当たってこのことを心配していた様子が見えます。

「わたしはもうこの世にはいなくなりますが、彼らはこの世に残っており、わたしはみもとに参ります。聖なる父よ、わたしに賜った御名によって彼らを守って下さい。それはわたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためであります。」(ヨハネ17・11)

しかし、これが「みこころにかなった」(マルコ13・3)使徒たちであり、十二弟子はこのようにして選ばれたのです。実は主イエスも御自身を特命全権大使として遣わされた者だと言っている聖書箇所があります。

「あなたがわたしを世につかわされたように、わたしも彼らを世につかわしました。」(ヨハネ17・18)

ここで「つかわす」と訳されている言葉が「特命全権大使として派遣する」という意味の言葉アポステロです。御自身が父なる神から遣わされた大使であり、主イエスもその権威を以て弟子たちをご自分の代理人として選んだということが語られているのです。

イエス・キリストの「特命」とは私たちの罪を赦すための十字架と復活であり、使徒たちの特命は、その救いの福音を全世界に宣べ伝えることでした。人間の眼には十字架と復活は愚かに見えますが、その愚かに見える手段を使って、神様は私たちに救いをもたらしたのです。

十二人のほかにもう一人、「使徒」と呼ばれるパウロがいます。彼はかつてクリスチャンを迫害した人でしたが、ダマスコ途上で復活した主イエスから直接の召命を受けて使徒となった人です。彼の書いた書簡に次のような力強い福音宣言があります。

十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救にあずかるわたしたちには、神の力である。すなわち、聖書に、「わたしは知者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなしいものにする」と書いてある。知者はどこにいるか。学者はどこにいるか。この世の論者はどこにいるか。神はこの世の知恵を、愚かにされたではないか。この世は、自分の知恵によって神を認めるに至らなかった。それは、神の知恵にかなっている。そこで神は、宣教の愚かさによって、信じる者を救うこととされたのである。

ユダヤ人はしるしを請い、ギリシヤ人は知恵を求める。

しかしわたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝える。

このキリストは、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものであるが、召された者自身にとっては、ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神の力、神の知恵たるキリストなのである。

神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからである。(1コリント1:18-25)

ところで、神が人を選ぶ基準はどこにあるのでしょうか？ ダビデが王に選ばれたとき預言者サムエルに語られた主なる神の言葉は「顔かたちや身の丈を見てはならない…私が見るところは人と異なる。人は外の顔かたちを見、主は心を見る」(サムエル上16:7)でした。

このことで、思い合わせるのは、私たち夫婦が「ペットを飼おう」ということになった時のことです。ペット・ショップに行ってみて、気に入ったのは真っ白で小さな文鳥でした。どれにしようかと見ていると、頭の禿げている数羽がいます。私は「これはきっとイジメだ！」と思い、店員に聞くと、やはりそうで、急に聖書の言葉が思い出されました。

「主があなたがたを愛し、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの国民よりも数が多かったからではない。あなたがたはよろずの民のうち、もつとも数の少ないものであった」 (申命記7:7)

その小鳥を見ていると可愛そうになってきました。私自身、最も惨めなときに主に救っていただいた者なので、どうしても「元気なほうを下さい」とは言えないのです。思わず「その一番イジメられているのを下さい」と言いました。お店の方も喜んで500円を引いて下さり、3,500円を買ってきたのが火曜日でした。ところが、金曜日にその店の新聞広告が入り、その中になんと「文鳥一律1,000円」とあるではありませんか！

でも、不思議と私たちには損をしたという思いが起きませんでした。というのは、むしろ主イエスの十字架という高い値をもって買い取られ、私たちも神の家族に加えられたということが思い合わされたからです。しかし、その文鳥がなかなか馴つきません。長い間イジメられていたので無理もないと思い、毎日エサを与え、鳥かごの掃除をし、語りかけ続けました。主もこんなふうに頑(かたくな)な私たちに必要なものを備え、心が開かれるのを長い間待っていて下さったのだなぁと思われたことでした。

そうして一年ほど経ったある日、とうとう小鳥が指に乗ってくれたのです。それからは、とにかく飼い主と一緒にいることを楽しんで囀(さえず)るので、これこそ讚美の原型ではないかと学ぶ思いでした。この小さな命を通して主が信仰について教えてくださった色々なことを感謝しています。

ともすれば私たち人間は強い者、良いもの、優れた、才能のある人を選ぼうとしますが、主がお選びになる基準はそれとは異なっています。むしろ、パウロが次のように言っている通りです。

兄弟たちよ。あなたがたが召された時のことを考えてみるがよい。人間的には、知恵のある者が多くはなく、権力のある者も多くはなく、身分の高い者も多くはない。それなのに神は、知者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選び、有力な者を無力な者にするために、この世で身分の低い者や軽んじ

られている者、すなわち、無きに等しい者を、あえて選ばれたのである。それは、どんな人間でも、神のみまえに誇ることはないためである。

あなたがたがキリスト・イエスにあるのは、神によるのである。キリストは神に立てられて、わたしたちの知恵となり、義と聖とあがないとになられたのである。それは、「誇る者は主を誇れ」と書いてあるとおりである。（Ⅰコリント1:26-31）

12. 「幸いな人は誰？」 (ルカ 6・20-49)

**「こころの貧しい人たちは、さいわいである、
天国は彼らのものである。」**(マタイ5・1-3)

有名な「山上の垂訓」または「山上の説教」と呼ばれる箇所の一節です。表現の響きは穏やかで平安なのですが、語られている内容は逆説に満ちていて、深い意味が込められています。

主イエスは「**こころの貧しい人たちは、さいわいである**」と言われました。不思議な言葉です。私たちは豊かさの中にこそ幸いがあると信じ、それが物質的なものであれ、精神的なものであれ、ひたすら豊かさを求めて生きてきたのではないのでしょうか？ しかし、ルカはさらに端的に、主イエスは「**あなたがた貧しい人たちは、さいわいだ。神の国はあなたがたのものである**」と語られたと記しています(ルカ6・20)。貧しいことが幸いであり、貧しい人こそが神の国に入ることができるとは、一体どういう意味なのでしょう？

「貧しい」という言葉は謙譲語だと思います。というのは、自分で「私は貧乏だ」とか「家はお金がない」とは言っても、他人から「あなたって貧乏だね」とか「あなたは心の貧しい人だ」と言われたら、きっと誰でも憤慨し、傷つくはずだからです。しかし「清貧」という言葉はこれとは逆で、他人に対して使っても、自分自身には使えない言葉です。『新明解国語辞典』には次のように説明されています。

「清貧」〔権勢の地位にある政治家などが〕地位を利用して
富を求めたりせず、お金と縁の遠い生活に安んじること。

つまり、お金持ちが慎ましく暮らすから清貧なのであって、もともとお金持ちではない人が慎ましく暮らしても、それは単に貧乏であるに過ぎないというわけです。そうとすれば、誰もが権勢の地位などにあるわけではないので、主イエスは私たちに「あなたがた貧しい人たちは、さいわいだ。神の国はあなたがたのものである」と言っておられるということなのでしょう？ どうも、そう単純な意味ではなさそうです。主が言われた意味を正しく理解するには、この言葉が語られた時の状況を見る必要があります。

**大ぜいの弟子たちや、ユダヤ全土、エルサレム、ツロと
シドンの海岸地方などからの大群衆が、教を聞こうとし、
また病気をなおしてもらおうとして、そこにきていた。
そして汚れた霊に悩まされている者たちも、いやされた。
また群衆はイエスにさわろうと努めた。それは力がイエスの
内から出て、みんなの者を次々にいやしたからである。
そのとき、イエスは目をあげ、弟子たちを見て言われた、
「あなたがた貧しい人たちは、さいわいだ。神の国はあなた
がたのものである。」** (ルカ6・17-20)

主イエスはこの言葉を「弟子たちを見て」語られたというのが、マタイとルカの証言です。ここで「貧しい」と訳されている言葉は、確かに経済的貧困も意味しますが、霊的な意味でも用いられます。『織田昭ギリシャ語小辞典』には次のように説明されています。

「**霊で貧しい者たち、霊で自分の貧困を意識する者たち、
自らの霊性で自分が神の前に無一物、乞食同然であることを知る人々**」

このように、全てを捨てて従ってきた弟子たちが、駆け集まってくる多くの病に苦しむ人々に対して、何も出来ない自分を知り、自らの霊的無力さを覚えて打ちひしがれているのを見て、主は励ましの言葉を語られたのであって、貧しい人が幸いだという一般論ではないのです。なぜなら、自らの霊的貧困を悟った彼らは、やがてふさわしい時になって、主イエスから悪霊を追い出し、病を癒す権威を与えられて福音宣教に派遣されるのですから(マタイ10章、マルコ6章、ルカ9章)。

弱さ・無力さを知ることは、決して自分という存在を否定することではありません。前に「**健康な人には医者はいらない。いるのは病人である**」(ルカ5・31)という御言を学びましたが、自分の健康を自負している限り人は医者の所に行かないように、自分の強さを誇っている人は主イエスの所には来ません。しかし、神の前に人間が弱く・無力な存在であることは事実です。このことに目が開かれた人は幸いの源である主の元に来ます。だから主イエスは「**あなたがた貧しい人たちは、さいわいだ**」と言われたのです。

さて「さいわい」とはどのようなことでしょうか。「幸い」「幸せ」「幸福」と言葉はいろいろありますが、あなたはどのような時に幸いだと感じますか？ 国語辞典には「運が良く、恵まれた状態にあること」とありますが、英語では ハッピー **happy**であり、**hap**(物事が起きる)がその語源だとありました。「幸福は自分の手でつかみ取るもの」という表現がありますが、せっかく掴み取った幸福なのに、それは運や物事が起きることに依存しているため一旦起きてしまえば、その幸福感は長続きしないのです。なるほど、欲しいものが手に入ったり、試験に合格したり、という場合に私たちが幸せを感じるのは事実ですが、そういう幸福感は一時的なもので、やがていつの間にか薄れていくものです。

ところが、ここで主イエスが「さいわいです」と言っているのは、「祝福される」(英語で **blessed**)という言葉なのです。幸福と祝福はどう違うのでしょうか。「幸福」とは人間が与えることのできる一時的な幸いですが、「祝福」とは神様だけが与えることの出来る永続的な幸いです。実は「山上の垂訓」の冒頭はこの「祝福される」という言葉でした。そして、このように語り出されることによって、その場にいる人々がすぐに連想したのは、同じように「幸いなことよ」で始まっている詩篇第一篇だったのではないかと思うのです。そこに「祝福される」とはどのようなことなのか鮮やかに描かれています。

**幸いなことよ。悪者のはかりごとによらず、罪人の道に立たず、
あざける者の座に着かなかつた、その人。まことに、その人は
主のおしえを喜びとし、昼も夜もおしえを口ずさむ。
その人は、水路のそばに植わった木のようだ。時が来ると
実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしても栄える。
悪者は、それとは違い、まさしく、風が吹き飛ばすもみがら
のようだ。それゆえ、悪者は、さばきの中に立ちおおせず、
罪人は、正しい者のつどいに立てない。まことに、主は、正しい者の
道を知っておられる。しかし、悪者の道は滅びうせる。**

祝福の反対は「呪い」だと言われます。それは「吹き飛ばされ」「滅び失せる」ことです。しかし、祝福された人は「何をしても栄える」とあります。祝福がどんなに素晴らしいことであるかが分かります。その人は「水路のそばに植わった木のようだ」と喩えられています。緑と水の豊かな日本ではあまりピンとこない喩えですが、砂漠と隣り合わせのパレスチナで水は生命線ですから、その水が豊かに流れる川は豊かな生命を表す象徴です。神様から溢れ流れる豊かな祝福をいただく人は「時

が来ると実がなり、その葉は枯れない」と描かれています。「山上の垂訓」には、この他にもたくさんの素晴らしい祝福の言葉がありますから、是非ご自分で読み味わってください。ここではもう一箇所だけをご紹介します。

それだから、あなたがたに言うておく。何を食べようか、何を飲もうかと、自分の命のことで思いわずらい、何を着ようかと自分のからだのことで思いわずらうな。命は食物にまさり、からだは着物にまさるではないか。空の鳥を見るがよい。まくことも、刈ることもせず、倉に取り入れることもしない。それなのに、あなたがたの天の父は彼らを養っていて下さる。あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか。あなたがたのうち、だれが思いわずらったからとて、自分の寿命をわずかでも延ばすことができようか。(マタイ6・25-27)

そして次のように語られています、

まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。だから、あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであろう。一日の苦勞は、その日一日だけで十分である。(マタイ6・31-34)

「神の国と神の義とを求めるとは、主なる神を礼拝する日曜日を大切に、聖書に書かれている神の御言葉を生きることです。それが「流れのほとりに植えられた木」が意味するものであって、いつも主の祝福に潤されている人の生き方です。

さて、以上のことから「祝福」とはどういうことだと言えるでしょうか。それは単なる言葉ではありません。祝福されるということは、祝福の源である主がいつも貴方と共にいて下さるということです。「共におられる神」ということを旧約聖書が書かれたヘブル語では「インマヌエル」と言います。

それゆえ、主はみずから一つのしるしをあなたがたに与えられる。見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名はインマヌエルとなえられる。(イザヤ7・14)

これはクリスマスに読まれることの多い聖書の言葉で、救い主の誕生を預言するイザヤ書の言葉です。事実、この言葉は語られた七百年後にイエス・キリストにおいて成就したのです。

幸いな人とは誰でしょうか？ それは、日々起きてくる個々の事柄に一喜一憂する者ではなく、インマヌエルの神がいつも共にいて祝福して下さることを信じ、神の国とその義を第一とする人です。あなたは今自分の弱さ、無力さを覚えていますか？ 主イエスはそのようなあなたと共におられます。主イエスは十字架と復活という救いの御業を成し遂げて天に帰られる前に言われました。

「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。」(マタイ28・18-20)

13. 「裁く心からの解放」 (ルカ6・37, 38)

会社で一緒に働いていた二人のアルバイト学生が何かの間違いをした時のことです。ひとこと注意しようとして呼んだところ、一人が言いました。「泣くまで責めよう、他人の失敗！」すると、間髪を入れずにもう一人が「笑ってごまかそう、自分の失敗！」そして二人で「ワハハハ～」と笑ったのです。

その当意即妙さと絶妙なコンビネーションで呆気にとられ、私は思わず「見事だ」と感心してしまいました。結局、彼らは自分で分かっているようなので、注意は無用と判断しましたが、その後で、確かに「人には厳しく、自分には甘い」ということがあるなぁと考えさせられたことでした。ある人はこうも言っています、「過ちは人の常、過ちを他人のせいにするのは、もっと人の常」。なるほど…と我が身を振り返らされる言葉です。

さて、今回の聖書箇所で主イエスは「裁くな」と言っておられます。

人をさばくな。そうすれば、自分もさばかれることがないであろう。

また人を罪に定めるな。そうすれば、自分も罪に定められることが

ないであろう。ゆるしてやれ。そうすれば、自分もゆるされるであろう。(ルカ6・37)

この言葉は、ともすれば、自分が裁かれることがないようにするために、あなたも他人を裁くな、という意味に読みがちですが、そのような消極的な意味だけではなく、もっと深い意味がありそうです。

そもそも、「裁く」とはどうすることでしょうか？また、なぜ裁いてはいけないのでしょうか？「裁く」と訳されているギリシャ語は「価値判断をする」というのが本来の意味です。またヘブル語なら「分離する」という意味を持つ「パラス」という言葉で、これが「パリサイ派」の語源とされています。そうすると、次に問題になるのは、判断基準ないし分離基準は何かということになりますが、主イエスは、次のように言っておられます。

「与えよ。そうすれば、自分にも与えられるであろう。

人々はおし入れ、ゆすり入れ、あふれ出るまでに量を

よくして、あなたがたのふところに入れてくれるであろう。

あなたがたの量るその量りで、自分にも量りかえされるで

あろうから。」(ルカ6・38)

ここで「量り」と訳されている言葉は、「秤」ではなく、秤の皿に乗せられる「分銅」です。古代ギリシャでは「正義の女神は目隠しをして天秤を掲げ持つ」と言われましたが、そのような彫刻や彫像も現代に残っています。外見にとらわれない公平さを保つため目隠しをした正義の女神が、善悪を判断するための天秤を掲げ持っているのですが、その秤の一方の皿には基準となる分銅が乗せられ、他方には量られるべきものが乗せられているという図式です。

私達が価値判断するとき、もしかすると自分を、秤を掲げ持つ女神の立場に置いてはいないでしょうか。しかし、主イエスの主旨は、私たち自身が皿に載せられて較量される、ということです。つまり、私達の判断基準はほかでもない自分自身の価値観であって、私達自身が分銅のように、一方の皿に乗っているということになります。ですから、私達が裁くとき、実は自分自身の価値観がどのようなものであるかが問われるというのです。事実、マタイ7・2には次のように書かれています。

あなたがたがさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなた

がたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられるであろう。

パウロはもっとハッキリと言っています。

だから、ああ、すべて人をさばく者よ。あなたには弁解の余地がない。

あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めている。

さばくあなたも、同じことを行っているからである。 (ロマ2・1)

厳しい言葉です。以上のことから、「裁く」とは《自分と相手を分離し、自分の価値観で相手を悪いとか劣っていると判断をすること》という心の働きを示していると言えます。しかも、裁いている自分は必ずと言っていいほど、自身を良い者・正しい者に思い為し、その基準で相手を批判するという場合が圧倒的に多いはずで。

それなら私達は一切の価値判断をすべきではないのかということ、そうではないと思います。何にもとらわれない、公平で客観的な価値判断ということは、神お一人がなしうることであって、人間の判断は多かれ少なかれ主観的なものだということをわきまえておく必要があるということです。自分の判断だけが公平で絶対に正しいと、独善に陥ることがあってはならないし、他の人を、ただ違っているだけに過ぎないのに、悪いとか、間違っているとして「分離」してゆくパリサイ的な生き方は、裁きをむしろ自分の身に招くだけだということを、聖書の言葉は示しているのです。

マタイ伝では、この後に有名な「豚に真珠」の喩えが語られています。

聖なるものを犬にやるな。また真珠を豚に投げてやるな。

恐らく彼らはそれらを足で踏みつけ、向きなおってあなたがたに

かみついてくるであろう。 (マタイ7・6)

これを私は、《価値の分からない人に貴重なものを与えるな、無駄になるばかりか、かえって恨まれることにもなりかねない》という意味だと思っていました。しかし、ある時、急に疑問に思われてきたのです。主イエスともあろう方からそんな冷たく突き放したような、また、人を馬鹿にしたような言葉を発せられたはずがないと思ったからです。そういう見方で改めてこの御言葉を読んでみると、「相手の人を犬や豚だと思ふなら、あなたがどんなに真珠の価値を知っていても、その人に価値は伝えられない。なぜなら、あなたが相手の人を犬や豚だと裁いているその前提が問題なのだから」と言っておられるのではないかと思われてきました。そうすると、後半の「恐らく彼らはそれらを足で踏みつけ、向きなおってあなたがたにかみついてくるであろう」と言われた意味がよく分かります。真珠に怒っているのではなく、犬や豚だと思われたこと、また投げつけられたことに怒って、真珠に価値を見出すことがないというのは当然のことです。ここで真珠というのは福音を指しています。福音の価値を見えなくさせているのは、実は相手を「犬だ」「豚だ」と見なして、前もって裁いている心が問題だと主は言っておられるのではないのでしょうか。

では、どうすればよいのか？ それは、この言葉に先立って既に語られています。

しかし、あなたがたは、敵を愛し、人によくしてやり、また

何も当てにしないで貸してやれ。そうすれば受ける報いは大きく

あなたがたはいと高き者の子となるであろう。いと高き者は、

恩を知らぬ者にも悪人にも、なさけ深いからである。

あなたがたの父なる神が慈悲深いように、あなたがたも

慈悲深い者となれ。 (ルカ6・35、36)

「裁く」の反対は「裁かない」ではなく、また「赦す」でもない。「裁く」の反対は「愛することだ」と主イエスは言っておられるのです。では「愛する」とはどうすることなのでしょう？ 次回はこのことについて、ご一緒に学びます。

14. 「敵を愛する？」 (ルカ6・35、36)

「かだぎだってもでァじにしろ」

これは山浦 玄 ^{はるつく}嗣さんという方が「敵を愛しなさい」という言葉を東北弁に訳したものです。山浦さんはカトリックのクリスチャン・ホームに育った、岩手県大船渡市のお医者さんです。幼い時にはクリスチャン信仰の故に友人たちから「ヤソ」とか「国賊」と ^{ののし}罵られたそうですが、それは友人たちが主イエスの素晴らしさを知らないからだと考え、いつの日にか自分たちが生まれ育った気仙 ^{けせん}地方の方言に福音書を翻訳したいとの願いを持ち続けました。そして、まずケセン語の研究をして辞典や文法書を作って準備し、六〇歳を過ぎてからギリシャ語を学んで四つの福音書をケセン語に完訳しました。その翻訳はやがてカトリック東北司教区から推薦されて、二〇〇四年四月にローマ法王ヨハネ・パウロII世に献呈されました。

『ケセン訳福音書』には翻訳本文と山浦さん自身による朗読CDが付いています。私は二〇〇三年に初めてCDを聞いたとき、思わず吹き出してしまいました。というのは私も岩手県生まれですが、自分が育った懐かしき東北弁で福音が語られていたからです。しかし、聞き続けているうちに、しだいに腹の底に福音が響いてくるのを覚えました。

東北各地にも隠れ切支丹の里と呼ばれる場所が数多くあります。遙か昔、みちのくに福音が伝わったとき、厳しい迫害下にこのような言葉でキリストの言葉が語り伝えられたのではないかと思われてきたのです。岩手県南部の、ある殉教記念館を訪ねたとき、近くに「トキゾー沢」と呼ばれる場所があると聞きました。トキゾーという人の名前にちなんだ沢なのかなと思ったら、それは「徒刑場の沢」を意味する地名だったのです。ここで信仰の先輩たちは「かだぎだってもでァじにしろ」と言いつつ殉教していったのでしょうか。

さて、山浦さんは、「愛する」を「大事にする」と訳しましたが、このことについて新聞への寄稿で次のように語っておられます。

『『敵を愛せ』も実に奇怪な表現で、納得できるものではない。

教会という社会だけで通用する業界用語は一般世間には通じない。

日本語の聖書は世間離れのした表現に満ちていると気がついた。

そこで私は新約聖書原典の古代ギリシャ語から直接ケセン語に

翻訳することとした。…

『敵(かだぎ)だっても大事(でァじ)にしろ！』と、おらほ(私たちの)ヤソ様が
みんなの心の中で笑っている。」

(2005年5月19日付『河北新報』寄稿「日本語と私」より)

愛せないから敵なのであって、それを愛しなさいとは矛盾だと、大いに悩んだそうですが、その結果、山浦さんは「大事にしろ」と訳したのです。確かに、私も日本語で「愛する」という言葉を使うのには名状しがたい抵抗を覚えます。それを、こともあろうに敵に対して使うということはほとんど絶望的な気がします。ところが、主イエスははっきりとこう言われたのです。

しかし、あなたがたは、敵を愛し、人によくしてやり、また何も
当てにしないで貸してやれ。そうすれば受ける報いは大きく、
あなたがたはいと高き者の子となるであろう。いと高き者は、
恩を知らぬ者にも悪人にも、なさけ深いからである。
あなたがたの父なる神が慈悲深いように、あなたがたも
慈悲深い者となれ。 (ルカ6・35、36)

一体、「愛する」とは、どうすることなのでしょう？ 日本語に「好き」とか「恋」、「愛」という言葉があるように、ギリシャ語にも「愛」を表す4つの言葉があります。第一はスルゲーで「家族愛」を表し、第二はエロースで男女間の「性愛」を、第三はフィリアで「友愛」、第四がアガペで「至上の愛」を表すと言われます。主イエスが「敵を愛しなさい」と言われたのは、この第四番目のアガペの愛なのです。これら四つの愛についてカトリック作家、曾野綾子は次のように語っています。

日本人の概念の中にある愛というのは、恐らくこの第三の
分類に入るものまでなのである。しかし問題は、第四の愛で、
それがアガペーと言われ「くじくことのできない慈悲、うち
破ることのできない善意」を意味するという。第三までの愛は、
いわば感情の移入が簡単に行われ得るものである。子供は
かわいいし、恋人は好きでたまらない。親しい友人に親愛感を
持つのも、水が低きにつくように自然である。

(2009 年7月4日「産経新聞」コラム・オピニオンより)

ところが、主イエスが「敵を愛しなさい」と言われたことについては、これらの四つの違いを区別できないと、不当に買いかぶられたり、偽善的だとして嫌われたりしてきました。つまり「何とご立派なことか」とか、「だからクリスチャンは嘘つきでいやだ」とエセ道徳家呼ばわりする人もいるわけです。しかし、第三までの愛には、かならず何らかの交換条件(英語で言うギブ・アンド・テイク)の要素が含まれているのに対し、第四のアガペの愛は、無条件で一方向的に与え尽くしてやまない愛なのです。

「好き」は英語では ライク(like)、「愛」は ラブ(love)ですが、私はこの二つの言葉の違いについて、あるアメリカ人宣教師に質問したことがあります。その答は「likeをどんなに重ねても、loveの一語には到底かなわない」ということでした。

明治の文豪、二葉亭四迷がこのような英語の love が持つ語感を何とか和訳しようとして苦しんだということですが、煩悶の末に彼が至った翻訳は「あなたのためなら死んでもいい」でした。このような「至上の愛」を人間は果たして持つことができるのでしょうか？「私は愛がないから、そのようなことはとてもできない」と思う人は多いと思います。

では、主イエスは人間の努力目標としてアガペの愛の奨めをしているのでしょうか？ 私にはそうは思われぬのです。むしろ、「愛は名詞ではなく、動詞だ」ということを意味しているのではないかと思います。つまり、先ず「愛」という感情があって、その発露として具体的な行動をしていくのではなく、自分の心の中の感情は感情として持ちつつも、それにもかかわらず、相手が必要としていることを自分がするとき、それは「愛する」ことなのだということを主イエスは言っておられるのではないのでしょうか。

曾野綾子は先の文章にさらに続けます。

アガペーの愛には、更に辛い結果が待ち受けている。アガペーの愛に限り、相手から感謝されることを期待できない。それだけではなく、侮辱され、嫌がらせを受けることさえある。それでも相手に対して憎しみを持つことなく、「くじかれることのない慈悲と善意」をもって、相手のために一番いいことをしようとする。キリスト教における、真の意味の愛は、このアガペーの愛をおいて他にはない。

これは主イエスの次の言葉を思い起こさせます・

わたしのいましめは、これである。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。あなたがたにわたしが命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。わたしはもう、あなたがたを僕(しもべ)とは呼ばない。僕は主人のしていることを知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼んだ。わたしの父から聞いたことを皆、あなたがたに知らせたからである。あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。そして、あなたがたを立てた。それは、あなたがたが行って実をむすび、その実がいつまでも残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである。これらのことを命じるのは、あなたがたが互に愛し合うためである。(ヨハネ15・12-17)

敵を好きになれないというのは当然のことです。しかし、敵を好きになれるまで何もしないというのであれば、いつまでたってもその時は決して来ないはず。「好き」とか「愛」といった感情が湧き起こって、それが行動にならなければいけないというものではありません。「感情に裏打ちされていない行為は偽善だ」と言って何もしないなら、それは愛さない言い訳にしか過ぎません。

むしろ、敵に良くしてやり、何も当てにしないで貸すこと、それこそが「愛する」ことだと主イエスは言っておられるのではないのでしょうか。「好意」は「行為」に伴って起きてくることもあれば、伴って来ない場合もあります。しかし「愛する」とは単なる感情的・情動的な行為ではなく、たとえ自分の感情に反してでも相手の必要に応じてゆく、もっと意志的で、理性的な行動なのです。

事実、主イエスはこのように言って十字架への道を歩まれました。ただ言葉で愛すると言うだけではなく、ご自分の命を十字架の上に投げ出して下さいました。私たちが犯した罪のゆえに受けるべき罰を、主イエスが身代わりに受けて下さったのです。この救い主イエス・キリストにこそ、敵をも愛する本当の愛があります。

15. 「ただ御言葉を下さい」 (ルカ7・1-10)

**「あなたがたに言うておくが、これほどの信仰は、イスラエルの
中でも見たことがない」** (ルカ7・9、マタイ8・10)

聖書の中には、主イエスにその信仰を激賞された何人かの人々がいます。それは意外にも異邦人の場合が多いのですが、その中の一人が今回の聖書箇所に出てくる「百 卒 長」(百人隊長)という要職にあったローマの軍人です。主イエスが感心したのですから、よほど素晴らしい信仰だったことがうかがわれますが、それは一体どのようなものだったのでしょうか？ここに私たちは信仰にとって非常に大切な要素の一つを学ぶことができますはずです。

**イエスはこれらの言葉をことごとく人々に聞かせてしまったのち、
カペナウムに帰ってこられた。ところが、ある百卒長の頼みに
していた僕が、病気になって死にかかっていた。
この百卒長はイエスのことを聞いて、ユダヤ人の長老たちを
イエスのところにつかわし、自分の僕を助けにきてくださる
ようにと、お願いした。彼らはイエスのところにきて、熱心に
願って言った、「あの人はそうしていただくねうちがございます。
わたしたちの国民を愛し、わたしたちのために会堂を建てて
くれたのです」** (ルカ7・1-5)

カペナウムはガリラヤ湖畔にあり、ペテロやヨハネなど、ほとんどの弟子の出身地で、主イエスが伝道の拠点にした港町です。今日訪れても、もしかしたら、この百人隊長が献堂した会堂だったのだろうかと思われるような、大きなユダヤ人会堂の遺跡があります。

この町に駐屯していたローマ軍の百人隊長が、ユダヤ人を愛したばかりではなく、会堂まで建ててあげたというのですから、その信心深さが分かります。そして、彼の信頼していた僕が病気で死にそうになった時に、百人隊長の代わりに会堂の長老たちが来て、その僕の癒しを願ったというのです。そこで、主イエスは彼らと連れだって出かけたのですが、その家からほど遠くないあたりまで来たとき、百人隊長は今度は友人を送って、次のように伝えました。

**「主よ、どうぞ、ご足労くださいませんように。わたしの屋根
の下にあなたをお入れする資格は、わたしにはございません。
それですから、自分でお迎えにあがるねうちさえないと
思っていたのです。ただ、お言葉を下さい。そして、私の
僕をなおして下さい。私も権威の下に服している者ですが、
私の下にも兵卒がいまして、ひとりの者に『行け』と言えば
行き、ほかの者に『こい』と言えばきますし、また、僕に
『これをせよ』と言えば、してくれるのです」。** (ルカ7・6-8)

主イエスはこの百人隊長の言葉を聞いて、非常に感心して言われたのが冒頭の言葉、「これほどの信仰は、イスラエルの中でも見たことがない」でした。彼の信仰のどのような点に感心されたのでしょうか？百人隊長は病をも癒すイエスの権威を信じていました。しかし「権威」とは何でしょう？「権威」に似ているのは「権力」で、それぞれは別物ですが、どう違うのでしょうか？

こんな事を聞いたことがあります。ある会社の部長さんは温情味のある人で、知的障害者Aさんを雇いましたが、社長さんはよく「ウチは福祉施設じゃないゾ」と言っていました。

ある朝、部長さんに会ったAさんは「部長、おはよう」と言いましたが、社長さんに会ってもそっぽを向いていたそうです。部長さんから「社長さんに挨拶しなさい」と言われると「オレは社長より偉いんだ」と言ったというのです。このことが示しているのは、社長に権力はあっても、Aさんに対して権威がなかったということになります。生殺与奪せいざつよだつを握る「権力」とは異なって、「権威」は他人が認めるかどうかにかかっているものだからです。

主イエスはこの世的には権力者ではありませんでした。百人隊長は主イエスにお会いしたことが無かったにもかかわらず、噂を聞いて病をも癒す圧倒的な権威を持つお方だと信じたのです。そして、自分が日常に経験している軍隊の上命下服の権威から類推して、人間の軍隊でさえ部下が上官の言葉に服従するのだから、まして全能の神の御子であられる主イエスなら言葉だけで病を癒すことがおできになると信じたのです。なんという単純で力強い信仰でしょうか。

イエスはこれを聞いて非常に感心され、ついてきた群衆の方に振り向いて言われた、「あなたがたに言うておくが、これほどの信仰は、イスラエルの中でも見たことがない」(ルカ7・9)

こう言ってから主イエスが「行け、あなたの信じたとおりになるように」と言われると、ちょうどその時に、僕は癒されたと書かれています(ルカ7・10)。このように、主が語られたことは必ず実現するという信仰を、百人隊長は軍隊での自分の経験から導き出したのですが、イザヤ55・10、11にも次のように書かれています。

天から雨が降り、雪が落ちてまた帰らず、地を潤して物を生えさせ、芽を出させて、種まく者に種を与え、食べる者にかてを与える。このように、わが口から出る言葉も、むなしくわたしに帰らない。わたしの喜ぶところのことをなし、わたしが命じ送った事を果す。

神様はいったん御言葉を発せられると、それは必ず成就すると宣言しておられるのです。

このことを私もいろいろな機会に体験しましたが、その一つは、仙台で小さな家を借りて開拓伝道を始め、三年目のことでした。借家では段々手狭に感じてきた年末のある日、出エジプト記四〇章冒頭の御言葉が、なぜかとても気になりました。そこには次のように書かれていたからです。

主はモーセに言われた「正月の元日にあなたは会見の天幕なる幕屋を建てなければならない。」

私はこの御言葉から新年礼拝の説教をしました。しかし、開拓伝道初期であり、礼拝に集う人々は少なく、とても会堂を購入できるような経済状態ではありません。そこで私たちは資金集めではなく、御言葉集めをすることにしました。みんなが日々のディポジションで示された御言葉を持ち寄ることにしたのです。たくさん御言葉が集められて行く中で、家内は「**気をつけて、静かにし、恐れてはならない**」(イザヤ7・4)という御言葉を示されました。

ある日のこと、近くに空き家のできたので、私と家内で行ってみました。そこで修理をしていた大工さんに「この大家さんはどなたですか？」と尋ねたところ、「ナニオ〜！」とのすごい剣幕で返答されたので、逃げ帰って来ました。やはり「静かに」していなさいとの御言葉通りだ、と思いました。

やがて夏に大家さんから「母屋を増築するので、申し訳ないが、あなた方の都合の良いときに明け渡してほしい」と言われました。私たちは「いよいよ動き始めた！」と喜びました。近くの不動産屋に行くと、ナント、あの恐い大工さんの経営する不動産屋だったのです。でも、今度は優しく対応してください、物件を見せてくださいました。

銀行借入れだけでは足りない価格だったのですが、ある財団からも借り入れることができ、購入契約をしたのがその年のクリスマス、そして翌年の正月には引っ越すことが出来たのです。まさしく御言葉の通りでした。

このことを通しても、主が御言葉を発せられると、それは必ず成就するということを学びました。聖書の言葉を自分への主の語りかけとして読み、聴き従うことの幸いにあなたも招かれています。



16. 「安心して行きなさい」 (ルカ7:36-50)

これは有名な「ナルドの香油注ぎ」の箇所です。新約聖書にはイエスの言行録と言うべき四つの福音書がありますが、四つすべてに記録されている記事はそう多くはありません。「ナルドの香油注ぎ」はそういう数少ないものの一つで、福音書記者の全てが注目しているほどに印象深い出来事だったことが分かります。そして、4つの記事を読み比べていくと微妙に違いがあって興味深いものがあります。その中で、私はルカ7:39に「オヤ？」と思いました。こう書かれていたからです。

**イエスを招いたパリサイ人がそれを見て、心の中で言った、
「もしこの人が預言者であるなら、自分にさわっている女が
だれだかどんな女かわかるはずだ。それは罪の女なのだから」**

これはパリサイ人の心の中の^{つぶや}呟きです。どうしてルカは内心の呟きまで分かったのだろうか、と不思議に思ったのです。ルカは十二使徒の一人ではないのでその場に居合わせなかったのですが、その場にいたはずのマタイやヨハネが記録していないのです。もちろん、ルカはたくさんの資料を集めて書いたと言っていますから(ルカ1:3)、誰か他の人から聞いた事であることは確かですが、では誰から聞いたのでしょうか？ こんな推理小説のような詮索の結果は結局、推測にしか終わらないことは分かっていますが、「聖書だから」とか、「主イエスだから、人の内心までお見通しなのは当然だ」と聖書を単なる創作小説のように見なすとしたら、もったいない読み方だと思うのです。聖書はどんな検証にも耐えうる神の言の書なのですから。

さて、ルカは誰から聞いたのか。医者だったルカはパウロの同行者でしたが(コロサイ4:14、2テモテ4:11)、そのパウロは元パリサイ派に属していましたから、パリサイ派仲間のこととして、ルカがパウロから聞いたということが考えられます。しかし、直接に本人から聞いたという可能性もあり得るのではないのでしょうか。

このパリサイ人はシモンという名前だったことが主イエスの呼び掛けから分かります(ルカ7:40)。そして、マタイとマルコはこの出来事がベタニヤの重い皮膚病を患っていたシモンの家で起きたと言っています(マタイ26:6-7、マルコ14:3)。しかし、ヨハネはベタニヤではあったが、ラザロ宅での出来事だったとしているので(ヨハネ12:1)、ナルドの香油注ぎは一度ならず、二度あったのではないかと言う人も多いのです。

医者ルカは配慮深い人であり、人の名前や素性をあまり詳しく書かないのが普通で、この女性も「罪の女」とは言うものの、それがどんな罪だったのかとか、彼女の名前とかも記していません。現代風に言うと、医者による守秘義務とか個人情報保護ということになるでしょう。ところが、パリサイ人の名前については、はっきりと「シモン」だったと書いているのです。こうした記事を総合すると、ベタニヤに住むパリサイ派の律法学者シモンが、自分の重い皮膚病を癒していただいたお礼に開いた祝宴に、主イエス一行を招待したときの出来事だった、ということが考えられます。

では、その時の様子を見てみましょう。明らかに、その場にいた人から聞いたということが伺われるほど、女性の動作描写が実に細やかです。

**あるパリサイ人がイエスに、食事を共にしたいと申し出たので、
そのパリサイ人の家にはいつて食卓に着かれた。するとそのとき、**

その町で罪の女であったものが、パリサイ人の家で食卓に着いておられることを聞いて、香油が入れてある石膏のつぼを持ってきて、泣きながら、イエスのうしろでその足もとに寄り、まず涙でイエスの足をぬらし、自分の髪の毛でぬぐい、そして、その足に接吻して、香油を塗った。（ルカ7・36-38）

香油というのはインド産で、雪花石膏の壺に密封されたものです。それが「ナルドの香油」と呼ばれるものだったと言っているのはヨハネです（ヨハネ12・3）。このときユダは「なぜこの香油を三百デナリに売って、貧しい人たちに、施さなかったのか」と言っています（ヨハネ12・5）。一デナリは、当時の成人男子が一日働いて得る賃金だったといえますから、現代の日本円にすれば約一万円でしょう。すると、ナルドの香油は一壺で約三百万円もしたことになります。非常に高価な香油だったので嫁入り道具の一つにされていたとも言われますが、どうしてこの女性がそんなに貴重な香油を持っていたのかについてルカは何も語りません。「罪の女」ではあっても、いつの日にか自分も結婚することを夢見て買っておいたのかもしれない。しかし、この高価な香油を、彼女は惜しげもなく主イエスの足に注いだのです。その時にパリサイ人が心の中で思ったことが、冒頭の言葉でした。それに対して主イエスは、次のようなデナリの喩えを語られました。

そこでイエスは彼にむかって言われた、「シモン、あなたに言うことがある」。彼は「先生、おっしゃってください」と言った。イエスが言われた、「ある金貸しに金をかりた人がふたりいたがひとり五百デナリ、もうひとり五十デナリを借りていた。ところが、返すことができなかったので、彼はふたり共ゆるしてやった。このふたりのうちで、どちらが彼を多く愛するだろうか」。シモンが答えて言った、「多くゆるしてもらったほうだと思います」。イエスが言われた、「あなたの判断は正しい」。（ルカ7・40-43）

片や五十デナリは五十万円ですが、他方、五百デナリとなると五百万円ですから、大人のほぼ二年分の収入に相当する借金です。それを全部免除されたというのですから大変な喜びだったはず。このふたりのうちで、どちらが彼を多く愛するだろうか」という主イエスの質問に対して、シモンが「多くゆるしてもらったほうだと思います」と判断したのは当然正しい答です。ここで「正しい」と訳されているのは「オルソス」という言葉で、英語の「オーソドックス(=正統)」の語源ですから、主イエスは「そうなんだよ。まったくあなたの言うとおりなんだよ、シモン！」と大きな笑顔で言われたのではないのでしょうか。

このように見てくると、この場の出来事は、律法学者シモン対イエスという対立の構図下に起きた事ではなく、重い皮膚病を癒されたシモンのお礼の祝宴にひっそりと入ってきた罪の女性にも、法外な恵みが注がれたという大きな喜びを伝える記録なのです。そうとすれば、皆さんはルカが伝える次の記述をどのように読むでしょうか？

それから女の方に振り向いて、シモンに言われた、「この女を見ないか。わたしがあなたの家にはいつてきた時に、あなたは足を洗う水をくれなかった。ところが、この女は涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でふいてくれた。あなたはわたしに接吻をしてくれなかったが、

**彼女はわたしが家にはいった時から、わたしの
足に接吻をしてやまなかった。あなたはわたしの頭に
油を塗ってくれなかったが、彼女はわたしの足に香油
を塗ってくれた。**（ルカ7・44-46）

私は以前、この箇所は主イエスがシモンを皮肉タップリに諷刺しているところだと思っていました。しかし今度あらためて読んでみて、それでは間違いではないかと思われてきました。まず、主イエスは「女の方に振り向いて、シモンに言われた」とありますから、身体はシモンの方を向いていますが、顔は振り返って女性を見ています。そしてシモンに語られたのですが、これはきっとその場をなごやかなものにする主イエスのユーモアたっぷりの言葉だったのでしょう。というのは、重い皮膚病を癒されたことを喜ぶお礼の祝宴であるなら、主イエスがシモンに対して恥をかかせるようなことを言うはずがないからです。だから、ルカも安心して「シモン」という名前を記録に残しているのではないのでしょうか。主イエスの言葉を私なりに言い替えれば次のような意味だったのではないかと思うのです。

「ほらシモン、この女性をご覧ください。大喜びのあなたが私の足を洗い忘れたものだから、この女性は自分の涙で洗ってくれたではないか。それにあなたがタオルを用意していなかったから、彼女は自分の髪で拭いてくれたんだよ。あなたは喜びの余り主人として来客を歓迎する時の接吻を忘れたものだから、この女性は私の足にしてくれたし、そのうえ高価なナルドの香油まで注いでくれた。あなたの喜びは分かるが、あとで、この女性によく感謝しておきなさいよ。」

当時の晩餐はレオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」の絵のようにではなく、長椅子の上に横になって食事をし、会話をしたといえます。だから女性はそっと主イエスの足許に立ち、その涙で主イエスの足を濡らし、髪で拭き、接吻し、またナルドの香油を注ぐことができたのです。ヨハネはその時、「香油のかおりが家にいっぱいになった」と伝えています（ヨハネ12・3）。主イエスの機知に富んだユーモアとナルドの香りが、その祝宴を馥（ふく）郁（いく）とした香気で満たしたことでしょう。そして主イエスは次のように言われたのです。

**「それであなたに言うが、この女は多く愛したから、
その多くの罪はゆるされているのである。少しだけ
ゆるされた者は、少しだけしか愛さない」。**（ルカ7・47）

これも誤解されがちな言葉です。まるで三百万円もの香油を注いだから、それだけ多くの彼女の罪が赦されたと受けとめられかねないからです。むしろ、この時の言葉は新共同訳がもっとも適切に訳していると思います。

**「だから、言うておく。この人が多くの罪を赦されたことは、
わたしに示した愛の大きさで分かる。赦されることの少ない
者は、愛することも少ない。」**

シモンが重い皮膚病を癒されて大喜びで祝宴を開いている、まさにそのように、彼女も主イエスにお会いして、自分の背負いきれないほど多くの罪が赦されたという信仰に導かれるのを覚えたのでしょう。それが三百デナリの香油をも惜しいと思わないほどの感謝になって溢れ出たのだと主は言っておられるのです。そしてその女性に次のような重要な言葉を語られました。

**イエスは女に、「あなたの罪は赦された」と言われた。
「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」**（48、50節）

ここで「行きなさい」と訳されているのは特別な言葉で、「浅瀬に行く」という意味の言葉です。言い替えば、「人生の浅瀬に行くように気をつけてゆきなさい」という思いやりがこめられています。そして次の「安心して行きなさい」は「平安を心に持って行きなさい」という意味ではなく、「平安《の中に》入って行きなさい」という言葉なのです。誰の平安でしょうか？もちろん、主イエスの平安ですから、行く先にあるのは主の平安だと言っておられるのです。

私たちの人生の歩みには様々な危険がありますが、主と共に歩むなら、それは深みではなく、浅瀬に行くようなものです。そして行く先にあるのは主の平安なのだと言っておられるのです。ヨハネはあるとき主イエスがこう言われたと伝えています。

**私は平安をあなた方に残して行く。私の平安をあなた方に
与える。私を与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。
あなた方は心を騒がせるな、またおじけるな。(ヨハネ14・27)**

主イエス御自身が平安(シャローム)そのものなのです。このシャロームの中に女性を導いておられるのですが、シャロームに生きるにはたった一つだけ条件があります。それは信仰です。どんな信仰かという、主イエスが先ほど言われた言葉の中に明らかです。「あなたの罪は赦された」との宣言を信じる信仰です。マタイ、マルコ、ヨハネの三人がこのナルドの香油注ぎは公生涯の最後が間近の頃ベタニヤで起きたと伝えています。この後すぐに、主イエスは私たちの罪の身代わりに十字架を背負われるのです。ですから、ここで主イエスが「赦された」と言われたのは、私たちの過去・現在・将来にわたる全ての罪に対する赦しの御業の完了を意味しています。

この女性がどこで主の救いの福音を聞いたのかについて福音書記者たちは語りません。しかし、彼女は主イエスの言葉を自分の背負いきれない罪への全面的な赦しとして信じたのです。信じる人々に主イエスは今も宣言されます。

「あなたの罪は赦された。あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」



17. 「四つの土地のたとえ」 (ルカ8・1-15)

この箇所は「種蒔きのたとえ」と呼ばれることが多いのですが、同じ種が四つの土地に蒔かれたのですから、「四つの土地のたとえ」と言うほうがふさわしいと思います。

さて、大ぜいの群衆が集まり、その上、町々からの人たちがイエスのところに、
ぞくぞくと押し寄せてきたので、一つの譬で話をされた、
「種まきが種をまきに出て行った。まいているうちに、
ある種は道ばたに落ち、踏みつけられ、そして空の鳥に食べられてしまった。
ほかの種は岩の上に落ち、はえはしたが水気がないので枯れてしまった。
ほかの種は、いばらの間に落ちたので、いばらも一緒に茂ってきて、
それをふさいでしまった。
ところが、ほかの種は良い地に落ちたので、はえ育って百倍もの実を結んだ」。
こう語られたのち、声をあげて「聞く耳のある者は聞くがよい」と言われた。

(ルカ8・4-8)

これはとても分かりやすい譬えです。蒔かれた土地の状態によって、種からの生長の仕方が違ってくるといのは、私たちも経験することだからです。そして、弟子たちの解き明かしの要望に応じて、主イエスは次のように語られました。

この譬はこういう意味である。種は神の言である。

道ばたに落ちたのは、聞いたのち、信じることも救われることもないように、
悪魔によってその心から御言が奪い取られる人たちのことである。

岩の上に落ちたのは、御言を聞いた時には喜んで受け入れるが
根が無いので、しばらくは信じていても、試練の時が来ると信仰を捨てる
人たちのことである。

いばらの中に落ちたのは、聞いてから日を過ごすうちに、生活の心づかいや
富や快楽にふさがれて、実の熟するまでにならない人たちのことである。

良い地に落ちたのは、御言を聞いたのち、これを正しい良い心でしっかりと
守り、耐え忍んで実を結ぶに至る人たちのことである。 (ルカ8・11-15)

しかし、主イエスの解き明かしにもかかわらず、この譬えは次のような間違った読み方をされることが多いのです。

「道ばた」というのは忙しい生活に追われる姿を指しているからそれはまさしく私だ。

「岩」のようにかたくなな心も私。「いばら」は雑草・雑念だらけの心だから、それも私だ。

結局、私はどこから見ても「良い地」じゃない。

どうせ私は救われようのないダメ人間なんだ…。

ひと頃、家内と私は市民農園を借りて野菜を育てたことがありました。春になって、冬の間にく固くなった土を掘り起こして耕し、種を蒔き、よく水やりに行きました。草取りも良くしたつもりですが、あるとき隣の畑を見ると、雑草が全く生えていません。たまたま居合わせたその畑の人に聞きました、「どうしてお宅の畑には雑草が生えないんですか。どんな農薬を使っているんですか？」するとその人は言いました、「毎日来て、草取りをしているんです！」。私たちは「失礼しました」と言うしかありませんでした。

確かに私たちは誰でもこれら4つの土地の要素すべてを持っています。そして最初から良い土地などどこにもありません。

このことで思い出すのは、幼い頃、私の実家が埋め立て地に家を新築した時のことです。引っ越してから、父と兄は時間を作っては砂利やゴミを取り除き、一生懸命に畑や庭を整備し、野菜を植えて良い実りを収穫するようになるまで何年もかかりました。

良い土地は元々あるのではなくて、丹念に世話して作られるものなのです。また荒地であっても、水、肥料、空気などと共に、鋤、鎌、鍬などを受け入れるから、徐々に良い土地になっていくのです。

榎本保郎牧師は口語訳聖書のマルコ伝4章にあるこの記事について、次のように記しています。

このところで、はじめの三つ、すなわち、道ばたに落ちた種、
石地に落ちた種、いばらの中に落ちた種のところでは、みな
「御言を聞く」と書かれているが、よい地に落ちた種
のところでは、「御言を聞いて受け入れ」となっている。
「御言を聞く」というのと、「御言を聞いて受け入れ」とは
よく似ているが、そこに根本的な違いがある。
「御言を聞く」というのは、自分をしっかり持っていて、
そのうえで御言葉を聞き、取捨選択することである。
「御言を聞いて受け入れる」ということは、自分があって
御言葉を聞くのではなく、むしろ御言葉に聞く、御言葉に
自分が導かれることである。自分がなく御言葉が主人である。
…私たちは畑の状態によって種の成長が左右されるように
思いがすがそうではない。むしろ、みことばを聞いて
受け入れる態度によって、そこに良い地ができて行くのである。
人がみことばに対してどのような態度をとるかによって、
みことばが実を結ぶか、結ばないかが決まるのである。

(榎本保郎著「新約聖書一日一章」74頁)

これは私たちの人生にもあてはまります。養分だけ受けて良い土地になれるのであればいいのですが、思いがけない試練や困難が襲ってくることがあります。しかし、それは良き農夫なる神様のお許しの元に、その大きなご計画の中で起きることなのですから、神様がそのすべてを良きに導いてくださるのです。

それならば、「御言葉を聞いて受け入れる」とはどのようにすることなのでしょう？ その典型的な例の一つは、ペテロが主イエスの言葉に従ったときの姿に見ることができると思います。彼は夜通しの漁にもかかわらず魚がまったく獲れず、疲労困憊して帰ってきたとき、主イエスから「(もう一度)沖へ漕ぎ出し、網を下ろして漁をしてみなさい」と言われました(ルカ5・4)。ガリラヤ湖の漁に関しては主イエスよりペテロの方が遙かに熟練したプロです。彼は「お言葉ですが…」と幾らでも反論できたはずですが、「お言葉ですから…」と言って主イエスの言葉に従ったとき、大漁という奇蹟を体験したのです。「お言葉ですが…」と「お言葉ですから…」は表現上は僅かな違いですが、不信仰と信仰の大きな違いがあります。「御言葉を受け入れる」とは自分の経験や主義主張・希望・願望・計画などよりも、主の御言葉を第一としてゆく、信仰の生き方なのです。

種の中にはDNAという詳細な設計図がすでにあるように、御言葉には驚くべき神のご計画が秘められています。しかし種は良い地に植えられなければ、それはいつまでも設計図にとどまります。

良い地が種を受け入れ、雨風に遭いながらも、やがて豊かな実を結ぶように、私たちも聖書に書かれている主の御言葉を聞き、受け入れ、たとえ困難があろうとも、それをしっかりと保ち続けるとき、主は豊かな実りの時を迎えさせてくださるのです。主イエスは次のようにこの譬えを結ばれました。

**良い地に落ちたのは、御言を聞いたのち、これを正しい良い心で
しっかりと守り、耐え忍んで実を結ぶに至る人たちのことである。(ルカ8・15)**



18. 「湖上の嵐」(ルカ8・22-24)

昔からコワイものと言えば「地震、雷、火事、親父」と相場が決まっていますが、近頃はその中で「親父」の影が薄いようです。以前なら、子供が悪さをした時、「そんなことをすると、お父さんに叱られますよ」と言えばおとなしくなったのに、最近ではむしろ、「そんなことをすると、お父さんのようになりますよ」ということを聞くというのです。お父さん世代の私には何とも耳の痛いことですが、地震・雷・火事の方は相変わらず怖いものです。日本全国ほとんど毎日、どこかが地震で揺さぶられていますし、「対岸の火事」とばかりに高をくっていた私も、二十数年前、火事で実家全焼の憂き目に遭いました。

怖いものは他にも様々あって、風・水・波なども大きくなると私たちに恐れを起こさせます。以前、イカ釣り船に乗せてもらった高校生の時の体験に触れたことがありますが(第7回「イエスの招き」)、あのとき私も友人たちも外洋の漁場に着くまでにすっかり船酔いしてしまいました。ところが、漁師さん達は大波を越えていく漁船の先端に立って、全く怖がらなかったのが印象的でした。「漁師は滅多なことでは海を怖がらないんだ」ということを知りました。

今回の聖書箇所場面はガリラヤ湖です。この湖はイスラエルの北部にあり、南部にある死海とは異なって、魚が豊富に獲れる大きな湖です。私が訪れた時、湖面は穏やかでしたが、海拔がマイナス二百メートルほどで、しかも地形がロート状になっているために、ヘルモン山おろしの風が吹くと、突風を伴った嵐になることが多いと聞きました。弟子たちが遭遇したのは、そのようなガリラヤ湖の嵐だったのです。このことを通して、私たちは主が求められる信仰とはどのようなものかを学ぶことができると思うのです。

**ある日のこと、イエスは弟子たちと舟に乗り込み、
「湖の向こう岸へ渡ろう」と言われたので、一同が
船出した。渡って行く間に、イエスは眠ってしまわれた。
すると突風が湖に吹きおろしてきたので、彼らは水をかぶって
危険になった。そこで、みそばに寄ってきてイエスを起し、
「先生、先生、私たちは死にそうです」と言った。(ルカ8・22-24a)**

ガリラヤ湖の大概の嵐は知っているはずの漁師達が「先生、私たちは死にそうです」とパニックになったのですから、この突風(マタイ8・24 では「地震」をも意味する「暴風」)が、弟子たちにどんなに大きな恐怖を惹き起こしたかがうかがわれます。しかし、主イエスはこの嵐を一言で鎮められます。

**するとイエスは彼らに言われた、「なぜこわがるのか、
信仰の薄い者たちよ」。それから起きあがって、
風と海とをおしかりになると、大なぎになった。
彼らは驚いて言った、「このかたはどういう人なのだろう。
風も海も従わせるとは」。(マタイ8・26、27)**

ルカ伝によると、嵐を「こわがった」弟子たちは、主イエスが嵐を鎮められたのを見て、単に驚いたばかりではなく「恐れた」とあります(ルカ8・25)。ここで弟子たちの心に起きた二つの「おそれ」には別々の言葉が使われています。嵐へのおそれには「臆病になる」という意味の言葉が、また主イエスの御業へのおそれには「(引きつけを起こすような)恐怖」という言葉が使われています。これら二つ

の言葉の違いを知ることが、「なぜこわがるのか、信仰の薄い者たちよ」という主の言葉を理解する手掛かりになります。

まず、事は主イエスが「湖の向こう岸へ渡ろう」と言われたことに始まります。陸路を取ることも可能だったはずですが、舟で渡ることになったとき、弟子たちは「舟なら私たちに任せて、イエス様はどうぞ寝ていてください」と思ったのではないのでしょうか。その時の様子をマルコは次のように伝えます。

イエス自身は、舳の方でまくらをして、眠っておられた。

そこで、弟子たちはイエスを起して、「先生、私どもが溺れ

死んでも、おかまいにならないのですか」と言った。(マルコ4・38)

嵐の大きさが相当のものだったことがうかがわれますが、主イエスと弟子達の姿は対照的です。イエスが枕をして眠っているそばで、弟子たちは慌てふためき、その上、憤慨したのでしょうか、眠っている主イエスをゆり起こして、「先生、わたしたどもがおぼれ死んでも、おかまいにならないのですか」と言っています。

そんなはずはないのですが、屈強な漁師達が死の恐怖でパニックに陥っているのです。マルコが伝える、目を覚ました主イエスの言動に注目しましょう。

イエスは起きあがって風をしかり、海にむかって、

「静まれ、黙れ」と言われると、風はやんで、大なぎになった。

イエスは彼らに言われた「なぜ、そんなにこわがるのか。

どうして信仰がないのか」。(マルコ4・39、40)

「湖の向こう岸へ渡ろう」と言ったのは主イエスだったのですから、向こう岸には主が必ず渡らせてくださるのです。またイエスは眠っていましたが、それは「舳の方」だったとあります。「舳」というのは舟の先でしょうか、後ろでしょうか？実は、舳は舵がある後ろの方をさす言葉です。主イエスはちゃんと舟の舵の所におられるのです。それなのに弟子たちは自分の力や経験を頼り、向こう岸へ渡ると言ったのが主イエスであり、その舵も主がシッカリと把握しておられることに気づいていないのです。だから、自分たちの手に負えない大きな嵐が来たときに、臆病になって恐れてしまったのです。

主はこのように、私たちが最も得意とする分野や領域で試練に遭わせることがあります。自分の限界に直面させられるのです。しかし、その時こそ弟子たちのように見栄も誇りも捨てて主の名を呼ぶなら、主の御業を目撃し、真の恐れを学ぶのです。主イエスが嵐を鎮めたのを見て弟子たちが覚えた「恐れ」には、「畏怖する、畏敬する、畏れかしこむ」という意味もある言葉が使われています。一体、弟子たちは何をおそれたのでしょうか？それは彼ら自身の言葉がはっきりと示しています。

彼らは恐れ驚いて互に言い合った、「一体、この方は誰だろう。

お命じになると、風も水も従うとは」(ルカ8・25b)

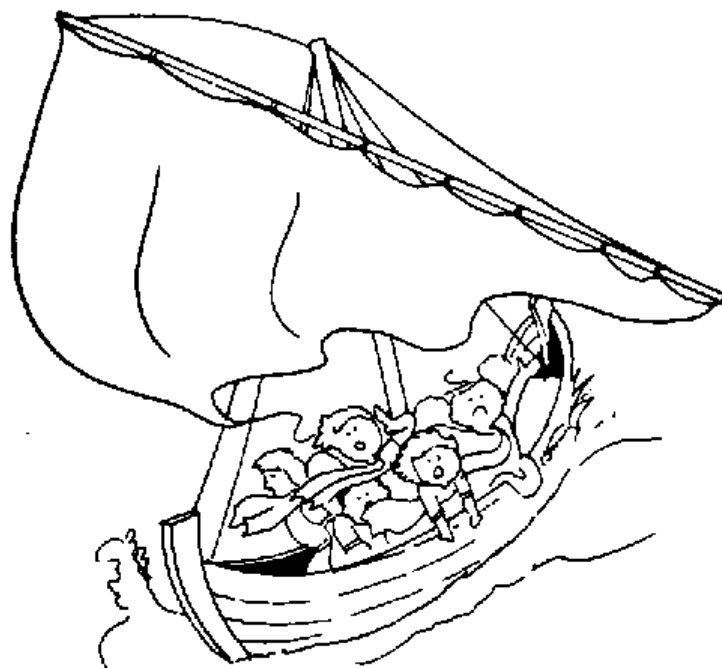
聖書の登場人物で水や風を従えた人は他にもいます。モーセは神から預った杖で紅海を分け(出エジプト14章)、ヨシュアは神の契約の箱を担いでヨルダン川の激流をせき止め(ヨシュア3章)、エリシャはエリヤから受け継いだマントでヨルダンの水を分けました(列王下2・8)。しかし、主イエスは「静まれ、黙れ！」という言葉だけで荒れ狂う嵐を鎮め、ガリラヤ湖を大凧にしたのです。詩篇に次のような箇所があります。

**わがたましいよ、主をほめよ。わが神、主よ、あなたは
いとも大いにして誉と威厳とを着、光を衣のようにまとい天を
幕のように張り、水の上におのが高殿のうつばりをおき雲を**

おのれのいくさ車とし、風の翼に乗りあるき、風をおのれの使者とし、火と炎をおのれのしもべとされる。あなたは地をその基の上にすえて、とこしえに動くことのないようにされた。あなたはこれを衣でおおうように大水でおおわれた。水はたたえて山々の上を越えた。あなたのとがめによって水は退き、あなたの雷の声によって水は逃げ去った。(詩篇104・1-7)

ここには、宇宙を創造し、大自然をも支配しておられる主なる神おおなごが讃美されています。私たちの主は天地を治めておられ、御言葉によって一瞬にして嵐を鎮め、大風おおなごを送ることがおできになる神です。その神の御子が自分たちと共におられるということに弟子たちの目が開かれ、畏敬に満ちた真の恐れを覚えた体験でした。

主が私たちに求められる信仰とは、自分の経験・知識・力などに頼ることではなく、共にいて下さる全知全能の主を全面的に信頼することなのです。



19. 「癒し、生かすキリスト」 (ルカ8・40-56)

「柳に雪折れなし」という諺がありますね。風に揺られて弱く見える柳が、雪の重みにも良くしなって耐える力があるので、堅いばかりが強さではないという意味に使われます。外国にも似たような諺があり、たとえば英語では「ひびの入った壺が一番長持ちする (Cracked pots last longest.)」というのがあるそうです。

私たちは無^む病^{びょう}息^{そく}災^{さい}を願いますが、長い人生ではいつもそういうわけには行かず、病気や災いは思い掛けない時にやってくるものです。私の場合は、むしろ「一病息災」が助けになって来たという思いがします。それというのも若い時からの腰痛のお陰(?)で、常に健康に留意せざるをえなかったからです。ストレッチや筋トレをサポートしていると、ある日突然に腰痛が起きるので、それがかえって身体を健康に保とうとする動機になってきました。これを昔の人は「病を養う」と言うのだそうですが、なかなかうまい表現だと思います。

しかし今回の聖書箇所(ルカ8・43 以下)に出てくる女性の場合、「一病息災」とか「病を養う」などと悠^{ゆう}長^{ちやう}なことを言っではいられない深刻な状況にありました。なにしろ、十二年間も長^{なが}血^ちをわずらっていて、医者のために自分の身代をみな使い果してしまったけれども、だれにもなおしてもらえなかったのだからです。

ユダヤ教のタルムードと呼ばれる文書には、このような婦^み人^{にん}性^{じやう}疾^{じやく}患^{わん}の場合の処方箋が十一ほど書かれています。たとえば、「アレキサンドリア・ガムに明^み礬^{ばん}を加えて、クロッカスとアジサイを葡萄酒で溶いたものを飲む」とか、「ペルシャ玉^{たまねぎ}葱^{そう}を葡萄酒で煮たものを食べる」、あるいは「葡萄酒を持って交差点に立ち、背後から『長血よ、止まれ!』と叫んでビックリさせる」というものまであります。彼女はこれらの全てを試してみたことでしょうか、何一つ効き目がなく、ただ自分の財産すべてを使い果たしてしまっただけだったというのです。

彼女を苦しめたのは病気と貧困だけではありませんでした。というのは、レビ記の中に規定があるように(レビ15・19 以下)、このような病気をもった女性は社会生活上遠ざけられました。触ったもの、座ったものは汚れるとか、神殿の女性の庭にも入ることが許されず、周囲の人々からの冷たい視線が彼女の苦悩をいっそう増し加えました。何か悪いことをしたというのではなく、ただ病気であるというだけで、人々から忌み嫌われ、差別され、村八分にされ、それが十二年にも及んでいたのです。彼女にとって町の通りに出ることはとても勇気を要することだったはずですが、しかし、主イエスが来られるということを聞いて、彼女は雑踏に紛れて行くことを決心したのでしょう。ルカはその時の様子を次のように伝えています。

ここに、十二年間も長血をわずらっていて、医者のために自分の身代をみな使い果してしまっただが、だれにもなおしてもらえなかった女がいた。この女がうしろから近寄ってみ衣のふさにさわったところ、その長血がたちまち止まってしまった。(ルカ8・43-44)

その時、主イエスが振り向いて言われました。

「わたしにさわったのは、だれか」。人々はみな自分ではないと言ったので、ペテロが「先生、群衆があなたを取り囲んで、ひしめき合っているのです」と答えた。しかしイエスは言われた、「だれかがわたしにさわった。力がわたしから出て行ったのを感じたのだ」。(ルカ8・45-46)

この「力」はどのようなものだったと思いますか？「力」を表す言葉には、腕力、権力、磁力、エネルギーなど、他にも様々ありますが、ここで使われている言葉は、「(普段は静かだが、いざという時に驚異的威力を発揮する)力」を表すディナミスです。この言葉がダイナモ(発電器)とか、ダイナミック(躍動的)、さらにはダイナイトという言葉の語源なのです。御衣みころもに触れた女性の長血患ながちわすらいを一瞬にして癒したのは主イエスのこの「力」でした。

しかし、ペテロが言っているように、群衆が主イエスを取り囲み、押し合いへし合いしている中で、どうしてこの女性だけが主イエスから力をいただき癒されたのでしょうか？マルコ伝の並行箇所には次のように書かれています。

**この女がイエスのことを聞いて、群衆の中にまぎれ込み、後ろから、
み衣にさわった。それは、せめて、み衣にでもさわれば、なおして
いただけるだろうと、思っていたからである。(マルコ5・27-28)**

群衆がひしめくなか、人目を忍ぶ彼女が、道を通って行く主イエスに触れることができるチャンスはごくごくわずかだったはずですが、しかし「せめて、み衣にでもさわれば、なおしていただける」との必死の思いで、辺りははかを「憚りながらも人混みをかき分け、ようやく主イエスの後ろから御衣に触れることができた」というのは、まさに神様からの千載一遇せんざいいちぐうのチャンスでした。これは信仰としては非常に初歩的で、迷信的とさえ言うことができるものです。彼女は自分の罪を告白したわけではありません。また主イエスが救い主キリストだということも知りません。弟子たちだって未だにこのことは知らなかったのですから。

しかし、彼女が御衣にふれた瞬間「血の元がすぐにかわき、女は病気がなおったことを、その身に感じた」とマルコは伝えています。ちょうどダイナイトがわずかな打撃で爆発さくれつ的威力を発揮するように、彼女の単純で幼い、しかし切実な信仰をもった接触で、主の「力」が炸裂し彼女を瞬間的に癒したというのです。弟子たちの言葉にもかかわらず「イエスはさわった者を見つけようとして、見まわしておられた」(マルコ5・32)。

**女は隠しきれないのを知って、震えながら進み出て、
みまえにひれ伏し、イエスにさわった訳と、さわると
たちまちなおったこととを、みんなの前で話した。
そこでイエスが女に言われた、
「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。
安心して行きなさい」(ルカ8・47-48)。**

実は、長血患ながちわすらいの女性の癒しは、主イエスが会堂司かいどうづかさヤイロの「娘が死にそうです。どうぞ来て、手を置いてやってください」という懇願を受けて、彼の家に向かう途中で起きた出来事です。そして長血患を癒している内に、会堂司の家から使いの者が来て告げます、「お嬢さんはなくなられました。この上、先生を煩わすには及びません」。そのとき主イエスは次のように言われました。

**しかしイエスはこれを聞いて会堂司にむかって言われた、
「恐れることはない。ただ信じなさい。娘は助かるのだ」。
それから家にはいられるとき、ペテロ、ヨハネ、ヤコブおよび
その子の父母のほかは、だれも一緒にはいつて来ることを
お許しにならなかった。人々はみな、娘のために泣き悲しんで
いた。イエスは言われた、「泣くな、娘は死んだのではない。
眠っているだけである」。**

人々は娘が死んだことを知っていたので、イエスをあざ笑った。イエスは娘の手を取って、呼びかけて言われた、「娘よ、起きなさい」。するとその霊がもどってきて、娘は即座に立ち上がった。イエスは何か食べ物を与えるように、さしずをされた。（ルカ8・50-55）

長血患いの女性の名前は聖書に書かれていませんが、伝説によればヴェロニカだったといわれています。エルサレムに行くと、今も十字架の道行きを辿るヴィア・ドロローサという巡礼の道があります。病を癒された彼女が、後にその感謝の思いをもって、十字架を担ぐ主の側に寄り、御顔の汗を拭ったという場所が第六ステーションとして記念されています。

神のダイナミックな力は幼な子のような信仰を持った人であっても豊かに注がれ、その力は求める人を生かさずにはおかないのです。この力を持った主イエスが会堂司の娘をも生き返らせました。真に人を癒し生かす方はイエス・キリストであるということが、ここで明らかに示されています。



20. 「旅路の必需品」 (ルカ9・1-6)

時折の旅は良いものです。それは日帰りの時もあれば何泊かの旅行だったりもしますが、携行品を準備するのも心躍るひとときです。お金、着替え、食べ物・飲み物、デジカメ、それから聖書も忘れることは出来ませんし、これらを入れるバッグも必要です。何人かに「旅行に必要なものは何ですか？」と尋ねたところ、ある人は「携帯電話だけでいいですよ」とのことでした。「お財布ケータイ」があればお金だって要らないと言うのです。また、山登りが好きな人の答は「衣食住が問題だけど、飲み水は山にあるから心配ない。お金も往復の切符代以外は要らない、山でお金は役に立たないからね。ただ、杖は必需品だよ」とのことでした。

こうして出かける旅は楽しいものです。しかし今回、十二弟子たちが送り出されるのは観光旅行ではなく伝道旅行です。もし、皆さんが伝道旅行に行きなさいと言われたらどう思うでしょうか？「どこへ行ったらいいんだろう？誰に、何を語ったらいいのか？泊まる所は？食事は？それに、もし、冷たくされたら…」など、いろいろと思い悩むことでしょう。弟子たちの心にも同じように様々な不安が起きたことだろうと思います。主イエスは彼らの心を察しておられましたが、そのアドバイスは私たちの常識とは全くかけ離れたものでした。

それからイエスは十二弟子を呼び集めて、彼らにすべての悪霊を制し、病気をいやす力と権威とをお授けになった。また神の国を宣べ伝え、かつ病気をなおすためにつかわして言われた、「旅のために何も携えるな。つえも袋もパンも銭も持たず、また下着も二枚は持つな。また、どこかの家にはいたら、そこに留まっておれ。そしてそこから出かけることにしなさい。だれもあなたがたを迎えるものがいなかったら、その町を出て行くとき、彼らに対する抗議のしるしに、足からちりを払い落しなさい」。 (ルカ9・1-5)

私たちは言わば人生という旅をする者ですが、この旅に本当に大切なものは何なのでしょう。主イエスは弟子たちを伝道旅行に派遣するに当たって、たくさんのものを与えています。まず、「すべての悪霊を制する権威」と「病気をいやす力」です。次に二つの使命を与えました。「神の国を宣べ伝えること」と「病気を治すこと」です。それから細々とした指示を与えています。携行品については「何も携えるな」と言い、宿泊先は一旦決めたらあちこち変えないようにと指示しています(ルカ10・5-7 参照)。

しかし「つえも袋もパンも銭も持たず、また下着も二枚は持つな」という指示は弟子たちにとって、さぞ心細かったことでしょう。このことについて、ルカ10・7では七十二人を同様にして派遣するに当たって「働き人がその報いを得るのは当然」だから心配するなと言っておられます。またお金についてもマタイ10・8では「ただで受けたのだから、ただで与えるがよい」と言って、悪霊払いや癒しの料金をいただくなくても心配無用だと言っておられます。

さらに、歓迎されなかった場合の抗議の仕方まで教えています。口語訳では「抗議」と訳されていますが、ある英語訳で「肩をすくめて」としているように、「歓迎されなくても気にすることなく、次の町に行きなさい」ぐらいの意味で言われたのかもしれない。

こうしてみますと、たくさんのものを与えたというよりも、ほとんど着の身着のまま送り出したことがわかります。けれども、やがて最後の晩餐の席で主イエスが弟子たちに「わたしが財布も袋もくつも持たせずにあなたがたをつかわしたとき、何かこまったことがあったか」と尋ねたとき、弟子たちは「いいえ、何もありませんでした」と答えました(ルカ22・35)。本当に何も持って行かなくとも、彼らは全然困らなかつたばかりか、必要は完全に充たされたのでした。衣食住は生きる上で基本中の基本ですが、これは弟子たちにとって、主への全き信頼に生きるべき事を学んだ時であると同時に、自分たちを無一物のように思っていた彼らが、本当に持っているものが何であるのかを実体験する旅でもありました。

主イエスが弟子たちに与えたものは、力と権威でした。ここでの「力」とは前回学んだのと同じダイナミスであって、《いざという時に威力を発揮する力》です。ただし、ダイナミスの本来の意味は「〜できる」という《可能》を表します。また、「権威」という言葉の語源は《行動する自由》を表します。

さらに、弟子たちは「使徒」という名を与えられました。「使徒」とは「特命全権大使」を意味する言葉で、略して「大使」とも呼ばれますが、国家元首の代理として外国と交渉する特別の権限を与えられた使節です。こうしたことを総合すると、弟子たちが持っていたのは、《イエス・キリストの名によって悪霊を追い出し、病を癒すことができる力》だということが分かります。そしてキリストのために働くのですから、その衣食住の必要等はキリストがすべて責任をもって下さるのです。

さて、弟子たちの伝道旅行の結果はどうだったでしょうか。ルカ9・10には「使徒たちは帰ってきて、自分たちのしたことをすべてイエスに話した」と短く書かれているだけですが、七十二人の場合には弟子たちの報告が詳しく書かれています。

「主よ、あなたの名によっていたしますと、悪霊までがわたしたちに服従します」。彼らに言われた、「わたしはサタンが電光のように天から落ちるのを見た。わたしはあなたがたに、へびやさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けた。だから、あなたがたに害をおよぼす者はまったく無いであろう。しかし、霊があなたがたに服従することを喜ぶな。むしろ、あなたがたの名が天にしろされていることを喜びなさい」。 (ルカ10・17-20)

私たちの人生という旅路の必需品は何でしょうか？ 弟子たちに素晴らしい経験をもたらした必需品は、「あなたの名」つまり「イエス・キリストの名」でした。「主よ、あなたの名によっていたしますと、悪霊までがわたしたちに服従します」と弟子たちは喜びをもって報告しました。主の御名にはそれほどの権威と力があるのです。皆さんは誰か他の人に自分の名前を使っていいと許可を与えたことがありますか？これはよほど信用のおける人でなければめったに出来ないことです。後で責任が回って来るからです。しかし、主イエスのご自分の権威ある名を使うことを弟子たちだけでなく、私たちにも許可して下さい。

よくよくあなたがたに言うておく。わたしを信じる者は、またわたしのしているわざをするであろう。そればかりか、もっと大きいわざをするであろう。わたしが父のみもとに

行くからである。わたしの名によって願うことは、なんでも叶えてあげよう。父が子によって栄光をお受けになるためである。何事でもわたしの名によって願うならば、わたしはそれをかなえてあげよう。もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。それは真理の御霊である。この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けることができない。あなたがたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるからである。わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない。あなたがたのところに帰って来る。(ヨハネ14・12-18)

私が信仰に導かれたのが、この「主イエスの御名」によって始めて真剣に祈ったときだったということは第2回「平和の主の誕生」のところで述べましたが、その後も何度となく主の御名の力を体験しました。

ある時は高慢の罪を犯し、苦しみの奈落に陥ったことがありました。そのとき「もうお前はダメダ」と私に囁きかける声に対して、主イエスに祈りの内に自分の罪と十字架の贖いの信仰を告白して、「主イエスの御名によって命じる。サタンよ去れ！」と叫んで平安を与えられたこともありました。

人生という旅路の必需品は主イエスの名です。クリスチャンは祈りの最後に「主イエスの名によってお祈りします」と添えます。この名によって人生の旅路を祈りつつ歩んで参りましょう。

21. 「人生の荒野にて」 (ルカ9・10-17)

今回の聖書箇所は、荒野での「パンと魚の奇蹟」または「五千人の食事」と呼ばれる出来事です。正式な食事の後にはデザートがつきもの。デザート(**dessert**)といえば、食事の後に出るお菓子などのことですが、まったく同じ発音でデザート(**desert**)と言うと「見放す」という意味の動詞になります。そして、この「見放す」という単語をデザトと読むと、「(見放された場所としての)荒野」という名詞になります。《s》ひとつの違いで何ともややこしい話ですが、この単語の読みは気をつけないと、美味しいデザートから見放されることになるかもしれません。

皆さんはイスラエルの荒野をどのような所だと思いますか？ もしかしたら、砂漠や赤土の大地がどこまでも続いている写真を見たことがあるのではないのでしょうか。確かに荒野はそうなのですが、私がイスラエルを旅行したとき、ツアー・ガイドが興味深いことを言っていました。「皆さんは、荒野をご覧の通りの赤土の砂漠だと思うでしょう。今は六月で乾期に入ったので全部枯れて地肌がむき出しになっていますが、春、ここには一面に花が咲いていたのです。これから十一月まで乾期が続く、雨は一滴も降りません。ワディと呼ばれる川も干上がっていますが、雨期にはたくさんの水が流れていたのです。」これはイザヤの次の言葉を思い起こさせます。

**荒野と、かわいた地とは楽しみ、さばくは喜びて花咲き、
さふらんのように、さかんに花咲き、かつ喜び楽しみ、かつ
歌う。これにレバノンの栄えが与えられ、カルメルおよび
シャロンの麗しさが与えられる。彼らは主の栄光を見、
われわれの神の麗しさを見る。** (イザヤ35・1, 2)



ガイドの説明から、土地が荒野になる理由は、雨が降らず、水がないからだということが分かりました。日本では人が手入れをしないから土地は「荒れ地」となるのですが、これとは異なって、「荒野」は乾燥しきって手入れのしようがない見放された土地なのです。どうしてこのような命の危険が伴う荒野に、群衆が集まったのでしょうか？ マルコはその時の様子を次のように伝えています。

さて、使徒たちはイエスのもとに集まってきて、自分たちがしたことや教えたことを、みな報告した。するとイエスは彼らに言われた、「さあ、あなたがたは、人を避けて寂しい所へ行って、しばらく休むがよい」。それは、出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったからである。そこで彼らは人を避け、舟に乗って寂しい所へ行った。ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見、それと気づいて、方々の町々からそこへ、一せいに駆けつけ、彼らより先に着いた。(マルコ6・30-33)

主イエスは伝道旅行から帰って来た弟子たちを休息させようとして、舟に乗って荒野を意味する「寂しい所」に行ったのです。日本では休息するためなら温泉か保養地に行くところですが、どうして荒野で休息なのかというと、「それは、出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったからである」と書かれています。

ヨハネはこの時期について「時に、ユダヤ人の祭である過越が間近になっていた」と記しています(ヨハネ6・4)。過越祭はユダヤ暦では固定していますが、新暦では3月下旬から4月に当たるので、この頃の荒野にはまだ草花が生えていたはずです。事実、ヨハネ6・10には「その場所には草が多かった。そこにすわった男の数は五千人ほどであった」と書かれています。男だけでも五千人と言いますから、男女子供を合わせるとおそらく一万人は越えるほどの人々が集まったのではないのでしょうか。

福音書には主イエスが為された多くの奇蹟が書かれています。四つの福音書全部が記録している奇蹟は二つであり、「キリストの復活」と、この「パンと魚の奇蹟」だけです。この奇蹟が弟子たちにどんなに強烈な印象を残したかが分かります。けれども、もしこれを単なる過去の物語として読むなら、この奇蹟は自分とは関係のない他人事となって、その意味は私達に語りかけてくることはありません。この出来事を通して主イエスが語っておられることを聞き取るために、その時の様子をもう少し見てみましょう。

イエスは目をあげ、大ぜいの群衆が自分の方に集まって来るのを見て、ピリポに言われた、「どこからパンを買ってきて、この人々に食べさせようか」。これはピリポをためそうとして言われたのであって、ご自分ではしようとするのを、よくご承知であった。すると、ピリポはイエスに答えた、「二百デナリのパンがあっても、めいめいが少しずついただくにも足りませんまい」。(ヨハネ6・5-8)

「二百デナリ」は現代の邦貨に換算すれば、約二百万円に相当します。仮に一万人がそこにいたとすると、一人当たり二百円ということになり、ピリポの素早い計算は、ほぼ正しいこととなります。そして、その回転の速い頭で「たとえお金があったとしても荒野では調達のしようがない」と考えたのです。他の弟子たちも来て主イエスに言いました。

「群衆を解散して、まわりの村々や部落へ行って宿を取り、食物を手にいれるようにさせてください。わたしたちはこんな寂しい所にきているのですから」。しかしイエスは言われた、「あなたがたの手で食物をやりなさい」。彼らは言った、

**「わたしたちにはパン五つと魚二ひきしかありません、この
大ぜいの人のために食物を買いに行くかしなければ」。(ルカ9・12-13)**

「…しかない」とは私たちもよく言う言葉です。そして「だから無理！」と結論づけます。しかし、主イエスは、「これっぽっちしかない…」と悲観している弟子たちに、彼らが本当に持っているものが何であるかを示されました。つまり、彼らの手元にあるものはたとえわずかであっても、彼らと共におられる方はそれを何百倍、何千倍にも増し加えて生かすことの出来るお方なのだということです。主イエスはこのことを教えるために次のように為されました。

**イエスは言われた、「それをここに持ってきなさい」。
そして群衆に命じて、草の上にすわらせ、五つのパンと
二ひきの魚とを手に取り、天を仰いでそれを祝福し、
パンをさいて弟子たちに渡された。弟子たちはそれを
群衆に与えた。みんなの者は食べて満腹した。
パンくずの残りを集めると、十二のかごにいっぱい
になった。食べた者は、女と子供とを除いて、おおよそ
五千人であった。(マタイ14・18-21)**

この奇蹟を通して主イエスが弟子たちに示されたことは、荒野のように人に見捨てられた場であっても、主は私たちをお見捨てにならないということです。このことをよく表している『足跡』と題する詩があります。

【足 跡】

私の歩んできた道を振り返ると浜辺に二つの足跡が並んでいた
私が楽しかったとき喜びの時に足跡はいつも並んでいた
しかし、私が悩み苦しみ悲しみに沈んでいたとき 足跡は一つしかなかった
私は主にたずねた
主よ、私の苦しみの時に足跡はなぜひとつだったのですか
私があなただを最も必要とするとき どうして足跡はひとつだったのですか
主は私に答えられた
私はあなたを離れない、決して見放さない
あなたが悩み苦しみ悲しみの底に沈んでいたとき
友よ、わたしはあなたを背負っていたのだ

ともすれば、私たちは解決すべき問題や課題があまりにも大きく、それに対して、自分にあるものがわずかで貧弱に思われる時、「…しかない」と我が身の非力や貧困を嘆きがちです。手元にあるものだけを見続ける限り、自分が見捨てられ荒野に立たされたような思いになります。そして心はすさみ、自分も他の人を見捨てたくなくなります。

しかし、もともと人間は非力であり、自分の手元にあるものもわずかですが、主が共にいて下さるのですから、大丈夫なのです。今手元に与えられているものは、大きな祝福の端緒であり、始まりなのです。私たちがなすべきことは、主イエスがなさったように、まずそれを手に取り、天を仰いで父なる神に感謝し、その祝福を信じて歩み出すことなのです。

22. 「ペテロの信仰告白」 (ルカ9・18-27)

以前、勤務先の学生アルバイトと禅問答のようなことをしたことがあります。彼を仮に「鈴木一郎」君とします。

私・「君は誰？」

彼・「鈴木一郎です。」

私・「それは名前だ。日本に鈴木一郎は他にも沢山いるよ。」

彼・「〇〇大学の学生です。」

私・「それは君の社会での現在の立場。他にも学生はいる。」

彼・「じゃ、意志を持った肉体です。」

私・「私だって同じだ。それでは君を特定することにならない。」

彼・「そんなの難しいですよ。答ってあるんでしょうか？」

私・「実はその答は、君にとって私が誰かということに鍵があると思うんだけどね。」

彼・「妙に納得感がありますけど、どういうことですか？」

これは、近頃の大学生が「自分は何者？」というアイデンティティの問題をどう考えているか知りたかったので、一緒に働いていたアルバイト学生に振ってみたのですが、彼としては手玉に取られたようで、迷惑をかけたかもしれません。ただその時、彼に伝えたかったことは、私たちが契約時や銀行窓口などで「本人確認」を求められるときに、運転免許証とか健康保険証、あるいはパスポート等々を提示しますが、それらに限らず、実は私たち一人一人は、人間関係の数だけ様々な面を持っているのではないかと、つまり、個人のアイデンティティは一つではないということです。

今回の聖書箇所冒頭で、主イエスは弟子たちに興味深い問いかけをしています。

イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちが近くにいたので、彼らに尋ねて言われた、「群衆はわたしをだれと言っているか」。彼らは答えて言った、「バプテスマのヨハネだと、言っています。しかしほかの人たちは、エリヤだと言い、また昔の預言者のひとりが復活したのだと、言っている者もあります」。 (ルカ9・18、19)

私たちは時に「みんなは自分のこと、どう思っているんだろう」と評判が気になったり、あるいは「自分は一体何者だろう？」と考えることがあります。主イエスも同様のことを考えたのでしょうか？
いいえ、そうではなく、弟子たちにご自分との関係を問われたのだと思うのです。これは単に弟子たちが主イエスをどう見ているかを問題にしているだけではありません。逆から言えば、主イエスに自分をどう見てほしいかという弟子たちの願望を表しているのであって、そのことを明らかにするために主イエスは質問したのだと思うのです。果たして、次のように問われました。

彼らに言われた、「それでは、あなた方は私を誰と言うか」。

ペテロが答えて言った、「神のキリストです」。 (ルカ9・20)

マタイはこの時の様子をもっと詳しく伝えています。

シモン・ペテロが答えて言った、

「あなたこそ、生ける神の子キリストです」。
すると、イエスは彼にむかって言われた、
「バルヨナ・シモン、あなたはさいわいである。
あなたにこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、
天にいますわたしの父である。そこで、わたしも
あなたに言う。あなたはペテロである。そして、
わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう。
黄泉の力もそれに打ち勝つことはない。
わたしは、あなたに天国のかぎを授けよう。
そして、あなたが地上でつなぐことは、天でもつなぐがれ、
あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう」。
そのとき、イエスは、自分がキリストであることを誰にも
言うてはいけないと、弟子たちを戒められた。(マタイ16・16-20)

主イエスの激賞を受けたこの答えは「ペテロの良き信仰告白」と呼ばれます。主イエスが救い主・キリストであることを初めて明確に告白した記念碑的な言葉だからです。カトリックでは、後にここを根拠にして、ペテロがローマで開いたと言われるローマ教会の普遍的権威の基礎としています。しかし、ペテロ個人にそれがあるのではなく、「あなたこそ、生ける神の子キリストです」という信仰告白に基礎があるということ、主イエスは語っておられるのです。

ところで、どうして主イエスは、このキリスト告白を口止めされたのでしょうか？これは私たちの信仰告白を公にしてはならないという意味では決してありません。むしろ、この直後に語られた十字架予告にその理由があります。ルカ伝には次のように書かれています。

イエスは彼らを戒め、この事をだれにも言うなと命じ、
そして言われた、「人の子は必ず多くの苦しみを受け、
長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、
そして三日目によみがえる」。(ルカ9・21-22)
それから、みんなの者に言われた、「だれでもわたしに
ついてきたいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を
負うて、わたしに従ってきなさい」。(ルカ9・23)

ところがルカは上記の22、23 節の間に起きた大変な出来事を、なぜか省略しています。その場にいたマタイが伝えます。

この時から、イエス・キリストは、自分が必ずエルサレム
に行き、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、
殺され、そして三日目によみがえるべきことを、弟子たちに
示しはじめられた。

すると、ペテロはイエスをわきへ引き寄せて、いさめはじめ、
「主よ、とんでもないことです。そんなことがあるはずは
ございません」と言った。イエスは振り向いて、ペテロに
言われた、「サタンよ、引きさがれ。わたしの邪魔をする者だ。
あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」。(マタイ16・21-23)

今しがた主イエスに激賞されたペテロが、今度は急転直下、サタン呼ばわりされたこととマタイは伝えているのでしょうか。後にペテロ本人から聞いて彼の説教原稿を書いたと言われるマルコは、この時の様子を次のように記しています。

**イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペテロをしかって
言われた、「サタンよ、引きさがれ。あなたは神のことを
思わないで、人のことを思っている」。(マルコ8・33)**

つまり、主イエスは最初は自分を引き寄せたペテロを見ていたはずですが、振り返って弟子たちを見ながら言われたというのですから、ペテロ個人をサタン呼ばわりしているのではなく、主イエスの視線は弟子たちの間に忍び込んでいるサタンに向けられていたのです。

では、叱責されたサタンの思いとはどのようなことだったのでしょうか？主イエスはそれを「神のことを思わないで、人のことを思っている」と表現しています。神のご計画は罪人の私たちを主イエスの十字架と復活によって救うことです。しかし、サタンはペテロの口を通して「主よ、とんでもないことです。そんなことがあるはずはございません」と言わせたのです。

ペテロが信仰告白として言った「生ける神の子キリスト」というのは、当時のイスラエル人にとって、《ローマの圧制をくつがえす独立解放運動の指導者》を意味していました。ですから、多くの人々が待ち望んでいたのはこのような意味でのキリストであって、それは人間的な解放者を指していました。後に十二弟子の内のヤコブとヨハネの言動を伝える次のエピソードは、弟子たちがイエス・キリストの本当の使命を知らなかったことを示しています。

**さて、ゼベダイの子ヤコブとヨハネとがイエスのもとに
きて言った、「先生、わたしたちがお頼みすることは、
なんでもかなえてくださるようお願いします」。
イエスは彼らに「何をしてほしいと、願うのか」と言われた。
すると彼らは言った、「栄光をお受けになるとき、ひとり
あなたの右に、ひとり左にすわるようにしてください」。**

**イエスは言われた、「あなたがたは自分が何を求めているのか、
わかっていない。あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、
わたしが受けるバプテスマを受けることができるか」。
彼らは「できます」と答えた。するとイエスは言われた、
「あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける
バプテスマを受けるであろう。しかし、わたしの右、左に
すわらせることは、わたしのすることではなく、ただ備え
られている人々だけに許されることである」。**

**十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネとのことで憤慨
し出した。(マルコ10・35-41)**

この出来事は、ヤコブとヨハネのみならず、十二弟子全員が主イエスを現世的な独立解放運動の政治的指導者という意味での救い主だと見ていたことを示しています。だから、革命が成功して主イエスが王として戴冠するときに、自分たちがその側近として重用されることを彼らは夢見ていたのです。しかし、主イエスの使命はそのようなことではなく、全人類の罪を背負うキリストとしての贖いの御業でした。この御業をつぶさに目撃し証言する証人として弟子たちは招かれていたのであることを、

次の主イエスの言葉は示しています。

**それから、みんなの者に言われた、「だれでもわたしについて
きたいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、
わたしに従ってきなさい。**

**自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために
自分の命を失う者は、それを救うであろう。人が全世界を
もうけても、自分自身を失いまたは損したら、なんの得に
なろうか。わたしとわたしの言葉とを恥じる者に対しては、
人の子もまた、自分の栄光と、父と聖なる御使との栄光の
うちに現れて来るとき、その者を恥じるであろう。**

**よく聞いておくがよい、神の国を見るまでは、死を味わわ
ない者が、ここに立っている者の中にいる」。(ルカ9・23-27)**

そして、このすぐ後に起きた変貌山での出来事は、主イエスが全人類の救い主・キリストであるこ
とを明らかに示すものでした。

**これらのことを話された後、八日ほどたってから、
イエスはペテロ、ヨハネ、ヤコブを連れて、祈るために
山に登られた。祈っておられる間に、み顔の様が変わり、
み衣がまばゆいほどに白く輝いた。すると見よ、ふたりの
人がイエスと語り合っていた。それはモーセとエリヤで
あったが、栄光の中に現れて、イエスがエルサレムで遂げよう
とする最後のことについて話していたのである。(ルカ9・28-31)**

とても興味深いのは、ここで「最後のこと」と訳されている言葉です。これは「エクソダス」という単
語で、旧約聖書の「出エジプト記」を意味します。「出エジプト記」は古代エジプトで四百年間も奴隷
状態にあったイスラエルの民が、神によって立てられたモーセを指導者として、その苦役から解放さ
れ、約束の地に導かれるまでを記録した書物です。ちょうどそのように、主イエスは私たちを罪の苦
しみから解放するために、エルサレムで十字架と復活による解放を成し遂げてくださる、その御業の
ことを語り合っていたというのです。その時の三人の弟子たちの様子が次のように書かれています。

**ペテロとその仲間の者たちとは熟睡していたが、
目をさますと、イエスの栄光の姿と、共に立って
いるふたりの人とを見た。このふたりがイエスを
離れ去ろうとしたとき、ペテロは自分が何を言っ
ているのかわからないで、イエスに言った、「先生、
わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。
それで、わたしたちは小屋を三つ建てましょう。
一つはあなたのために、一つはモーセのために、
一つはエリヤのために」。(ルカ9・32-33)**

この素晴らしい出来事を目撃しても、まだ弟子たちは何のことか理解できず、良く分からないまま
的外れなことを口走っていた様子が描かれています。

彼がこう言っている間に、雲がわき起って彼らをおおいはじめた。そしてその雲に囲まれたとき、彼らは恐れた。すると雲の中から声があった、「これはわたしの子、わたしの選んだ者である。これに聞け」。

そして声が止んだとき、イエスがひとりだけになっておられた。弟子たちは沈黙を守って、自分たちが見たことについては、そのころだれにも話さなかった。(ルカ9・34-36)

これら一連の出来事を通して私たちが学ぶことができるのは、主イエスは私たちが罪から解放するために十字架と復活の御業をなさろうとして来られた救い主キリストだということです。そして私たちが主イエスをどう見るかは、実は自分自身をどう見るかということと深く関わっています。主イエスを単なる一宗教の開祖とか宗教的思想家と見るなら、永遠に自分とは関係のない人にとどまります。しかし「あなたこそ生ける神の子キリスト」というペテロの言葉は、やがて彼が自分の体験を通してその意味を深く理解してゆく信仰告白だったのです。

さて、貴方にとって主イエスはどなたですか？

23. 「誰が一番？」 (ルカ9・37-48)

ある時、読んでいた本の中に『あなたの免状を見せてみよ』という、次のような一文がありました。皆さんはどう思われますか？

『あなたの免状を見せてみよ』

では、ここでクイズをひとつ。次の問題をやってみてください。

- ①世界最高の金持ちを十人あげよ。
- ②ミス・アメリカ・コンテストのここ十年間の受賞者は？
- ③ノーベル賞あるいはピュリツァー賞の受賞者を八人あげよ。
- ④ここ十年のアカデミー賞作品賞の受賞者は？
- ⑤ここ十年のワールド・シリーズの勝者は？

どうでした？ 僕も全然できなかった。マニアでもない限り、昨日の大スターの名前でさえよく覚えていない。ここにあげたのはどれも並の功績じゃない。その分野の最高の人たちばかりだ。だが、喝采はやみ、賞は色あせる。業績は忘れられ、栄誉も証明書も持ち主と共に埋葬される。

では、また別のクイズを。今度はどうでしょうかね。

- ①あなたが一緒に時間を過ごして楽しい人を三人思い浮かべよ。
- ②これ迄あなたに何か価値ある事を教えてくれた人十人をあげよ。
- ③辛い時に助けてくれた友人を五人あげよ。
- ④あなたを感動させ、奮い立たせる物語の主人公を五人あげよ。

こっちのほうが易しかったでしょ？ 僕もそうだった。この教訓？ それは、僕たちにとっての重要人物は、資格証明書を持った人ではなく、関心を持ってくれている人たちだということだ。」

(マックス・ルケード著「ファイナル・ウィーク」より)

今回の聖書箇所では、弟子たちの内で「誰が一番偉いだろうか？」ということが話題になっていと書かれています。おそらく、これまでの諸事情が重なり合っただけのことでしょう。主イエスが変貌山と一緒に連れて行ったのがペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人だけだったこと、主イエスの受難予告が恐れをもたらしたこと、ペテロがサタン呼ばわりされたこと、また弟子たちが悪霊に取り憑かれた子供を癒せなかったこと等々が重なって、彼らの心に疑問や不安などがわき起こり、そのようなことが取り沙汰されていたものと思われまふ。その時の様子についてマルコが詳しく伝えています。

それから彼らはそこを立ち去り、ガリラヤを通過して行ったが、イエスは人に気づかれるのを好まれなかった。それは、イエスが弟子たちに教えて、「人の子は人々の手にわたされ、彼らに殺され、殺されてから三日の後に甦るであろう」と言っておられたからである。しかし、彼らはイエスの言われたことを悟らず、また尋ねるのを恐れていた。
それから彼らはカペナウムにきた。そして家におられる時、イエスは弟子たちに尋ねられた、「あなたがたは途中で何を論じていたのか」。彼らは黙っていた。それは途中で、だれが一ばん偉いかと、互に論じ合っていたからである。

(マルコ9・30-34)

いったい弟子たちはどんな議論をしていたのでしょうか。私は少し想像力をたくましくしてみました。

「もしも主イエスがいなくなったら、そのあと一体誰がリーダーになるんだ？」
「そりゃ、ペテロだろう」
「でも、主はペテロをサタン呼ばわりしたんだぞ」
「いや、主イエスはペテロではなく、あの場にいたサタンを叱ったんだ」
「まあ、山の上で主の変貌を見たのは、ペテロ、ヤコブ、ヨハネだけだから、この三人のうちの誰かだな」
「ヨハネじゃないか？ あいつは主のお気に入りだぞ」
「ヨハネはまだ甘えん坊だ！」
「じゃ、兄貴のヤコブか」
「あの兄弟はボアネルゲ(=雷)のあだ名の通り、ただ声がデカイだけだ」

弟子たちのヒソヒソとした議論はピリポ・カイザリヤからカペナウムまでの五〇kmほどの間、延々と続いたようです。彼らの議論を察知して主イエスがこのことについて弟子たちに語られるのですが、マタイはそれが弟子たちの思い切った質問への答えとして語られたと伝えています。

そのとき、弟子たちがイエスのもとにきて言った、

「一体、天国では誰が一番偉いのですか」。(マタイ18・1)

今まで弟子たちが議論していたのは、「自分たちの内で誰が一番偉いか」ということだったので、そのまま単刀直入に質問するのははばかられたのでしょうか、「天国では誰が…？」と一般論に変えています。

これは考えてみれば奇妙な質問です。なぜなら、天国で一番偉いのは明らかに神様だからです。しかし、主イエスは彼らの心を見抜き、近くにいた幼な子と呼び寄せて例えに取り、目に見えるようにして応えられました。

イエスは幼な子と呼び寄せ、彼らのまん中に立たせて言われた、

「よく聞きなさい。心をいれかえて幼な子のようにならなければ、

天国にはいることはできないであろう。この幼な子のように

自分を低くする者が、天国で一番偉いのである。」(マタイ18・2-4)

皆さんの「幼な子」のイメージは、もしかしたら「純真無垢」でしょうか？もしそうなら、私たちにとって幼な子のようになることは絶望的な不可能を意味します。しかし、主イエスは、幼な子が天国に入るというのではなく、「この幼な子のように」と言われたのです。福音書を総合すると、実はこの時の様子は次のようだったことが分かります。

①イエスはすわって十二弟子を呼び、そして言われた(マルコ9・35)

「だれでも一ばん先になろうと思うならば、一ばんあとになり、
みんなに仕える者とならねばならない」

②イエスは幼な子と呼び寄せ、彼らのまん中に立たせて言われた、

「よく聞きなさい。心をいれかえて幼な子のようにならなければ、
天国にはいることはできないであろう。この幼な子のように自分を
低くする者が、天国でいちばん偉いのである。(マタイ18・2-4)

③ そして、…それを抱いて言われた。

最初、主イエスは座っていました。そこに幼な子呼び寄せて、彼らに向けてその真ん中に立たせたのです。そして「心をいれかえて」というのは「向きを変える」という言葉ですから、幼な子をご自分の方にクルリと向けさせ、きっと頭を撫でながらその子を「低く」、つまりご自分の前に座らせたのでしょう。それからその子を抱き、立ち上がって言われたのです。

**「だれでもこの幼な子をわたしの名のゆえに受けいれる者は、
わたしを受けいれるのである。そしてわたしを受けいれる者は、
わたしをおつかわしになったかたを受けいれるのである。**

あなたがたみんなの中でいちばん小さい者こそ、大きいのである」(ルカ9・48)

これは、今まで「誰が一番か」と論争し続けていた弟子たちへの、目に鮮やかな形で示された主イエスの答だったはずです。そして「あなたがたみんなの中でいちばん小さい者こそ、大きいのである」と言われたのですが、実にそのように弱く愚かで小さな者である私たちを天の高みに押し上げるために、主イエス御自身は十字架につかれたのです。見栄と虚飾と高慢で肥大した罪人の私たちの身代わりとして十字架の上で砕かれたのですから、主イエスのこの宣言は命懸けの宣言でした。

しかし、ここで「大きい」と訳されている言葉は単なる大きさのことを言っているのではなく、「重要さ」ということを意味しています。つまり、神の国に入るためには小さいことが大切なのだと主は言うておられるのです。

このことで思い合わせるのは、イスラエル旅行でベツレヘムの聖誕教会を訪れたときのことです。

この教会は、例年クリスマスの時にそのミサの様子が世界中にテレビ中継されるのですが、入り口は人が一人歩いて通れるような小ささです。ガイドの説明によると、この石造りの堂々とした教会の入り口は本来大きかったそうですが、昔ローマの兵隊がこの由緒ある教会に馬に乗ったままで入ろうとしたことがありました。それに憤慨した教会の人々が、馬から降りなければ入れないように頑丈な石で小さく区切ったのだそうです。まさに「狭い門より入りなさい」(マタイ7・13) との御言葉通りです。



私たちの内にはもしかすると、弱小恐怖症があるのではないのでしょうか。それは、小さいことはよくないこと、弱いことは悪いこと、という刷り込みがあって、だからいつも虚勢や見栄を張り、自分を大きく、ひとかどの者に見せようとする思いがあるのではないのでしょうか。しかし、主イエスは言われました。

**「だれでもこの幼な子をわたしの名のゆえに受けいれる者は、
わたしを受けいれるのである。そしてわたしを受けいれる者は、
わたしをおつかわしになったかたを受けいれるのである。**

あなたがたみんなの中でいちばん小さい者こそ、大きいのである」(ルカ9・48)

私たちは何かというと「誰が一番?」ということを取りざたにする世界に住んでいます。しかし、私たちの心の中に潜んでいる小ささ・弱さ・愚かさ・罪深さ、その表面化を恐れている思いを主はご存知の上で「狭い門より入りなさい」と言われたのです。背伸びして一番にならなければ神の国に入れ

ないではありません。むしろ、自分の小ささを知る者こそ、そのまま天国の門に入るにふさわしいと言われるのです。なぜなら、そのような罪人のために主は十字架に架かってくださったのだからです。あなた方をそのまま私が天の高みに押し上げると主イエスはおっしゃっています。

あなたは心の奥で、自分の弱さ・小ささにおののいていますか。実は、そのようなあなたこそ天国にふさわしいとイエス・キリストは招いておられます。



24. 「敵か、味方か？」 (ルカ9:49-56)

私たちはよく人間を二種類に分類します。例えば、男・女、大人・子供、内向的・外向的、保守・革新、文化系・体育会系等々です。そうした中に「敵か、味方か？」というのがあります。

私は元来、運動音痴で自分を体育会系とはとても言えないと思いつけて来たのですが、苦手を克服しようと運動を心掛けた結果、夏はテニス、冬はスキー、それに近頃は水泳を始めたので、一年中スポーツを楽しめるようになりました。それで「運動音痴」はそろそろ返上しようかなと思っています。

さて、三つのスポーツを通して分かった事は、テニスとスキー、水泳は性格が異なるという事です。テニスを楽しむには相手、つまり敵が必要ですが、雪のスロープ相手のスキーや水泳には敵がいるとは言えません。競技会にでも出れば競争相手を敵と呼べるかも知れませんが、それでも基本的には相手は雪・水です。こうして、テニスもスキーも40年ほどのキャリアがありますが、どちらが面白いかという、正直言って、私はスキーに少し飽きを覚えてきています。人間相手のスポーツの方が駆け引きの妙味があって飽きが来ないのです。これはなかなか面白いことだと思っています。

ところで、日本語の「敵」という言葉には幾つかの意味があります。第一は「自分に害をなすもの」の意味で使われる場合ですが、この害は何とかして取り除かなければなりません。第二は「敵は今日は休みだ」などのように「話題になっている人」という意味で使われます。この「敵」は取り除いてはいけません、仲良くすべきです。そして第三の用法が「戦いの相手」という場合です。もしそれがスポーツの相手であれば、ルールを守って競うのでない、次回からは一緒にスポーツを楽しむことが出来なくなります。しかし、戦争などの敵との戦いであれば、如何に勝利を収めるかが課題となります。

今回の聖書箇所ではヨハネの言葉に答えた主イエスが「味方」と言った時、その背後にどんな「敵」のことが想定されていたのでしょうか。

「先生、わたしたちはある人があなたの名を使って悪霊を追い出しているのを見ましたが、その人はわたしたちの仲間でないので、やめさせました」。

イエスは彼に言われた「やめさせないがよい。あなたがたに反対しない者は、あなたがたの味方なのである」。(ルカ9:49-50)

この時の会話をマルコはもう少し詳しく伝えています・

イエスは言われた、「やめさせないがよい。だれでもわたしの名で力あるわざを行いながら、すぐそのあとで、わたしをそしることはできない。わたしたちに反対しない者は、わたしたちの味方である。だれでも、キリストについている者だというのであなたがたに水一杯でも飲ませてくれる者は、よく言うておくが決してその報いからもれることはないであろう。また、わたしを信じるこれらの小さい者のひとりをつまつかせる者は、大きなひきょうを首にかけられて海に投げ込まれた方が、はるかによい。」

(マルコ9:39-42)

終わりの警告はちょっとこわいですが、決して、自分たちで敵を排除し、亡き者にしなさいという意味ではないと思います。むしろ、この表現で強調されているのは、人に^{つまづ}きを与える者の責任の

重大性であって、逆から言えば、愛することの大切さでしょう。事実、主イエスは次のように言われました。

『隣り人を愛し、敵を憎め』とされていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。敵を愛し、迫害する者のために祈れ。こうして、天にいますあなたがたの父の子となるためである。天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さるからである。 (マタイ5・43-45)

私たちはこのことを、第14回「敵を愛する？」で既に学びました。そこで学んだことは、愛とは単なる感情ではなく、むしろ意志の事柄だということでした。愛という感情が湧き起こるまで待つなら、いつまでたっても人を愛することは出来ません。このことを「愛とは名詞ではなく、動詞だ」とも表現しました。愛するとは行動すること、相手の喜ぶことをすることなのだということです。こうしてみると、主イエスの次の言動が理解できます。

さて、イエスが天に上げられる日が近づいたので、エルサレムへ行こうと決意して、その方へ顔をむけられ、自分に先立って使者たちをおつかわしになった。そして彼らがサマリヤ人の村へはいって行き、イエスのために準備をしようとしたところ、村人は、エルサレムへむかって進んで行かれるというので、イエスを歓迎しようとはしなかった。弟子のヤコブとヨハネとはそれを見て言った、「主よ、いかがでしょう。彼らを焼き払ってしまうように、天から火をよび求めましょうか」。イエスは振りかえって、彼らをお叱りになった。そして一同は他の村へ行行った。(ルカ9・51-56)

では、世の中には、およそ「敵」などは存在しないのでしょうか？主イエスはそうは言っていないと思います。「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」と言われたとき、愛し、祈るべき「敵」という存在のいることが前提になっていることは明かです。

それなら、「敵」とは誰なのでしょう？聖書的には敵に三種類があると思います。第一は自分に害悪を及ぼす他人であり、この敵を愛し、祈るべきだと主は言われたのです。第二は悪魔と呼ばれるサタンであり、次のように書かれています。

身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししののように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている。この悪魔にむかい、信仰にかたく立って、抵抗しなさい。 (1ペテロ5・8、9a)

てごわい敵であるサタンについては別の機会に譲りたいと思います。しかし、忘れてはならない第三の敵がいます。その敵について次のように書かれています。

あなたがたも、かつては悪い行いをして神から離れ、心の中で神に敵対していた。しかし今では、御子はその肉のからだによりその死をとおして、あなたがたを神と和解させ、あなたがたを聖なる、傷のない、責められるところのない者として、みまえに立たせて下さったのである。 (コロサイ1・21、22)

つまり、私たち自身が神の敵であったということです。これをある人は次のように言っています。

「もし、最良の友と最悪の敵を見たかったら、鏡を見なさい。そこにあなたの最良の友と最悪の敵が同時に映し出される。なぜなら、不摂生、否定的な考えに囚われる習慣、一日延ばしの傾向、

**忍耐力の欠如、否定的な性格、ギャンブル好き、優柔不断、迷信と偏見、
集中力の欠如、浪費癖、狭量さ、協調性の欠如、利己主義と虚栄心…」**

リストは延々と続きます。あなたはどれにもあてはまりませんか？こう考えてくると、実は私たちは心の中で自分自身を憎んでいるということがありはしないでしょうか。

しかし、そうやってあなたを責め立てているのは主イエスでしょうか？いいえ、そのように不甲斐ない自分を責めているのは、理想のみを追求する自分自身です。しかし、本来、滅ぼされるべき者として神に敵対していた私たちをさえ主イエスは愛して、私たちの身代わりになって死んでくださったというのが聖書の伝える福音です。

しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである。わたしたちは、キリストの血によって今は義とされているのだから、なおさら、彼によって神の怒りから救われるであろう。もし、わたしたちが敵であった時でさえ、御子の死によって神との和解を受けたとすれば、和解を受けている今は、なおさら、彼のいのちによって救われるであろう。そればかりではなく、わたしたちは、今や和解を得させて下さったわたしたちの主イエス・キリストによって、神を喜ぶのである。(ロマ5・8-11)

パウロはさらに、コロサイ教会の人々に次のように書き送っています。

あなたがたは、先には罪の中にあり、かつ肉の割礼がないままで死んでいた者であるが、神は、あなたがたをキリストと共に生かしわたしたちのいっさいの罪をゆるして下さった。神は、わたしたちを責めて不利におとしいる証書を、その規定もろともぬり消し、これを取り除いて十字架につけてしまわれた。(コロサイ2・13、14)

主イエスは言われます。

あなたがたが自分を愛する者を愛したからとて、なんの報いがあるのか。そのようなことは取税人でもするではないか。兄弟だけにあいさつをしたからとて、なんのすぐれた事をしているだろうか。そのようなことは異邦人でもしているではないか。それだから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなた方も完全な者となりなさい。(マタイ5・46-48)

冒頭でテニスとスキー、水泳の違いを述べましたが、敵のいることがテニスを飽きさせないということの意味は次のようなことではないかと思うのです。

私たちの人生に様々な彩りを与えているのは、実は、予測し難い他人との関係であって、この機微に富む人間関係を、単に敵・味方で色分けするのは、私たちの人生を潤いのないものにしてしまうことなのではないでしょうか。

主イエスが十字架で私たちの身代わりに罰を受けて下さったということを信じる人は、もはや自分を責めたる必要はありません。主がこの和解を通して私たちを愛していることを知って信じたのですから、私たちもまず自分自身と和解することが大切なのです。そうすれば、他の人々とも和解し愛することができるようになります。敵であった私たちを主が愛して下さって、私たちも愛されることの素晴らしさを知る者とされたのだからです。

25. 「弟子の覚悟」 (ルカ9・57-62)

新共同訳聖書には、今回の箇所「弟子の覚悟」という小見出しがつけられていて、身の引き締まる思いと同時に、少し困惑も覚えます。というのは、クリスチャンになるということは、相当の覚悟が必要であるかのような印象を受けるからです。もちろん、信仰の決断は確かに人生の大きな転機となることですが、聖書の原文にはこのような小見出しはありません。それでは、まず本文を見てみましょう。

道を進んで行くと、ある人がイエスに言った、「あなたがおいでになる所ならどこへでも従ってまいります」。イエスはその人に言われた、「きつねには穴があり、空の鳥には巣がある。しかし、人の子にはまくらす所がない」。

またほかの人に、「わたしに従ってきなさい」と言われた。

するとその人が言った、「まず、父を葬りに行かせてください」。

彼に言われた、「その死人を葬ることは、死人に任せておくがよい。

あなたは、出て行って神の国を告げひろめなさい」。

またほかの人が言った、「主よ、従ってまいります、
まず家の者に別れを言いに行かせてください」。

イエスは言われた、「手をすきにかけてから、うしろを見る者は、
神の国にふさわしくないものである」。(ルカ9・57-62)

これを表面的に読むと、クリスチャンは、①住む家を持つことができない、②身内が死んでも葬儀に出られない、③信仰を持つ時は黙って家族と別れること、などと誤解されかねません。しかし、私のこれまでの信仰経験から「そんなことはない」と確信を持って言うことができます。というのは、私はこれまで住む家に困ったことはありませんし、二〇〇〇年に父を天国に送った時も、平安な守りの内にすべてを執り行うことが出来ました。そして家内も私も実家の家族と良い関係を持っているからです。とすれば、これをおっしゃった主イエスの意図はどこにあるのでしょうか？

ここには三人の、弟子候補者のことが書かれています。最初の人に対する答えで、野の動物には巣があるのに「人の子には枕する所がない」と言っておられます。マタイ8・19によれば、この人は「律法学者」だったと書かれています。当時の律法学者が欲していたのは、さらなる知識とそれによって得られる富と名声でした。しかし、人々を救う御業をなすために来られた主イエスは公生涯中、地上にご自分の家を建てるようなことはありませんでした。

主イエスは地上の家ではなく、天国の永遠の住まいに人々を招くために来られたのです。こうした生きる目的の根本的違いに目を開かせるためのショック療法だったと思うのです。天の住まいについて次のように言っておられます。

**「私の父の家には、すまいがたくさんある。もしなかったならば私は
そう言っておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意しに
行くのだから。そして、行って、場所の用意ができたならば
またきて、あなたがたを私のところに迎えよう。私のおる所に
あなたがたもおらせるためである。」(ヨハネ14・2、3)**

次の人は主イエスの召きを受けたとき、「まず、父を葬りに行かせてください」と言っています。これは奇妙な答です。一見すると親孝行に思われるかもしれませんが、むしろ親不孝だとも言えます。なぜなら、自分の親の危篤もしくは死を差し置いて、主イエスの話を聞きに来たというのなら、とんでもない親不孝者だということになるからです。また、「いつになるかはわからないのですが、父の最期を見とってからお従いします」という意味であるなら、招きの言葉への不誠実な返答になります。しかし、主イエスはさらに迫ります。

**彼に言われた、「その死人を葬ることは、死人に任せて
おくがよい。あなたは、出て行って神の国を告げ広めなさい」**

正直に言いますが、私の父親が亡くなった時、もし主にこのように言われたなら、非常に苦しんで信仰が大きく揺さぶられたことだろうと思います。しかし主はむしろ、大きな平安で私を包み、すべてのことを守り導いてくださいました。

多発性脳梗塞で入院中の父が亡くなったとの知らせを受けたのは水曜日のことでした。葬儀の司式についてほとんど未経験な私でしたが、喪主兼司式者として、主の完全な守りの内に、親族や父の知人の方々と共に、キリスト教式で葬儀をすることができました。

その二年前に、父は主イエスを救い主として信じ、病床洗礼を受けていたのです。父を天国に送った翌々日の聖日礼拝は私にとって特に感慨深いものとなりました。葬儀のあとで、なお「あなたは、出て行って神の国を告げひろめなさい」との御言葉に従うことができるように、主が一切のことを導き整えてくださったのだからです。

それでは第三番目の、「まず家の者に別れを言いに行かせてください」と言った人に対して、主イエスが「手をすきにかけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくない」と言われたのはどういう意味でしょうか？実は旧約聖書の列王紀上に、似たようなことが書かれているところがあります。それは預言者エリヤがエリシャの上に外套をかけ、弟子となって従って来なさいと招いている箇所です。

**エリシャは牛を捨て、エリヤのあとに走ってきて言った、
「わたしの父母に口づけさせてください。そして後あなたに
従いましょう」。エリヤは彼に言った、「行ってきなさい。
わたしはあなたに何をしましたか」。エリシャは彼を離れて帰り、
ひとくびきの牛を取って殺し、牛のくびきを燃やしてその肉を煮、
それを民に与えて食べさせ立って行ってエリヤに従い、彼に仕えた。**

(列王上19・20-21)

エリヤ、エリシャの場合とは異なって、主イエスにはもうじき御自分の十字架の時が迫っていました。それがなければすべての人の救いの道がなくなるという大切な贖いの御業を成し遂げる時が近づいている中で、弟子への招きは切迫感に満ちています。この人は主イエスが成し遂げる救いの御業を目撃し宣べ伝える使命に招かれているのですから、後ろを振り向いている余裕はないのだということの意味しているのです。

やがて十字架の後に復活した主イエスは、天に帰って行かれるとき次のように言われました。

**「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。
それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、
父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに**

**命じておいたいっさいのを守るように教えよ。見よ、わたしは
世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」**（マタイ28・18-20）

これは「大宣教命令」と呼ばれますが、「大委任」とも呼ばれます。主の命令ではあっても主イエス・キリストの救いを知るすべての人に、福音を伝えることを託する全面的な「委任」だからです。

ある時、知り合いのコンピュータ・プログラマーが私のところに来て言いました、「満たされに来た。千田さん、あなたは私と会うと、いつもコンピュータのことしか言わないよね。どうして神様のことを話してくれないんですか。」私は頭をガツンと殴られた思いがしました。人々は信仰者から、ありきたりの話題ではなく、私たちが持っている希望・喜び・確信を本当は聞きたがっているのです。

大委任は「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいる」という言葉で締めくくられています。主が私たちといつも共にいて下さるというのですから、それはこの上ない祝福です。そしてこの祝福を味わいつつ、分かち合うことはあなたにも託されているのです。



26. 「私の隣り人とは？」 (ルカ10・25-37)

ルカだけが伝える主イエスの有名な「良きサマリヤ人」の譬えは、児童用の絵本などではそれ自体が単独で紹介されることが多いのですが、実はこの譬えの前に律法学者との会話があったことを見逃すことは出来ません。なぜならこの譬えは、会話の中の大切な点をより良く説明するために語られたのだからです。では始めに律法学者と主イエスの会話を見てみましょう。

するとそこへ、ある律法学者が現れ、イエスを試みようとして言った

「先生、何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」。

彼に言われた、「律法にはなんと書いてあるか。あなたはどの読むか」。

彼は答えて言った、『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いを

つくして、主なるあなたの神を愛せよ』。また、『自分を愛するように、

あなたの隣り人を愛せよ』とあります」。彼に言われた、「あなたの答は正しい。

そのとおり行いなさい。そうすれば、いのちが得られる」。(ルカ10・25-28)

律法学者の最初の質問「何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」というのは、ユダヤ的表現であって、日本語の表現なら「どうしたら天国に行けますか」に当たるでしょう。この質問に対して「律法にはなんと書いてあるか。あなたはどの読むか」と主イエスは言われました。ここでの「律法」とは旧約聖書を意味していますから、「あなたが専門としている旧約聖書にはどう書いてあると思えますか？」と逆に問いかけたわけですね。

律法学者の返答は、旧約聖書の教えは、①全身全霊を以て神様を愛すること(申命記6・5)、②自分を愛するだけでなく、そのように隣人をも愛すること(レビ記19・18)の二つに要約できる、ということでした。マタイ伝とマルコ伝によると、律法学者の質問にこのように答えたのは主イエスのほうだったと書かれています。どちらであるにしても、主イエスもまったく同じ見解だったということがわかります。しかし、ルカは律法学者がさらに次のように言ったと伝えています。

すると彼は自分の立場を弁護しようと思って、イエスに言った、

「では、わたしの隣り人とはだれのことですか」。(ルカ10・29)

こういうわけで、主イエスは次のような「良きサマリヤ人」の譬えを話されたのです。

「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、強盗どもが彼を襲い、

その着物をはぎ取り、傷を負わせ、半殺しにしたまま、逃げ去った。

するとたまたまひとりの祭司がその道を下ってきたが、この人を見ると、

向こう側を歩いて行った。同様に、レビ人もこの場所にさしかかってきたが、

彼を見ると向こう側を歩いて行った。

ところが、あるサマリヤ人が旅をしてこの人のところを通りかかり、彼を見て

気の毒に思い、近寄ってきてその傷にオリーブ油とぶどう酒とを注いでほしいを

してやり、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。

翌日、テナリ二つを取り出して宿屋の主人に手渡し、『この人を見てやって

ください。費用がよけいにかかったら、帰りがけに、わたしが支払います』と

言った。この三人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣り人になったと思うか」。

彼が言った、「その人に慈悲深い行いをした人です」。そこでイエスは言われた、

「あなたも行って同じようにしなさい」。(ルカ10・30-37)

これは現代の私たちにとっては絵画的で分かりやすい内容ですが、聞いていた当時の律法学者たちは、かなりの抵抗感を覚えた譬えだったのではないかと思います。というのは、サマリア地方の人々は古代にアッシリア帝国の征服を受け、宗教的・民族的混血を強いられた歴史があったため、「サマリア人」と言えば、当時のユダヤ人から嫌悪感を伴った差別と軽蔑を受けていた人々だったからです。

祭司やレビ人(神殿で神に仕える職務の人々)が無視して助けなかった傷ついたユダヤ人商人を、皆から差別されていたサマリア人が親身に介抱したというのですから、譬え話だとしても状況設定が自分たちに対してあまりに糾弾的だ、という反感を惹き起こしたのではないかと思います。これは、時代を現代にして、「祭司」を「牧師」、「レビ人」を「クリスチャン」などに置き換えると、私たちにも当時の律法学者が受けたショックを追体験することが出来ます。主イエスはこの譬えを通して何を語ろうとしておられるのでしょうか？

それは、「神に仕える」とは「隣りに仕える」ことだということです。つまり、神様を愛すると言いながら困っている人を助けないなら、神を愛したことにはならない。そして、隣り人だから仕えるのではなく、仕えるから「隣り人になる」ということであり、それこそが、神を愛することになるという意味なのです。

このことは、生涯を「良きサマリア人」のように生きたマザー・テレサを思い起こさせます。「貧しい人の中でも最も貧しい人の救済」に生涯を捧げたマザー・テレサは、その働きのゆえに1979年にノーベル平和賞を受賞しましたが、1997年に天に召されました。国民の85パーセントがヒンズー教徒といわれるインドでカトリック式の国葬が行われたことからみても、彼女がいかに特別な存在であったかがうかがわれます。日本に彼女を紹介し、二十三年間にわたって交流を続けた写真家の沖守弘さんが次のように言っています。

私たちにマザーの行いは「貧しい人を助けている」としか見えない。
しかし、マザーやシスターたちは、病気の老人や捨てられた子どもの中に神様を見ているのです。だから貧しい人に仕えることは神に仕えること。
神に一生を捧げた彼女たちには、これは大きな喜びなのです。

具体的なエピソードを挙げましょう。行き倒れて瀕死の人たちが運ばれてくる「死を待つ人の家」に、痩せ細り意識のない老人が一人、運び込まれました。マザーはこうした死にかけている人も、いつも平等に温かく迎え入れます。まず体を洗ってやり、粗末だけれど清潔な寝間着に着替えさせました。それから食事や薬を与え、できる限りのお世話をします。その老人を運び込んだヒンズー教徒の男性が、マザーの懸命な介護の様子を見て言いました。「あなたをここまで働かせる宗教は本物に違いない」マザーは答えました、「そうです。私はいまキリストのお体に触れているのです。」

27. 「なくてはならないもの」 (ルカ10・38-42)

車で遠出をしたとき、途中で面白い看板を見ました。金物屋さんのようにでしたが、大きな店舗ビルディングに、「ないものはない店」と大書しているのです。一見して「ないものはない店」なのだから「何でもある」という意味だと思いましたが、次に、もしかして店に入って希望のものが無かったら「すみません。実は、中には無いものもある、という意味です」と言って謝られるのかなとも思いました。それで車と一緒に乗っていた人々と、ひとしきり楽しい話題になりました。結局、その店に用事はなかったの
で通過したのですが、皆さんはどちらだと思えますか。何でもあるのか、無いものもあるのか…。何とも紛らわしい店名ですが、どこか、店主のユーモアのセンスが感じられる面白い看板だと思いました。これに対して、今回の主題は「なくてはならないもの」ですから、これは迷うことなく「絶対に必要なもの」という意味です。

この聖書箇所には対照的な性格ながら、仲の良いマルタ、マリヤという二人の姉妹が登場します。では、エルサレム途上の主イエス一行を迎えた、この姉妹のエピソードを見てみましょう。

一同が旅を続けているうちに、イエスがある村へ入られた。

するとマルタという名の女がイエスを家に迎え入れた。

この女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、御言に聞き入っていた。ところが、マルタは接待のことで忙がしくて心をとりみだし、イエスのところにきて言った、「主よ、妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか。わたしの手伝いをするように妹におっしゃってください」。

主は答えて言われた、「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。しかし、なくてはならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ。

そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである」。 (ルカ10・38-42)

この記事は読む人それぞれで異なった感想が出てくることです。たとえば、「一生懸命に主イエスを接待しようとしていたマルタがかわいそうだ」とか、「何もしないで座っていたマリヤだけが褒められていて不公平だ」、あるいは「どうしてマルタは妹のマリヤに言わず、主イエスに言ったのだろうか？」など、その他にもいろいろな意見が出てくることでしょう。

実は、これと似た体験をしたことがあります。私が実家に帰るとき、母にあらかじめ到着日時を連絡しておきました。一人で住んでいた母は久しぶりの息子夫婦の来訪を喜び、先ずお茶を入れて挨拶し、お茶菓子を出して来てテーブルの上に置き、それから台所に戻ってお新香を持ってきました。家内も手伝おうとしましたが、「お客さんは座ってて」と言って、今度は「お腹はすいてないかい」と食事を作ろうとしたのです。私としては母とゆっくりと話をし、できれば信仰のことを伝えたいと思っていたのに、母は席が温まるいとまもなく台所と居間を行ったり来たりしていました。私は「お母さん、もてなしはこれで充分だから、ゆっくり座って話をしようよ」と言いました。喜ぶ母の心が分かるだけに嬉しいのですが、私たちはまるで居間に取り残されたようで、もてなしのどうあるべきかを考えさせられたことでした。

マルタも主イエス一行を出来るだけのおもてなしで歓迎したかったのでしょう。おそらく食事の用意だけでなく、今晚の寝具の準備なども人数分揃えとなると、猫の手も借りたいほどの忙しさだったのではないのでしょうか。ところが、妹のマリヤはと見ると「主の足もとにすわって、御言に聞き入っているのです。最初は「少しぐらいなら…」と我慢していたのでしょうか、とうとう堪忍袋の尾が切れて、マルタは主イエスに言いました。

「主よ、妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか。わたしの手伝いをするように妹におっしゃってください」。

どうして、直接に妹のマリヤに言わなかったのでしょうか？マリヤと喧嘩していたのでしょうか、あるいはマリヤは普段、お姉さんの言うことを聞かない妹だったのでしょうか。ルカは何も書いていないのははっきりしたことはわかりません。けれども、姉妹の仲が良かったことは、ラザロの復活を伝えるヨハネ伝の記事の中で、最初に主イエスを出迎えたマルタがマリヤを呼び「先生がおいでになって、あなたを呼んでおられます」(ヨハネ11・28)と言ったことから伺われます。

それにしても、主イエスの言葉がマルタにちょっと可愛そうに思われるのは私だけではないでしょう。主イエスはいったい何を「無くてならぬ…一つだけ」のものと言っているのでしょうか？私はここで、主イエスの荒野の誘惑を思い合わせます。

さて、イエスは御霊によって荒野に導かれた。悪魔に試みられるためである。

そして、四十日四十夜、断食をし、そののち空腹になられた。

すると試みる者がきて言った、「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんなさい」。

イエスは答えて言われた、「『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである』と書いてある」。(マタイ4・1-4)

確かに食べ物は大切ですが、神の言はそれ以上に人が生きる上で必要不可欠のものだということを主イエスは、その公生涯の冒頭において宣言されたのです。「マリヤはその良い方を選んだ。そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである」という言は厳しいけれども真理なのです。そして、いま主イエスが行こうとしているエルサレムで待ち受けているのは十字架です。主の言が聞ける最後のチャンスにマリヤが耳を傾けているのは、主にとっても本当に喜びだったはずです。

マリヤについてヨハネ11・2 は「このマリヤは主に香油をぬり、自分の髪の毛で、主の足をふいた女であった」と伝えています。また、「ナルドの香油」のルカ伝7章の女性だったとすると「その町で罪の女であった」と書かれていました(ルカ7・37)。罪を赦されたマリヤが一心に主イエスの言に喜びをもって耳を傾けていた様子がうかがわれます。このとき主イエスはどんな話をしておられたのでしょうか。その内容は書かれていませんが、あるとき、主イエスは罪人を招くために来られたということを、パリサイ人に語ったことがありました。

イエスが家で食事の席についておられた時のことである。多くの取税人や罪人たちがきて、イエスや弟子たちと共にその席に着いていた。

パリサイ人たちはこれを見て、弟子たちに言った、「なぜ、あなたがたの先生は、取税人や罪人などと食事を共にするのか」。

イエスはこれを聞いて言われた、「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。『わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない』とはどういう意味か学んできなさい。

わたしがきたのは、義人を招くためではなく罪人を招くためである」。(マタイ9・10-13)

お医者さんが病気の人のお家に往診に来たとき、大事なことは何でしょうか。それはおもてなしに心を砕くことよりも、まずその医師の言葉に耳を傾けることです。マルタは彼女なりに思慮無く、もてなしに心を尽くしたので、このような言い方はマルタに酷かも知れません。けれども、最後の時が迫っている主イエスにとって、ご自分の語る言に熱心に耳を傾けてくれるマリヤの姿は何よりも嬉しかったに違いありません。もう一度、主の言葉に聞きましょう。

**「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って
思いわずらっている。しかし、無くてならぬものは多くはない。
いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ。
そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである。」**

28. 「天のアバ」 (ルカ 11:1-13)

また、イエスはある所で祈っておられたが、それが終わったとき、弟子のひとりが言った、「主よ、ヨハネがその弟子たちに教えたように、私たちにも祈ることを教えてください」。

そこで彼らに言われた、「祈るときには、こう言いなさい、『父よ、御名があがめられますように。御国がきますように。わたしたちの日ごとの食物を、日々お与えください。私たちに負債のある者を皆ゆるしますから、私たちの罪をもおゆるしてください。私たちを試みに会わせないでください』」。(ルカ11:1-4)

勤務先で一緒に働いている大学生アルバイトがとても素直なので、ある時「君が父親になったらどんなふうに子供を育てる？」と聞いてみました。すると「オレなら殴^{なぐ}って育てますね」と意外な答が返ってきました。そのわけを尋ねると、彼が悪いことをして聞き分けがないと父親は殴ることがあるのだそうです。しかしその後で必ず「今殴ったのは、お前が憎いからではなく、こうだったからだ」とフォローがあって、彼にもその都度納得できるので「オヤジは怖い存在だけど、尊敬できる」と言うのです。彼は自転車で通勤していましたが、大雨や大雪の時に、彼の父親が、好きな晩酌を控えてのことでしょ、午後十時の勤務終了の頃に自動車で迎えに来て、乗せて帰ることがよくありました。幼い頃から、確かな父親像を見て育った彼はきっと良い父親になることでしょう。大事に、シッカリと愛されているその姿を見るのは、とても心温まることでした。

今回の箇所には「主の祈り」とその由来が書かれています。これは「主よ、ヨハネがその弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈ることを教えてください」との弟子たちの求めに応じて、主イエスが「祈るときには、こう言いなさい」と言って教えて下さった祈りです。ここでのヨハネとは主イエスの宣教の先駆者だった洗礼者ヨハネのことを指しています。彼は主イエスにバプテスマを授けてからしばらくして、ヘロデ王に斬首されてしまったことが福音書に書かれています(マタイ14:1-12、マルコ6:14-29、ルカ3:19-20)。しかし、洗礼者ヨハネの死後もその弟子たちは「ヨハネ教団」という形で暫くのあいだ存続していたことが歴史上知られています。彼らの祈りは聞いてすぐそれと分かる何らかの特徴があったらしく、主イエスの弟子たちも自分たちにふさわしい祈り方について教えを請うたというのが「主の祈り」の由来です。

こうして「主の祈り」は現代の私たちにも伝えられ、多くの教会で礼拝のたびに捧げられているのですが、マルチン・ルターは「主の祈りはキリスト教会の中の最大の殉教者だ」と言っています。なぜなら、それが典礼文のようになってしまっていて、ほとんど意味も考えずに唱えられているからだということです。これは大いに反省しなければならないことだと思います。

「主の祈り」の意味について深く掘り下げた詳しい解説書は既に多く出版されていますので、私たちはここで、むしろその冒頭の言葉に目を注ぎたいと思います。というのは、それまでのユダヤ人の神様に対する見方をまったく覆^{くつがえ}す特徴的な言葉で始まっているからです。その言葉とは「父よ」という呼び掛けです。これは当時のユダヤ人が聞いて驚くような革新的言葉だったと思われる。

なぜなら、それまで神様を「父よ」と呼ぶことはあまりにも恐れ多いと考えられていたからです。しかし、それだけではありません。ゲッセマネの園で主イエスは「アバ、父よ、あなたには、できないことはありません。どうか、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころのままになさってください」(マルコ14・36) と祈ったと記されています。「アバ」とはその当時の言葉で「お父さん」あるいはもっとくだけた表現では「お父ちゃん」を意味する、子供が父親に呼び掛ける時の言葉なのです。これはその当時のコチコチ頭の宗教家たちにとっては神を冒瀆するものに響いたはずです。

新約聖書はギリシャ語で書かれていますが、マタイ伝は最初ヘブル語で書かれたものが後にギリシャ語に翻訳されたのではないかという人もいます。現代ヘブル語に翻訳された新約聖書というものがありますが、そのルカ11・2 では「私たちのアバ」と訳されています。父に対してこのように呼び掛けることができるのは家族だけです。主イエスは、天におられる神は私たちを家族と思ってくださっているのだから、そのように呼び掛けて良いのだと教えられたのです。そして、イエス御自身が最も苦しい祈りの時を過ごしたゲッセマネで、そのように呼び掛けたのでした。

ところで福音書記者ルカが伝える「主の祈り」は、ふだん私たちが捧げているものよりもずっと短いことにお気づきのことと思います。より長い祈りはマタイ6・9-13にありますが、現代の私たちに伝わっているのは、この後に更に使徒伝承による一文が加えられたものです。しかし、その長さとか一言一句を間違わないように祈ることが重要なのではなく、大切なのは祈りを聞いてくださる神様は私たちにとっての天におられるお父さんなのだということであり、それほどに親しい関係での神様との会話が祈りというものなのだということです。

さて、次に主イエスは一つの譬えを語られます。

そして彼らに言われた、「あなたがたのうちのだれかに、友人があるとして、その人のところへ真夜中に行き、『友よ、パンを三つ貸してください。友だちが旅先から私のところに着いたのですが、何も出すものはありませんから』と言った場合、彼は内から、『面倒をかけないでくれ。もう戸は締めてしまったし、子供たちも私と一緒に床にはいつているので、いま起きて何もあげるわけにはいかない』と言うであろう。しかし、よく聞きなさい、友人だからというのでは起きて与えないが、しきりに願うので、起き上がって必要なものを出してくれるであろう。 (ルカ11・5-8)

そして、これは次の有名な言葉「求めよ、さらば与えられん」ということを分かり易くするための譬えだったことが明かされています。

そこでわたしはあなたがたに言う。求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。すべて求める者は得、捜す者は見だし、門をたたく者はあけてもらえるからである。 (ルカ11・9-10)

冒頭の大学生に私は「君のお父さんが喜ぶのはどういう時なんだい？」と聞きました。彼の答は、「オヤジはオレとか妹にねだられたり、相談されたりする時って、結構嬉しそうですね」というものでした。

人間の親がそうであるなら、まして天のお父さんはそうであるに違いありません。主イエスが次のように言っておられる通りです。

**あなたがたのうちで、父であるものは、その子が魚を求めるのに、
魚の代りにへびを与えるだろうか。卵を求めるのに、さそりを与えるだろうか。
このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には良い贈り物を
することを知っているとするば、天の父はなおさら求めて来る者に聖霊を
下さらないことがあろうか」。**（ルカ11・11-13）

いかがですか？ 祈りについて私たちは余りにも杓子定規に、堅苦しく考え過ぎていたのではないのでしょうか。主イエスが弟子たちに諭されたことばは私たちに、祈りの本来の姿を示していると思うのです。

29. 「神の指」 (ルカ11・14-28)

「神様の御手^{みて}」とか「主の御手」という言葉は用いることがあっても、「神の指」という表現にはあまり馴染みがないかもしれません。今回の主題は次の聖書箇所から取りました。

**しかし、私が神の指によって悪霊を追い出しているのなら、
神の国はすでにあなた方の所に来たのである。(ルカ11・20)**

主イエスは「神の指」によって悪霊を追い出していたというのですが、これはどういう意味でしょうか？
まず「悪霊」について聖書がどう語っているかを見たいと思います。旧約聖書では、神の許しのもとに人の心を惑わし錯乱させる悪霊の存在が考えられていました。たとえば、御心に逆らうようになったサウル王は次第に凶暴化し、ダビデを殺そうとして追い回すようになりますが、彼について次のように書かれています。

**さて主の霊はサウルを離れ、主から来る悪霊が彼を悩ました。
サウルの家来たちは彼に言った、「ごらんなさい。神から来る
悪霊があなたを悩ましているのです。」(サムエル上16・14-15)**

新約の時代になると、悪霊はサタンの支配下にあって働く霊的存在として認識されるようになり、主イエスも使徒たちも、その力と戦っています。悪霊は人に働きかけ、人の中に入り込んで、精神的に、あるいは肉体的に病的状態をもたらします。しかし主イエスはしばしば悪霊を追い出し、弟子たちにも悪霊を追い出す権威を授けて、人々を救いに導かれました(マタ8・28 -34, 10・1, 12・22, 15・22-28等)。パウロも「惑わす霊と悪霊の教え」(1テモ4・1)が人を信仰から離れさせることについて警告していますから、悪霊の働きは私たちの良心と信仰にも影響を与えるものであることが分かります。

このように聖書は「悪霊」の存在と働きをはっきりと指摘しています。これに対して、科学や知識の発達した時代に住む私たちは、ともすれば「悪霊」とかサタンなどは古代の迷信であって、映画や芝居の中に登場することはあっても、実際には存在しないと考えがちではないでしょうか。

実は、私もかつて、そう思っていました。ところが、次のような調査結果を読んだことがあります。アメリカの代表的な教会のリーダー研修会でのことですが、百六十五人ほどの参加者のうち、その約95%が悪霊体験を持っていると解答したというのです。最も文明が進んでいると見られている国のクリスチャン指導者の多くがそうであるというのは驚きでしたが、同時に、「やはり、そうなのか」と思ったことも事実です。というのは、私の信仰生活の中でも、悪霊体験としか呼べないようなことがあったからです。

四年間の借家での開拓伝道が終わって、中古住宅でしたが会堂を購入することができた時のことは第15回『ただ御言葉を下さい』の中で証しました。ところが内壁が古かったので化粧板を購入し、約一ヶ月ほどかかって礼拝室を全面的に改装した直後、その晩から数日間、私は名状しがたい恐怖感に襲われました。やがてそれは、「新会堂が手に入り、内装も自力で為し終えた」という愚かな高慢の罪から来たものであることが祈りの中で示され、心からの悔い改めに導かれたのです。サタンから来る悪霊は人間の罪に食らいつく、ということ身を以て知った恐ろしい体験で、今でも忘れることが出来ません。

さて、悪霊に憑かれて口がきけなくなっていた人を主イエスが癒した時に、次のようなことを言う人がいました。

**「彼は悪霊のかしらベルゼブルによって、悪霊どもを追い出しているのだ」
と言い、またほかの人々は、イエスを試みようとして、天からのしるしを求めた。**

(ルカ 11・15、16)

ベルゼブルとは「ハエの神」という意味です。ハエの親玉が子分のハエを追い出しているだけだとひどい悪口を言う人々がいたのです。しかし主イエスは、彼らの思いを見抜いて言われました。

**「おおよそ国が内部で分裂すれば自滅してしまい、また家が
分れ争えば倒れてしまう。そこでサタンも内部で分裂すれば、
その国はどうして立ち行けよう。あなたがたはわたしが
ベルゼブルによって悪霊を追い出していると言うが、もし
わたしがベルゼブルによって悪霊を追い出すとすれば、
あなたがたの仲間はだれによって追い出すのであろうか。
だから、彼らがあなたがたをさばく者となるであろう。」** (ルカ11・17-19)

主イエスのここでの主旨は二つです。一つには、内輪もめをする国は遅かれ早かれ立ちゆかなくなるということ。もう一つは、悪霊がハエの神で追い出せるなら、あなた方も同じ非難を免れないということです。当時のユダヤには諸国を巡回している魔よけの祈祷師がいたことが使徒19・13-17からもうかがわれます。

**そこで、ユダヤ人のまじない師で、遍歴している者たちが、
悪霊につかれている者にむかって、主イエスの名をととなえ、
「パウロの宣べ伝えているイエスによって命じる。出て行け」
と、ためしに言ってみた。ユダヤの祭司長スケワという者の
七人のむすこたちも、そんなことをしていた。すると悪霊が
これに対して言った、「イエスなら自分は知っている。
パウロもわかっている。だが、おまえたちは、いったい
何者だ」。そして、悪霊につかれている人が、彼らに飛び
かかり、みんなを押えつけて負かしたので、彼らは傷を
負ったまま裸になってその家を逃げ出した。このことが
エペソに住むすべてのユダヤ人やギリシヤ人に知れわたって、
みんな恐怖に襲われ、そして主イエスの名があがめられた。**

さて、主イエスはこのように力に満ちた「神の指」によって悪霊を追い出していたわけですが、旧新約聖書のあちこちに「神の指」が見え隠れしています。たとえば、天地創造の時に人が造られた様子を聖書は次のように記しています。

**主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹きいれられた。
そこで人は生きた者となった。主なる神は東のかた、エデンに一つの
園を設けて、その造った人をそこに置かれた。** (創世記2・7-8)

ここには主なる神が陶器師のように心を込めて土をこね、ご自分の像に似せて徐々に形を整えながら人を創造し、大切にエデンの園に住まわせた様子が描かれています。また、出エジプト時にイスラエルの民が奴隷状態から解放される時、神様は十の災害を送られましたが、その第四の災害として、エジプト全土に「ぶよ」を送った時のことです。

魔術師らも秘術をもって同じように行ない、ぶよを出そうとしたが彼らにはできなかつた。ぶよが人と家畜についたので、魔術師らはパロに言った、「これは神の指です」。しかし主の言われたようにパロの心はかたくなになって、彼らのいうことを聞かなかつた。（出エジプト8・18-19）

更に、十戒の書かれた石板について、モーセは次のように語っています。

主は神の指をもって書きしるした石の板二枚をわたしに授けられた。その上には、集会の日に主が山で火の中からあなたがたに告げられた言葉が、ことごとく書いてあつた。（申命記9・10）

それから、ダニエル書の次の記事も有名です。

ベルシャザル王は、その大臣一千人のために、盛んな酒宴を設け、その一千人の前で酒を飲んでゐた。酒が進んだとき、ベルシャザルは、その父ネブカデネザルがエルサレムの神殿から取ってきた金銀の器を持ってこいと命じた。王とその大臣たち、および王の妻とそばめらが、これをもって酒を飲むためであつた。そこで人々はそのエルサレムの神の宮すなわち神殿から取ってきた金銀の器を持ってきたので、王とその大臣たち、および王の妻とそばめらは、これをもって飲んだ。すなわち彼らは酒を飲んで、金、銀、青銅、鉄、木、石などの神々をほめたたえた。

すると突然人の手の指があらわれて、燭台と相対する王の宮殿の塗り壁に物を書いた。王はその物を書いた手の先を見た。そのために王の顔色は変わり、その心は思い悩んで乱れ、その腰のつがいはゆるみ、ひざは震えて互に打ちあつた。（ダニエル5・1-6）

神の指が書いた謎の言葉を解読した預言者ダニエルは、驕り高ぶるベルシャザル王に待ち受けている神の審判を告げたのでした。

ところが、福音書はこの大きな御業をなさつた神の御子の御手を、人間が十字架につけて釘で刺し通してしまつたことを記しています。私たちが形造つた神の指、民を導いた神の指、生きる指針をと十戒を刻んだ神の指、捕囚民を支配する王に警告を与えた神の指、そして多くの奇蹟をなし、また人々を癒した神の指を人間は十字架につけて刺し通し、救い主イエス・キリストを殺してしまつたのです。公生涯を共にした弟子たちは、この時みな逃げ去ってしまいました。やがて三日目に復活して弟子たちに現れたとき、その場に居合わせなかつたトマスは言いました。

「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ決して信じない」。（ヨハネ20・25）

しかし福音書は、その八日ののちに起きたことを伝えています。

イエスの弟子たちはまた家の内におり、トマスも一緒にいた。戸はみな閉ざされていたが、イエスがいってこられ、中に立って「安かれ」と言われた。それからトマスに言われた、「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」。

トマスはイエスに答えて言った、「わが主よ、わが神よ」。

**イエスは彼に言われた、「あなたはわたしを見たので信じたのか。
見ないで信ずる者は、幸いである」。(ヨハネ20・26-29)**

トマスは現代の私たちの言動を代表しています。なぜなら、私たちも主を信じるより、自分の五感、知識、理性を何よりも信じがちだからです。しかし、それにもかかわらず復活した主の御手は私たちの名前を「いのちの書」に手ずから書き、決して消すことをしないとされます。

**勝利を得る者は、このように白い衣を着せられるのである。
わたしは、その名をいのちの書から消すようなことを、決してしない。
また、わたしの父と御使たちの前で、その名を言いあらわそう。 (黙示録3・5)**

**わたしは、すぐに来る。あなたの冠がだれにも奪われないように、
自分の持っているものを堅く守っていなさい。勝利を得る者を、
わたしの神の聖所における柱にしよう。彼は決して二度と外へ
出ることはない。そして彼の上に、わたしの神の御名と、
わたしの神の都、すなわち、天とわたしの神のみもとから
下ってくる新しいエルサレムの名とわたしの新しい名とを、
書きつけよう。 (黙示録3・11-12)**

この慈しみと憐れみに富み給う主を、私たちは詩人と共に、心から感謝し讃美する者でありたいと思います。

**わたしは、あなたの指のわざなる天を見、あなたが設けられた
月と星とを見て思います。人は何者なので、これをみ心に
とめられるのですか、人の子は何者なので、これを顧みられる
のですか。ただ少しく人を神よりも低く造って、栄えと誉とを
こうむらせ、これにみ手のわざを治めさせ、よろずの物を
その足の下におかれました。すべての羊と牛、また野の獣、
空の鳥と海の魚、海路を通うものまでも。主、われらの主よ、
あなたの名は地にあまねく、いかに尊いことでしょう。**

(詩篇8・3-9)

30. 「奇蹟にまさるもの」 (ルカ11:29-32)

聖書は皆さんにとってどのようなものでしょうか？これを「神話」と考える人もいるでしょうか。もし神話であるなら、それは《神の話》であって、人間は単なる脇役に過ぎないことになります。また聖書を《人間の歴史》と考えるなら、今度は神様が脇役になります。

ある人は聖書を「叙事詩」だと言います。叙事詩というのは神話・伝説・歴史上の事件などを物語のように述べた詩のことですが、聖書を《神と人間の出来事の記録》と見るわけです。それは、神が人間の歴史に介入しているという視点ですから、古代、ひいては現代の私たちにも神様は深く関わり、語りかけて下さっているとして聖書を読むことになります。「歴史」は英語で **history** で、その語源は **His story** にあるという説もあります。英語で大文字の **He** は「神」をさしますから、「歴史」は語源的には、人間と神とが織りなす物語であるというのです。

このように、聖書は神が人間と共に働かれた出来事の叙事詩であり、また私たちの信仰の先輩に語られた御言葉の記録であるとすれば、現代の私たちにも生きて働く神の言葉だと言うことができます。そして事実、私たちにも熱い眼差しを注いでおられるのです。

ルカ11章29節には次のように書かれています。

**さて群衆が群がり集まったので、イエスは語り出された、
「この時代は邪悪な時代である。それはしるしを求めが、
ヨナのしるしのほかには、何のしるしも与えられないであろう」**

主イエスの最初の言葉「この時代は邪悪な時代である」は、その頃の時代状況を嘆き、当時の人々を叱責しているのでしょうか？確かにそのようにも思われる語り出しです。では、主イエスの時代が「邪悪」だったのであるなら、文明や科学技術の進んだ現代はもっと素晴らしい時代になっていると言えるのでしょうか。多くの人々が「昔はもっと良かった」と慨嘆するように、時代が進めば進むほど、悪化こそすれ、段々良くなってきていると言う人はほとんどいないように思われます。

地球のあちこちで今も悲惨な戦争が行われており、また犯罪が後を絶たないばかりか、ますます凶悪化して行き、テレビや新聞ではこれでもか、これでもかと言わんばかりに不幸な出来事が毎日報道されています。誰もがより良い時代が来ることを望み、その為に努力を惜しまないはずなのに、一体どうしたことなのでしょう。二千年前の主イエスの言葉は、実はそのまま私たちの現代にもあてはまるのです。

ここで「時代」と訳されているのは「世代」という言葉です。また「邪悪」と訳されている言葉は「腐っている」というのではなく、「労苦によって圧迫されている」という意味なのです。ですから、主イエスが言われたのは、「この時代に生きている人々の心は、様々な労苦に押しつぶされそうになって、病み苦しんでいる」という深い憐れみの言葉なのです。もし時代が悪いのなら、その時代に住む人々はすべて救いようがないことになります。しかし、主イエスが来られたのは、押しつぶされそうになりながら生きている人々に救いをもたらすためです。

人間を圧迫しているものは何なのでしょう。病気、貧困、圧制、争い、妬み、欲望…。その原因には数限りがありません。こうした状況の中で人々は主イエスに「しるし」つまり奇蹟を求めました。人の苦しみの原因に限りがないように、主イエスの元に「しるし」を求めてくる人々も後を絶ちませんでした。

このように「しるし」とは奇蹟を指しますが、それによって病気や苦しみから解放されたとしても、それは一時的なものです。やがてまた別な苦しみが襲ってきたとき、人々は更に奇蹟を求めます。「この時代はしるしを求める」と主イエスが言われたように、もっともっと、と人間はしるしを求めます。そこで主は言われました。

**「この時代は…しるしを求めるが、ヨナのしるしのほかには、
なんのしるしも与えられないであろう。というのは、二ネベ
の人々に対してヨナがしるしとなったように、人の子も
この時代に対してしるしとなるであろう。」**

「ヨナのしるし」とはヨナ書に書かれているように、海に投げ出された神の預言者ヨナが魚に飲み込まれ、三日三晩、魚の腹の中にいた後に生還したこと、神に逆らい続けたアッシリヤの首都二ネベに行き、神の言葉を伝えて悔改めに導き、その滅亡から救ったという故事をさしています。このことによって、主イエスは御自身の十字架の死と三日後の復活を予告し、癒しや悪霊追い出しは一時的な奇蹟にとどまるが、十字架と復活は罪からの根本的で永続的な解決となる奇蹟であるということを告げられたのです。

これこそ、主イエス・キリストが来られた最大の目的であり、神のしるしであるのに、人々は一時的で副次的な奇蹟だけを際限なく求めたのです。それほどに人々が日々の労苦に圧迫され悩み苦しんでいる様子を見て、主イエスは深い憐れみの言葉を発せられたのでした。そして、主がこれからエルサレムに行って受けようとしておられる苦難は、神話でも、人間の歴史でもなく、神が人間の歴史に介入して、私たちすべての根本問題である罪を贖うという主の御業なのです。

ところが、人々はこのことが分からず、十字架にかけられた主イエスに向かってなおも、「イスラエルの王キリスト、いま十字架からおりてみるがよい。それを見たら信じよう」としるしを求め続けたのです(マルコ15・32)。ここには、目に見えるものしか信じられないという人間の現実が描かれています。

しかし、私自身がそのような人間の一人であることを思い知らされたのは、献身してからのことでした。「十字架わがためなり！」と信じて受洗し、入学したはずの神学校でした。けれども神学のクラスで、十字架の贖いについて様々な学説があることを知り、しかもそれぞれの説には一長一短があって、未だ完全にキリストによる贖罪を解明できている説はないように思われました。すると、自分の救いはどのような十字架理解に立っているのだろうか、救いの確信がぐらつき始めたのです。学生仲間と議論し、教授の所に行き、質問もしたのですが、いくら説明を聞いても納得できません。

悩み続けて二年ほどたったある日、「自分は『～説』によって救われたのではなく、十字架と復活という歴史的事実によって救われたのだ」ということに、はたと気づかされたのです。私たちはもはや十字架と復活を眼前に見ることはできません。しかし聖書はそれが事実として起きたと記録しています。この贖いの御業は全能の神がなさったことであって、ちょうど三位一体論がそうであるように、有限な人間が完全に説明しつくすことのできるものではありません。イザヤ43・1に「**恐れるな、わたしはあなたをあげた。わたしはあなたの名を呼んだ、あなたはわたしのものだ**」とあります。救いは、贖いについての教理を完全に理解したかどうかではなく、主の宣言を信じるかどうかにかかっているのだということがはっきりとわかりました。

十字架の周りを取り囲んだ人々は「他人を救ったが、自分自身を救うことができない。イスラエルの王キリスト、いま十字架からおりてみるがよい。それを見たら信じよう」と罵(のの)しりました。しかし、

もしこのとき主イエスが自分自身を救ったら、贖いが私たち人間にもたらされることはなかったでしょう。実際に、復活の事実を見ても彼らの多くは主イエスを救い主と信じなかったのです。よみがえりの主イエスは弟子たちに言われました、「**見ないで信する者は、さいわいである**」(ヨハネ20・29)。

聖書は単なる神話でも歴史書でもありません。それは神様が大きい慈しみをもって人間のために為して下さった御業の記録です。しかし、それだけではなく、現代の私たちに、今も語りかけて下さっている神の言の書です。時を越えて私たちに語りかけ、導き、生かして下さる御言の書を味わうことこそ、一時的な奇蹟にまさる確かな祝福の源なのです。

31. 「光の中を生きる」 (ルカ11:33-36)

皆さんは真闇を体験したことがありますか？私たちの生活では、真夜中でもどこかに電気などの照明があるので、真闇を体験することは稀です。私はかつて大きな鍾乳洞へ行った際、案内の人が「それでは電気を消します」と言った時に体験しました。周りには他に大勢の人がいたにもかかわらず、まるで口から真っ黒な墨が流れ込むような思いがして、一瞬恐怖を覚えました。しかし、ようやく闇に目が慣れてきた頃に、案内人がライターをつけた時、その小さな光が真っ暗な鍾乳洞をどんなに明るくしたかを印象的に思い出します。主イエスは言われました。

**だれもあかりをともし、それを穴倉の中や枳の下に置く
ことはしない。むしろはいつて来る人たちに、そのあかりが
見えるように、燭台の上におく。** (ルカ11:33)

ライターひとつで明るくなるような闇であれば事は簡単なのですが、人生には真闇としか呼べないような時があるものです。右にも左にも、また進退も極まる時、私たちは主イエスが言われるように、きっと暗い目をしているのでしょ。

**あなたの目は、からだのあかりである。あなたの目が澄んでおれば、
全身も明るい、目がわるければ、からだも暗い。**

だから、あなたの内なる光が暗くならないように注意しなさい。 (ルカ11:34-35)

どうすれば光を得て、そのような暗闇から抜け出すことができるのでしょうか。

**イエスは、また人々に語ってこう言われた、「わたしは世の光である。
わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく命の光をもつであろう」。**

(ヨハネ8:12)

主イエスは御自身を世の光だと言われましたが、また別の箇所では次のようにも語っておられます。

あなたがたは、世の光である。山の上にある町は隠れることができない。

**また、あかりをつけて、それを枳の下におく者はいない。むしろ燭台の
上において、家の中のすべてのものを照らせるのである。**

**そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、
人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの
父をあがめるようにしなさい。** (マタイ5:14-16)

ヨハネ伝で主イエスはご自分が世の光だと言い、マタイ伝ではあなた方、つまり私たちが世の光だと言っておられます。これは矛盾しているのでしょうか？いいえ、そうではありません。それは世の光なる主イエスを見上げて歩むとき、私たち自身も光に照らされ、御言葉なるキリストの光を反映する者になるからです。そのように「みことばはわが足のともしび、わが路の光」(詩篇119:105)であって、私たちに希望と確信を与える力があります。このことを主イエスは次のように言われました。

**もし、あなたのからだ全体が明るくて、暗い部分が少しもなければ、
ちょうど、あかりが輝いてあなたを照す時のように、全身が明るく
なるであろう。** (ルカ11:36)

弟子ヨハネもその書簡の初めに、次のように証しています。

**わたしたちがイエスから聞いて、あなたがたに伝えるおとずれは、
こうである。神は光であって、神には少しの暗いところもない。**

神と交わりをしていると言いながら、もし、やみの中を歩いているなら、わたしたちは偽っているのであって、真理を行っているのではない。しかし、神が光の中にいますように、わたしたちも光の中を歩くならば、わたしたちは互に交わりをもち、そして、御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである。(1ヨハネ1:5-7)

聖書の言葉が私たちの歩むべき道を照らす光だということを様々な機会に体験してきましたが、以前(第3回「神の時が満ちる」)証した、開拓伝道に導かれた時もその一つでした。

1988年に神学校を卒業して、最初に私たち夫婦が赴任したのは鹿児島県の山村の教会でした。そこで一年間、休暇で米国に帰る宣教師のための留守番牧師として奉仕しました。やがて約束の一年が過ぎる頃、次にどこへ行くべきかを祈り求めていましたが、主は「私が…与える地に行きなさい」(ヨシュア1:2)との御言葉をもって押し出して下さいました。

荷物は「後で住所が決まったらお知らせします」と言って宅配便取次店をしていた大家さんに預け、私たちは行き先を知らずに旅立ったアブラハムのような思いで、自動車に枕と毛布を二つ積んで出発し、ひとまず私の母教会がある宮城県仙台市を目指しました。

一週間後、母教会に着くと、玄関に貼り紙がしてあり、その二週間前に閉鎖・売却されていたことを知りました。どうしたらよいか分からず、その晩ホテルに泊まって、夜のディボーションで聖書を開くと、丁度その日の通読箇所、「さてエリコは、…かたく閉ざして、出入りするものがなかった」(ヨシュア6:1)という御言がありました。昼に見た出来事との余りの符合に驚き、心震える思いで読み進めると、「あなたがた、いくさびとはみな、町を巡って、町の周囲を一度回らなければならない」(6:3)という御言がありました。

翌日、御言通りに母教会の周辺を自動車でも回り、ようやく見つけた不動産屋に飛び込んだところ、集会を始めるのにうってつけの借家を紹介してもらうことが出来ました。ただし、不動産屋の担当者から「借家を教会に使うということは大家さんには話さない方がいいですよ。宗教目的というのはどの大家さんも一番嫌うことですからね」と言い含められて大家さんと面談しました。

話している内に、大家さんの出身地が私の故郷に近いということが分かって、すっかり意気投合してしまい、問われるままに「いずれ家庭集会のような形ででも礼拝をしたいと思っています」と答えました。すると、大家さんは「礼拝？それはいいことです。是非やって下さい。」と言われたのです。そのことを不動産屋さんに話すと、「あなた方には天使がついていますね」と言われました。

このように、神の言が私たちの道を照らすともしびであり、その光に照らし出された道を歩むとき、私たちもキリストの光を反映する者となるということを身をもって知りました。その時々にも最もふさわしい御言を以て導いて下さる主が共におられることを体験しつつ、私たちの開拓伝道が始まったのでした。

しかし、御言の光は時には厳しい警告となるときもあります。それは、祝福で始まった開拓伝道開始直後のことです。借りた家の周りを見回すと、近くに大きな団地が広がっています。さっそく集会案内トラクトを作り、配布し終えてから、その日のディボーション箇所を開くと、そこにあったのは「**あなたは愚かなことをした**」(サムエル上13:13)という衝撃的な御言葉でした。恐る恐るその先を読むと、

**「あなたは、あなたの神、主の命じられた命令を
守らなかった。もし守ったならば、主は今あなたの
王国を長くイスラエルの上に確保されたであろう」**

と書かれているではありませんか。「一体どんな愚かなことをしたんだろう…」と必死になって考えました。すると、トラクトを作る時も、配布する時も、まったく祈っていなかったことに思い当たりました。主が祝福をもって始められた伝道を、自分たちの人間的な力で成そうとしていたのです。背筋が凍るような思いになって、必死に悔い改めの祈りを捧げました。祈りの中ではっきり分かったことは、伝道は人間の業ではなく主の業なのだ、ということであり、このことを開拓冒頭ではっきりと示されたことは大きな教訓でした。

幸いなことに、あの時から伝道は祝福の内に続けることが許され、現在に至っています。たとえどんなに伝道が愛に根ざしていたとしても、それが主の業であることを忘れるなら、恣意的な自己実現の力業になってしまうでしょう。御旨を尋ね求めつつ、御言葉に聴き従うことの大切さを銘記させられた出来事でした。ヨハネは次のように記しています。

**もし、罪がないと言うなら、それは自分を欺くことであって、
真理はわたしたちのうちにない。もし、わたしたちが自分の
罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、
その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて
下さる。もし、罪を犯したことがないと言うなら、それは神を
偽り者とするのであって、神の言はわたしたちのうちにない。(1ヨハネ1:8-10)**

聖書は私たちを為すべきこと、歩むべき道に導く神の言葉です。イザヤが次のように言っている通りです。

**また、あなたが右に行き、あるいは左に行く時、そのうしろで
「これは道だ、これに歩め」と言う言葉を耳に聞く。(イザヤ30:21)**

日々聖書を読み、御言の導きを豊かにいただきつつ、感謝と讃美をもって光の中を歩み続ける者でありたいと思います。

32. 「生きた信仰」 (ルカ11:37-54)

今回の聖書箇所のはじめであるルカ11章37節には次のように書かれています。

イエスが語っておられた時、あるパリサイ人が、自分の家で食事をしていただきたいと申し出たので、はいつて食卓につかれた。

ところで、ルカ7章36節以下の「ナルドの香油注ぎ」の記事も次のように始まっていました。

あるパリサイ人がイエスに、食事を共にしたいと申し出たのでそのパリサイ人の家に入って食卓に着かれた。

事の始まりは同じです。「ナルドの香油」の場合、食事に招待したパリサイ人シモンは主イエス一行となごやかな食事を楽しんだということ、私たちは第16回「安心して行きなさい」のところで見ました。ところが今回のパリサイ人は、以下に見ますが、主イエスに激しく糾弾されているのです。

このように、同じことをしても一方は褒められ、他方は叱られるということが、往々にしてあります。日本の民話にもそのようなものがありますね。「舌切り雀」、「花咲爺さん」、それから「こぶとり爺さん」。(知り合いに『こぶとり爺さん』って何だっけ?と聞いたところ、「それはね、チョット太ったお爺さんのことだよ。小太り爺さん!」と教えられました…チガウ!)

それはともかく、これらの民話は教訓として「正直者は報われる」と教えることにありますが、主イエスも今回そのようなことを意図しているのでしょうか? いいえ、そうではなく、ここで私たちは「生きた信仰・死んだ信仰」ということを学ぶことができると思うのです。それでは、事の起こりを見てください。

ところが、食前にまず洗うことをなさらなかったのを見て、そのパリサイ人が不思議に思った。そこで主は彼に言われた、「いったい、あなたがたパリサイ人は杯や盆の外側をきよめるが、あなたがたの内側は貪欲と邪悪とで満ちている。愚かな者たちよ、外側を造ったかたは、また内側も造られたではないか。ただ、内側にあるものをきよめなさい。そうすれば、一切があなた方にとって、清いものとなる。」(ルカ11:38-41)

この時パリサイ人は「食前にまず洗うことをなさらなかったのを見て、不思議に思った」だけなのに、主イエスはいきなり、ものすごい剣幕で語り出されたのです。ここで「洗う」というのは、私達が食事前に手を洗うような簡単なものではなく、入念な清めの洗浄でした。このことがマルコ7:3-5には次のように書かれています。

もともと、パリサイ人をはじめユダヤ人はみな、昔の人の言伝えをかたく守って、念入りに手を洗ってからでないと、食事をしない。また市場から帰ったときには、身を清めてからでないと、食事をせず、なおそのほかにも、杯、鉢、銅器を洗うことなど、昔から受けついでかたく守っている事が、たくさんあった。そこで、パリサイ人と律法学者たちとは、イエスに尋ねた、「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人の言伝えに従って歩まないで不浄な手でパンを食べるのですか」。

洗淨用の水を用意していたパリサイ人は、主イエス一行がこうした当時の習慣を守らないのを見て侮蔑した様子^{ふべつ}がうかがわれます。それに対して主イエスは激しい語調で反論されたのです。叱責は更に続きます。

しかし、あなた方パリサイ人は、わざわざいである。はっか、うん香あらゆる野菜などの十分の一を宮に納めておりながら、義と神に対する愛とをなおざりにしている。それもなおざりにはできないがこれは行わねばならない。あなたがたパリサイ人は、わざわざいである。会堂の上席や広場での敬礼を好んでいる。あなたがたは、わざわざいである。人目につかない墓のようなものである。その上を歩いても人々は気づかないでいる」(ルカ11:42-44)

とうとう、その場に居合わせた律法学者が怒り出しました。

「先生、そんなことを言われるのは、わたしたちまでも侮辱することです」

(ルカ11:45)

この箇所を、ある人は「そんなことを言うのは、私たちに喧嘩を売っていることになりすぞ」と訳しています。たしかに主イエスの態度は喧嘩腰です。そして、その律法学者に対しても主イエスは激しい語調で語るのです。

「あなたがた律法学者も、わざわざいである。負い切れない重荷を人に負わせながら、自分ではその荷に指一本でも触れようとしない。あなたがたは、わざわざいである。預言者たちの碑を建てるが、しかし彼らを殺したのは、あなたがたの先祖であったのだ。だから、あなたがたは、自分の先祖のしわざに同意する証人なのだ。先祖が彼らを殺し、あなたがたがその碑を建てるのだから。」 (ルカ11:46-48)

いつもの穏やかな主イエスはどこに行ったのだろうかと思うほどの激しさです。一体、何が起きたのでしょうか？実は、主イエスがここで糾弾している事柄はすべて、その当時のパリサイ人や律法学者が実際に行っていたことなのです。主の糾弾は彼らにとどめを刺します。

「それゆえに、『神の知恵』も言っている、『わたしは預言者と使徒とを彼らにつかわすが、彼らはそのうちのある者を殺したり、迫害したりするであろう』。それで、アベルの血から祭壇と神殿との間で殺されたザカリヤの血に至るまで、世の初めから流されてきたすべての預言者の血について、この時代がその責任を問われる。そうだ、あなたがたに言っておく、この時代がその責任を問われるであろう。あなたがた律法学者は、わざわざいである。知識のかぎを取りあげて、自分がいらないばかりか、はいろいろとする人たちを妨げてきた」。 (ルカ11:49-52)

次に書かれているパリサイ人・律法学者の行動を、皆さんはどのように見るでしょうか？主イエスが喧嘩を売った結果だと思えますか？それとも、以前から目論んでいた彼らの悪企みが一層拍車を掛けられて具体化していったものだと思いますか？

イエスがそこを出て行かれると、律法学者やパリサイ人は、激しく詰め寄り、いろいろな事を問いかけて、イエスの口から何か言いがかりを得ようと、狙いはじめた。(ルカ11:53-54)

自分の罪をあばかれて喜ぶ人はいません。そして反省したり、悔い改めたりする代わりに、「恥をかかされた」と言って、むしろ暴露した人を憎悪し、亡き者にしようとするのが人の常です。律法学者・パリサイ人はまさしくその道をまっしぐらに突き進んでいったのです。

私はこれまで、主イエスは糾弾調で激しく叱責したと表現してきましたが、実はここで繰り返されている「わざわいである」は、新約聖書が書かれたギリシャ語では「ウーエイ」という言葉です。辞典には次のように説明されています。

「ウーエイ」(間投詞) 悲嘆、悲痛を表わす「ウェッ！」何と
悲しいことか、悲しいことよ(「あなたたちのことを考えると、
私の胸は張り裂ける！」の意味。「禍あれ」ではない)

(織田昭著「ギリシア語小辞典」)

主イエスは彼らを糾弾しながらも、「あなたたちのことを考えると、私の胸は張り裂ける！」と悲嘆しつつ悔い改めを迫っていたのです。しかしそれは、当時、既にこの世的な権勢と名誉を得ていた律法学者・パリサイ人には到底受け容れることの出来るものではありませんでした。彼らはイエスという方の存在そのものを喜ぶことができなかつたのです。

但し、全ての律法学者・パリサイ人がそうだったわけではありません。ルカ伝第7章に書かれている重い皮膚病を癒されて、感謝と喜びをもって主イエスを食事に招待したパリサイ人シモンに対して、主イエスは機知とユーモアをもって次のように言われたことを私たちは前に見ました。

**それから女の方に振り向いて、シモンに言われた、
「この女を見ないか。わたしがあなたの家にはいつてきた時に、
あなたは足を洗う水をくれなかった。ところが、この女は涙で
わたしの足をぬらし、髪の毛でふいてくれた。あなたはわたしに
接吻をしてくれなかったが、彼女はわたしが家にはいつた時から、
わたしの足に接吻をしてやまなかった。あなたはわたしの頭に油を塗って
くれなかったが、彼女はわたしの足に香油を塗ってくれた。(ルカ7・44-46)**

このシモンの場合は、主を喜ぶあまり、浄めの水を用意し忘れただけでなく、歓迎する主人として当然為すべき来客の頬への接吻も、頭への塗油も忘れてしまったのです。しかし、主イエスにとって、ご自分の来訪を喜こんでくれることの方が何よりの歓迎だったのです。

これに対して、今回のパリサイ人は浄めの水のみならず、万端の用意を整えて主とその一行を招待したのですが、それは何とか訴える口実を見つけようとの意図から仕掛けた罠だったのです。主イエスはそれを直ちに見破って、あの悲嘆に満ちた激しい言葉となったのです。

一方は万事をそつなく整えたものの、心の伴わない招待であり、他方は不手際だらけであつたけれども、主を迎える真の喜びから出た招待でした。

同様の事は信仰にも言えます。私たちの信仰生活は形式的・儀式的になってはいないでしょうか。心から主を喜ぶ祈りや礼拝を、主ご自身も喜ばれるのです。喜びは主の御言葉を心を含めて聞くことから来ます。ネヘミヤは「主を喜ぶことはあなたがたの力です」と言いました。その時の聖書の言葉をもって結びとします。

**総督であるネヘミヤと、祭司であり、学者であるエズラと、
民を教えるレビびとたちはすべての民に向かって「この日は**

あなたがたの神、主の聖なる日です。嘆いたり、泣いたりしてはならない」と言った。すべての民が律法のことを聞いて泣いたからである。そして彼らに言った、「あなたがたは去って、肥えたものを食べ、甘いものを飲みなさい。その備えのないものには分けてやりなさい。この日はわれわれの主の聖なる日です。憂えてはならない。主を喜ぶことはあなたがたの力です」。レビびともまたすべての民を静めて、「泣くことをやめなさい。この日は聖なる日です。憂えてはならない」と言った。すべての民は去って食べ飲みし、また分け与えて、大いに喜んだ。これは彼らが読み聞かされた言葉を悟ったからである。（ネヘミヤ8・9-12）

33. 「パリサイ人のパン種」 (ルカ12・1-10)

ゴールデン・ウィークに、渋滞中の高速道路が空から映し出されることがあり、まるで日本人が民族大移動をしているような印象を受けます。このような大移動を伴う日本の三大行事と言えば、皆さんは他に何を挙げますか？「盆暮れ」と言いますから、八月のお盆とクリスマスから年末年始にかけての時期でしょうか。

実はイスラエルにも、「成年男子は皆エルサレムに集うこと」とされて大移動を伴うお祭が年三回ありました。第一は三月から四月にかけて持たれる「過越すぎこしの祭」(ペサハ)、第二は九月から十月にかけて行われる「新年祭」(ローシュ・ハ・シャナ)、第三は新年祭に続いて行われる「大贖罪日だいじよくさいひ」(ヨム・キプール)でした。そしてイエス一行は今、第一の、しかし三年の公生涯で最後の「過越祭」のためにエルサレム途上にあるのです。主イエスのいる所にはいつも人々が集まって来ましたが、そのような時のことです。

**おびたしい群衆が、互に踏み合うほどに群がってきたが、
イエスはまず弟子たちに語りはじめられた、**

「パリサイ人のパン種、すなわち彼らの偽善に気をつけなさい。(ルカ12・1)

「パリサイ人のパン種」とは不思議な表現で、私たちには分かりにくいのですが、当時の人々にはすぐにピンと来た表現だったはず。なぜなら、近づいている「過越祭」には「パン種」と呼ばれる「パン酵母」が深く関係しているからです。過越祭については既に第4回「神の子の平安」(ルカ2・40-52)で見ましたが、それはこのような祭でした。

ヘブル語でペサハと呼ばれる「過越祭」はユダヤ暦のニサンの月(太陽暦の三月から四月にまたがる月)の十日に準備が始まり、先祖がエジプトから解放されたことを記念する春の祭です。紀元前1450年頃、神様がイスラエル人をエジプトでの奴隷状態から解放するとき、エジプト王にその許可を要求して十の災害を送りました。その十番目の災害は死の使いがエジプト中の長子を撃つというものでしたが、玄関の鴨居に子羊の血を塗ったイスラエル人の家だけは、「死の御使いが過ぎ越した」ということに由来します。

さて「パン種」ですが、この「過越祭」の前には、準備として「除酵祭じよこうさい」が行われます。除酵祭とは、出エジプト時に急いで荒野に出発しなければならなかったため、食料のパンに酵母(=イースト菌、「パン種」)を入れなかったことを記念する祭です。それは発酵による腐敗を避ける意味もありました。パン種はマツァあるいはモチと呼ばれます。(日本のモチにも酵母が入っていないのに、熱を加えると膨らむ食べ物なのは興味深いことです。)これを記念する除酵祭は家中の酵母を探し出して取り除く行事なのです。実は、あらかじめ親がわざとパン切れなどを家のどこかに隠しておき、子供たちも総出で大騒ぎをしながら探しつつ、家中の大掃除もしてしまうという一石二鳥の家族行事なのです。そして見つけると「マツァ！」と叫ぶので、マツァは「見つける」という動詞としても使われています。

このような歴史的背景をもった伝統的行事なので、「パリサイ人のパン種に気をつけなさい」と主イエスが言われたとき、人々は《膨れあがるほどに中味を空っぽにし、人間を腐敗させる偽善に気をつけよ》という主イエスの意図がピンと来たはず。す。

このように、主イエスは「偽善」の譬えとして「パン種」と言われたのですが、それでは「偽善」とは
どういうことでしょうか？「偽善」とは新約聖書で「仮面」を意味する言葉が使われています。日本に
も「お面」を使う「能」があるように、古代の西洋にも仮面劇がありました。続けて語られた主の言葉
に聴きましょう。

**おおいかぶされたもので、現れてこないものはなく、
隠れているもので、知られてこないものはない。だから、
あなたがたが暗やみで言ったことは、なんでもみな明るみで
聞かれ、密室で耳にささやいたことは、屋根の上で言い
ひろめられるであろう。（ルカ12・2-3）**

「顔で笑って、心で泣く」という表現があるように、仮面の陰で表面とは裏腹の心を抱くこと、特に、
うわべを飾って心や行いが正しいように見せかけることを主イエスも「偽善」と言って戒めておられる
ことがわかります。では、これによって主イエスは何を伝えたいのでしょうか？

**そこでわたしの友であるあなたがたに言うが、
からだを殺してもそのあとで、それ以上なにも
できない者どもを恐れるな。
恐るべき者がだれであるか、教えてあげよう。
殺したあとで、更に地獄に投げ込む権威の
あるかたを恐れなさい。そうだ、あなたがたに
言うておくが、そのかたを恐れなさい。（ルカ12・4-5）**

このように、どんなに自分では隠したつもりでも、主なる神は一切をご存知であり、隠れて悪いこ
とをしたり企んだり、あるいは他人の悪口を言ったりしても、それらは除酵祭のときのパン種のように
すべて見つけ出されるのだから、一切の悪から遠ざかり、主なる神を恐れなさいとの教えなのです。

但し「主なる神を恐れなさい」というのは、ガタガタ恐れていつもパニックになっていなさいという意
味でないことは明かです。では私たちに数えきれないほどの恵みを下さる神様を恐れなさいとは一
体どういうことなのでしょう？

この教えは私にはとても身近なこととして理解できます。というのは、私は信仰を持つ前から今に
至るまで長年、市内の燃料会社で働いてきましたが、そこで取り扱いに専従している危険なLPガ
スの事を考えると、主イエスの教えがよく理解できるのです。LPガスは私たちの生活にとっても有用
なものです。食べ物を煮炊きする火になったり、寒いときには暖房用の燃料になったりするほか、自
動車燃料として動力源になるばかりか、さらに冷媒としてクーラーに用いることさえできるのです。
身近には着火用のライターに入っている透明の液体という形で見るすることができます。液体になっ
ているのはそのほうが、体積を小さくすることが出来て便利だからです。LPガスは液体のままでは燃
えませんが、使うときに気体のガスにし、空気に微量を混ぜてはじめて燃えるようになるのです。

このようにLPガスは非常に有用なものですが、ガソリンなどの「危険物」よりも更に取り扱いに注
意を要する「爆発物」に指定されています。それなら毎日私は会社で恐れてパニックになっている
のかというと、そんなことはありません。安全第一でキッチンと仕事をしていれば、その恩恵をフルに受
けることが出来るのです。ちょうどそのように、私たちに大きな恩恵をもたらすものでありながら、同
時に恐れるべき方が神様であることを、主イエスは次のように言われました。

五羽のすずめは二アサリオンで売られているではないか。
しかも、その一羽も神のみまえで忘れられてはいない。
その上、あなたがたの頭の毛までも、みな数えられている。
恐れることはない。あなたがたは多くのすずめよりも、
まさった者である。

そこで、あなたがたに言う。だれでも人の前でわたしを
受けいれる者を、人の子も神の使たちの前で受けいれるで
あろう。しかし、人の前でわたしを拒む者は、神の使たちの
前で拒まれるであろう。また、人の子に言い逆らう者は、
ゆるされるであろうが、聖霊をけがす者は、ゆるされることはない。(ルカ12・6-10)

同様のことは、火、水、自動車、火薬、原子力など様々なものについても言うことができます。侮つたり、ぞんざいにすることは大きな災いをもたらすだけなのです。むしろ、偽善や怠慢に生きるのではなく、恵みに富たもう父なる神に感謝しつつ、すべてをお見通しである主を覚えて、誠実に歩む者でありたいと思います。

34. 「本当の富」 (ルカ12・13-34)

昔の流行歌に、『傘がない』(作詞作曲・井上揚水)があります。その歌詞の一番は次のようなものでした。

都会では自殺する若者が増えている
今朝きた新聞の片隅に書いていた
だけでも問題は今日の雨 傘がない
行かなくちゃ 君に会いに行かなくちゃ
君の町に行かなくちゃ 雨に濡れ
冷たい雨が今日は心にしみる
君のこと以外は考えられなくなる
それはいいことだろう

これは時代の利己的風潮を表しているのか、それとも批判をも想定した逆説的警世の歌なのかなどと、当時も論議を呼びましたが、むしろ今でも同様のことが言えるのではないのでしょうか。なぜなら、私たちの日常は自分のことで精一杯ということが多いからです。しかし主イエスは弟子たちに言われました。

「それだから、あなたがたに言うておく。何を食べようかと命の
ことで思いわずらい、何を着ようかと、からだのことで思い
わずらうな。命は食物にまさり、からだは着物にまさっている。」(ルカ12・22)

そして、その趣旨をカラスと野の草花を譬えにとって、次のように語られるのです。

からすのことを考えて見よ。まくことも、刈ることもせず、また、
納屋もなく倉もない。それなのに、神は彼らを養っていて下さる。
あなたがたは鳥よりも、はるかにすぐれているではないか。

あなたがたのうち、だれが思いわずらったからとて、自分の
寿命をわずかでも延ばすことができようか。そんな小さな事さえ
できないのに、どうしてほかのことを思いわずらうのか。

野の花のことを考えて見るがよい。紡ぎもせず、織りもしない。

しかし、あなたがたに言うが、栄華をきわめた時のソロモン
でさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。
きょうは野にあって、あすは炉に投げ入れられる草でさえ、
神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上
よくして下さらないはずがあろうか。ああ、信仰の薄い者たちよ。
あなたがたも、何を食べ、何を飲もうかと、あくせくするな、また気を使うな。

(ルカ12・24-29)

この譬えの始めには「それだから」(22節)とありますが、どのような場面で語り出されたのかというと、群衆の中のひとりが主イエスに、「先生、わたしの兄弟に、遺産を分けてくれるようにおっしゃってください」(ルカ12・13)と言ったことに始まります。この要望に対して主イエスは次のように答えられました。

彼に言われた、「人よ、だれがわたしをあなたがたの裁判人
または分配人に立てたのか」。それから人々にむかって言われた、

「あらゆる貪欲に対してよくよく警戒しなさい。たといたくさんの物を持っていても、人のいのちは、持ち物にはよらないのである」。(ルカ12・14、15)

欲深でぶしつけな遺産相続人に憤慨して主イエスが次の譬えを語ったのかというと、当時の習慣から言えば、そうではなかったようです。なぜなら、当時ラビと呼ばれた律法学者は、巡回裁判人の役目も果たしていたので、主イエスをラビだと思った人が家族の困り事を相談したということのようです。そして主はこの機会を用いて、天の父なる神の下さる「本当の富」について、次のような譬えをもって語られました。

**「ある金持の畑が豊作であった。そこで彼は心の中で、
『(私は) どうしようか、私の作物をしまっておく所がないのだが』**と思いめぐらして言った、
『(私は) こうしよう。私の倉を取りこわし、もっと
大きいのを建てて、そこに(私の) 穀物や(私の) 食糧を
全部しまい込もう。そして私の魂に言おう。たましいよ、
おまえには長年分の食糧がたくさんたくわえてある。
さあ安心せよ、食べ、飲め、楽しめ』。

**すると神が彼に言われた、『愚かな者よ、あなたの魂は
今夜のうちにも取り去られるであろう。そしたら、あなたが
用意した物は、だれのものになるのか』。自分のために
宝を積んで神に対して富まない者は、これと同じである」**(ルカ12・16-21)

ここで(私は)とか(私の)と括弧書きで補ったのは、原文にはあるものの、和訳の際に煩瑣を避けて訳出されなかったからで、この箇所には「私」が合計七回も出てきます。譬えを通して主イエスが示していることは、自分のことだけしか考えない金持ち農夫の愚かなエゴイズムなのです。ギリシャ語で「私」は「エゴ」という単語ですから、エゴイズムは「利己主義」を意味する言葉になりました。

このような状況で、22節の言葉、「**それだから、あなたがたに言うておく。何を食べようかと、命のことで思いわずらい、何を着ようかとからだのことで思いわずらうな。命は食物にまさり、からだは着物にまさっている**」と語られたのです。誰も「私が、私の、私だけを」との偏狭なエゴイズムに生きたいとは思っていないはずですが、「自分のために宝を積んで神に対して富まない者」という主の言葉が胸に刺さるのを覚えるのは私だけではないと思います。一体どのように生きることが「神に対して富む者」となることなのでしょうか？

これは言い換えれば「本物の富とは何か？それはどこにあるのか？」ということです。多くのクリスチャンは「本物の富は天にあって、それは主なる主イエスです」と答えるでしょう。確かに、その答は信仰的であり、教理的にも間違いではありませんが、それはここで主イエスが意味しているおられることとは違うと思うのです。なぜなら、この答には「(私の) 本物の富は天にあって…」というように、(私の)が隠れており、やはりエゴイズムから抜け出ていないからです。主イエスがここで私たちに求めておられるのは、視点の一八〇度の変更です。つまり《あなたの》富というよりも、《主なる神の》富は何か？ということにあると思うのです。主なる神の富は、実は、私たち自身なのです。

こんなことがありました。教会の隣りに幼稚園がありますが、あるとき運動会で祝辞を頼まれたことがありました。開会式で紹介があって私が話し始めたのですが、子供たちは落ち着いて聞いている様子がなく、その目はキョロキョロと周りを見回しています。お父さんやお母さんが来ているかどうか気になってしかたがないのです。そしてその姿を見つけると安心したようにニコニコしていました。

やがてかけっこが始まりました。親たちはデジカメやムービーカメラを持って、自分の子供の姿だけを追いかけて写しています。私はその様子を見て神様と私たちの関係を見るように思いました。親にとって子供はこの上ない宝です。しかし、それ以上に父なる神様は私たちを宝として愛して下さって、その家族に迎えるために私たちの罪の身代わりとして主イエスを送って下さったのです。それはイザヤ書43章4節にもこう書かれている通りです。

**あなたはわが目に尊く、重んぜられるもの、わたしはあなたを愛するがゆえに、
あなたの代りに人を与え、あなたの命の代りに民を与える。**（イザヤ43・4）

このように主なる神が私たちが御自身の富として下さっているのですから、その富を宝のように大切にしてくださいということの主イエスは言うておられるのです。視点が「私が」から「主が」に変わるとき、次の主の言葉に溢れている愛と慈しみが見えて来るのではないのでしょうか。

**きょうは野にあつて、あすは炉に投げ入れられる草でさえ、
神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上
よくして下さらないはずがあろうか。ああ、信仰の薄い者たちよ。
あなたがたも、何を食べ、何を飲もうかと、あくせくするな、また
気を使うな。これらのものは皆、この世の異邦人が切に求めているものである。あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに
必要であることを、ご存じである。
ただ、御国を求めなさい。そうすれば、これらのものは添えて与えられるであろう。恐れるな、小さい群れよ。御国を下さることは、
あなたがたの父のみこころなのである。自分の持ち物を売って、
施しなさい。自分のために古びることのない財布をつくり、
盗人も近寄らず、虫も食い破らない天に、尽きることのない宝を
たくわえなさい。あなたがたの宝のある所には、心もあるからである。**

（ルカ12・28-34）

35. 「平安の基い」 (ルカ 12・35-59)

平和を意味する日本語には「平和」「和平」「平安」「平穩」と、いろいろありますが、それぞれはどのように意味が異なっているのでしょうか？ 国語辞典で調べてみました。

「平和」: 戦争や災害などが無く、不安を感じずに生活できる状態。

「和平」: 国家間の紛争状態が終わり、平和を取り戻すこと。

「平安」: 心配・もめごとなどが無く、なごやかな状態。

「平穩」: 日常の生活を乱していた事が収まり、穏かに毎日が経過する様子。

こうしてみると、「平和」と「和平」は国家間の戦争や紛争などが無いことを表し、「平安」と「平穩」は私たちの心の状態が和やかであることを表していることが分かりますが、旧約聖書が書かれたヘブル語ではこれら全部の意味を「シャローム」の一語で表します。さらに「シャローム」は挨拶の言葉でもあり、会う時にも別れる時にも「シャローム」(あなたに平安がありますように)と相手に呼び掛けるのです。肥沃なメソポタミアとエジプトに挟まれ、常に係争の地だったイスラエルであればこそ、平和を願うこの挨拶が交わされて来たのでしょうか。

主イエスが最後の晩餐の席で語られた言葉に次のようなものがあります。

「私は平安をあなたがたに残して行く。私の平安をあなた方に与える。

わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。

あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな。」(ヨハネ14・27)

信仰を持つ前と後で何が変わったかと言えば、私の場合、主から戴くこの「平安」だと思います。それは決して、病気になるいとか、困難に遭わないいとか、悩んだり苦しんだりすることがないという意味ではありません。たとえそれらに遭遇することがあっても、主が守り導いてくださるという平安が信仰経験を伴って与えられているということなのです。

ところが、51 節以下にはこれと矛盾するような主イエスの言葉が書かれています。

「あなたがたは、わたしが平和をこの地上にもたらすためにきたと

思っているのか。あなたがたに言うておく。そうではない。

むしろ分裂である。

というのは、今から後は、一家の内五人が相分れて三人はふたりに、

ふたりは三人に対立し、また父は子に子は父に、母は娘に、娘は母に、

しゅうとめは嫁に、嫁はしゅうとめに、対立するであろう」。(ルカ12・51-53)

この正反対に見える言葉を一体どう受けとめたらよいのでしょうか。主の言葉を正しく理解するためには、当時の人々がどのようなキリスト(ヘブル語でメシヤ)観を持っていたのかを知る必要があります。イザヤ書の中に次のようなメシヤ預言がありますが、これはクリスマスに教会でよく読まれる御言でもあります。

ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、ひとりの男の子が

われわれに与えられた。まつりごとはその肩にあり、その名は、

「靈妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君」ととなえられる。

そのまつりごとと平和とは、増し加わって限りなく、ダビテの位に座して、

**その国を治め、今より後、とこしえに公平と正義とをもってこれを立て、
これを保たれる。万軍の主の熱心がこれをなされるのである。(イザヤ9・6、7)**

このように、キリストは第一に、平和をもって治める王として来られるということが預言されているのですが、第二にこれと矛盾するようなことがミカ書に書かれています。

**むすこは父をいやしめ、娘はその母にそむき、嫁はそのしゅうとめにそむく。
人の敵はその家の者である。(ミカ7・6)**

この預言は上記の主イエスの言葉と同じであり、私たちを戸惑わせます。その本当の意味を理解するために、この時の状況を考えてみましょう。十字架はもう間近に迫っているのですが、主イエスが救い主・キリストだということを理解している人は側近の弟子たちも含めて誰もいませんでした。もちろんペテロの信仰告白もあつたくらいですから、彼らも言葉の上では知っていましたが、主の十字架と復活を経験するまで、キリストの受難という大工事なしに、私たちに真の平和・平安がもたらされることがないことを知らなかったのです。

このことは家の建て替えに譬えて言うことが出来るのではないのでしょうか。何十年も住んだ家を建て替えたいという時に、もし長年の重みや地震などでガタガタになった土台をそのままに使う、うわものだけを建て替えたらどうなるのでしょうか？ せっかくりフォームした新しい家は、遅かれ早かれ土台から壊れてしまうことでしょう。

救われて信仰によって生きることは単なるリフォームではなく、「新生」と呼ばれますが、この新生のために私も大工事を受けたことがあります。

主イエスを救い主・キリストと信じて洗礼を受けた後に、神学校で学びたいとの思いが湧き起こってきた時、私の最大の問題はお金と語学力でした。宵越しの金は持たないとばかりに、入社以来、給料は全部使い切る生活を続けて来たので貯蓄が全くなく、しかも奨められたのはアメリカの神学校だったからです。牧師に相談すると、「これは主のご用ですから、主が備えて下さいます。祈りましょう。」と言われました。

ともかく、神学校に翌年入学する予定であることを会社に伝えたところ、「どうしても行くのと言うのなら、替わりの人を採用するので、訓練し引き継ぎをして行ってほしい」とのことでした。やがて、予定の時までにボーナスや退職金などが残り、また親や兄弟たちに計画を知らせると御祝いも届き、勉強に必要な資金が手元に集まりました。

「神様スゴイ！」と思った矢先、書類不備で留学はどうしても、もう一年延期せざるを得なくなりました。会社に相談したところ、「予算がない。申し訳ないがアルバイトとしてなら働いてもらえる。」と言われました。事業所の責任者をして自分がアルバイト…。しかも一年後確実に神学校に行けるという保証はない。「神様、これはあんまりです」とひどく落ち込みました。それからの一年間、牧師の元で語学を必死に学びました。悔しさや不安がこみ上げてくるたびに、それを振り払うため懸命に英語・ギリシャ語・ヘブル語の単語や活用の暗記につとめました。

翌年、待ちに待っていた入学許可とビザが届き、折しも襲来していた台風の中でしたが、大きな平安と感謝をもって成田から出発することができました。もし、主からの思い切った工事を受けなかったら、私は何とか現状維持のままで行こうとしたはずですが、あの時のことを思い出すたびに、主が必要なこととして、愛をもって為して下さった大工事だったのだなぁと思うのです。

本当の平和は人と人との間の和平工作からは来ません。なぜなら罪人同士の平和は常に一時的なものであり、本当の平安は罪の問題が解決されない限り得られないものだからです。この罪の問題は、人と神との間にある隔ての中垣であって、神との和解があつてこそ、本当のシャロームが与えられるのです。人間は自分で罪を償いきれるものではありません。主イエスが十字架の上にご自分の命を投げ出して私たちの受けるべき罰を身代わりに受けて償ってくださったことによつてのみ、罪の根本的解決を戴き、神様からの真の平和と平安が与えられるのです。

36. 「実を結ぶ神の木」 (ルカ13・1-21)

私の妻は地方紙に時々投稿することがあり、「実らないリンゴの木」と題する次の文はその一つです。

「実らないリンゴの木」

六年ほど前に、ホームセンターで富士と津軽のリンゴの苗木を買いました。夢は我が家の庭で収穫したリンゴでアップルパイを作ることでした。リンゴ大好き家族なのです。二、三年は花も咲かず実もつけないことに何とも思っていませんでした。

その後も木はずいぶん大きくなり、葉は茂るのですが全く花が咲きません。花が咲かないので、実のなるはずがありません。今年も私たちの期待はおおきく裏切られ、一つの花も咲いていません。

聖書に、三年のあいだ実をつけないイチジクの木を、農園の主人が園丁に「もう切り倒せ」と言ったという話があります。園丁は「今年もこのままにしておいてください、肥料をやってみますから。そうすれば来年実がなるかもしれません。もしそれでもだめでしたら、切り倒してください」とお願いしました。私たちももう一年、もう一年と、リンゴの木が実をつけるまで何年も待とうと思います。

我が家の実らないリンゴの木を通して、学ぶことも多くあります。私の毎日は失敗も多く、落ち込んだり喜んだり、決して実を結んでいる生活とは言えません。でもリンゴの木の実がなることを願っている思いと同じように、多くの人たちの愛とゆるしによって今の自分があることを感謝しています。来年リンゴの実がなることを願いつつ。

ここで引用されていたのが今回の聖書箇所ルカ13・6-9です。

ある人が自分のぶどう園にいちじくの木を植えて置いたので、実を捜しにきたが見つからなかった。そこで園丁に言った、「わたしは三年間も実を求めて、このいちじくの木のところに来たのだが、いまだに見あたらない。その木を切り倒してしまえ。なんのために、土地をむだにふさがせて置くのか」。

すると園丁は答えて言った、「ご主人様、ことしも、そのままに置いてください。そのまわりを掘って肥料をやってみますから。それで来年実がなりましたら結構です。もしそれでもだめでしたら、切り倒してください。」

「桃栗三年、柿八年」と言いますが、ある果樹園主はさらに「梨のバカヤロ十三年と言うんだよ」と教えてくれました。リンゴは何年かかるのかわかりませんが、木が果を実らせるには本当に多くの年月と忍耐が必要なのですね。私たちは「今年こそは」と思いつつ、水をやり、肥料をやりつつ見守るしかありません。

さて、主イエスはこの譬えをどのような時に、またどんな思いを込めて語られたのでしょうか？

13 章の冒頭にはその時の状況がこう記されています。

ちょうどその時、ある人々がきて、ピラトがガリラヤ人たちの血を流し、それを彼らの犠牲の血に混ぜたことを、イエスに知らせた。そこでイエスは答えて言われた、「それらのガリラヤ人が、そのような災難にあったからといって、他のすべてのガリラヤ人以上に罪が深かったと思うのか。あなたがたに言うが、そうではない。あなたがたも悔い改めなければ、みな同じように滅びるであろう。」（ルカ13・1-3）

災害や事故、病気など、私たちの日常にも思わぬ災難が降りかかってくる場合がありますが、その頃イスラエルでも様々な事件や災害が起きていたことが分かります。そうした災いにあった人々だけが罪人なのではありません。罪の生活を悔い改めるべきことを説いて、主イエスは次のように言われました。

また、シロアムの塔が倒れたためにおし殺されたあの十八人は、エルサレムの他の全住民以上に罪の負債があったと思うか。あなたがたに言うが、そうではない。あなたがたも悔い改めなければ、みな同じように滅びるであろう」。（ルカ13・4-5）

「悔い改め」というのは、前にも述べましたが、単なる「後悔」とは異なって、生き方を一八〇度方向転換し、主を見上げて生きることです。「後悔」はいつも後ろ向きであって、過去の自分の失敗や罪だけを見て悔やみ続けるのですが、これに対して「悔い改め」はそうした反省も踏まえつつ、罪も失敗も赦して下さる主に向き変えて歩み出すことです。

ルカはこの後に、ある安息日、十八年間も病気の霊に憑かれ、かがんだままで、からだを伸ばすことが全くできない女の人を主イエスが癒したことを記しています。労働を禁じられている安息日に、癒しという治療行為をしたとして非難する会堂司に向かって主イエスは言われました。

「偽善者たちよ、あなたがたはだれでも、安息日であっても、自分の牛やろばを家畜小屋から解いて、水を飲ませに引き出してやるではないか。それなら、十八年間もサタンに縛られていた、アブラハムの娘であるこの女を、安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったか」。

（ルカ13・15、16）

それから主イエスは芥子種とパン種の譬えを語られました。

そこで言われた、「神の国は何に似ているか。またそれを何にたとえようか。一粒のからし種のようなものである。ある人がそれを取って庭にまくと、育って木となり、空の鳥もその枝に宿るようになる」。

また言われた、「神の国を何にたとえようか。パン種のようなものである。女がそれを取って三斗の粉の中に混ぜると、全体がふくらんでくる」。（ルカ13・18-21）

災害・実を結ぶ木・癒しと種の譬えはどこでつながっているのでしょうか？ 実はこの中に主イエスが来られた目的である「解放」ということが共通しているのです。なぜなら、悔い改めなければ滅びを免れない私たちを罪の生き方から解放し、実を結ぶ生き方へ導くために主イエスは来られたのだからです。

小さな種の中には発芽し成長して実を結ぶための設計図が既に備えられています。この神の手

になる設計図を守るために殻が覆っているのですが、それがいつの間にか種を束縛する硬い殻になってしまって、発芽を阻止し、実を結ばないものになっていることがあるのです。安息日は本来、人を守るためのものでしたが、癒しさも労働と見なして非難する会堂司の言葉のように、硬直した律法主義になってしまっていたのです。主イエスの言葉には「解放」という言葉が使われています。

**自分の牛やろばを家畜小屋から《解いて》やるではないか
アブラハムの娘であるこの女を…その束縛から《解いて》
やるべきではなかったか。**

実のならない木のために、「ご主人様、ことしも、そのままに置いてください。そのまわりを掘って肥料をやって見ますから」と嘆願している園丁のように、実を結ぶ木となるように世話をし続け、真剣に執り成し続けて下さっているのが主イエスなのです。

この園丁は「それで来年実がなりましたら結構です。もしそれでもだめでしたら、切り倒してください」と言っていますが、もし翌年も実が生らなかつたら切り倒されてしまうのでしょうか。いいえ、園丁は自分の手で切り倒すとは言っていませんし、園の主人もそのように嘆願する園丁の心を尊重して、一年また一年と待ち続けるのではないのでしょうか。

我が家のリンゴの木はその後、植えてから十五年経って、三〇個ほどの実をつけるまでに成長しました。教会に来る子供も大人も大喜びで、収穫の季節になると皆で美味しく食べています。待ち続けてよかったなあと心から思うのです。いつも主につながっていて、時が来れば豊かな実を結ぶ木でありたいと願いつつ、詩篇第一篇を思い合わせます。

**悪しき者のはかりごとに歩まず、罪びとの道に立たず、
あざける者の座にすわらぬ人はさいわいである。
このような人は主のおきてをよろこび、昼も夜もそのおきてを思う。
このような人は流れのほとりに植えられた木の時が来ると
実を結び、その葉もしばまないように、そのなすところは皆栄える。**

37. 「狭き門より入りなさい」 (ルカ13・22-35)

「狭き門」で思い出すのはやはり、ベツレヘムの「生誕教会」の入り口です。ここを訪れた時のことについては第23回「誰が一番？」で次のように述べました。

この教会は、例年クリスマスの時にそのミサの様子が世界中にテレビ中継されるのですが、入り口は人が一人歩いて通れるような小ささです。ガイドの説明によると、この石造りの堂々とした教会の入り口は本来大きかったそうですが、昔ローマの兵隊がこの由緒ある教会に馬に乗ったままで入ろうとしたことがあり、それに憤慨した教会の人々が、馬から降りなければ入れないように頑丈な石で小さく区切ったのだそうです。まさに「狭い門より入りなさい」との御言葉通りです。

そういえば、千利休によって大成された日本の茶の湯でも、茶室には小さなくぐり戸があって、誰でも身を低くし、また武士も刀を帯びたままでは入れないようになっていました。実は千利休は茶友のキリシタン大名高山右近などから聞いて、この聖書の言葉を知っていたとか、あるいは千利休自身もキリシタンだったという説があります。それによると、茶会はキリシタンの聖餐式で、迫害者に踏み込まれたとき「これは茶会です」と言ってカモフラージュするためのものだったというのです。それが事実であるとすれば、興味深いことです。

さて、この有名な「狭き門より入れ」という御言葉はどのような際に語られたのでしょうか。

イエスは教えながら町々村々を通り過ぎ、エルサレムへと旅を続けられた。すると、ある人がイエスに、「主よ、救われる人は少ないのですか」と尋ねた。そこでイエスは人々にむかって言われた、「狭い戸口からはいるように努めなさい。

事実、入ろうとしても、はいれない人が多いのだから。 (ルカ13・22, 23)

このように、「主よ、救われる人は少ないのですか」という質問に対する答として語られたことが分かります。一部の註解者によると、これは皮肉と嘲笑まじりに発せられた質問だったと言うのです。というのは、「全てのユダヤ人は神によって選ばれた民であり、既に救われている。それなのにイエスよ、あなたは『救われる者は少ない』と言うのか？」との悪意から出た質問だったとするのです。しかし、たとえ悪意からだったとしても、次の譬えを読むとき、主イエスの答の真実が明かです。

家の主人が立って戸を閉じてしまってから、あなたがたが外に立ち戸をたたき始めて、『ご主人様、どうぞあけてください』と言っても主人はそれに答えて、『あなたがたがどこからきた人なのか、わたしは知らない』と言うであろう。

そのとき、『わたしたちはあなたとご一緒に飲み食いしました。またあなたはわたしたちの大通りで教えてくださいました』と言い出しても、彼は、『あなたがたがどこからきた人なのか、わたしは知らない。悪事を働く者どもよ、みんな行ってしまえ』と言うであろう。

**あなたがたは、アブラハム、イサク、ヤコブやすべての
預言者たちが、神の国にはいつているのに、自分たちは外に
投げ出されることになれば、そこで泣き叫んだり、歯がみを
したりするであろう。**

**それから人々が、東から西から、また南から北からきて、
神の国で宴会の席につくであろう。こうしてあとのもので先に
なるものがあり、また先のものであとになるものもある。(ルカ13・25-30)**

神の国に入る人が多ければ多いほど神様の喜びは増し加わるはずなのに、どうして神の国への門は広く開かれていないのでしょうか？ マタイ7・13, 14には次のように書かれています。

**狭い門からはいれ。滅びにいたる門は大きく、その道は広い。
そして、そこからはいつて行く者が多い。命にいたる門は狭く、
その道は細い。そして、それを見いだす者が少ない。**

なぜ、命にいたる門は狭く、その道は細いのかというと、それが格好悪いからです。滅びに至る道は誘惑に満ちて広く開かれている格好良い道で、それを見出す者が多いけれども、命に至る道は、一見すると格好悪く、自尊心が傷つけられるように思われるので、そこから入っていく人が少ないのです。

信仰の道に入るといのは、自分の罪を悔い改め、イエス・キリストに助けを求め、神の前にひれ伏す者となるばかりか、何かかんじがらめの規則づくめの世界に入っていくように思われ、そのような卑屈で窮屈そうな世界に入っていくよりは、自分が自分の主となり、主体的に生きていく方が良いと考えがちです。これは主体的ということの甚だしい誤解です。真に主体的な生き方は、私達を創造し命を与えてくださり、守り導いて生かしてくださっている主なる神をわが主と戴くことなのです。ところが、この誤解は信仰に入るときだけでなく、信仰に生きるようになってからも大きな誘惑力を持っています。

私が神学校を卒業して仙台に戻ってきたとき、その少し前に母教会が閉鎖されていたことは第3回「福音に生かされて」のところで既に述べました。そのとき、残っていた高齢の教会員のために急遽、開拓伝道を余儀なくされました。それで、経済的理由から、まず職探しを始めました。すると、仙台に住んでいた私の妹から聞いたと言って、献身以前に私が8年間働いていた会社の部長さんから「また働いてくれないか」との電話がありました。私は、今はもう牧師であること、日曜日は公休を戴かなければならないこと、そのほか様々な理由を挙げてお断りしました。以前の経験から、年中無休の職場であり、しかも単純作業の仕事には飽き飽きしていたので、あのLPガス・スタンドには絶対に戻りたくないと思っていました。せつかく転職をするのだから、もっと楽しい、格好良い職種をと望んでいたのです。

しかし、ぜひ会って話したいというのでお会いしてみると、「君は今も高圧ガスの資格証を持っているかい？」と聞かれたので「はい」とお答えしました。実は神学校に行っている間に、私の実家が火事で全焼しました。その焼け跡からわずかに焼け残ったものとして、後で母が届けてくれたのがその「資格証」で、私は二度と使うことはないだろうと思っていたものでした。しかし私がまだ持っているということが分かると部長さんは「どんな条件でも飲むから戻ってきてほしい」と言われたのです。後で分かったのは、ちょうどその頃、スタンドは資格者不在のため、営業停止処分を受ける恐れがあったのだそうです。そんな折に私が仙台に戻ってきたというので、会社は何とか資格者を確保しようとしていたのです。神様の絶妙なタイミングでした。

あの時からもう二十年以上が過ぎました。振り返ってみて思うのは、この仕事が経済的な心配なしに牧会伝道を続けるために、どんなに助けになってきたことかということです。神様は信仰に入る前からこの職場で私を訓練し、また再就職の道をも備え、今に至るまで守り導き祝福してくださっています。私にとって格好悪くつまらなく見えた「狭き門」は実は祝福への入り口だったのだなぁと心から思うのです。

狭い門からはいれ。滅びにいたる門は大きく、その道は広い。

そして、そこからは行って行く者が多い。命にいたる門は狭く、

その道は細い。そして、それを見いだす者が少ない。(マタイ7・13、14)

38. 「安息日への祝福」 (ルカ 14・1-11)

ルカによる福音書第14章には、ある安息日に起きた一連の出来事が書かれています。それは次のように始まりました。

ある安息日のこと、食事をするために、あるパリサイ派のかしらの家には行って行かれたが、人々はイエスの様子をうかがっていた。 (ルカ14・1)

この日、主イエス一行はパリサイ派の指導者から食事の招待を受けたのですが、「人々はイエスの様子をうかがっていた」というのですから、それは心からの歓迎というよりも、疑いの思いをいだいてのことだったと分かります。その事情を知るには、安息日とは何かということがカギになるのですが、大きなカルチャー・ショックを伴って体験した時のことは既に第10回「安息日は誰のため？」で述べました。

あのときは、何たる「風が吹くと桶屋が儲かる」式の理屈だと思いました。しかし、彼らは大真面目で、しかも法律を作って国家的規模でモーセ律法を守ろうとしているのです。三千四百年以上も前の律法が現代生活の細部にまで生きているということに驚きを覚えました。まして、主イエスの時代の安息日遵守はどれほど厳しかったかと想像するのです。このことを心に留めて、主イエスに起きた出来事を見てみましょう。

**ある安息日のこと、食事をするために、あるパリサイ派のかしらの家には行って行かれたが、人々はイエスの様子をうかがっていた。
するとそこに、水腫をわずらっている人が、みまえにいた。
イエスは律法学者やパリサイ人たちにむかって言われた、
「安息日に人をいやすのは、正しいことかどうか」。
彼らは黙っていた。そこでイエスはその人に手を置いて
いやしてやり、そしてお帰りになった。** (ルカ14・1-4)

なぜ人々が様子をうかがい、律法学者やパリサイ人たちが押し黙っていたのかは、ルカがすでに13・14に伝える会堂司の言葉に表れています。

**ところが会堂司は、イエスが安息日に病気をいやされたことを憤り
群衆にむかって言った、「働くべき日は六日ある。その間に、
なおしてもらいにきなさい。安息日にはいけない」。**

確かに、安息日はヘブル語で「シャバト」と呼ばれ「休む」を意味しますが、なんと、安息日には病気を癒すこともしてはいけないと考えられていたのです。安息日の由来は、神が天地万物を創造され、それをなし終えたときに休息されたことに始まります。創世2・1-3 には次のように書かれています。

**こうして天と地と、その万象とが完成した。神は第七日にその作業を終えられた。すなわち、そのすべての作業を終って第七日に休まれた。
神はその第七日を祝福して、これを聖別された。神がこの日に、
そのすべての創造のわざを終って休まれたからである。**

この創造の記事の中には、直接「安息日」という言葉は使われていませんが、ここで「休む」と訳されている言葉には「憩う」という意味があります。モーセを通して制定された十戒の第四番目に安息日についての戒めが掲げられ、その根拠として神の創造の業が述べられています。

安息日を覚えて、これを聖とせよ。

六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。

七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをも

してはならない。あなたもあなたのむすこ、娘、しもべ、

はしため、家畜、またあなたの門のうちにいる他国の人も

そうである。主は六日のうちに、天と地と海と、その中の

すべてのものを造って、七日目に休まれたからである。

それで主は安息日を祝福して聖とされた。(出エジ20・8-11)

このようにして、イスラエルの民はこの日を単に休息の日とするだけでなく、神への礼拝の日とした。安息日は金曜日没から始まりますが、クリスチャンはイエス・キリストが週の初めの日に復活したのを記念し、日曜日を聖日として守るようになったのです。

さて、このようなわけで、水腫をわずらっている人の癒しが行われたのが安息日だったことから、律法学者やパリサイ人たちは憤慨して押し黙っていましたが、主イエスはこの日を律法的(=規則づくめ)にとらえないようにと教えるために、次のように語られました。

「あなたがたのうちで、自分のむすこか牛が井戸に

落ち込んだなら、安息日だからといって、すぐに

引き上げてやらない者がいるだろうか。」(ルカ14・5)

「彼らはこれに対して返す言葉がなかった」とルカは記しています。いったい彼らの関心事は何にあったのでしょうか。それはその次に書かれている記事から伺われます。

客に招かれた者たちが上座を選んで座を占んでいる様子をごらんになって、

彼らに一つの譬を語られた。「婚宴に招かれたときには、

上座につくな。あるいは、あなたよりも身分の高い人が

招かれているかも知れない。その場合、あなたとその人とを

招いた者がきて、『このかたに座を譲ってください』と言うであろう。

そのとき、あなたは恥じ入って末座につくことになるであろう。

むしろ、招かれた場合には、末座に行ってすわりなさい。

そうすれば、招いてくれた人がきて、『友よ、上座の方へ

お進みください』と言うであろう。そのとき、あなたは席を共にする

みんなの前で、面目をほどこすことになるであろう。おおよそ、自分を

高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう」。(ルカ14・7-11)

これは私たち日本人にも分かりやすい譬えですが、律法学者やパリサイ人たちの関心事は、明らかに安息日律法を含むその時代の解釈者としての自分たちの権威や面子でした。ところが、主なる神が大切なこととして設けた安息日についての彼らの解釈は、その趣旨から根本的に外れていたのです。安息日の本来の意味について主イエスは次のように語られました。

「安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない。

それだから、人の子は安息日にもまた主なのである」(マルコ2・27、28)

主なる神が六日間にわたる天地創造の働きを終えて七日目に休まれたのは、ちょうど芸術家がその作品を完成した後に、それを愛おしむように、御手になる傑作である私たち人間と憩う時だからです。それを人間的権威や面子のうごめく場としてしまっていた当時の律法学者やパリサイ人たち

は、基本的理解において誤っていました。安息日礼拝はこのように、労働しないことに意義があるのではなく、神と人とが憩う喜びの時なのです。

「安息日は人のためにある」と主イエスは言われました。それは誰よりも主なる神御自身が私たちにとの交わりである聖日礼拝の時を心から喜び憩い、これを守る人々を祝福されるのだからです。

39. 「神には何でもできる」 (ルカ14・25-35)

何かを習得しようとするとき、独学という方法は安価ではありますが、上達への早道は信頼できる師匠につくことだと思います。一人で試行錯誤を重ねるのは、時間的・精神的にもロスが多いからです。しかし、その「信頼できる」とか、「信頼する」というのはどのようなことを言うのでしょうか？

小林恵子さんというマジシャンのことを新聞で読んだことがあります。中学三年の時、デパートの文具コーナーで手品を実演していた人に「それが欲しいんですが…」と言ったのが師匠との出会いでした。その人に「これは難しいから…」と言われたので、負けず嫌いの彼女はかえって欲しくなり、その場で金のリングを買い「教えて下さい」と頼んだのだそうです。その時「真剣に教える方がいいの、それとも趣味程度に？」と聞かれて驚いたばかりか、更に予想もしなかった厳しい質問をされたのです。「じゃあ、もう一つ聞くけど…、親を捨てられる？」小林さんはその時「捨てられます。反対されたら親を説得します」と答えました。中学・高校と有数の進学校に通ったあと、大学には進学せず、プロのマジシャンの道に邁進、十年後の1995年、日本で開かれたマジックの大会で女性マジシャンとして「初出場、初優勝」の快挙を成し遂げたとの新聞記事でした。

新共同訳聖書は今回の聖書箇所「弟子の条件」という小見出しをつけていますが、それは小林恵子さんの師匠と似たような主イエスの言葉で始まります。

**大ぜいの群衆がついてきたので、イエスは彼らの方に向けて言われた、
「だれでも、父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分の命までも捨てて、
わたしのもとに来るのとなければ、わたしの弟子となることはできない。
自分の十字架を負うてわたしについて来るものとなければ、わたしの弟子と
なることはできない。」** (ルカ14・25-27)

なんと厳しい言葉。主イエスの弟子になるためにそのように全てを捨てなければならぬとすれば、いったい誰がクリスチャンになることができるだろうと思うのではないのでしょうか。実は、この言葉はマタイ19・16 以下にもあるのですが、そこでは「どんなよいことをしたら永遠の生命を得ることが出来るのでしょうか」と尋ねた若い金持ちの青年との出会いの際に語られたと記されています。

**イエスは言われた、『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証を立てるな。
父と母とを敬え』。また『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』。
この青年はイエスに言った、「それはみな守ってきました。
ほかに何が足りないのでしょうか。」** (マタイ19・18-20)

永遠の命を求める青年の真剣な問いです。これに対して主イエスも齒に衣を着せずにはっきりと答えられました。

**「もしあなたが完全になりたいと思うなら、帰ってあなたの持ち物を売り払い、
貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つようになろう。
そして、わたしに従ってきなさい」。
この言葉を聞いて、青年は悲しみながら立ち去った。
たくさんの資産を持っていたからである** (マタイ19・21-22)。

そしてこの時に主イエスは「**富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい**」と言われたのです。「では、だれが救われることができるのだろう」と驚く弟子たちに、主は次のように語られました。

イエスは彼らを見つめて言われた、「人にはそれはできないが、神にはなんでもできない事はない…おおよそ、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、もしくは畑を捨てた者は、その幾倍もを受け、また永遠の生命を受けつぐであろう。しかし、多くの先の者はあとになり、あとの者は先になるであろう。」（マタイ19・19-30）

いったい「捨てる」とはどういう意味なのでしょう。それはルカが伝える、主イエスが続いて語られた邸宅の建築の譬えに手掛かりがありそうです。

あなたがたのうちで、だれかが邸宅を建てようと思うなら、それを仕上げるのに足りるだけの金を持っているかどうかを見るため、まず、すわってその費用を計算しないだろうか。そうしないと、土台をすえただけで完成することができず、見ているみんなの人が、『あの人は建てかけたが、仕上げができなかった』と言ってあざ笑うようになろう。（ルカ14・28-30）

皆さんの中には家を建てた経験がおありの方もおられると思います。私は、建てた経験を持っていませんが、今、主が不思議な方法を通してお与え下さった新会堂で、牧会伝道が続けることができます。それは次のような経緯で与えられたのです。

四年間の借家での開拓伝道の後に、中古住宅でしたが会堂を購入することができた時のことはすでに第15回「ただ御言葉を下さい」の中で証しました。そこで十年間伝道したのですが、築後三十年が経過する頃、あちこちに老朽化が目立つようになり、会堂のリフォームか、新築かが懸案になってきていました。

そんなおり、同様に移転のため不動産を探していた友人牧師が、「元はキリスト教会の建物だったという物件が売りに出ているのを不動産屋から紹介され、主の恵みにより購入することができました」というので、私たち夫婦は年末に見学に行きました。それは聖書・讃美歌のみならず、教会墓地さえも予め備わっていた素晴らしい物件でした。

帰り道で「私たちにも新会堂が備えられますように」と祈っていると、主が備えて下さるという思いが与えられ、またその後のディボーションでもたくさんの御言葉を与えられました。たとえば、イザヤ48・6には「**わたしは今から新しい事、あなたがまだ知らない隠れた事をあなたに聞かせよう**」とありました。しかし、実はその年の夏、次のような事情があつて私たちは古い会堂ではありましたが、土地と共に、あるキリスト教系の財団に既に寄付していたのです。

その前年の春、私は「あなたは登録していた骨髄バンクのドナーに該当しました」との連絡を受けました。大学病院で骨髄移植手術について数回の説明を受ける中で、ドナーとしての覚悟が必要なことを知りました。それはやがて「患者さんの都合で」ということで中止終了となったのですが、そのようなことが何と二度も続いて起きたので、万一の自分の死に備える必要を覚え、便宜上、私の個人名義だった教会堂をあるミッション財団の名義にと寄付したのでした。

さて「新しい会堂をあげよう」との約束が与えられた翌年の春、私は昔の友人と二十三年ぶりに

再会する機会があり、その時に彼から、「事情があって、自分の家を土地ごと買ってこないだろうか」と相談されました。それは丘の上にあって広い公園に面し、教会堂としても申し分ない素晴らしい新築の物件でした。しかし、上記のような事情から「私たちには資金に出来る不動産もない」と説明したところ、友人は「その財団に話してみてもどうか」と言うのです。財団に話してみると、「寄付して下さいた会堂を売却して購入資金に充てましょう」と応じてくださり、それからわずか三ヶ月の内にまったく思い掛けない方法で、2003年のイースターに新会堂が与えられたのです。

主イエスは「あなたがたのうちで、自分の財産をことごとく捨て切るものでなくては、わたしの弟子となることはできない」(ルカ14・33)と言われましたが、私は骨髄バンクのドナー該当という導き無しには自分の死の準備を考えることはなかったでしょう。しかし、主は私たちの性格や考え方もご存知で、どのようにすれば御自身の御計画と御業をなすことが出来るかを知っておられる方です。

私たちは自分のすべてを主にお任せするとき、その大きな御業に活かされてゆくことができます。主から委ねられたものについての「私の…、私の…」という思いを捨て、安心して主イエスとそのお導きに私たちのすべてをお委ねしましょう。なぜなら、「神にはなんでもできない事はない」からです。



40. 「迷いからの解放」 (ルカ 15・1-32)

友人の牧師から「至急返信願います」との問合わせメールを受け取りました。彼はテーマが「クリスチャン・ライフの素晴らしさとは？」という青年キャンプのメッセージャーを依頼され、あちこちからアンケートを集めて参考にしたいのだそうです。私は「ひとこと言えば、喜びです」と、若干の説明を加えた文章と共に返信しました。その喜びというのは、かつては死んでいたような私が、活かされているという喜びをもっていま生きているという思いからでした。

今回の聖書箇所、ルカ伝15章には主イエスの語られた三つの譬話が書かれていますが、これらに共通するテーマは「死んでいたような者が生き返った喜び」ということにあると思います。第一は「迷子になった一匹の羊」の譬えです。

さて、取税人や罪人たちが皆、イエスの話を聞こうとして近寄ってきた。
するとパリサイ人や律法学者たちがつぶやいて「この人は罪人たちを
迎えて一緒に食事をしている」と言った。
そこでイエスは彼らに、この譬をお話しになった、
「あなたがたのうちに、百匹の羊を持っている者がいたとする。
その一匹がいなくなったら、九十九匹を野原に残しておいて、
いなくなった一匹を見つけるまでは捜し歩かないであろうか。
そして見つけたら、喜んでそれを自分の肩に乗せ、家に帰って
きて友人や隣り人を呼び集め『わたしと一緒に喜んでください。
いなくなった羊を見つけたから』と言うであろう。(ルカ15・1-6)

この譬えを語り出された時の状況に注目してください。パリサイ人や律法学者たちが「罪人」と呼ぶ人々と主イエスが一緒に食事をしているのを見て呟いたので、この話をされたのです。主イエスが伝えなかった事は天に起こる大きな喜びのことでした。

よく聞きなさい。それと同じように、罪人がひとりでも
悔い改めるなら、悔改めを必要としない九十九人の正しい人の
ためにもまさる大きいよろこびが、天にあるであろう。(ルカ15・7)

次いで二つ目の譬えを語られました。

また、ある女が銀貨十枚を持っていて、もしその一枚を
なくしたとすれば、彼女はあかりをつけて家中を掃き、
それを見つけるまでは注意深く捜さないであろうか。
そして、見つけたなら、女友だちや近所の女たちを
呼び集めて、『わたしと一緒に喜んでください。
なくした銀貨が見つかりましたから』と言うであろう。

よく聞きなさい。それと同じように、罪人がひとりでも
悔い改めるなら神の御使たちの前でよろこびがあるであろう。(ルカ15・8-10)

ここでもポイントはやはり天に起きる大きな喜びです。このように、どこかに迷い込み失われた人が回復される時に神の国ではどんなに大きな喜びが湧き起こるかということの主イエスは伝えたいのです。

皆さんも大なり小なり、道に迷ったという経験をお持ちのことと思います。私の勤務先で一緒に働いている人とそんな話題になったことがありました。彼は道に迷ってパニックになった経験を話してくれましたが、やがて知っている道に戻ることができた時には本当に安心したと語っていました。私はふと思いついて彼に「ところで、どういう場合に道に迷うだろう？」と尋ねてみました。彼は「道が分からない場合、たとえば、書いてくれた地図があやふやな場合とか、教え方が間違っていた場合、それから方向音痴の場合…」などといういろいろ挙げました。私はもっと単純に、「道に迷うのは、目的地があるからじゃないか。もともと、目的地がない場合には道に迷うとは言えないと思う」と言ったところ、彼曰く「なるほど、あてのない旅にゴールはないか」と、何やら禅問答のような会話になってしまいました。

ところが、旅行社に勤めている人から、こんなことを聞いたことがあります。旅に出掛けるには目的地のはっきりしていることが大切なはずですが、その人によれば、「目的地が分からないので旅行相談に来られるという方も結構います」というのです。ミステリー・ツアーというのがありますが、それは行先が予め知らされていないだけであって、主催者側にはきちんと綿密な計画があるので参加者は安心してその旅行を楽しむことができます。「あてのない旅」は格好良く響く言葉ではありますが、それが人生となると話は別です。人生はよく旅に譬えられますが、みなさんの旅の目的地ははっきりしていますか？

さて、主イエスが三番目に語られた「放蕩息子」の場合、目的ははっきりしていたのでしょうか？

また言われた、「ある人に、ふたりのむすこがあった。

ところが、弟が父親に言った、『父よ、あなたの財産のうちでわたしがいただく分をください』。そこで、父はその身代をふたりに分けてやった。それから幾日もたたないうちに、弟は自分のものを全部とりまとめて遠い所へ行き、そこで放蕩に身を持ちくずして財産を使い果した。

何もかも浪費してしまったのち、その地方にひどいききんがあったので、彼は食べることに窮しはじめた。そこで、その地方のある住民のところに行って身を寄せたところが、その人は彼を畑にやって豚を飼わせた。彼は、豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいと思うほどであったが、何もくれる人はなかった。（ルカ15・11-16）

この息子は、親から無理矢理に分けてもらった相続財産をもって町にゆき、一旗揚げようと思ったのでしょう。しかし放蕩に身を持ち崩し、無一文になってようやく目が醒めたというわけです。

そこで彼は本心に立ちかえって言った、『父のところには食物のあり余っている雇人が大ぜいいるのに、わたしはここで飢えて死のうとしている。立って、父のところへ帰って、こう言おう、父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかって、罪を犯しました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇人のひとり同様にしてください』。そこで立って、父のところへ出かけた。（ルカ15・17-20a）

しかし、父親はそんな放蕩息子の帰りを今日か明日かと待ちわびていたのです。

まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思って走り寄り、その首をだいて接吻した。

むすこは父に言った、『父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかって、罪を犯しました。もうあなたのむすこと呼ばれる資格はありません』。

しかし父は僕たちに言いつけた、『さあ、早く、最上の着物を出してきてこの子に着せ、指輪を手にはめ、はきものを足にはかせなさい。また、肥えた子牛を引いてきてほふりなさい。食べて楽しむうではないか。このむすこが死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから』。

それから祝宴がはじまった。(ルカ15・20b-24)

「指輪」というのは古代社会では日本の印鑑に相当するものでした。父親は単に息子の帰宅を喜んだばかりではなく、この息子を愛し赦して自分の信頼を置く者としたのです。兄がこれを快く思わなかったのも無理はない話です。

ところが、兄は畑にいたが、帰ってきて家に近づくと、音楽や踊りの音が聞えたので、ひとりの僕を呼んで、

『一体、これは何事なのか』と尋ねた。

僕は答えた、『あなたのご兄弟がお帰りになりました。

無事に迎えたというので、父上が肥えた子牛をほふらせなされたのです』。

兄は怒って家にはいろいろとしなかったのに、父が出てきてなだめると、兄は父にむかって言った、『私は何か年もあなたに仕えて、一度でもあなたの言いつけにそむいたことはなかったのに、友だちと楽しむために子やぎ一匹も下さったことはありません。それなのに、遊女どもと一緒にあって、あなたの身代を喰いつぶしたこのあなたの子が帰ってくると、そのために肥えた子牛をほふりなさいました』。

すると父は言った、『子よ、あなたはいつもわたしと一緒にいるし、またわたしのものは全部あなたのものだ。しかし、このあなたの弟は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのはあたりまえである』。(ルカ15・25-32)

旅の楽しさはどこにあるのでしょうか？もちろん、様々な未知のものを見聞する楽しさは言うまでもありませんが、実はその楽しさは、帰る所があるという安心感があればこそではないでしょうか。つまり帰ることのできる家がなければ、それは放浪の旅であって、楽しみよりも、むしろ常に不安がつきまとう旅になってしまうと思うのです。

道に迷った羊が自分で目的地を定めたとしても、それで迷子の状態が終わるわけではありません。失われた硬貨は机の下ではその価値を発揮しません。放蕩息子も華やかな都会を目的地に定めたものの、それは滅びの道でした。羊も硬貨も放蕩息子も、その本当の価値を見出したのはその持ち主の所においてでした。私たちが創造者であり、救い主であり、牧者なる主イエス・キリストの元に本当の命を見出すのです。主こそ私たちが命がけで救い出してくださったお方だからです。

41. 「良い管理人」 (ルカ第 16 章)

この聖書箇所は別名で「不正な管理人のたとえ」と呼ばれるもので、主イエスは悪いことをしていた家令が主人からほめられたという、何とも戸惑いを覚える譬え話をされました。いったいこの管理人はどんなことをしていたのでしょうか？

「ある金持のところにひとりの家令がいたが、彼は主人の財産を浪費していると、告げ口をする者があった。

そこで主人は彼を呼んで言った、『あなたについて聞いていることがあるが、あれはどうなのか。あなたの会計報告を出しなさい。もう家令をさせておくわけにはいかないから』。(ルカ16・1-2)

主人から任されていた財産を自分のために浪費していたとすれば、これは「横領」です。家令はそれが露見したので謝罪したのかというと、そうではなく更に次のような事をしたのです。

この家令は心の中で思った、『どうしようか。主人がわたしの職を取り上げようとしている。土を掘るには力がないし、物ごいするのは恥ずかしい。そうだ、わかった。こうしておけば、職をやめさせられる場合、人々がわたしをその家に迎えてくれるだろう』。

それから彼は、主人の負債者をひとりひとり呼び出して、初めの人に、『あなたは、わたしの主人にどれだけ負債がありますか』と尋ねた。『油百樽です』と答えた。そこで家令が言った、『ここにあなたの証書がある。すぐそこにすわって、五十樽と書き変えなさい』。次に、もうひとりに、『あなたの負債はどれだけですか』と尋ねると、『麦百石です』と答えた。これに対して、『ここに、あなたの証書があるが、八十石と書き変えなさい』と言った。(ルカ16・3-7)

これは家令の直接の利益にはならないとしても、主人の財産に損失を及ぼす罪ですから、いわゆる「背任」にあたります。皆さんが主人なら、この二重に不正を重ねた家令をどうしますか？ きっと解雇だけでは済まないことでしょう。しかし、主イエスは次のように語られたのです。

ところが主人は、この不正な家令の利口なやり方をほめた。

この世の子らはその時代に対しては、光の子らよりも利口である。(ルカ16・8)

なんと、主人はこの人を処罰するどころか「ほめた」というのです。それだけではありません。主イエスは続けて次のように語られました。

またあなたがたに言うが、不正の富を用いても、自分のために友だちをつくるがよい。そうすれば、富が無くなった場合、あなたがたを永遠のすまいに迎えてくれるであろう。

小事に忠実な人は、大事にも忠実である。そして、小事に不忠実な人は大事にも不忠実である。だから、もしあなたがたが不正の富について忠実でなかったら、だれが真の富を任せるだろうか。(ルカ16・9、10)

これを聞いていた「欲の深いパリサイ人たちは、すべてこれらの言葉を聞いて、イエスをあざ笑った」と書かれています。しかし、たとえ欲深ではなくとも、この譬え話に疑問を持つ人はみなパリサイ

人と同じ過ちを犯しているということになるのでしょうか？ 何とも困惑させられる譬え話ですが、これは自分を主人の立場に置いている限り納得することはできないと思います。また、「私が管理人ならこんな不正なことはしない」と思っているのは、パリサイ人と同じ過ちをおかすことになるでしょう。主人が管理人をほめたのは、その「横領」の不正さではなく、不正な管理人の「背任」としか思われられない行動でした。しかし、横領と背任は、どこの国の刑法でも犯罪になるはずで、神の国では横領は罪になるが、背任は奨励されるのでしょうか？ この譬えを語られた主イエスの真意はいったいどこにあるのでしょうか？ その手掛かりは、次に主が語られた言葉の中にありそうです。

**また、もしほかの人のものについて忠実でなかったら、
だれがあなたがたのものを与えてくれようか。どの僕でも、
ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。一方を憎んで他方を
愛し、あるいは、一方に親しんで他方をうとんじるからである。
あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない。(ルカ16・10-13)**

ここで「富」と訳されているのは「マモン」という言葉であり、「マモン神」というお金の神です。私たちはもちろんマモン神という偶像にではなく、真の神に仕える者であって、管理人なのです。そして、実は私たちが自分のものと思っているものは、体・心・才能・財産・家族・友人・知人などは、すべてが神様から委ねられた預りものであって、私たちは言わばそれらの管理人だということができます。そして管理人に求められているのは忠実さと誠実さです。ところが、もしそれらを自分のためだけに使うとすれば、それは横領であり、ひいてはマモン神に仕えることになってしまうと主イエスは言っておられるのです。

したがって、背任に見えた「不正な管理人」の行為は、主人から預かっていたものを他の困っている人々を助けるために使った行為だったこととなります。この管理人の場合は自分の損失において為されたことではなく、またその動機も、自分が困ったときに助けてくれるだろうという打算的なもので、決して褒められたものではなかったのですが、借金に苦しむ人たちを助けるためにした行為だったので、主人は彼のやり方をほめたというのです。

こうしてみると、更に主イエスが語った「金持ちとラザロ」の話も、この趣旨をさらに説き明かすための物語であることが分かります。

**毎日贅沢に遊び暮らしていた金持ちと、その食卓から落ちるもので
飢えをしのごうとするほどに貧しく病気がちだったラザロの二人が
死んだ時、ラザロは御使いによって「アブラハムのふところ」である
天国に導かれましたが、金持ちは黄泉に行く者となり、苦しみの中で
アブラハムにこう叫びました。**

**『父、アブラハムよ、わたしをあわれんでください。ラザロを
おつかわしになって、その指先を水でぬらし、わたしの舌を冷やさせて
ください。わたしはこの火炎の中で苦しみもだえています』。(ルカ16・24)**

これに対するアブラハムの答えは厳しいものです。

**アブラハムが言った、『子よ、思い出すがよい。あなたは
生前よいものを受け、ラザロの方は悪いものを受けた。
しかし今ここでは、彼は慰められ、あなたは苦しみもだえて
いる。そればかりか、わたしたちとあなたがたの間には**

**大きな淵がおいてあって、こちらからあなたがたの方へ
渡ろうと思ってもできないし、そちらからわたしたちの方へ
越えて来ることもできない』。(ルカ16・25、26)**

金持ちは、それならラザロを自分の五人の兄弟たちの所へ送って、彼らが黄泉に来ることのないように警告させてくださいと懇願するのですが、アブラハムは、次のように答えます。

**『もし彼らがモーセと預言者にとりて耳を傾けないなら、死人の
中からよみがえってくる者があっても、彼らはその勧めを
聞き入れはしないであろう』。(ルカ16・31)**

「モーセと預言者」とは旧約聖書のことを指し、「死人の中からよみがえってくる者」というのは復活の主イエス・キリスト本人を暗示しています。ですから、聖書として既に与えられている神の言葉に聴き従わないなら、どんな奇蹟が起きても悔い改めて救われることはないだろうというのです。

この物語は因果応報や善因善果を勧める教訓話ではありません。神からのものを預かる良い管理者として如何に生きるべきかを私たちに問う主の語りかけです。私たちは自分自身や人・もの・お金に加え、聖書という神の御言をも与えられています。このように、信頼され委ねられている多くのものを大切に活かして神と人とのために用いることこそ、主が良い管理者としての私たちに期待しておられることなのです。

42. 「赦し、赦されて生きる」 (ルカ 17・1-10)

第17章冒頭で主イエスは「罪の誘惑が来ることは避けられない」と言っておられます。たとえば道路にお金落ちていて、それが一円玉ではなく五百円玉だったら、あなたはどうしますか？ある六十歳の主婦が「十万円拾ったらどうします？」という題で新聞に次のような投稿していたのを読んだことがあります。

「十万円拾ったらどうします？」

一つの実験を試してみた。年齢や経済状態の違う男女十人ずつに次の質問を試みたのである。「あなたは十万円拾ったらどうしますか」。金額を十万円にしたのは、百万円では空恐ろしいし、一万円では猫ばばしても罪悪感にさいなまれることはなさそうだからである。

6人の男性と9人の女性が「交番または然るべき所に届ける」と、ためらわず答えた。男性の一人だけが「もらっちゃうね」と言ったが、あとは「場合による。迷う」という返事だった。

次に「十万円落とししたら出てくるとおもいますか」と聞いてみた。面白いことに全員が「出てこないと思う」と答えた。迷った人が届ける側にまわったら、95%は落とし主に戻るはず。

ハテ、このカラクリはどうなっているのか。答えた人の中に、十数万円入りの財布を拾ったことがあるという人がいて、「その時は交番に走っていくこと以外考えなかったけれども、後で落とし主からお礼として千円程度の佃煮が送られてきたときは、お礼をあてにしていたわけではないのに、なぜか腹立たしい気持ちになった」と語った。お金と人間の心の動きは不思議なものである。

この投稿者のように「不思議」ぐらいで済むのならいいのですが、主イエスの言いたい事は別の所にあります。

イエスは弟子たちに言われた、「罪の誘惑が来ることは避けられない。

しかし、それをきたらせる者は、わざわざである。(ルカ17・1)

口語訳での「誘惑」は他の訳では「つまづき」となっています。誘惑と躓きでは意味合いが異なりますが、原語は「スカンダロン」で、ここから英語の「スキャンダル」という言葉が出てきました。ある国語辞典には「スキャンダル:①良くない噂、②社会的地位のある人の不正事件」とありましたが、確かに誘惑に陥って不正なことをした人のスキャンダルには躓きを覚えるものです。スカンダロンは本来、動物を捕らえる罠の部品である「支え棒」であって、それが比喩的に「人を捉えて罪に落とし、また信仰を疎外する原因になるもの」を意味するようになったのです(織田昭「ギリシア語小辞典」)。そして、主イエスは続けて次のように語られました。

**これらの小さい者のひとりを罪に誘惑するよりは、むしろ、
ひきうすを首にかけられて海に投げ入れられた方が、ましで
ある。あなたがたは、自分で注意していなさい。(ルカ17・2)**

ある日の朝刊に次のような子供の投稿が載りました。

「私のじてん車をどうか返して」

わたしのじてん車をかえしてください。わたしは今、小学二年生です。おこづかいと、おとしだまをためて買った、じてん車がなくなってしまいました。わたしのおうちのおにわに置いていたのになくなったので、びっくりしました。

やっと買った大すきなパンダのじてん車なので、とてもかなしくて、くやしいです。わたしのいえのちかくにおいておいてください。

どうか、わたしのじてん車をかえしてください。

本当におねがいします。 齊藤萌子(8歳) 小学生

女の子の悲しさ、悔しさが伝わってきます。自転車がなくなったことに気づいた時、どんなに驚いたことでしょう。それは、あるいは単なる悪戯のつもりだったのかも知れませんが、いとけない小さな心を深く傷つけ、恨みや憎しみさえもいだかせる大きな罪です。「これらの小さい者のひとりをして罪に誘惑するよりは、むしろ、ひきうすを首にかけられて海に投げ入れられた方が、ましである。あなたがたは、自分で注意していなさい。」との主の言葉が迫ります。

自分自身が誘惑に陥らないように注意するというだけではなく、他の人を躓かせるようなことがないように注意しなさいというのですが、主ご自身が弱く愚かな私たちに「罪の誘惑(あるいは躓き)が来ることは避けられない」と言っておられます。そうであるとすれば、どうすればよいのでしょうか？

あなたがたは、自分で注意していなさい。もしあなたの兄弟が罪を犯すなら、彼をいさめなさい。そして悔い改めたら、ゆるしてやりなさい。 (ルカ17:3)

その時、弟子たちの中に「自分にはどうしても兄弟を赦せない！」と思う者がいたようです。彼は「わたしたちの信仰を増してください」と主イエスに願いました。マタイによれば、それはペテロだったと言います。

そのとき、ペテロがイエスのもとにきて言った、
「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯した場合、
幾たびゆるさねばなりませんか。七たびまでですか。
イエスは彼に言われた、「わたしは七たびまでとは言わない。
七たびを七十倍するまでにしなさい。」 (マタイ18:21、22)

マタイによれば、主イエスはこのあと、多額の負債を赦されながら少額の貸金を取り立てた愚かな僕の譬を通して、互いに赦し赦されることの重要性を語られました(マタイ18:23-35)。その譬えに出てくる王の僕は、自分が一万タラント(邦貨にすれば六千億円！)の借金を赦されながら、仲間に対して自分が持つ百デナリ(百万円)の貸金を免除せず、彼を獄に入れてまで取り立てたのです。そのことを伝え聞いた王は怒りました。

そこでこの主人は彼を呼びつけて言った、『悪い僕、私に願ったからこそ、あの負債を全部ゆるしてやったのだ。私があわれんでやったように、あの仲間をあわれんでやるべきではなかったか』。そして主人は立腹して、負債全部を返してしまうまで、彼を獄吏に引きわたした。 (マタイ18:32-34)

主イエスは次のようにこの譬えを結んでいます。

**あなたがためいめいも、もし心から兄弟をゆるさないならば、
私の天の父もまたあなたがたに対して、そのようになさるであろう。(マタイ18・35)**

この僕は本当に愚かだと思いますが、他人事ではなく、実はこんなことがありました。新会堂が圧倒的恵みとして与えられた経緯は前回に証しましたが、そのすぐ後に、ある友人から「友だち価格で頼む」ということで、3枚の木彫りの看板製作を依頼されました。私の趣味が木工で、教会の看板なども自作したのを知っての頼みです。喜んで引き受け、私なりに心を込め、時間と労力を注いで製作し納入しました。代金は友人だから奮発し、3つで三千元位と考えていましたが、待てど暮らせど「幾ら払ったらいい？」との問い合わせが来ません。私は段々腹が立ってきました。

「友だち価格というのはタダでという意味だったのか！ それなら友だち辞めようか」とまで思い詰めました。しかし、ある日ディポーションで聖書を開くと、このマタイ伝の主の言葉でした。それは「おまえが三千元をどうしても赦さないのなら、新会堂を取り上げてもいいのか」という主の問いかけに聞こえたのです。私は自分が愚かな僕だったことを悟り、悔い改めの祈りをしました。罪という返済不能の巨大債務を赦されている者として、自分も赦すことの大事さを身に沁みて知った体験でした。

ところで、あの自転車を盗まれた女の子はその後どうなったかが気になっておられることでしょう。一ヶ月ほどたったある日、新聞に次のような投稿が載りました。

「わたしのじてん車 見つけたよ」

わたしの家のにわからわからなくなったパンダのじてん車が、とうとう見つかりました。きんじょの人が、わたしの家のちかくで見つけてくれました。
今、そのじてん車をいっぱいのみまわしてあそんでいます。とてもうれしいです。でも、じてん車をもっていった人は、わるいと思います。
じてん車は今、お父さんがくれたかぎで、じてん車おき場のはしらくくりつけています。だから、あんしんです。
みつけてくれたきんじょの人に、とてもかんしゃしています。
しんぶんを読んであげましてくれた人、ありがとうございます。

赦し赦されて生きるということの大切さは、「主の祈り」の中にもあります。

我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく、我らの罪をも赦し給え。

我らを試みにあわせず、悪より救い出し給え。

国と力と栄えとは限りなく、汝のもののなればなり。アーメン。

主イエスの言葉をもって結びとします。

もしあなたの兄弟が罪を犯すなら、彼をいさめなさい。

そして悔い改めたら、ゆるしてやりなさい。

もしあなたに対して一日に七度罪を犯し、そして七度

『悔い改めます』と言ってあなたのところへ帰ってくれば、

ゆるしてやるがよい」。 (ルカ17・2-3)

43. 「神の国はいつ、どこに」 (ルカ 17・20-37)

ある日の礼拝説教で私が「皆さん、天国に行きたいですか？」と尋ねたところ、「いらねワ！」と、ひととき大きな声で答えた人がいました。てっきり全員が「ハイ！」と言うだろうと思っていただけに驚きましたが、それは母親と一緒に出席していた発達障害の人でした。彼はその頃、大好きなお祖母ちゃんを亡くし、「天国に行く＝死ぬこと」と悲しみをもって実感していたので、「オレと母ちゃんは、いらねの」と重ねて言ったのです。しかしその彼も、やがてイエス様を救い主と信じ、「神様の子供になりたいですか？」という質問には「ハイ！」と答え、母ちゃんと一緒に受洗しました。

聖書の中で「天国」と「神の国」は同じ意味に使われており、今回の聖書箇所でも、パリサイ人は主イエスに「神の国はいつ来るのですか」と尋ねています。この質問にはその時代の背景があります。

当時イスラエルを占領していたのはローマ帝国でした。ローマは占領した各地の信仰の自由を認めてはいましたが、イスラエル人は神の民である自分たちを人間の帝国ローマが支配しているのが何とも不満でした。また、形式上は自治の形を取りながらローマの手先となって治めているヘロデ王家がユダヤ人ではなく、エドム人であることも不愉快なことでした。「神の国はいつ来るのか」という質問には、ローマの圧制を覆し、かつて栄華を誇っていたダビデ、ソロモンのようなユダヤ人の王国が回復されるのはいつなのか、という思いが込められていたのです。これに対して主イエスは次のように答えられました。

「神の国は、見られるかたちで来るものではない。

また『見よ、ここにある』『あそこにある』などとも言えない。

神の国は、実にあなたがたのただ中にあるのだ」 (ルカ17・20、21)

ここで主イエスは神の国について3つのことを答えています。一つは「かたち」についてであり、目に見えるかたちでは来ないということ。二つ目は場所について、ここにあつてあそこにはないというようなものではなく、その到来は全面的であること。三つ目に、人々の「ただ中」にあるということです。

しかし、パリサイ人の質問は「いつ来るのか」という「時」に関する質問でしたから、これについてはどうなのでしょう。実は主イエスはちゃんと答えておられるのです。「ただ中に《ある》」というのは文法的には現在形ですから、「既に来ていて、今現在ある」と語っておられるのです。ローマの圧制を覆すまでは決して神の国は来ない、と思っていたパリサイ人の考えとはまったく異なっていることが分かります。

では、主イエスが語っておられる神の国とはどのようなものなのでしょう。ここで「国」と訳されている言葉は「王として支配する」が語源ですから、「神の国」とは「神が王として支配するところ」という意味になります。そうとすれば、パリサイ派の律法学者たちは人間の目に見える王国の到来する時はいつですか？と尋ねたのに対して、神の子イエス・キリストの到来によって神の王権支配は既に確立している、ということを宣言したのです。しかし主イエスをキリストと認めない彼らにはそれが見えず、将来のこと、地上的なこととしか考えられなかったのです。

「神の王権支配」と言いましたが、「支配」という言葉に抵抗を覚える方がおられるかもしれません。しかし支配とは「支え配慮する」と書き、決して圧迫したり強制・束縛することではないのです。むしろ

王なる神様が私たちの全ての必要を知っておられ、支え配慮し最良のものをもって満たし導いてくださることを表している言葉だと思のです。次のような詩篇があります。

**主は王となられた。地は楽しみ、海に沿った多くの国々は喜べ。
雲と暗やみとはそのまわりにあり、義と正とはそのみくらの基
である。火はそのみ前に行き、そのまわりのあだを焼きつくす。
主のいなすまは世界を照し、地は見ておののく。もろもろの山は
主のみ前に、全地の主のみ前に、ろうのように溶けた。もろもろの
天はその義をあらわし、よろずの民はその栄光を見た。(詩篇97・1-6)**

パリサイ人ならずとも、私たちも地上での神の御支配だけを考えているとするなら、それは近視眼的です。主イエスは御自身の十字架と復活を見通し、さらに大きな時間的視野で神の国の到来を語られます。

**それから弟子たちに言われた、「あなたがたは、人の子の日を
一日でも見たいと願っても見ることができない時が来るであろう。
人々はあなたがたに、『見よ、あそこに』『見よ、ここに』と言うだろう。
しかし、そちらへ行くな、彼らのあとを追うな。いなすまが天の端から
ひかり出て天の端へとひらめき渡るように人の子もその日には同じ
ようであるだろう。
しかし、彼はまず多くの苦しみを受け、またこの時代の人々に
捨てられねばならない。そして、ノアの時にあったように、
人の子の時にも同様なことが起るであろう。(ルカ17・22-26)**

26節以降で、主は昇天後に御自身が再び来るとい「再臨」のことを語っておられます。再臨とはひとことと言うと「完成の時」であって、その時には三つのことが完成します。

(1) 神の国の完成

今はすべての人がキリストの支配を受け入れているわけではありませんが、再臨において神の御支配が究極の完成を見る時には「全ての口が『イエス・キリストは主である』と告白して父なる神が誉め讃えられます」(ピリピ2・10、11)。

(2) 救いの完成

最後の敵である死が滅ぼされ、キリストにある死者は朽ちないものに甦り、生きている信者はみな変えられます(第一コリント15・23 - 26、51、52)。

(3) 審判の完成

主イエスを「救い主」として迎えることのできなかつた人たちは「裁き主」と告白せざるを得なりませんが、キリストの言葉を聞いて信じる人は死から永遠の命に移っています(ヨハネ5・25-29)。

この完成の希望に満ちた信仰は決して失望に終わることがないことを、ある時「百万人の福音」に載った『ボク、ここにいるよ』という次のような記事に見ることができます。

『ボク、ここにいるよ』

ロジャーさん一家は、信仰心に篤い両親と、子ども三人の家庭です。
ある晩のこと。その日は末っ子のジミーが、自分がもらってる永遠の

いのちとはどんなものか話す番でした。七歳の彼はこう言いました。

「あのね、僕たちみんな、いつか天国の門のどこに行くでしょ。
そしたら、でっかい天使が出てきて、持っている本を開いて、
天国に入る人みんなの名前を呼ぶの。うちの家族のどこにも来て、
まず『お父さんはいますか？』と聞いたら、父さんが『ハイ、ここに
います』って答えるでしょ。つぎに天使が『お母さんは？』と
おっきな声で呼んだら、母さんも『ハイ』と返事するの。
それから天使はこっちにも来て、兄さんと姉さんの名前も呼ぶんだ。
二人とも『ハイ、ここでーす』と言うの」。

ジミーはそこで、大きく息を継いでから続けました。

「最後に、そのおっきな天使は『ジミー・ロジャーはいますか？』って、
僕の名前を呼ぶんだ。僕が小さすぎて天使に見えないといけないから、
僕、ジャンプしてすごく大きな声で、天使に分かるように『ハーイ』って言うんだ」

大事故が起こったのは、その数日後です。スクールバスに
乗り遅れそうになって急いで道を渡ろうとしたジミーが、
車と衝突したのです。救急病院に運び込まれ、家族全員が駆け
つけた時には、ジミーは重態でした。家族に囲まれてベッド
に横たわるジミーの体は動かず、意識もまったく戻りません。
医者たちは全力を尽くしましたが、どうすることもできず、
小さい命は、もう、翌朝までもちそうありませんでした。
家族は祈りつつ、片時もそばを離れませんでした。
真夜中近く、ジミーにほんの少し意識が戻ったような気配が
感じられました。みんながいつせいに枕元に顔を寄せた、その時、
ジミーの唇が動きました。それは、この地上の生涯で彼が最期に
残した、たった一つのことばでした。しかし、後に残された家族に
とって、それはなんと慰めと希望に満ちたことばだったことでしょう。
ジミーは、全員がそれと聞き取れるほどはっきりした声で、こう言ったのです。

「ハーイ」。

そして、ジミーは息を引き取りました。

私たちは自分の死の時がやがて来ることを知っていますが、あたかも永遠に来ないかのように、
今を過ごしがちです。聖書は神の御支配とその完成であるキリストの再臨の時があって、それは必
ずやって来ると言っています。そして、イエス・キリストを信じる人には、すでに永遠の命が与えられて
いるのです。目を覚まし、御心に生き、救いの福音とその希望を宣べ伝える者でありたいと思います。

44. 「針の穴を通るラクダ」 (ルカ 18・18-30)

グリム童話に「天国に行ったお百姓」という話があります。「昔々、貧しくて信心深い、一人のお百姓が死んで天国の門の前にやって来ました…」で始まるお話です。

そこへ一人の大金持ちもやって来た。すると天国の鍵を持っている聖ペトロ様が現れ、門を開けてその大金持ちだけを中に入れた。後に残されたお百姓が門の外で聞いていると、天国ではその金持ちの旦那が大歓迎を受けているとみえ、音楽や楽しい歌声が外まで響いてきた。やがてそれが止むと、また聖ペトロ様が出てきて、貧しいお百姓を中に入れてくれた。

そこで彼は、自分も大歓迎を受けるだろうと期待したところ、何も起こらず、天国はひっそりとしていた。確かにお百姓は優しく親切に受け入れられ、天使達が出迎えてくれた。しかし誰も歌をうたってくれなかったのである。

そこで貧しいお百姓は聖ペトロ様に尋ねた。「なんで、私が来た時にはあのお金持ちの旦那の時みたいに、歌を歌ってくれないんでしょう。どうやら天国でも下界同様、えこひいきがあるみたいですね」。

すると聖ペトロ様が言った、「いや、そうではないよ。お前さんは他のみんなと同じように愛されているし、あのお金持ちの旦那同様、ありとあらゆる天国の喜びにあずかっている。しかしなあ、お前さんのような貧しいお百姓は、毎日毎日この天国にやってくるのだが、ああいうお金持ちの旦那がここにやってくるのは、百年に一度くらいなんでねえ」

この童話にあなたは「そうか、じゃあ大金持ちじゃない私は大丈夫だ」と安堵するかもしれませんが。しかし、作家の曾野綾子さんは、以前に放送されたNHK教育のテレビ番組『現代に生きる聖書』で言っていました、「多くの国を旅してみても思うことは、日本は世界で一、二を争う夢の国だということです。だって、行き倒れの人でも救急車が病院まで連れていってくれるんですよ」。確かに、マザー・テレサも「人間にとって本当の飢えとは、ただ食べ物が無いことではありません。それは誰からも必要とされないこと、みんなからも見捨てられて路上に死んでいくことです」と言っています。そしてマザーはその生涯を、カルカッタの町で貧しい人々のために捧げたのです。こうしてみると、日本のように豊かな国は地球上にそう多くはないのでしょうか。

今回の聖書箇所で主イエスに「よき師よ、何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」(ルカ18・18)と質問した役人は、その富める資産によっても、心が満たされていなかったのではないのでしょうか。この時の様子はマルコの描写が実にこまやかです。

**イエスが道に出て行かれると、ひとりの人が走り寄り、
みまえにひざまずいて尋ねた、「よき師よ、永遠の生命を
受けるために、何をしたらよいでしょうか」。**

**イエスは言われた、「なぜわたしをよき者と言うのか。
神ひとりのほかによい者はいない。いましめはあなたの知って
いるとおりである。『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証を
立てるな。欺き取るな。父と母とを敬え』」。**

**すると、彼は言った、「先生、それらの事はみな、小さい
時から守っております」。** (マルコ10・17-20)

この役人は、通例「若い金持ちの青年」と呼ばれていて、単に富んでいただけではありません。若くして財産のみならず、名誉、地位など、ほとんどのものを持っていたばかりか、善行を積むにも熱心な青年だったことがうかがわれます。しかし、彼は主イエスの元に「走り寄り、みまえにひざまずいて尋ねた」ほどに、その心に霊的な飢え渴きを覚えていたのでしょう。

**イエスは彼に目をとめ、いつくしんで言われた、
「あなたに足りないことが一つある。帰って、持っている
ものを みな売り払って、貧しい人々に施しなさい。
そうすれば、天に宝を持つようになろう。そして、
わたしに従ってきなさい」。** (マルコ10・21, 22)

「彼に目をとめ、いつくしんで」を直訳すると「じっと彼を見つめ、彼を愛して」となり、この青年に対する主イエスのひとかたならぬ思いやりが伺われる描写です。しかし、青年は今自分が持っている「たくさん資産」を貧しい人々のために手放すことはできず、また主イエスの招きを受け容れることもできず「顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った」のでした。

**それから、イエスは見まわして、弟子たちに言われた、
「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことであらう」。弟子たちはこの言葉に驚き怪しんだ。イエスは
更に言われた、「子たちよ、神の国にはいるのは、なんと
むずかしいことであらう。富んでいる者が神の国にはいる
よりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」。** (マルコ10・23-25)

駱駝が針の穴を通るはずはありませんから、これは「不可能」を意味しているはずですが、うがち過ぎかも知れませんが、主イエスのこの譬えを聞いて、私は小学生の頃に工作でつくった「ピンホール・カメラ」のことを思い出すのです。ボール紙で作った箱に針で穴を開けると、箱の後ろに貼ったハロン紙に倒立の像が映る簡単なカメラです。この仕掛けを使えば、映像という形ではありませんが、駱駝は針の穴を通ることになります。像を結ぶには針の穴は小さくしなければなりません。大きすぎると像を結ばないので、まさに「狭き門」です。主イエスの時代にカメラはなかったので、主が譬えをこのような意味で語られたはずはありませんが、理解の手掛かりとすることはできないのでしょうか。

これを聞いた人々が、「それでは、だれが救われることができるのですか」と尋ねると、イエスは言われた、「人にはできない事も、神にはできる」。ペテロが言った、「ごらんなさい、わたしたちは自分のものを捨ててあなたに従いました」。イエスは言われた、「よく聞いておくれがよい。だれでも神の国のために家、妻、兄弟、両親、子を捨てた者は、必ずこの時代ではその幾倍もを受け、また、きたるべき世では永遠の生命を受けるのである」。 (ルカ18・26-30)

駱駝が針の穴を通ることができないのは、針の穴がとても小さいのに、駱駝が大き過ぎるからですが、これは地上のものへの執着の強さを表しているのでしょう。青年の心をよぎったかもしれない思いとはどのようなことなのかを考えてみましょう。

「…これらの財は決して、私が騙したり奪い取ったりしたものではない。私が労して得た財産が、なぜ永遠の命の妨げになるのか？ 私が額に汗して得たものをどうして、働きもしない貧しい者に与え尽かさなければならないのか。私が貧しい人に施したとて、感謝されるどころか豚に真珠になりかねない。彼らに私の財産を得るとどんな資格があるというのか…」

青年のみならず、私たちの中での執着である「らくだ」が巨大すぎるのです。ここでマザー・テレサの次の言葉を味わうことは針の穴を通る為の大きな助けになるのではないのでしょうか。

「気にすることなく」

人は、不合理、利己的です。

気にすることなく、人を愛しなさい。

あなたが善を行うと、利己的な目的でそれをしたと言われるでしょう。

気にすることなく、善を行いなさい。

目的を達しようとする時、邪魔立てする人に出会うでしょう。

気にすることなく、やり遂げなさい。

善の行いをして、おそらく次の日には忘れられるでしょう。

気にすることなく、し続けなさい。

あなたの正直さと誠実さが、あなたを傷つけるでしょう。

気にすることなく、正直で誠実であり続けなさい。

あなたの作りあげたものが、壊されるでしょう。

気にすることなく、作り続けなさい。

助けた相手から、恩知らずな仕打ちを受けるでしょう。

気にすることなく、助け続けなさい。

あなたの中の最良のものを、この世に伝えなさい。

蹴り返されるかもしれません。

でも気にすることなく、最良のものを与え続けなさい。

45. 「ザアカイ物語」 (ルカ 19・1-10)

それは春の熱い東風シロッコが吹く日のことでした。取税人のかしらザアカイがいつもより早く目を覚ましたのは、その暑さのせいだけではなく、ここ数日来聞いていた、メシヤの噂が気になって昨夜もよく眠れなかったのです。ガリラヤ出身の青年イエスがローマの圧制を覆す救い主メシヤかもしれないという噂が、彼の心に引っ掛かっています。そのイエスが来週行われる過越の祭を祝うためにエルサレムに上るとすれば、今日あたりこのエリコの町を通るはずでした。

ガリラヤからヨルダン川を渡って東岸を南下する荒野の道は、このナツメヤシの茂るエリコに至って、旅人が休憩するオアシスになるのです。イエスには自分と同業で旧知のマトイが心酔して取税人を辞め、その取り巻きの弟子たちに加わっているということを風の便りに聞いていました。

「ローマの威を借りたこんな実入りのよい取税人の仕事を辞めるとは…。マトイほどのやり手が一体どうしてそこまでしたんだろう。イエスは本当にメシヤなのだろうか。なんとか一度見てみたいものだ。ただ、ローマがいなくなったら俺はどうなる？まあ、そんなことを心配するより、まず仕事だ。」

ザアカイはそう独りごち、今日、税金を取り立てることになっている徴税者名簿に目をやると、真っ先に飛び込んできたのがシムシヨンの名。幼馴染みというよりも、小さい頃に「チビ！デブ！」と言って、事あるごとに自分をいじめたガキ大将の名前です。ザアカイは一瞬のうちに怒りと憎しみに満ちた復讐心が湧き起こるのを覚えました。

「アイツは俺の顔を見ると餌を見つけた野良犬のように走ってきて馬鹿にし、子どもと一緒にやってからかったんだ。誰だって好きでチビなわけじゃない。俺が生まれたとき親は大いに喜んで「清い子になれ、正しく生きろ」という願いを込めてザアカイという名をつけたそう。それを小さいときから何度も聞かされ、俺だってそうだろうと心がけていたんだ。だけどみんなの背文がドンドン伸びていくのに、俺だけはいつまでも伸びなかった。何とか背を伸ばそうと木に登ってぶら下がったり、人一倍飯も食ったが、俺の場合、栄養が縦にでなく横にばっかりいって、みんなからチビデブのザアカイと呼ばれるようになってしまった。悔しくて泣いてばかりいたが、俺はその時から『今に見ている、きついつかお前達を見返してやる！』と思っていた。だから、大人になってローマの役人が来て取税人の募集があったとき、俺は真っ先に応募した。奴らから税金をビシビシ取り立てて、馬鹿にされた仕返しをしてやろうと思ったんだ。どんなに、『ローマの手先』とか、『同胞の裏切り者』呼ばわりされたって構やしない。俺をイジメたアイツ等の方が悪いんだ。」

当時、ローマ帝国は徴税実務をローマ人が行うのではなく、占領地の住民から取税人を募集しました。そうすることによってローマへの直接的反感をかかわることができ、また事情に通じた現地の住民による方が徴税の実があがることを知っていたからです。そしてこの徴税権限の取得を入札制にしていたため、ローマへの納入金を最も高く入札した者から順に権利を取得することができることとなっていたのです。取税人としては、万が一税金を徴収できなかった場合は自分の負担となるので、それに備えて、徴収する税金は多めに集めておく必要がありました。この水増し徴税は必要悪と

してローマが黙認することでしたが、それを悪用して巨利を貪り、私腹を肥やす事が横行していたのです。彼らが罪人と同等に見なされ、社会的にさげすまれていたことはマタイ召命時の次のような記述にも表れています。

**さてイエスはそこから進んで行かれ、マタイという人が
収税所にすわっているのを見て、「わたしに従ってきなさい」
と言われた。すると彼は立ちあがって、イエスに従った。
それから、イエスが家で食事の席についておられた時の
ことである。多くの取税人や罪人たちがきて、イエスや弟子
たちと共にその席に着いていた。パリサイ人たちはこれを見て、
弟子たちに言った、「なぜ、あなたがたの先生は、取税人や
罪人などと食事を共にするのか」。(マタイ9:9-11)**

ザアカイもかつてのマタイに劣らぬほど徴税業務に励み、私腹も肥やしつつ、エリコでは並ぶ者が無いほどの税収を上げて、取税人のかしらになっていました。家も財産も何不足ない彼でしたが、一つだけ昔から欠けていたものがありました。それは心を打ち明けることの出来る真の友です。それだけは金で買うことのできるはずのものではありませんでした。もちろん彼の取り巻きとして遊女や遊び友だちはいつもたくさんいました。しかしそれがあくまで「金の切れ目が縁の切れ目」の関係であることは、彼自身が一番良く知っていたのです。

「本当の友がほしい。しかし恨みつらみの仕返しで生きている俺には叶っこ無い願望だな。ま、そんな子供染みた願いはしよせん俺には似合わないのさ。どうれ、今日は手始めにシムシヨンの所へ取り立てに行くとするか。容赦はしないぞ。」と、ザアカイが腰を上げた時のことです。通りが突然騒がしくなりました。

「イエスだ！ナザレのイエスが来るぞう」と誰かが走りながら叫んでいるのが聞こえます。ザアカイは反射的に駆け出し、中庭を通過して表に飛び出して行きました。通りには既にかなりの人垣ができています。「ヤッパリ今日来たんだ。何とか一目見たい。しかし、この人だかりは何だ？全然見えないじゃないか！」ザアカイは人垣に何とか割り込もうとするのですが、群衆はそれがザアカイだと分かる、日頃の恨みからこの時とばかりに「あっち行け、裏切り者のチビ！」と邪魔立てをして入れまいとします。押し問答に苛立ったザアカイが目を上げると、子供の頃から登り馴れたイチジク桑の木が目に入りました。「このままじゃ、通り過ぎてしまう…。エエイ！」と思った彼は、やおらその木に登り始めました。それを見た群衆から哄笑が湧き起こりました。「エーッ、誰だアイツは？ザアカイか。木登りなんて、気でも狂ったか。」しかし、この時を逃したら、あとはいつ再びチャンスが来るか分かりません。「この際、体面も世間体もクソ食らえだ！」と居直って、ザアカイはイエスとその一行が近づくのを高みの見物気分で眺めていました。

ほどなくイエス一行がその木の下に差し掛かりました。その時の様子をルカは次のように伝えています。

**イエスは、その場所にこられたとき、上を見あげて言われた、
「ザアカイよ、急いで下りてきなさい。きょう、あなたの家に
泊まることにしているから」。(ルカ19:5)**

「な、なんで俺の名前を知っているんだ?!」驚いたザアカイは木から転げ落ちそうになりました。やっとの思いで幹につかまり、気を取り直して「私の家にですかぁ?」と尋ねました。下の方でマタイが「オーイ、ザアカイ。久しぶりだなぁ。お前、一体そこで何やってるんだ。降りて来いよぉ」と手を振っています。

イエスはと見ると、優しい眼差しでザアカイを見上げています。緑多きガリラヤに吹き渡るようなその穏やかな笑顔に、ザアカイは思わず頬が赤らむ思いがしました。「この方がナザレのイエスなのか…。ザアカイは大人げない自分の所作に恥じ入りながら急いで木から降り、喜んでイエス一行を家に迎えました。しかし、そのとき街道を埋めていた群衆から大きな失望のため息と呟きが聞こえました。

「なんで、ザアカイの家なんだ。なんで、あんな同胞の裏切り者の家に行くんだよ。」

「しかも、行くだけじゃなくて、今晚泊まると言ってたぞ。」

「俺たちをローマから解放するメシヤかもしれないと期待していたのに…。結局、あのナザレのイエスも、単なる金持ち好きだったんだ。ガッカリだな。」

ルカはその時の人々の様子を、次のように伝えています。

人々はみな、これを見てつぶやき、「彼は罪人の家にはいつて客となった」と言った。(ルカ19・7)

人々の失望をしり目に、ザアカイはイエス一行を自宅に迎え、急に慌ただしくなりました。しかし召使いに宴会の用意一切を任せ、自分はこの千載一遇の機会を逃さぬよう、マタイとの旧交を温めるのもどかし、ナザレのイエスの語る言葉を一言も聞き漏らすまいと、その話に耳を傾けました。

イエスは宴会の席で放蕩息子の譬えを語られました。それは幼い頃から孤独だったザアカイの心に深く響き、放蕩三昧の末に取り巻きからも見放された彼の姿は、密かに自分が恐れていることをズバリと言い当てていて、その話は他人事には思えませんでした。そしてこの放蕩者の帰りを待つだけでなく、自分の所に来られたのがメシヤなるイエスであり、この方こそ長い間自分が渴仰していた真の友、いや、救い主なるキリストであることがはっきりと分かったのです。なぜなら、これまで自分ひとりに向けられていた非難・批判・言われなき差別などが、今やこの方が自分の家に来ることによって共に背負ってくださっていることがひしひしと分かったからです。「共に重荷を負って下さるこの方こそ私のメシヤ・キリストだ。なんと心強いことか。マタイは、だから取税人の仕事を捨ててこの方に従う者となったのだ。」ザアカイは自分自身を苦しめていた積年の復讐心から、次第に解放されていくのを覚えました。やがて、イエスが話し終えたとき、ザアカイは立ち上がって主にこう語りました。

「主よ、わたしは誓って自分の財産の半分を貧民に施します。

また、もしだれかから不正な取立てをしていましたら、

それを四倍にして返します」。イエスは彼に言われた、

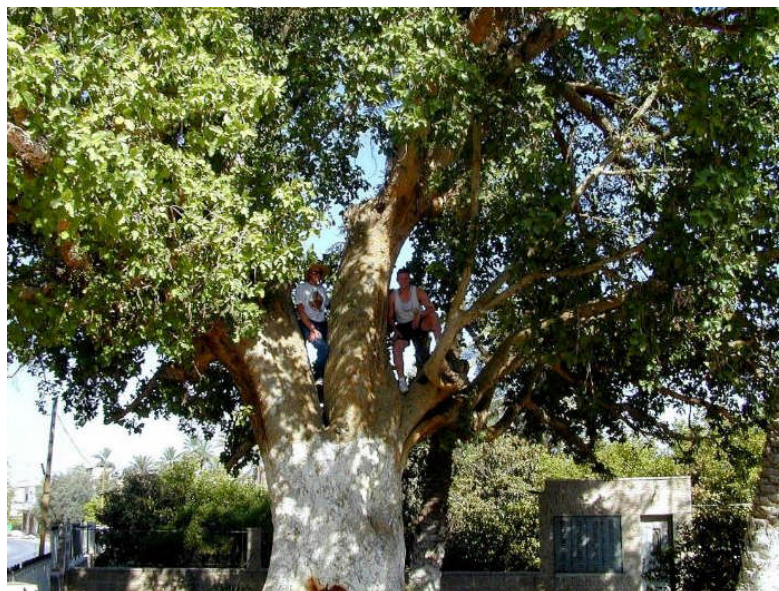
「きょう、救がこの家に来た。この人もアブラハムの子なのだから。

人の子がきたのは、失われたものを尋ね出して救うためである」。(ルカ19・8-10)

イエス一行がザアカイの家を発ったのは翌日の早朝でした。もはや見送りの群衆はいません。わずかにザアカイと彼にせかされて渋々門に立ったその家の召使だけが一行を見送りました。

人々はイエスに失望し、窓からのぞき見て「ほら、ごらんよ。偽メシヤがエルサレムに上って行く。フン、途中の崖から谷底に転げ落ちるなり、強盗にでも遭って殺されてしまえばいいんだ」と陰口を叩いていたのです。

翌週は過越の祭を祝う週であり、イスラエルの成人男子はできるだけエルサレムで、この祭を祝うことというのが定めとなっていました。エルサレムはエリコから峠の急な崖道を上った西30kmほどの距離にあります。ザアカイもなんとか祭に間に合わそうと、徴税業務や主に約束した貧しい人々への施し、それに不正取り立ての償いのため忙しい週を送りました。エリコの人々の反感のみならず、良心の咎めのゆえに、仕事は前よりも辛さを覚えるものとなっていました。中には彼の善行を喜ぶ者もいましたが、「何か魂胆があるんじゃないのか」との疑心から、冷ややかな目を向ける者のほうが多かったのです。それでもザアカイの心には自分が復讐心から解放され、主イエスによって新しい人間にされたという大きな喜びがありました。そして、自分も年度末の税務を終えてエルサレムに行き、できれば主イエスと過越の祭を祝いいたいと思っていました。彼は知らなかったのです。この過越こそ、神が御子イエス・キリストを贖いの子羊とし、大いなる御業をなさろうとしていることを。しかし、彼だけではありませんでした。再三の予告にもかかわらず、イエスの弟子たちでさえ、その意味を理解してはいなかったのです。



《ザアカイが登ったとされる木》

46. 「さあ、やってみなさい」 (ルカ 19:11-27)

平均的日本人が一生の労働から得る報酬はどのくらいになるかご存知ですか？およそ、一億五千万円ほどになるそうです。確かに成人男子の日当を平均一万円とすればそのくらいになる勘定です。その内の三千万円で家を買えば、返済には倍額の約六千万円が必要になるでしょう。しかし、もしあなたがこの六千万円をポンと任されて、「これで商売をみなさい」と言われたらどうしますか？

今回の主イエスの譬えに出てくる「ミナ」という貨幣単位は、現在の邦貨にすれば、約六千万円に相当する金額です。主イエスはこの法外なお金を譬えに使って、いったい何を語ろうとしておられるのでしょうか。実はこの譬え話は、主がまだザアカイの家にいる時に語られたことだったとルカは伝えています。

人々がこれらの言葉を聞いているときに、イエスはなお一つの譬をお話しになった。それはエルサレムに近づいてこられたし、また人々が神の国はたちまち現れると思っていたためである。

それで言われた、「ある身分の高い人が、王位を受けて帰ってくるために遠い所へ旅立つことになった。そこで十人の僕を呼び十ミナを渡して言った、『わたしが帰って来るまで、これで商売をみなさい』。

ところが、本国の住民は彼を憎んでいたので、あとから使者をおくって、『この人が王になるのをわれわれは望んでいない』と言わせた。(ルカ19:11-14)

ここで言われている「王」の就任とその帰国は、私たちに主イエスの再臨のことを指していると分かりますが、その場にいた人々は別のことを、しかも恐れをもって想い起こしたのではないのでしょうか。というのは、その約三〇年前にイスラエルに次のような事件が起きたからです。当時の歴史家ヨセフスは彼の本の中でこう記しています・

「ヘロデ大王が死去した。大王の遺言により、嗣子アケラオははるばるローマに上京し、皇帝の勅任を受けようとした。しかしユダヤ人はこれを好まず、むしろこの地がローマ領とならんことを強く求めて運動を展開した。」

やがて王位を受けて帰国したアケラオは反対者たちに対して血の粛清を行ったのです。エリコの町には、アケラオが建てた豪壮な宮殿が建っていました。主イエスはその宮殿を眺めながらこの譬えを語られたのかもしれませんが、主の譬えは続きます。

さて、彼が王位を受けて帰ってきたとき、だれがどんなもうけをしたかを知ろうとして、金を渡しておいた僕たちを呼んでこさせた。

最初の者が進み出て言った、『ご主人様、あなたの一ミナで十ミナをもうけました』。主人は言った、『よい僕よ、うまくやった。あなたは小さい事に忠実であったから、十の町を支配させる』。

次の者がきて言った、『ご主人様、あなたの一ミナで五ミナをつくりました』。そこでこの者にも、『では、あなたは五つの町のかしらになれ』と言った。

それから、もうひとりの者がきて言った、『ご主人様、さあ、ここにあなたの一ミナがあります。わたしはそれをふくさに包んで、しまっておきました。あなたはきびしい方で、おあずけにならなかったものを

取りたて、おまきにならなかったものを刈る人なのでおそろしかったのです』。

彼に言った、『悪い僕よ、わたしはあなたの言ったその言葉であなさをさばこう。わたしがきびしくて、あずけなかったものを取りたて、まかななかったものを刈る人間だと、知っているのか。では、なぜわたしの金を銀行に入れなかったのか。そうすれば、わたしが帰ってきたとき、その金を利子と一緒に引き出したであろうに』。そして、そばに立っていた人々に、『その一ミナを彼から取り上げて、十ミナを持っている者に与えなさい』と言った。

彼らは言った、『ご主人様、あの人は既に十ミナを持っています』。『あなたがたに言うが、おおよそ持っている人には、なお与えられ持っていない人からは、持っているものまでも取り上げられるであろう。しかしわたしが王になることを好まなかったあの敵どもをここにひっぱってきて、わたしの前で打ち殺せ』。

イエスはこれらのことを言ったのち、先頭に立ち、エルサレムへ上って行かれた。(ルカ19・15-28)

いかがですか。この譬え話を聞いてあなたの心には安堵感が残りましたか、それとも胸騒ぎがしましたか？もし胸騒ぎを感じたとすれば、それは主イエスの意図を正しく受けとめた事になると思います。ただし、次のことを心に留めていただきたいのです。

第43回目で述べたように、主の再臨目的には「審判」もありますが、その中心目的は「完成」であって、「救いの完成」と「神の国の完成」であるということです。しかし、完成させるのは私たちではありません。再臨の時に、主が完成させてくださるのです。

そうであるとするば、私たちは委ねられたミナをもってどのように生きるべきなのでしょう。この「ミナの譬え」は、マタイ伝では「タラントの譬え」(マタイ25・14-30)として語られています。

タラントも大きな貨幣単位であって、この言葉は英語のタラント(talent 才能)の語源になっています。才能も神様から戴く大きな賜物です。「私には何の才能も取り柄もなく…」と思われるのでしょうか？もしそうなら、あなたは「一ミナ」に嘆き、「一タラント」に不平・不満をいだく愚かな僕と同じ事になりはしませんか？覚えてください、主はその人の力量以上のものを要求する方ではなく、その成果如何にかかわらず、精一杯取り組んだ姿を見て、「**良い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ**」(マタイ25・21、23)と言って下さるお方です。

ですから、二つの譬え話の趣旨は「いま与えられているものを足らんと(タラント)不平を言うのではなく、さあやってみな(ミナ)さい」とも言えます。ここに、悔い改めたザアカイが新しい生き方に踏み出す勇気を得た秘訣を見ることができると思うのです。

私は小学生の頃、兄の指導でギターを始めました。やがて、大学でギタークラブに入り、一時はプロを目指そうと夢見たこともありましたが、音楽芸術の厳しさを知ってあきらめ、趣味として続けることにしました。また中学・高校とテニスをして、身の程知らずにプロスポーツマンに憧れたこともありましたが、自分の運動音痴を悟って余暇にとどめました。大学で法律学を学んだので、司法試験に何度か挑戦しましたが、合格することはありませんでした。その後、就職して働いている時、外国語を学

ぶ目的で通った教会で救われ、幾つかの困難もありましたが神学校に導かれ、いま牧師として働いています。

失敗し挫折したことはこの他にも沢山ありますが、ギターはいま教会の讃美奏楽に生きています。スポーツは健康管理に役立っており、法律も聖書理解の助けになっています。試みたこと全ては無駄にならず様々な形で役立っています。

主は私たちに譬えを通して、こうおっしゃっているのではないのでしょうか、「足らんと不平を言うよりも、勇気をもってやってみなさい。あとのことは私が完成する」と。主はそのような私たちの信仰を心から喜ばれるのです。たとえ今うまくゆかなくとも、完成させてくださるのは主です。主は再び来られて、私たちの挫折や涙をも喜びに変えてくださるお方だからです。

47. 「祝福される祈りの家」 (ルカ19・29-48)

「イーハトーブ」と言えば、岩手が生んだ作家・宮沢賢治が自分の作品の中で「理想郷」に与えた名前として知られています。しかしその語源は花巻にある記念館で尋ねてもはっきりしませんでした。諸説の中では「岩手」の歴史的仮名遣い「いはて」をもじって作られたというのが有力とされているようです。しかし、私は神学校でヘブル語を学んでから、これは「美しの都」エルサレムを意味する「ハイール ハトーヴァ」も可能性があるのではないかと思うようになりました。語頭の「ハ」は定冠詞であり、「ル」は流音なのでいずれも私たち日本人には聞き取りにくい弱音です。その結果「イー ハトーヴ」と聞こえるからです。事実、賢治は「イーハトーヴ」「イーハトーボ」など幾つかの異なった表記をしています。

宮沢賢治は法華宗徒だったとされていますが、科学や音楽のほか、様々な事柄に通じており非常に射程の広い人でした。彼は盛岡高等農林一年生の頃、盛岡バプテスト教会の聖書研究会に参加しており、ヘンリー・タッピング宣教師家族との親交がありました。また賢治の有名な作品「雨ニモマケズ」のモデルは、お寺の息子でありながらクリスチャンとなった友人の斎藤宗次郎だったと言われています。そうとすれば、賢治がエルサレムの別名である「ハイール ハトーヴァ」を知って自分の作品に取り込んだ可能性もあることになります。

さて、その美しの都エルサレムの町にイエスとその一行が入城するところから今回の聖書箇所は始まります。

イエスはこれらのことを言ったのち、先頭に立ち、エルサレムへ上って行かれた。そしてオリブという山に沿ったベテパゲとベタニヤに近づかれたとき、ふたりの弟子をつかわして言われた、「向こうの村へ行きなさい。そこにはいったら、まだだれも乗ったことのないろばの子がつかないのを見るであろう。それを解いて、引いてきなさい。もしだれかが『なぜ解くのか』と問うたら、『主がお入り用なのです』と、そう言いなさい」。そこで、つかわされた者たちが行って見ると、果して、言われたとおりであった。(ルカ19・28-32)

オリブ山と呼ばれるなだらかな丘を登りきってその頂に立つと、眼下にエルサレムの町が広がります。この町は明け方にはオリブ山に遮られてその影の中にあるのですが、陽が昇るにつれてその姿を上部から徐々にあらわします。その有様はまさしく「美しの都」という言葉通りで、荘厳さを覚えるほどに感動的です。ダビデの町を左手に控え、また陽光に輝く黄金門を中央にして、そびえる城壁に囲まれた姿にはいかめしさはなく、むしろ町全体が神殿のあるシオンの丘を中心にして、鳥が羽を休めているような印象さえ受けます。この町に馬で入城するのは戦いの武将ですが、平和の王は口バに乗って来るのです。紀元前五〇〇年頃に書かれたとされるゼカリヤ書に次のような預言があります。

シオンの娘よ、大いに喜べ、エルサレムの娘よ、呼ばわれ。見よ、あなたの王はあなたの所に来る。彼は義なる者であって勝利を得、柔和であって、ろばに乗る。すなわち、ろばの子である子馬に乗る。わたしはエフライムから戦車を断ち、エルサレムから軍馬を断つ。また、いくさ弓も断たれる。彼は国々の民に平和を告げ、

その政治は海から海に及び、大川から地の果にまで及び。(ゼカリヤ9・9、10)

この預言がまさしく、今イエス・キリストに成就したのです。人々がこの平和の君を「ホサナ」と叫んで迎えた様子をマタイが伝えます。

弟子たちは出て行って、イエスがお命じになったとおりにし、ろばと子ろばとを引いてきた。そしてその上に自分たちの上着をかけると、イエスはそれにお乗りになった。

群衆のうち多くの者は自分たちの上着を道に敷き、また、ほかの者たちは木の枝を切ってきて道に敷いた。そして群衆は、前に行く者も、あとに従う者も、共に叫びつづけた「ダビテの子に、ホサナ。主の御名によってきたる者に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ」。(マタイ21・6-9)

「ホサナ」というのは本来「私たちをお救い下さい」という意味ですが、当時は凱旋する王を迎える言葉として使われていました。しかし、平和を告げるはずのキリストは朝日に輝く「美しの都」エルサレムを見て次のように嘆き、涙を流されたのです。

いよいよ都の近くにきて、それが見えたとき、そのために泣いて言われた、「もしおまえも、この日に、平和をもたらす道を知ってさえいたら……しかし、それは今おまえの目に隠されている。いつかは、敵が周囲に壘を築き、おまえを取りかこんで、四方から押し迫り、おまえとその内にいる子らとを地に打ち倒し、城内の一つの石も他の石の上に残して置かない日が来るであろう。それはおまえが神のおとずれの時を知らないでいたからである」。(ルカ19・41-44)

いったい何がエルサレムを滅びに追いやるのでしょうか。次に起きたことからそれをうかがうことができます。その時の様子をマルコが詳しく伝えています。

それから、彼らはエルサレムにきた。イエスは宮に入り、宮の庭で売り買いしていた人々を追い出しはじめ、両替人の台や、はとを売る者の腰掛をくつがえし、また器ものを持って宮の庭を通り抜けるのをお許しにならなかった。そして、彼らに教えて言われた、「『わたしの家は、すべての国民の祈の家となえらるべきである』と書いてあるではないか。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巢にしまった」。

祭司長、律法学者たちはこれを聞いて、どうかしてイエスを殺そうと計った。彼らは、群衆がみなその教に感動していたので、イエスを恐れていたからである。(マルコ11・15-18)

「両替人の台や、はとを売る者の腰掛をくつがえし…」とは、平和の君として来られた方に似つかわしくない狼藉と思われるかもしれませんが、覚えておられるでしょうか。迷子になったと思われた十二歳の少年イエスが神殿で発見されたとき両親に言った言葉、「なぜ捜したの。ぼくがお父さんの家〔神殿〕にいるって、わからなかったのかなあ」(ルカ2・49、リビング訳)。主イエスにとって、エルサレム神殿は幼い頃から父なる神の家であり、そこは神聖な「祈りの家」だったのです。ところが当時の神殿は権力者たちによって、現代流の表現で言えば利権と癒着した喧噪に満ちた商売の場となり果てていたのです。

主イエスのこうした嘆きは、実は古来預言者たちによって度々警告され続けてきたことだったので。たとえば、預言者エレミヤは偶像崇拜と罪に走る人々に次のように警告しています。

**わたしの名をもって、となえられるこの家に来てわたしの前に立ち、
『われわれは救われた』と言い、しかもすべてこれら憎むべきことを
行うのは、どうしたことか。わたしの名をもって、となえられるこの家が、
あなたがたの目には盗賊の巣と見えるのか。わたし自身、そう見たと
主は言われる。(エレミヤ7・10、11)**

エレミヤを通して語られた言葉は、まさしく主イエスの言葉と同じであり、悲痛の嘆きと憤りをもって平和の君は宮清めをなされたのです。では彼らは、また私たちはどのようにすれば、主の嘆きや憤りではなく、祝福を受けることができるのでしょうか。それは主イエスが「祈りの家」という言葉を引用した預言者イザヤの言葉がはっきりと示しています。

**「主に連なり、主に仕え、主の名を愛し、そのしもべとなり、すべて
安息日を守って、これを汚さず、わが契約を堅く守る異邦人は
わたしはこれをわが聖なる山にこさせ、わが祈りの家のうちで
楽しませる、彼らの燔祭と犠牲とは、わが祭壇の上に受けいれ
られる。わが家はすべての民の祈りの家となえられるからである」。
イスラエルの追いやられた者を集められる主なる神はこう言われる
「わたしはさらに人を集めて、すでに集められた者に加えよう」と。(イザヤ 56・6-8)**

古代イスラエルの人々に、安息日を守り神殿を祈りの家とすることを求めた神は、現代の私たちにも、日曜礼拝を守り教会を共に集う祈りの家とすることを求めておられます。そして主は豊かな恵みをもって祝福し、「わたしはさらに人を集めて、すでに集められた者に加えよう」と約束してくださっています。これこそが「美しの都」に立つ「祝福された祈りの家」なのです。スカルの井戸で主がひとりの女性に語った次の言葉は、このことを示していたのだと思うのです。

**「わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが、この山でも、
またエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。
あなたがたは自分の知らないものを拝んでいるが、私たちは
知っているかたを礼拝している。救はユダヤ人から来るから
である。しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊とまこととを
もって父を礼拝する時が来る。 そうだ、今きている。
父は、このような礼拝をする者たちを求めておられるからである。
神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまこととをもって
礼拝すべきである」。(ヨハネ4・21-24)**

48. 「キリストの権威」 (ルカ 20・1-26)

ジレンマということがあります。「あちら立てれば、こちら立たず」ということで、例えば、手元に百円玉一つしかないのに、目の前に百円のお菓子とキャンディが並んでいて、一方を買えば他方が買えなくなるので、二者択一を迫られるというような場合です。エルサレムに入城した主イエスが神殿で教えていたことに難癖をつけた権力者達が、逆に質問されてジレンマに陥ったことが書かれています。

ある日、イエスが宮で人々に教え、福音を宣べておられると、祭司長や律法学者たちが、長老たちと共に近寄ってきて、イエスに言った、「何の権威によってこれらの事をするのですか。そうする権威をあなたに与えたのはだれですか、わたしたちに教えてください」。

そこで、イエスは答えて言われた、「わたしも、ひと言たずねよう。それに答えてほしい。ヨハネのバプテスマは、天からであったか、人からであったか」。

彼らは互に論じて言った、「もし天からだと言え、では、なぜ彼を信じなかったのか、とイエスは言うだろう。しかし、もし人からだと言え、民衆はみな、ヨハネを預言者だと信じているから、わたしたちを石で打つだろう」。それで彼らは「どこからか、知りません」と答えた。

イエスはこれに対して言われた、「わたしも何の権威によってこれらの事をするのか、あなたがたに言うまい」。(ルカ20・1-8)

主イエスの胸のすくような返答ですが、これを根に持った律法学者や祭司長たちは、後で仕返しをしようと陰險な策を練り、主イエスをジレンマに陥れようとしたことが21節以下に書かれています。

彼らは尋ねて言った、「先生、わたしたちは、あなたの語り教えられることが正しく、また、あなたは分け隔てをなさらず、真理に基いて神の道を教えておられることを、承知しています。ところで、カイザルに貢を納めてよいのでしょうか、いけないのでしょうか」。

イエスは彼らの悪巧みを見破って言われた、「テナリを見せなさい。それにあるのは、だれの肖像、だれの記号なのか」。「カイザルのです」と、彼らが答えた。するとイエスは彼らに言われた、「それなら、カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」。

そこで彼らは、民衆の前でイエスの言葉じりを捕えることができず**その答えに驚嘆して、黙ってしまった**。(ルカ20・21-26)

もし「ローマ皇帝カイザルに税金を納めてはいけない」と言えばローマへの叛逆になるでしょうし、反対に、「納めるべきだ」と言えばローマの支配に不満を抱いているユダヤ人の反感と失望を招くというジレンマに追い込む為の悪巧みだったのです。しかし「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」と主イエスは快刀乱麻を断つ返答をされたのでした。

ところで、この二つのジレンマ論争の間に、一つの譬え話が挟まれています。実はこの譬えが三つの出来事全体を貫く主題である「権威の所在」ということをはっきりと示しているのです。つまり、祭司長にではなく、ローマ皇帝にでもない、キリストにこそ権威があるということです。では、その譬え話を聞きましょう。

「ある人がぶどう園を造って農夫たちに貸し、長い旅に出た。季節になったので、農夫たちのところへ、ひとりの僕を送ってぶどう園の収穫の分け前を出させようとした。ところが、農夫たちは、その僕を袋だたきにし、から手で帰らせた。そこで彼はもうひとりの僕を送った。彼らはその僕も袋だたきにし侮辱を加えて、から手で帰らせた。そこで更に三人目の者を送ったが、彼らはこの者も、傷を負わせて追い出した。

ぶどう園の主人は言った、『どうしようか。そうだ、私の愛子をつかわそう。これなら、たぶん敬ってくれるだろう』。

ところが、農夫たちは彼を見ると、『あれはあと取りだ。あれを殺してしまおう。そうしたら、その財産はわれわれのものになるのだ』と互に話し合い、彼をぶどう園の外に追い出して殺した。

そのさい、ぶどう園の主人は、彼らをどうするだろうか。彼は出てきて、この農夫たちを殺し、ぶどう園を他の人々に与えるであろう」。人々はこれを聞いて、「そんなことがあってはなりません」と言った。 (ルカ20・9-16)

この譬え話を聞いた人々は、殺された僕たちというのが歴代の預言者たちだということは分かったとしても、殺された跡取りである愛子が主イエスであって、それが数日後に起きる十字架を指しているとは思ってもよらなかったはずだ。しかし、主イエスはこの譬え話に続けて次のように語られたのです。

そこで、イエスは彼らを見つめて言われた、「それでは、『家造りらの捨てた石が隅のかしら石になった』と書いてあるのは、どういうことか。すべてその石の上に落ちる者は打ち砕かれ、それがだれかの上に落ちかかるなら、その人はこなみじんにされるであろう」。 (ルカ20・17、18)

ここで主が引用しているのは、詩篇118篇ですが、それは次のような讃歌の一部です。

わたしは死ぬことなく、生きながらえて、主のみわざを物語るであろう。主はいたくわたしを懲らされたが、死にはわたされなかった。わたしのために義の門を開け、わたしはその内にはいつて、主に感謝しよう。これは主の門である。正しい者はその内にはいるであろう。わたしはあなたに感謝します。あなたがわたしに答えて、わが救となられたことを。家造りらの捨てた石は隅の頭石となった。これは主のされた事でわれらの目には驚くべき事である。(詩篇118・17-23)

明らかにキリストの受難とその勝利の復活が預言されています。「家造りらの捨てた石は隅のかしら石となった」というのは、建築の際に不要として捨てられた形のいびつな石が「隅の土台石」になったとするのが従来の解釈でした。しかし最近の研究で、アーチの最上部にはめられて、門をしっかりと組み上げるために必要不可欠な楔形の頭石を指すことが分かってきました。確かに詩篇118篇では「これは主の門である。正しい者はその内にはいるであろう」と歌われています。門を構成する一つ一つの石が、たとえどんなに素晴らしく、また豪華に装飾されたものであったとしても、この頭石がなければアーチは組み上がりません。これはキリストの体である教会をさしているということができます。すべての人々を巧みに組み合わせて美しく堅固な門を構成することを可能にしている頭石なるキリストこそ、私たちが共に戴いている権威であり、仰ぎ見るべきお方なのです。詩篇はさらに次のように続きます。

これは主が設けられた日であって、われらはこの日に喜び楽しむであろう。主よ、どうぞわれらをお救いください。主よ、どうぞわれらを榮えさせてください。主のみ名によってはいる者はさいわいである。われらは主の家からあなたをたたえます。 (詩篇118・24-26)

主イエスは最初にご自分を門にたとえ、次に羊飼にたとえて語られたとヨハネが伝えています。

わたしは門である。わたしを通過して入る者は救われる。その人は門を出入りして牧草を見つける。盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしが来たのは羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。 (ヨハネ10・7-11)

私はある時、この聖書箇所から、「牧師の使命とは何なのだろう？」と考えあぐねたことがありました。主イエスが私たちをしっかりと結び合わせる頭石であって、良き羊飼いなる牧者。それなら人間である牧師の役割は一体何なのか？と疑問に思ったのです。教会に集う人々はしばしば牧場の羊に譬えられる。この羊のために御自身の命をも惜しまずに投げ出したのは羊飼なるイエス・キリスト。だからこの方にこそ権威がある。すると牧師とはいったい何者なのか…。

暫く考えているうちに、「羊飼」を意味する英語のシェパード(**shepherd**)が「牧師」という意味にも使われていることを思い出しました。そして「主イエスがシェパードなら、牧師はシェパード犬と言えるのではないか」と思い至って平安を得ました。シェパード犬は牧場の羊を守るために羊飼いに忠実に仕えて働く使命を与えられているということが分かって喜びが湧いてきたのです。やがて私たちの教会の入口に看板を掲げようということになった時、シンプルに『キリストの教会』としました。私たちの頭石なる羊飼いはイエス・キリストおひとりであって、教会はこの方にのみ権威を戴くからです。主イエスはさらに次のように語られたとヨハネが伝えています。

わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。

わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。

わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛して下さる。だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。

これは、わたしが父から受けた掟である。」(ヨハネ10・14-18)



49.「生きている者の神」(ルカ20・27-40)

「 $A=B$ 、 $B=C$ 、ゆえに $A=C$ 」は「三段論法」と呼ばれますが、これをもじってある人が次のような三段論法(?)を作りました。「私は人である」→「私は牧師ではない」→「ゆえに、牧師は人でなし…」。
そ、それはないでしょう！

一体どういう時に正しい論法が成り立つのかということの研究するのが論理学だと聞いたので、少しでもまともな考え方ができるようにと、クラスを取ったことがあります。記号を使うのでとても難しく感じました。ある時の授業で「ゲーデルの不完全性定理」ということを習いました。説明が超難解で戸惑っていると、教師が「要するに、ゲーデルは《証明できなくても真理は真理》ということを実証したので」と言うのを聞いて安心しました。

なぜここで論理学なのかと言いますと、この聖書箇所「復活」を巡ってサドカイ派の人々が主イエスを攻撃するために取った論法が「帰謬法(きびゅうほう)」という論理なのです。というのは、彼らの意図が「復活があると仮定すると、次のような不合理が起きるので、復活など有り得ない」とすることにあったからです。ではサドカイ派の言う不合理とは何なのでしょう？

復活ということはないと言い張っていたサドカイ派のある者たちが、イエスに近寄ってきて質問した、「先生、モーセは、わたしたちのためにこう書いています、『もしある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだなら、弟はこの女をめとって、兄のために子をもうけねばならない』。ところで、ここに七人の兄弟がいました。長男は妻をめとりましたが、子がなくて死に、そして次男、三男と、次々に、その女をめとり、七人とも同様に、子をもうけずに死にました。のちに、その女も死にました。さて、復活の時には、この女は七人のうち、だれの妻になるのですか。七人とも彼女を妻にしたのですが」。(ルカ20・27-32)

古代ユダヤには、結婚した兄が子供を残さずに死んだ場合、弟が兄の妻と結婚して子孫を残さなければならないとする律法があり(申命記25・5-10)、「レビラート婚」(ラテン語 **levir** は「夫の弟」の意味)と呼ばれています。しかし、これは日本にもあり「嫂婚法(そうこんほう)」(=兄嫁婚法)と呼ばれます。

実際に、私の父がそのような弟でした。太平洋戦争で夫を失った母の元には五人の子供が残されたので生活にひどく困窮していましたが、シベリア抑留から生還した弟が母と結婚し、私が生まれました。これは厳密な意味のレビラート婚ではないのですが、戦争によって、このようなことが多く起きたと聞きます。もし私が「復活の時、私の母はどちらの妻なのでしょう？」と尋ねるなら、サドカイ派の人々と同じように、主イエスに叱られることでしょう。というのは、マタイ伝には次のような主イエスの答えが記されているからです。

「あなたがたは聖書も神の力も知らないから、思い違いをしている。復活の時には、彼らはめとったり、とついたりすることはない。」

彼らは天にいる御使のようなものである。

また、死人の復活については、神があなたがたに言われた言葉を
読んだことがないのか。」 (マタイ22・29-31)

ルカはこの時の答をもっと詳しく伝えていきます。

「この世の子らは、めとったり、とついだりするが、かの世にはいって
死人からの復活にあずかるにふさわしい者たちは、めとったり、
とついだりすることはない。彼らは天使に等しいものであり、
また復活にあずかるゆえに、神の子でもあるので、もう死ぬことは
あり得ないからである。

死人がよみがえることは、モーセも柴の篇で、主を『アブラハムの神、
イサクの神、ヤコブの神』と呼んで、これを示した。神は死んだ者の
神ではなく、生きている者の神である。人はみな神に生きるもの
だからである」。 (ルカ20・34-38)

主イエスはサドカイ派の「復活はない」という主張に対して、「ある」ということを直接に論証していません。それは論証の問題ではなく実証の事柄だからです。実際、この数日後、主ご自身の十字架と復活という事実によって明白になる事柄であり、論証しなくても真理は真理だからです。しかし、主イエスは話をはぐらかしているのではなく、また冷たく突き放しているのでもありません。むしろ、『**アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である**』との御言を引用して、これが死人のよみがえりを示していると言っているのですが、それはどのような意味なのでしょう？

引用されているのは、燃える柴の所でモーセを出エジプトの指導者として召命するため、主なる神が御自身を名乗られた時の語りかけです(出エジプト3・6)。入念に「…の神」が三度繰り返され、しかも「神であった」ではなく、「神である」と言明されました。その意味は、アブラハム・イサク・ヤコブは遙か昔に死に絶えた先祖なのではなく、主なる神のもとで今も生きていること。そして彼らに命を与え、守り、導き、用いた神は永遠に生きて働いており、今度は八〇歳になるまで死んだような生活をしてきたモーセを活かし用いるとおっしゃっているのです。しかし、モーセだけではありません。ここにあなたの名前を入れてみてください、「わたしは**アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。そして(あなたの名前)の神である!**」。なんと力強い主なる神の宣言ではありませんか。

主イエスは「**死人からの復活にあずかるにふさわしい者たちは…神の子でもあるので、もう死ぬことはあり得ない**」と言われましたが、どのような人が復活にふさわしく永遠の命を持つ者とされるのでしょうか？それは兄弟ラザロの死を悲しむマルタに向かって言われた主の言葉の中に明かです。

イエスはマルタに言われた、「**あなたの兄弟はよみがえるであろう**」。

マルタは言った、「**終りの日のよみがえりの時よみがえることは、存じています**」。

イエスは彼女に言われた、「**わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者はいつまでも死なない。あなたはこれを信じるか**」。

マルタはイエスに言った、「**主よ、信じます。あなたがこの世にきたるべきキリスト、神の御子であると信じております**」。 (ヨハネ11・23-27)

イエスを救い主・キリストと信じる人はたとえ死んでも生きる、なぜなら、永遠の生命を受けているからだと言われたのです。

50. 「感謝の献げ物」 (ルカ21・1-4)

ある有名なカトリック作家がテレビで「金銭について語る宗教は偽物だと思います」と語っていました。けれども福音書を読むと、主イエスはお金に関してかなりの回数に亘って語っています。思いつくまま挙げるだけでも、タラントの譬(マタイ18・24)、ミナの譬(ルカ19・13)、豊作に奢る金持の農夫(ルカ12・15)、金持の青年(ルカ18・23)、ラザロと金持(ルカ16・19)、「金と富とに兼ね仕えることはできない」(マタイ6・24)、雀とアサリオン硬貨(マタイ10・29)、魚の口から出た銀貨で納税した話(マタイ17・27)、カイザルの肖像が彫られたデナリ硬貨(マルコ12・15)等々。そして今回のレプタ硬貨の献金もその一つです。

私たちはともすれば「お金は汚れたもの」という思いを持ちながら、実際にはそれに振り回されているということがありはしないでしょうか。主イエスはそのような弱い現実の私たちをよくご存知です。しかも、神殿における律法学者たちとの度重なる論争で緊張が高まる中、迫り来る十字架に挟まれたこの僅か数行のさり気ないエピソードを通して、福音書記者ルカは、主が語られた私たちへの祝福に関わる重要な何かを伝えようとしているのです。

**イエスは目をあげて、金持たちがさいせん箱に献金を投げ入れるのを見られ、
また、ある貧しいやもめが、レプタ二つを入れるのを見て言われた。**(ルカ21・1、2)

主イエスも弟子たちと一緒に神殿に詣で、献金を捧げて祈り、目を上げた時のことなのでしょう。口語訳では「さいせん箱」と訳されていますが、漢字の「賽」には「神仏の恵みに報いる」という意味があります。また「投げ入れる」とありますが、当時、エルサレム神殿には青銅製の大きな角笛型の献金箱が十三もあったと言われ、まさしく「投げ入れる」のが通例だったのです。通用貨がコインだったので、青銅製の賽銭箱に当たってけたたましい音が響いていたことでしょう。そればかりか、ある聖書註解者によれば、神殿の祭司は金持からの献金を受け取って「ガリラヤの…様、御献金～デナリ！」などと大音声を発しながら投げ入れていたというのですから呆れ果てた当時の神殿の有様でした。

そのような中で、ある貧しい寡婦がレプタ硬貨二つを捧げました。レプタは最小額の銅貨で、デナリの一八分の一に相当したといえますから、デナリを一万円としても百円前後の金額です。主イエスはその様子を見て次のように言われました。

**「よく聞きなさい。あの貧しいやもめはだれよりもたくさん入れたのだ。
これらの人たちはみな、ありあまる中から献金を投げ入れたが、あの婦人は、
その乏しい中から、持っている生活費全部を入れたからである」。**(ルカ21・3、4)

主イエスはこの婦人の何を賞讃されたのでしょうか？もちろん「その乏しい中から、持っている生活費全部を入れたから」ですが、それならあなたも同じようにできるでしょうか？あるいは、同じようにしなければ主からの祝福を受けられないのでしょうか？こう考えてくると、単なる美しい話として読むにはよいとしても、とても厳しい内容を含んでいます。

聖書には神様への捧げものについての記述が多くあり、その最も詳しいものは旧約聖書のレビ記にあります。「全焼の捧げもの」(1章)、「穀物の捧げもの」(2章)、「和解の捧げもの」(3章)、「罪のための捧げもの」(4章)、「罪過のための捧げもの」(5章)、「誓願の捧げもの」(27章)。そして、旧約聖書最後のマラキ書には主なる神の次のような言葉が記されています。

**人は神の物を盗むことをするだろうか。しかしあなたがたは、
わたしの物を盗んでいる。あなたがたはまた『どうしてわれわれは、
あなたの物を盗んでいるのか』と言う。**

十分の一と、ささげ物をもってである。あなたがたは、
のろいをもって、のろわれる。あなたがたすべての国民は、
わたしの物を盗んでいるからである。

わたしの宮に食物のあるように、十分の一全部をわたしの倉に
携えてきなさい。これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を
開いて、あふるる恵みを、あなたがたに注ぐか否かを見なさいと、
万軍の主は言われる。

わたしは食い滅ぼす者を、あなたがたのためにおさえて、あなたがたの
地の産物を、滅ぼさないようにしよう。また、あなたがたのぶどうの木が、
その熟する前に、その実を畑に落すことのないようにしようと、万軍の主は
言われる。こうして万国の人は、あなたがたを祝福された者となえるであろう。

あなたがたは楽しい地となるからであると、万軍の主は言われる。(マラキ3・8-12)

神様は私たちに持ち物の全部を捧げるようにと求めてはられません。十分の九は心のままに使
い、その十分の一を感謝をもって捧げる人に溢れる恵みを注ぐと言っておられます。これは主なる神
が言われるのですから、この上なく確かな祝福の約束です。

しかし、そもそも天地万物を無から創造された神様は全てのものの所有者であって、私たちの捧
げ物がなければ貧しくなるようなお方ではありません。また人間の捧げ物によって富むということも
ないはずで。どうして神様は私たちに捧げ物を求められるのでしょうか。それは身近な例をとれ
ば、次のようにも言えるのではないかと思うのです。

我が家ではペットに小鳥を飼っています。飼い主としてペットから学ぶこと、考えさせられることが
多々あります。たとえば、野鳥ならその生涯のほとんどの時間を餌探しに費やしているのですが、
ペットはその必要がないので、いつも飼い主を見上げ、その心を飼い主に集中しています。信仰のあ
るべき姿を学ばされる思いです。そんな愛おしい小鳥のために、毎朝ケージをきれいに掃除し、いつ
も十分な食べ物を備えるのは私の役目です。彼らにとって餌はもっとも大切なものですが、だから
といって私に感謝してその一部をくれたとしたらどうでしょうか？私は微笑んで「ありがとう。でも気
持ちだけで嬉しいよ。それはあなたにあげたものだから、食べていつも元気でいなさい。」と言うでしょう。

ところが、もし一羽の小鳥が餌を独占し、他の鳥が食べるのを邪魔するようになったらどうでしょうか。
飼い主は「これはみんなが一緒に食べるようにと私が与えたものだ」と言って分かち合うようにさせ
るでしょう。それでも独り占めしようとするなら、その鳥は別のケージに離されることになるはずで
す。飼い主は小鳥たちが互いに助け合いつつ愛し合うことを望んでいるように、私たちが互いに愛し合
うことを求めておられるのではないのでしょうか。パウロもコリント教会の人々に次のように書き送っています。

**神はあなたがたにあらゆる恵みを豊かに与え、あなたがたを
常にすべてのことに満ち足らせ、すべての良いわざに富ませる
力のあるかたなのである。「彼は貧しい人たちに散らして与えた。
その義は永遠に続くであろう」と書いてあるとおりである。
種まく人に種と食べるためのパンとを備えて下さるかたは、
あなたがたにも種を備え、それをふやし、そしてあなた方の
義の実を増して下さるのである。こうして、あなたがたは
すべてのことに豊かになって、惜しみなく施し、その施しは
私たちの手によって行われ、神に感謝するに至るのである。**

**なぜなら、この援助の働きは、聖徒たちの欠乏を補うだけではなく、
神に対する多くの感謝によってますます豊かになるからである。**（Ⅱコリント9・6-12）

私は牧会伝道の傍ら、三〇年以上一般会社で勤務してきました。そこからいただく給料は家族の生活費として、また伝道続ける上での経済的支えとなってきたので、とても感謝しています。取り扱っているのはLPガスだけの単品ですが、それが商品となるまでには実に多くの人手を経ています。遠くアラビア砂漠で原油が汲み出され、巨大タンカーで日本に輸送され、精油所で精製される過程でLPガスが発生します。それを圧縮し商品化して貯蔵し、タンクローリーで私の勤務する会社に運送し、タンクに保管します。私たちの仕事は計量器で充填販売することですが、ここまで来るのになどんなに多くの人々が関わっているのかを考えると、「私が自分ひとりで働き出した給料だ」などとはとても言えることではありません。むしろ主イエスの次の言葉を思い合わせるのです。

**刈る者は報酬を受けて、永遠の命に至る実を集めている。
まく者も刈る者も、共々に喜ぶためである。そこで、
『ひとりがまき、ひとりが刈る』ということわざが、
ほんとうのこととなる。わたしは、あなたがたをつかわして、
あなた方がそのために労苦しなかったものを刈りとらせた。
ほかの人々が労苦し、あなたがたは、彼らの労苦の実に
あずかっているのである」。**（ヨハネ4・36-38）

聖日礼拝での献金感謝に先立って読む聖書箇所の一つにダビデの次の祈りがあります・

**そこでダビデは全会衆の前で主をほめたたえた。ダビデは
言った、「われわれの先祖イスラエルの神、主よ、あなたは
とこしえにほむべきかたです。主よ、大いなることと、力と、
栄光と、勝利と、威光とはあなたのものです。天にあるもの、
地にあるものも皆あなたのものです。主よ、国もまたあなた
のものです。あなたは万有のかしらとして、あがめられます。
富と誉とはあなたから出ます。あなたは万有をつかさどら
れます。あなたの手には勢いと力があります。あなたの手は
すべてのものを大いならしめ、強くされます。**

**われわれの神よ、われわれは、いま、あなたに感謝し、
あなたの光栄ある名をたたえます。しかし我々がこのように
喜んでささげることができても、わたしは何者でしょう。
わたしの民は何でしょう。すべての物はあなたから出ます。**

われわれはあなたから受けて、あなたにささげたのです。（歴代誌上29・10-14）

レプタ二枚を捧げた婦人は、きっと「私は全財産を捧げます」との悲愴な思いからではなく、ただ感謝が溢れて自分もっていた全てを主に捧げたのではないのでしょうか。主はそのような彼女を豊かに祝福して下さったのです。

51. 「終わりへの備え」(ルカ第21章)

主イエスの眼差しが貧しい寡婦の上に注がれていたのとは対照的に、弟子たちの目はエルサレム神殿の偉容に釘付けにされていたと福音書記者は告げます。この時に「小黙示録」とも呼ばれる、終わりの日についての主イエスの預言がなされたのです。マルコがその際の会話をより詳しく伝えています。

**イエスが宮から出て行かれるとき、弟子のひとりが言った、
「先生、ごらんなさい。なんと見事な石、なんと
立派な建物でしょう」。** (マルコ13・1)

エルサレム神殿は最初ソロモン王によって紀元前950年頃に完成しましたが、バビロニア帝国によって前586年に破壊されました。やがて、バビロン捕囚から帰還したゼルバベルを指導者として、様々な困難にも屈せず前516年に再建されたのが第二神殿ですが、それもポンペイウス率いるローマ軍によって前37年に破壊されました。しかし、この年にローマの後ろ盾を得てユダヤ王となったヘロデは、紀元前19年頃から神殿の再建に取り組み、彼の死後も王家の威信を懸けて建設は続けられました。その完成は紀元64年ですから、今回の聖書箇所はその建設工事中の出来事です。ヘロデ神殿は未完であるにもかかわらず、弟子たちが目を奪われるほど素晴らしかったのですが、主イエスの言は醒めたものでした。

**イエスは言われた、「あなたは、これらの大きな建物を
ながめているのか。その石一つでもくずされないままで、
他の石の上に残ることもなくなるであろう」。** (マルコ13・2)

居合わせた人々の誰一人として、まさかその言が事実になるとは信じられなかったことでしょう。ところが、完成のわずか六年後、紀元70年に皇帝テスの率いるローマ軍によって、エルサレム神殿は土台石に至るまで徹底的に破壊し尽くされるのです。そんなこととは知るはずのない弟子たちは主イエスに尋ねます。

**「先生、では、いつそんなことが起るのでしょうか。また、
そんなことが起るような場合には、どんな前兆がありますか」。** (ルカ21・7)

そのとき、主イエスは様々な天変地異を予告します。明らかにそれは単に神殿が破壊される時のことだけでなく、世の終わりに起きる諸々の出来事を預言するものです。以下に列挙しますが、各々には主の守りと励ましの言葉が添えられています。

・偽キリストの出現(8節)

あなたがたは、惑わされないように気をつけなさい。

・戦争と騒乱(9-10節)

おじ恐れるな。こうしたことはまず起らねばならないが、終りはすぐにはこない。

・大地震、疫病、飢饉、迫害(11-19節)

それは、あなたがたがあかしをする機会となるであろう。

反対者の誰もが抗弁も否定もできないような言葉と知恵とを

私が授ける。あなた方の髪の毛一すじでも失われることはない。

・軍隊によるエルサレム包囲(20-24節)

ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。市中にいる者は、そこから出て行くがよい。いなかにいる者は市内にはいつてはいけない。

・日と月と星とに、しるしが現れる(25-28節)

そのとき、大いなる力と栄光とをもって、人の子が雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。これらの事が起りはじめたら、身を起し頭をもたげなさい。あなたがたの救が近づいているのだから。

しかし、弟子たちの質問は「いつ起きるのですか？」ということでした。それは私たちの多くの疑問でもあります。主イエスは「その時」について次のように語られました。

いちじくの木からこの譬を学びなさい。その枝が柔らかになり

葉が出るようになると、夏の近いことがわかる。

そのように、これらの事が起るのを見たならば、

人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。

よく聞いておきなさい。これらの事が、ことごとく

起るまでは、この時代は滅びることがない。

天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない。

その日、その時は、だれも知らない。天にいる御使たちも、

また子も知らない、ただ父だけが知っておられる。(マルコ13:28-32)

「その時」になれば、誰の目にもハッキリと分かるというのです。しかし、「終末」と呼ばれる世の終わりがいつ来るのかは父なる神だけが知っておられることであって、主イエス御自身も知らないと言われました。よく、「〇〇年に終末が来る」とか「終末の詳細な時間表を差し上げます」とか言う人がいますが、主イエスも知らないことを自分が知っているとして豪語する者は明らかに偽預言者なのです。私たちはむしろ、主の次の言葉を心に留めたいと思います。

気をつけて、目をさましていなさい。その時がいつであるか、

あなたがたにはわからないからである。それはちょうど、

旅に立つ人が家を出るに当り、その僕たちに、それぞれ仕事を

割り当てて責任をもたせ、門番には目をさましておれと、

命じるようなものである。

だから、目をさましていなさい。いつ、家の主人が帰って来るのか、

夕方か、夜中か、にわたりの鳴くころか、明け方か、わからない

からである。あるいは急に帰ってきて、あなたが眠っているところを

見つけるかも知れない。目をさましていなさい。わたしがあなたがたに

言うこの言葉はすべての人々に言うのである」。(マルコ13:33-37)

「終末」が先になるか、それとも、私たち自身のこの世での終わりである「死」が先に来るかということも、父なる神のみが知っておられることです。私たちの為すべき「終わりの備え」は、「気をつけて、目を覚ましていること」だということです。では、それはどのようにすることなのでしょう。ルカが主イエスの言葉を伝えています。

あなたがたが放縦や、泥酔や、世の煩いのために心が鈍って

いるうちに、思いがけないとき、その日が罨のようにあなたがたを

捕えることがないように、よく注意していなさい。
その日は地の全面に住むすべての人に臨むのであるから。
これらの起ろうとしているすべての事からのがれて、
人の子の前に立つことができるように、絶えず目をさまして
祈っていなさい。（ルカ21・34-36）

私にとって、五十歳を過ぎてから自分の死を考えた時というのは、第39回「神には何でもできる」で述べたように、連続して二度にわたり骨髄バンクドナーに該当した時であり、その後、予想もしなかった経緯で新会堂が与えられたことは既に証しました。しかし、この時に私が迫られたのは「終わりへの備え」ということだったのです。どうすることが自分の死への最もふさわしい準備になるのかと真剣に考えさせられたからです。その時、思い立って着手したことは身辺整理ということでした。大袈裟なことではなく、押入や倉庫を片付けて不要な物を捨て、身軽になろうとしたのです。

倉庫整理をしている時に、大量に出てきたのがカセット・テープでした。その中に、敬愛する牧師、織田昭氏が心血を注いだ数十年分の説教録音がありました。手元には若干の未入手のものがあり、織田師は既に新約聖書全巻の講解説教を完結していたはずとは言え、廃棄処分するには到底忍びないものでした。そこで全部をデジタル音声にデータ化してみようと思い立ち、数ヶ月取り組んだところ、一枚のDVDに収まりました。その後に宮城県を連続地震が襲ったのです（二〇〇三年七月）。新会堂に移転した後だったので私たちは大丈夫でしたが、各地の教会から地震見舞いの電話を戴きました。織田師からも安否を尋ねる電話を戴いた折に、思い切って出来上がったDVDのことをお話しすると、「ぜひ新約全講のDVDを完成しましょう」と殊のほか喜ばれました。今それは完成し、「えりにか社」で入手できます。私個人の身辺整理が織田師のお役にも立つことができたことはとても嬉しい幸いでした。

「終わりへの備え」には様々な方法があるでしょうが、それは何時始めても、またどのような形でも、きっと豊かに祝福されることだと思います。なぜなら、それは主が私たちに求めておられることだからです。

52. 「最後の晩餐」(ルカ22・1-20)

「最後の晩餐」と聞けば、すぐにダ・ヴィンチの有名な絵を思い出す人も多いでしょう。こんなエピソードが伝わっています。

レオナルド・ダ・ヴィンチがその傑作となる「最後の晩餐」を描こうとして長いあいだ探したのはキリストのモデルだった。ついにローマの、とある聖歌隊の中に見つけた。容姿と性格が優しさを醸し出すその若者は、名前をピエトロ・バンディネリといった。

ところが、何年たっても作品は完成しなかった。キリストの弟子たちは描かれていったが、ただ一人、イスカリオテのユダだけを描きあぐねていたのだ。「その顔が罪でこわばり歪んだモデルがどうしても見つからない…。」

しかし、ローマの街角にいた乞食の中に、顔がいかにも悪辣そうな一人をととう見出し出した。その男を見つめるとダ・ヴィンチのほうが身震いしたほどだったので、彼を雇ってキャンバスにユダが揃った。

描き終え、金を払おうとして「ところで、あなたの名前をまだ聞いていなかったね」と言うと、男は答えた。「ピエトロ・バンディネリ。前にあんたのキリストのモデルになったことがある」。

ピエトロに一体どんなことが起きたのか？ エピソードはそれ以外のことを伝えていません。けれども、実際に起きたユダの裏切りについて、福音書記者ルカは次のように記しています。

さて、過越といわれている除酵祭が近づいた。祭司長たちや律法学者たちは、どうかしてイエスを殺そうと計っていた。民衆を恐れていたからである。そのとき、十二弟子のひとりでイスカリオテと呼ばれていたユダに、サタンがはいった。すなわち、彼は祭司長たちや宮守がしらたちのところへ行ってどうしてイエスを彼らに渡そうかと、その方法について協議した。彼らは喜んで、ユダに金を与える取決めをした。ユダはそれを承諾した。そして、群衆のいないときにイエスを引き渡そうと、機会をねらっていた。 (ルカ22・1-6)

ルカは、端的に「ユダに、サタンがはいった。」と語っています。古来、ユダが主イエスを裏切った動機については様々な憶測がなされてきました。最近のものとしては、1970年代にエジプトで発見された『ユダの福音書』と呼ばれるパピルス写本を根拠に、「イエスとユダには密約があり、ユダは裏切り者ではなかった」とする説が出されました。しかし、この文書は使われている用語から見て、明らか

に、初代教会を混乱させたグノーシス派の異端文書です。また原文は破損がひどく、翻訳に際して多くの言葉が補われており、とても信頼に足るものとは思われません。ただ、ユダが最後の晩餐の席にいたことは確かです。

「最後の晩餐」とは「過越祭の食事」のことです。この祭については福音書に度々出てきており、本書でも第4回「神の子の平安」を初めとして、イスラエルの出エジプトを記念する祭であることは既に述べました。主イエスは地上生涯最後となる今回の過越の食事を、愛する弟子たちと共に持ちたいと切望し、入念に備えておられました。それは弟子たちが準備のため町に出かけると、主が言われた通り、すぐに支度が整えられた二階の広間に通されたことから分かります(ルカ22・7-13)。このようにして食事が始まりました。

**時間になったので、イエスは食卓につかれ、使徒たちも共に席についた。イエスは彼らに言われた、
「わたしは苦しみを受ける前に、あなたがたとこの過越の食事をしようと切に望んでいた。あなたがたに言うておくが、神の国で過越が成就する時までは、わたしは二度と、この過越の食事をすることはない」。**

そして杯を取り、感謝して言われた、「これを取って、互に分けて飲め。あなたがたに言うておくが、今からの神の国が来るまでは、わたしはぶどうの実から造ったものを、いっさい飲まない」。

またパンを取り、感謝してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、「これは、あなたがたのために与えるわたしのからだである。わたしを記念するため、このように行いなさい」。

食事の後、杯も同じ様にして言われた、「この杯は、あなたがたのために流すわたしの血で立てられる新しい契約である。」 (ルカ22・14-20)

「最後の晩餐は、最初の聖餐である」と言われます。これが教会の礼拝で持たれる聖餐式の初めとなったからです。ここで主は何度か杯を手にはしていますが、過越の食事では、杯で四回飲むことが習慣でした。また、ある人によれば、祭の始めの除酵祭で、あれほど念入りに酵母を取り除いたのだから、この時に飲まれたのは葡萄酒ではなく葡萄ジュースだったはずだと言います。きっとそうだったのでしょう。しかし何よりも重要なのは、この時に主が言われた、「この杯は、あなたがたのために流すわたしの血で立てられる新しい契約である」という言葉です。

「新しい契約」。何か難しそうですが、その意味は難しくありません。「契約」とは「約束」の意味であり、神様が私たちをご自分の子供として神の家族に迎えてくださるという救いの約束です。旧約も新約もこのことを約束しているという点で変わりはありません。

では、何が古く、何が新しいのでしょうか？それは、モーセに与えられた旧約律法を守って救われる道ではなく、「主イエスの十字架と復活は私のためだ」と信じる人が救われるというのが新約の道なのです。ヘブル人への手紙には次のように記されています。

キリストは、はるかにすぐれた務を得られたのである。
それは、さらにまさった約束に基いて立てられた、さらに
まさった契約の仲保者となられたことによる。

もし初めの契約に欠けたところがなかったなら、あとの
ものが立てられる余地はなかったであろう。ところが、
神は彼らを責めて言われた、「主は言われる、見よ、
わたしがイスラエルの家およびユダの家と、新しい
契約を結ぶ日が来る。それは、わたしが彼らの先祖
たちの手をとって、エジプトの地から導き出した日に、
彼らと結んだ契約のようなものではない。彼らがわたしの
契約にとどまることをしないので、わたしも彼らをかえりみなかった
からであると、主が言われる。わたしが、それらの日の後、
イスラエルの家と立てようとする契約はこれである、
と主が言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの思い
の中に入れ、彼らの心に書きつけよう。こうして、わたしは
彼らの神となり、彼らはわたしの民となるであろう。彼らは、
それぞれ、その同胞に、また、それぞれ、その兄弟に、主を知れ、
と言って教えることはなくなる。なぜなら、大なる者から小なる者に
至るまで、彼らはことごとくわたしを知るようになるからである。
わたしは、彼らの不義をあわれみ、もはや、彼らの罪を思い出すことはしない」。

神は、「新しい」と言われたことによって、初めの契約を古いと
されたのである。年を経て古びたものは、やがて消えていく。（ヘブル8・6-13）

神は聖なる方ですから、聖い人・完全な人でなければ、神の子としてその家族に迎えられないこと
はできません。また旧約のもと、一つでも律法を破れば罪人となってしまいますから、それでは誰も
救われないこととなります。これが旧約の限界でした。新約では十字架による身代わりの死によって
全ての罪が赦されるのです。このことを信じて、イエスを救い主・キリストと受け容れる人はすべて神
の子となる道が開かれたのです。使徒ヨハネが彼の手紙の中で次のように記している通りです。

**わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を
父から賜ったことか、よく考えてみなさい。わたしたちは、
すでに神の子なのである。世がわたしたちを知らないのは、
父を知らなかったからである。**

愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、
わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時
わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。
そのまことの御姿を見るからである。彼についてこの望みを
いただいている者は皆、彼がきよくあられるように、自らをきよくする。
すべて罪を犯す者は、不法を行う者である。罪は不法である。
あなたがたが知っているとおり、彼は罪をとり除くために現れた
のであって、彼にはなんらの罪がない。（第一ヨハネ3・1-5）

最後の晩餐の席で主イエスが是非とも伝えたかったことは、御自身の受難と復活を通して今まさに示そうとしておられる、救いの新しい道のことだったのです。

こんな話を聞きました。ある教会の親子教室で、「できるだけたくさん『私は～です』を書いてください」との出題がなされたそうです。参加者は「私は小学4年生です」「私は男です」「私は日本人です」など、思い思いのことを書きました。書き終わると、「では、そのあとに『だから、死んでも大丈夫！』を付け加えるとどうなりますか？」と聞かれたそうです。ほとんどが、的外れな文になったというのです。しかし、「私は神の子です。だから、死んでも大丈夫！」は真理として立つ、というのがこの話の結論でした。

私も教会学校の子供たちに同じような質問をしてみました。やはり、ほとんどの答えが成り立たなかった中で、一人の男の子の答え「ボクは神様に選ばれた」だけが残りました。「どこでそのことを知ったの」と尋ねると、「保育園で聞いたよ」というのです。幼い時から神様の愛をしっかりと伝えることの大切さを思わされた出来事でした。

『だから、死んでも大丈夫！』。さて、あなたならこの前にどんなことを書きますか？

53. 「挫折の先を見通すイエス」 (ルカ22・21-34)

J・S・バッハの「マタイ受難曲」から一曲だけを選べと言われるなら、私は迷うことなくペテロの否認を歌った第39曲のアリア「憐れみ給え、わが主よ」を挙げます。「マタイ受難曲」は全68曲、全編演奏には約三時間もかかるという長大な作品です。その中で「憐れみ給え、わが主よ」はリピートが延々と続く曲なのですが、主イエスを否認してしまったペテロの慟哭^{どうこく}をアルトが切々と歌う名曲です。

十二弟子中で筆頭と見なされていたペテロが、逮捕された主イエスの取り調べが行われていた場所で、こともあろうに「イエスなど、知らない」と三度も言うてしまうのです(ルカ22・54-62)。しかし、それは最後の晩餐の席で、すでにイエスご自身によって見通されていたというのが、今回の聖書箇所です。

「シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちをカづけてやりなさい」。

シモンが言った、「主よ、わたしは獄にでも、また死に至るまでも、あなたとご一緒に行く覚悟です」。

するとイエスが言われた、「ペテロよ、あなたに言うておく。きょう、鶏が泣くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」。

(ルカ22・31-34)

主イエスはなぜこのような薄情に思われる予告をされたのでしょうか？ それには、このときの出来事の流れを見る必要があります。

- ・パンと杯を手にとって「新しい契約」について語られた(前回)
- ・その直後、弟子の裏切りが予告される(21-22 節)
- ・弟子たちに「それは誰か、また誰が一番か？」との争論が起きる(23-24 節)
- ・主イエスの教えの言葉(25-30 節)
- ・そして、ペテロの否認が予告される(今回)

これら一連の出来事の背後にあるのは「挫折とその先にあるもの」という主題だと思います。なぜなら、裏切り・争論・否認による弟子たちの挫折は、主の十字架という衝撃的な出来事がもたらす「新しい契約」により、大いなる救いの喜びに引き上げられてゆくからです。

しかし、誰でも挫折は好みません。それは計画や期待・目的などが中途でくじけることだからです。できることなら、計画通り、期待通りにいってほしいと誰もが思うのですが、人生の物事はなかなか願い通りにはいかないものです。成功と失敗の数を数えたら、きっと誰でも失敗の方が多くはないでしょうか。野球で「三割打者」といえば優秀選手です。しかし逆から言えば、十打席の内七本は失敗しているということであり、ヒットの倍以上の失敗率です。それにもかかわらず、三割というのは、なかなか達成できない打率です。大いに慰められる思いがしますが、主イエスはそのような意味の励ましを弟子たちに語られたのでしょうか？ そうではないと思います。

主はシモン・ペテロに「**サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された**」と

言いました(31節)。ここで「願って」と訳されているのは、実は「要求する」という言葉です。これに対して「しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った」とあります(32節)。ここでの「祈った」というのは「嘆願する」という言葉です。つまり、サタン³の要求によって、たとえ挫折の試みに遭わせることが許されたとしても、主イエスは、ペテロの信仰がなくならないように父なる神に嘆願したと言われたのです。「要求」と「嘆願」を受けた父なる神は、いったいどちらを喜ばれるでしょうか？もちろん「嘆願」のほうであるはずですが。なぜなら、嘆願とは「助命嘆願」という言葉があるように、「通常ではできないことを、特に事情を話して、是非ともそうして下さいと願うこと」だからです。

主イエスが予め主なる神に嘆願しなければならないほどの重大な裏切りの罪を、ペテロが犯す状況はどのようなものなのでしょう。それは、主イエスがユダの裏切りによって逮捕され、その取り調べの場にペテロが忍び込んだ時に起きました。

人々は中庭のまん中に火をたいて、一緒にすわっていたので、ペテロもその中にすわった。すると、ある女中が、彼が火のそばにすわっているのを見、彼を見つめて、「この人もイエスと一緒にいました」と言った。ペテロはそれを打ち消して、「わたしはその人を知らない」と言った。

しばらくして、ほかの人がペテロを見て言った、「あなたもあの仲間のひとりだ」。

するとペテロは言った、「いや、それはちがう」。

約一時間たってから、またほかの者が言い張った、「たしかにこの人もイエスと一緒にだった。この人もガリラヤ人なのだから」。

ペテロは言った、「あなたの言っていることは、わたしにわからない」。

すると、彼がまだ言い終らぬうちに、たちまち、鶏が鳴いた。

主は振りむいてペテロを見つめられた。そのときペテロは、「きょう、鶏がなく前に、三度わたしを知らないと言うであろう」と言われた主のお言葉を思い出した。そして外へ出て、激しく泣いた。(ルカ22・55-62)

「主よ、わたしは獄にでも、また死に至るまでも、あなたとご一緒に行く覚悟です」と豪語したペテロが、いざ自分に命の危険が迫ると、あっけなく、しかも三度も、主を否認したのです。「漁にかけては誰にもひけをとらない俺が、偉そうに強がりと言ったって、このていたらくか…」と、ペテロはどんなにか自分が情けなくて仕方がなかったことでしょう。ルカは言葉少なに「激しく泣いた」と記しています。

冒頭で述べたバッハの「憐れみ給え、わが主よ」はその時のペテロの慟哭を、綿々と繰り返いで表現します。バッハは深い感情表現に、ソプラノやテノールではなくアルトを使ったと言われますが、ここでも男声ではなくアルトの女声をもって表わしています。そういえば、日本の讚美歌にもこの時のことを歌った「あゝ主の瞳、眼差しよ」があります。

「讚美歌二四三番」

あゝ主のひとみ まなざしよ きよきみまえを 去りゆきし
富める若人 見つめつつ なげくはたれぞ 主ならずや

あゝ主のひとみ まなざしよ 三たびわが主を いなみたる
よわきペテロを かえりみて ゆるすはたれぞ 主ならずや

ここに歌われている主の眼差しはどのようなものだったのでしょうか。ルカは「主は振りむいてペテロを見つめられた」と伝えています(ルカ22・61)。ここで「見つめる」と訳されている言葉は、実は讚美歌の第一節で歌われている、富める若人に注がれた眼差しの描写「目をとめ」に使われている単語と同じなのです。それは次のように書かれていました。

イエスは彼に目をとめ、いつくしんで言われた「あなたに足りないことが一つある。帰って、持っているものをみな売り払って、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つようになる。そして、わたしに従ってきなさい。」(マルコ10・21)

富める青年に注がれたのは慈しみの眼差しだったとマルコが伝えています。同様に、否認したペテロに向けられた主の眼差しも、慈しみに満ちたものだったはずです。その眼差しはこのように言っていたのではないのでしょうか、「ペテロよ、わたしを否んだことに挫けるな。あなたの強さも弱さも知っている。わたしは、あなたを咎めない、責めない、決して見捨てない。あなたの咎はわたしがこれから十字架で背負う。生きよ、ペテロ。生きてわたしの福音を伝えよ。」ペテロの心に甦った晩餐での主の言葉は、現代の私たちへの語りかけでもあります。

「わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちをカづけてやりなさい」。

やがて、十字架から三日目、週の初めの日の朝、墓に着いた女性たちに主の復活を告げた御使いの言葉を、マルコが伝えています。

墓の中にはいると、右手に真白な長い衣を着た若者がすわっているのを見て、非常に驚いた。するとこの若者は言った、「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのであろうが、イエスはよみがえって、ここにはおられない。ごらんなさい、ここがお納めした場所である。今から弟子たちとペテロとの所へ行って、こう伝えなさい。イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて、あなたがたに言われたとおり、そこでお会いできるであろう、と」。(マルコ 16・5-7)

「弟子たちとペテロとの所へ行って」と、ペテロについて特にその名をあげ、主の復活を知らせるようにと御使いが告げているのです。挫折し落胆の中にあつたペテロを気遣う、主イエスの深い愛と配慮とがうかがわれます。

更にヨハネは、復活して弟子たちのいる所に姿を現した主イエスとペテロとの会話を伝えています。

彼らが食事をすませると、イエスはシモン・ペテロに言われた、「ヨハネの子シモンよ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか」。ペテロは言った、「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです」。イエスは彼に「わたしの小羊を養いなさい」と言われた。

またもう一度彼に言われた、「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか」。彼はイエスに言った、「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたをご存じです」。イエスは彼に言われた、「わたしの羊を飼いなさい」。

イエスは三度目に言われた、「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか」。ペテロは「わたしを愛するか」とイエスが三度も言われたので、心をいためてイエスに言った、「主よ、あなたはすべてをご存じです。わたしがあなたを愛していることは、おわかりになっています」。イエスは彼に言われた、「わたしの羊を養いなさい。」（ヨハネ21・15-17）

三度の否認をひとつずつ赦してゆくかのように、主イエスはペテロに三度、「わたしを愛するか」とお尋ねになりました。ここで、主がアガペの愛をもって尋ねたのに対し、ペテロは三度フィロ(友愛)をもってお答えしたことが知られています。アガペの愛は命懸けの絶対的愛を意味しますから、主を否定したペテロにはとうていその愛をもってお答えすることはできなかったのでしょう。そして主イエスは三度目にフィロの愛を受け容れて「わたしの羊を養いなさい」と弟子たちをペテロに託されたのです。

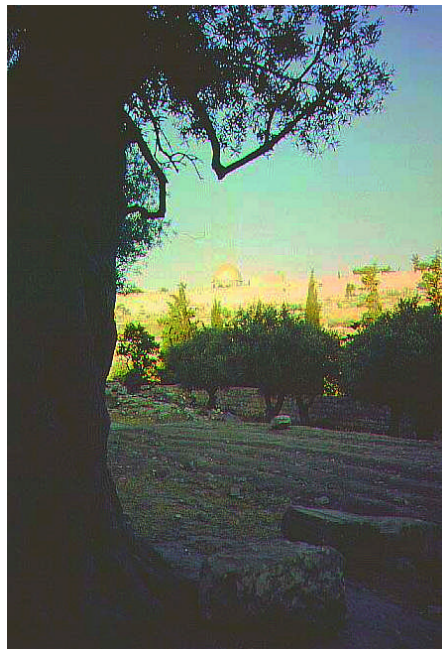
初代教会の歴史は、ペテロがやがてローマに行って宣教し、その地に殉教したことを伝えていきます。彼は主イエスの祈りの通り、挫折から立ち直り、命懸けのアガペの愛に生きる者に変えられたのでした。

54. 「ゲッセマネの祈り」 (ルカ22・39-46)

エルサレムの東向かいにあるオリブ山の斜面には、その名の通り一面にオリブの林になっている所があり、そこにゲッセマネの園があります。ゲッセマネというのは「油絞り」という意味で、オリブの油を絞った場所だからです。

エルサレムのホテルに泊まった時、私は友人の奨めに従って、早朝4時半に起き、オリブ山に行きました。印象的な日の出を見た後、ゲッセマネの園を通って帰ろうと思いましたが、そこはカトリックの管理地で高い塀で囲まれており、入口には鍵が掛かってあって、中に入れませんでした。しかし、周りにはなお鬱蒼たるオリブの林が広がり、そこにあって幹がねじれ育つオリブの木の様子は、汗を血のように滴らせながら祈ったという主イエスの姿のようでした。

目を上げると、遠く左の方に朝陽に照らされた黄金門が輝いています。「ほんとうに黄金のようだ」と思いました。主イエス一行はエルサレムに来ると、ゲッセマネの園を「いつもの場所」にしたと書かれています。するとこの辺りで野宿し、朝毎に黄金門を見あげたのではないかと、その時代にタイム・スリップしたような思いになりました。



最後の晩餐を終えた主イエスが「いつものようにオリブ山に行かれると、弟子たちも従って行った」とルカは伝えています。

いつもの場所に着いてから、彼らに言われた、

「誘惑に陥らないように祈りなさい」。

そしてご自分は、石を投げてとどくほど離れたところへ退き、

ひざまずいて、祈って言われた。 (ルカ22・40、41)

ルカの筆致は淡々としていますが、その場に居合わせたマタイの描写は主イエスが悲しみ悩む様子を伝えています。

それから、イエスは彼らと一緒に、ゲッセマネという所へ行かれた。

そして弟子たちに言われた、「わたしが向こうへ行って祈っているあいだ、ここにすわっていなさい」。

そしてペテロとゼベダイの子ふたりとを連れて行かれたが、悲しみを

催した悩みはじめられた。そのとき、彼らに言われた、

「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っていて、

わたしと一緒に目をさましていなさい」。(マタイ26・36-38)

「目を覚ましていなさい」と訳されているのはグレゴレオという言葉です。ローマ教皇にグレゴリウスという名の人十六人おり、「グレゴリオ聖歌」は第六四代ローマ教皇グレゴリウス一世(在位・590～

604AD)が編纂したと伝えられています。しかし、この時の弟子たちは目を覚ましていることができず、三度も眠り込んでしまったと、その場にいたマタイは記しています。

マタイとマルコは、主が「**悲しみのあまり死ぬほどだ**」と言われたことを伝えています。必死に祈る主の心を満たしていたのが、苦しみではなく悲しみだったとはどういうことなのでしょう？もちろんこの後に起きたことを既に知っている私たちは、復活後の再会までという、一時的な弟子たちとの別れの悲しみと見ることはできます。しかし、この後に厳然として待ち受けている残酷な十字架を考え合わせるとき、そのような意味にだけ見ることは、感傷的のそりをまぬがれないでしょう。

むしろ、父なる神の沈黙ゆえの深い悲しみだったのではないのでしょうか。なぜなら、悲しみとは、大切な何かが失われたと思う時に起きる感情だからです。御子イエスは祈りの方でした。朝早く、夜明け前の祈りをもって毎日を始めるのを常とし(マルコ1・35)、何事も父との祈りなしには行うことはありませんでした(マタイ11・27、ヨハネ8・38 など)。ところが、このゲッセマネの祈りの時は、父なる神からの親しい声を聞くことができなかつたのではないのでしょうか。主イエスは弟子たちにも共に祈ることを求めました。けれども彼らは睡魔に抗しきれず、三度も眠りこけてしまったのです。迫り来る十字架を覚えつつ、ゲッセマネの園でひとり身もだえしつつ三度も捧げた主イエスの祈りはどのようなものだったのでしょうか。

**「わが父よもしできることでしたら、どうかこの杯をわたしから
過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにではなく、
みこころのままになさって下さい」。**(マタイ26・36-39)

必死の祈りにしては余りの短さですが、睡魔に勝てず眠りに陥ってゆく弟子たちに、辛うじて聞こえた主イエスの祈りの言葉だったのでしょう。しかし、御子の切実な祈りに、父なる神は沈黙をもって答えられたのです。その沈黙は、十字架上で主イエスが「エリ、エリ、レマサバクタンニ(わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか)」と叫んだ時に至ってもなお続いていたのです。

いったい、最愛の子の苦しみを見て、共に苦しめない親がいるのでしょうか。私の老いた母は、不慮の火事で焼死した長男の死から、もはや四半世紀も過ぎようとしている今もなお、その悲しみから立ち直っていません。父なる神が御子の祈りに沈黙をもって答えなければならなかつた苦しみは、私たちの贖いのためではあっても、どんなにか胸を引き裂かれる思いだったにちがいません。それは、御子と共に十字架の苦しみを受けることが父なる神の御心だったからです。

**神はそのひとり子を賜わたしたほどに、この世を愛して下さった。
それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得る
ためである。神が御子を世につかわされたのは、世をさばくため
ではなく、御子によって、この世が救われるためである。** (ヨハネ3・16、17)

「祈りとは、自分の願いと意思とを、神の意志に服従させるための格闘である」と言った人がいます。**「わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さい」**と祈った主イエスは、神の沈黙という答えの中に、すべての人を救う贖いの十字架を背負うことが父なる神の御心であると受け容れたのです。

私たちは神を信じると言いながら、時としてその信仰は、自分自身が良しと思う範囲内でのみ、神のお働きを考えるとということがありはしないのでしょうか。というのは、病気になったり、失敗したり、事故に遭ったりした時に、期せずして「神様に見放された」と疎外感を覚えがちだからです。しかし、もしす

べてが私たちの願い通りになっていたとしたら、今ごろどうなっていたでしょうか？ カール・バルトは「我々の計画が成功し、我々の目的が達成される場合、それは最も恐るべき地獄である」と言っていますし、インドの詩人、タゴールは次のような詩を残しています。

日毎おんみは、私の願いを次々拒むことで、
この身をしておんみを完全に受け入れるのに
ふさわしくして下さい。浅はかな漠然とした
欲望の危機から私を救いながら。

また、内村鑑三の薫陶を受けた法哲学者、三谷隆正は次のように語っています。

「世の人はしばしば嘆じて言う、世の中のことは思うようにならないものだ。しかし私は思うようにならないがゆえに感謝したく思う。私の本当の幸福、本当の歓喜が、思わざる難儀、願わざる悲しみの中から生まれ出たものであることを知っている。そして思うことの思うようになったとき、かえって不満があり倦怠があり、空虚のあったことを知っている。」

そうであるなら、私たちは人生の意外性が持つ豊かさにもっと期待し、寛容になれるはずであり、思うようにならない人生を、勇気と信仰をもって生きることができるのではないのでしょうか。なぜならそこに私たちの思いを遙かに超えた神様のご計画があるはずだからです。

クリスチャン青年が次のような人生設計を出して、最後に神のサインを求めるような的外れなことをしていないか …。それは、自分の就職から結婚、家庭生活まで理想と思える計画を立て「どうかこの計画を実現させて下さい」と神に求める生き方である。

それに対し、神は何も書かれていない一枚の紙の末尾に「ただあなたのサインをしなさい」と求められる。

(ジョージ・マーレイ)

55. 「人が神を裁く？」 (ルカ22・63-23・25)

主イエス逮捕後についての記録は、四つの福音書が様々な点で最も異なっている出来事です。しかしそれは、ゲッセマネでの捕縛時、弟子たちがわっとばかりに逃げ散ったのですから無理もないことと言うべきでしょう。その中で、ペテロとヨハネが何とか裁判の場に潜入しようとしたことが伝わっています。しかし彼らととも、主イエスの逮捕・裁判・十字架という怒濤のような受難の流れを食い止めることは、到底なしうることはありませんでした。

ルカの記述はずいぶん簡略化されていますが、四つの福音書を総合してみると、主イエスの尋問や裁判は深夜から翌朝まで、次のように全部で五回にわたって行われるという、異常なものだったことがわかります。

- ①アンナス(大祭司の^{しゅうと}舅)による尋問(ヨハネ18・12-24)
- ②大祭司カヤパと最高議会サンヘドリンでの予審(マルコ14・55-65)
- ③ピラト(ローマ総督)の法廷での第一審(マタイ27・2, 11-14)
- ④ヘロデ(ガリラヤ領主)による尋問(ルカ23・6-11)
- ⑤ピラトの法廷での最終審(マタイ27・15-26)

日本の裁判では、初審・控訴審・最終審の三審制が採られており、このあと再審が認められることがあります。結審までには通例何年も、場合によっては何十年もかかります。ところが主イエスの場合、わずか数時間で結審し、翌日の昼には死刑が執行されたのです。ユダヤの法律によれば、裁判は夜や安息日・祝祭日に行なってはならないとされており、有罪判決を下すには、審問と判決の間に一日をおく定めとなっていました。また、最高議会サンヘドリンは、神殿内における洗神罪^{とくしんざい}については死刑判決を出すことができましたが、ローマによって権限が制限されており、全権はローマ総督にだけありました。但し十字架刑は、極悪の刑事犯にのみ執行され、宗教犯には適用され得ない極刑だったのです。ところが事態は、何もかもが異様な速さで、主イエスの十字架に向かって突き進んだのです。時期が過越祭の最中であり、安息日が金曜の夕方に始まるので、なんとかそれまでに全ての事を片づけてしまおうと画策した様子が見えます。

最初に連れて行かれたのは大祭司の舅アンナスの所でした。彼が弟子たちのことや教えのことを尋ねたのに対して、主イエスは次のように答えています。

「わたしはこの世に対して公然と語ってきた。

すべてのユダヤ人が集まる会堂や宮で、いつも教えていた。

何事も隠れて語ったことはない。なぜ、わたしに尋ねるのか。

わたしが彼らに語ったことは、それを聞いた人々に尋ねるがよい。

わたしの言ったことは、彼らが知っているのだから。」(ヨハネ18・20、21)

アンナスが弁明の機会を与えるような形で、何とか自白を得ようとしたのに対して、いっさい自己弁護をしない主イエスの逃げも隠れもしない堂々とした返答です。

刑事裁判において、自白は証拠として極めて有力ですが、それだけに取り調べに当たっては、昔から拷問などの強引な手段を使っても、自白が引き出そうとされてきました。現代日本の法律では、これを防止するため、国家の基本法である「憲法」で次のように定められています。

第三八条【不利益な供述の強要禁止、自白の証拠能力】

- ①何人も、自己に不利益な供述を強要されない。
- ②強制、拷問若しくは脅迫による自白又は不当に長く抑留若しくは拘禁された後の自白は、これを証拠とすることができない。
- ③何人も、自己に不利益な唯一の証拠が本人の自白である場合には、有罪とされ、又は刑罰を科せられない。

これは大原則です。しかし、ある刑法学の教授が言っていました。「そうは言うものの、実務的には『まず自白ありき』なのです。なぜなら、自白を取ってから、それに基づいて証拠を探すというのが捜査の早道だからです。」

アンナスの取り調べの後に続いて開かれた緊急のサンヘドリン法廷においても、自白が非常に重要視されていたことが分かります。祭司長たちと全議会とが偽証者を立ててまで、主イエスを死刑にしようとし、それが奏功しないと見るや、大祭司が直接に尋問した様子をマルコが伝えています。

そこで大祭司が立ちあがって、まん中に進み、イエスに聞きただして言った、「何も答えないのか。これらの人々があなたに対して不利な証言を申し立てているが、どうなのか」。

しかし、イエスは黙っていて、何もお答えにならなかった。

大祭司は再び聞きただして言った、「あなたは、ほむべき者の子キリストであるか」。

イエスは言われた、「わたしがそれである。あなたがたは人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」。

すると、大祭司はその衣を引き裂いて言った、

「どうして、これ以上、証人の必要があろう。あなたがたはこのけがし言を聞いた。あなたがたの意見はどうか」。

すると、彼らは皆、イエスを死に当るものと断定した。

そして、ある者はイエスにつばきをかけ、目隠しをし、こぶしでたたいて、「言いあててみよ」と言いはじめた。また下役どもはイエスを引きとって、手のひらでたたいた。(マルコ14・60-65)

この判決にはいくつもの問題点があります。まず、自白を唯一の証拠としている点、またその自白は、イエス自身がキリストであると真実を語ったことを有罪としている点、そして明らかに大祭司カヤパの家で行われた裁判であるのに、「神殿内における汚神罪」に当たるとして死刑を宣告している点です。しかも次に見るように、彼らは主イエスを宗教犯として裁きながら、ローマ総督には政治犯として告訴し、死刑判決を求めているのです。ここで巧妙な訴因のすり替えが行われた結果、官邸でローマ総督ピラトは次のように主イエスに審問しています。

「あなたがユダヤ人の王であるか」。イエスは「そのとおりである」と言われた。

しかし、祭司長、長老たちが訴えている間、イエスはひと言もお答えにならなかった。

「あんなにまで次々に、あなたに不利な証言を立てているのが、あなたには聞えないのか」。

しかし、総督が非常に不思議に思ったほどに、イエスは何を言われても、ひと言もお答えにならなかった。(マタイ27・11-14)

ピラトはこの後、無罪判決を下しています。つまり、ローマに対する反逆罪には当たらず、政治犯ではないとの判断を下したのです。

そこでピラトは祭司長たちと群衆とにむかって言った、
「わたしはこの人になんの罪もみとめない」。
ところが彼らは、ますます言いつのつてやまなかった、
「彼は、ガリラヤからはじめてこの所まで、ユダヤ全国に
わたって教え、民衆を煽動しているのです」。
ピラトはこれを聞いて、この人はガリラヤ人かと尋ね、
そしてヘロテの支配下のものであることを確かめたので、
ちょうどこのころ、ヘロテがエルサレムにいたのをさいわい
そちらへイエスを送りどけた。(ルカ23・4-7)

ここでの「ヘロテ」とはヘロデ・アンティパスであり、主イエスが生まれた時のヘロデ大王の息子です。兄弟のヘロデ・ピリポの妻を奪い取ったことを非難したバプテスマのヨハネを斬首した王です(マタイ14・1-12)。主イエスは、以前から彼の狡猾さや残忍さを知っており、「ヘロデのパン種を警戒しなさい」と言い(マルコ8・15)、また彼を「きつね」と呼んでいました(ルカ13・32)。ですから、彼の所に送られた時、ヘロデが何を質問しようと終始無言で一切弁明せず、ただ嘲弄されるままに、やがてピラトの元に送り返されたのも当然のことだったのです(ルカ23・8-12)。送り返された主イエスを見て、ピラトは再度、祭司長や役人たちと民衆を呼び集めて次のように叫んでいます。

「おまえたちは、この人を民衆を惑わすものとしてわたしのところに連れてきたので、おまえたちの前でしらべたが、訴え出ているような罪は、この人に少しもみとめられなかった。ヘロテもまたみとめなかった。現に彼はイエスをわれわれに送りかえしてきた。この人はなんら死に当るようなことはしていないのである。だから、彼をむち打ってから、ゆるしてやることにしよう」。(ルカ23・14-16)

ピラトは二度目の無罪宣告をし、祭ごとにローマ総督が囚人をひとりゆるす慣例になっていることを使って、主イエスを釈放しようとする。しかし民衆は一斉に「その人を殺せ。バラバをゆるしてくれ」と叫んで、都で起った暴動と殺人とのかどで、獄に投ぜられていたバラバのほうを釈放するよう求めたのです。

ピラトはイエスをゆるしてやりたいと思って、もう一度かれらに呼びかけた。
しかし彼らは、わめきたてて「十字架につけよ、彼を十字架につけよ」と
言いつづけた。
ピラトは三度目に彼らにむかって言った、「では、この人はいったい、
どんな悪事をしたのか。彼には死に当る罪は全くみとめられなかった。
だから、むち打ってから彼をゆるしてやることにしよう」。
ところが、彼らは大声をあげて詰め寄り、イエスを十字架に
つけるように要求した。そして、その声が勝った。
ピラトはついに彼らの願いどおりにすることに決定した。(ルカ23・20-24)

人が神を裁くことができるでしょうか？誰が考えてもその答は「絶対にできない」であるはずですが、ところが実際に、人間が神の御子を裁いたのです。その理不尽極まりない方法と性急さには悪魔的

なものを覚えますが、悪魔ではなく、確かに人間が寄ってたかって神の御子を裁いたのです。しかし、主はっさい自己弁護も弁解もせず、抵抗もしませんでした。なぜなのでしょう？ その謎を解く鍵は、イエス・キリストの来られる七百年も前に既に預言されていたのです。

彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人で、病を知っていた。

また顔をおおって忌みさらわれる者のように、彼は侮られた。

われわれも彼を尊ばなかった。まことに彼はわれわれの病を負い、

われわれの悲しみをになった。

しかるに、われわれは思った、彼は打たれ、神にたたかれ、

苦しめられたのだと。

しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの

不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲らしめをうけて、

われわれに平安を与え、その打たれた傷によってわれわれは

いやされたのだ。

われわれはみな羊のように迷って、おのおの自分の道に向かって

行った。主はわれわれすべての者の不義を、彼の上におかれた。

彼はしえたげられ、苦しめられたけれども、口を開かなかった。

ほぶり場にひかれて行く小羊のように、また毛を切る者の前に

黙っている羊のように、口を開かなかった。彼は暴虐なさばき

よって取り去られた。その代の人のうち、だれが思ったであろうか、

彼はわが民のとがのために打たれて、生けるものの地から断たれたのだと。

(イザヤ53・4-8)

56. 「パラダイスへの門」 (ルカ23・26-49)

エルサレムを訪れる旅人は「ヴィア・ドロローサ」と呼ばれる主の十字架の道行きを偲ぶ巡礼者の群れに出会います。この「悲しみの道」は、ローマ総督ピラトが主イエスに十字架刑を言い渡したアントニヤの要塞に始まり、ゴルゴダの丘の上に立つ壮大な聖墳墓教会に至る十四のステーションを辿る道です。曲がりくねった狭い石畳路の第五ステーションには「クレネ人シモン、主の十字架を背負う」との銘が打たれています。

そこへ、アレキサンテルとルポスとの父シモンというクレネ人が、郊外からきて通りかかったので、人々はイエスの十字架を無理に負わせた。そしてイエスをゴルゴダ、その意味は、されこうべ、という所に連れて行った。

(マルコ15・21、22)

夜通しの尋問と裁判、さらに残虐な鞭打ちによって瀕死の状態となった主イエスの代わりに、^{はか}囚らずもその十字架を背負うことになったのは、主の愛した弟子ではなく、通りすがりのクレネ人シモンだったと福音書は伝えています。主の最期に御側近く寄り添うこととなったシモンが目撃したものは何だったのでしょか。彼の語る言葉に耳を傾けましょう。

ユダヤ人なら誰でも望むように、私はできることなら、エルサレムで過越を祝いたいと思っていただけなのです。あの年の春は幸いエルサレムに仕事があり、それならということで、家族も一緒に行くことになりました。私は貿易を^{なりわい}生業とし、北アフリカのクレネに住んでいました。両親はもともとユダヤ生まれで、植民政策に応じてここに^{きつすい}移り住んだ生粋のイスラエル人です。このようなわけで、妻と二人の息子たちも、家族みんなでエルサレムの過越祭を祝うことが出来ると、大喜びでクレネを出帆したのです。やがてカイザリヤに着き、エルサレムに向かいました。旅のあいだ時折、私たちの話題になったのは、最近、かの地から伝わってくるナザレのイエスについての噂でした。今度エルサレムにのぼれば、その人の話をじかに聞く機会もあるだろうか、と話し合うことはあったのです。

しかし、都に着いてみると、今年はいつになく、どこか不穏な空気が感じられました。それが何から来るのか、はじめは分からなかったのですが、やがて投宿先の友人の話で明らかになりました。ナザレのイエスです。エルサレム神殿周辺での彼と弟子たちの言動に、祭司や律法学者たちが神経をとがらせており、それに伴ってローマ総督も警戒感を強めているというのです。町を巡回するローマ兵たちが目立ったのは、単に過越祭のゆえだけではなかったのです。

私はとにかく予定していた仕事を片付け、木曜の晩に両家族一緒に過越の食事をしました。友人の音頭に、杯を片手に繰り返して唱和する「ダイエヌ(でも、我らは大丈夫!)」を歌う皆の顔は笑顔でいっぱいでした。私たちは大きな安心感に包まれて床についたのです。

ところが、朝早く友の声で起きると、外の通りが騒然としています。群衆が大騒ぎしながらどこかへ走ってゆくのです。そのひとりを止めてわけを聞くと、ナザレのイエスが^{ゆうべ}昨晚遅く逮捕され、異例にも^{ふつきょう}払暁に開かれたサンヘドリンの裁判で、死刑を宣告されたというのです。通りを走る人々は総督への告訴のためイエスが送られたという、アントニヤの要塞に急いでいました。

私も駆けつけてみると、そこで三人の男が両手を縛られ、ユダヤ式に数を数えながら背中を打たれていました。異様なほどの^{おびただ}夥しい出血です。見るとユダヤの笞ではなく、革の鞭に無数の金属片や骨片が着いています。近くにいた人に「あの鞭は何ですか？」と尋ねると、「フラゲルムとかいう骨や内臓までえぐるローマ式の鞭だよ。むごいものだなあ。あんなもので鞭打たれたんでは、三九回を数えるまでに死んでしまうんじゃないか」と言うのです。とても正視するに忍びなく、私は逃げるように、その場を立ち去りました。

あまりの陰惨な光景に、私は^{ぼうぜん}呆然として市中を歩きながら、自問自答していました。「あの男たちが何をしたのだろう。なぜあんな残酷な鞭打ちを受けなければならないのだろう。あの中にナザレのイエスもいたはずだ。彼がどんな悪業をしたのか知らないが、今まで聞いた噂は、決して悪い事じゃなかった。異端の教えだと言う連中も確かにいたが、むしろ、病人を癒し、目や手足の不自由な人を奇蹟によって治したとかいう良い話ばかりだった。それなのになぜ…。」

自分がどれほどの間、またどこをどのように通っていたのか覚えていませんが、目の前の群衆が急に割れて、そこに十字架を背負って市中を引き回されていた、あの犯罪人のひとりがドサッと倒れたのです。私も思わず驚いて身を引きましたが、その人こそ、ナザレのイエスだということは一目見て分かりました。^{ひんし}瀕死の状態ながら、他の二人の男たちとはまったく異なっていたからです。

すると突然、周りの人々が私を前に押し出し「お前が代わりに担いで^{かつ}やれ！体が大きいんだから！」と叫ぶのです。ところがその時、私の心の中に湧き起こったのは、^{れんひん}憐憫ではなく、恐怖感でした。「関わり合いになりたくない！関わってはダメだ！」とっさに浮かんだのは、妻と子供たちがあの恐ろしい鞭で打たれる姿だったからです。そのすさまじいほどの恐怖の中で、ナザレのイエスと目が会った時、私は一瞬にして不思議な思いに包まれました。彼の目がたたえていたのは恐怖ではなく、^{こんべき}苦悩でもなく、また、懇願でもありませんでした。何と言うべきか、たとえて言うなら、澄み渡った紺碧の空にふと覚えることのある深い慈悲(ミゼリコルダ)とでも言ったらよいでしょうか。それは私の恐怖を一瞬にして包み込んだのです。私はまるで吸い込まれるように、彼の十字架を担ぎました。それは正しくは十字架というよりも、横木でしたが、肩に食い込むその重さは優に百キロはあったでしょう。「これほどの重荷を瀕死のこの方が、ここまで担いで来たとは…」と思うと涙がこみ上げてきました。やがて、それがゴルゴダの丘に立ててあった縦木と組み合わされて、主の十字架となったのです。

しかしそこまで行く道のりの何と遠かったことか。途中で何度もあの方は倒れました。ところが、それに追い打ちをかけるように^{のし}罵りや^{あざけ}嘲りの言葉だけでなく、唾を吐きかける者さえいたのです。しかし、あの方の口から発せられたのは恨みの言葉ではなく、むしろ信仰の兄弟ルカが、後に次のように書き記した通りでした。

大ぜいの民衆と、悲しみ嘆いてやまない女たちの群れとが、
イエスに従って行った。イエスは女たちの方に振りむいて言われた、
「エルサレムの娘たちよ、わたしのために泣くな。むしろ、
あなたがた自身のため、また自分の子供たちのために泣くがよい。
『不妊の女と子を産まなかった胎と、ふくませなかった乳房とは、
さいわいだ』と言う日が、いまに来る。
そのとき、人々は山にむかって、われわれの上に倒れかかれと言い、

**また丘にむかって、われわれにおおいかぶされと言い出すであろう。
もし、生木でさえもそうされるなら、枯木はどうされることであろう」。**

(ルカ23・27-31)

それが何のことを指しているのか、私にはまったく分かりませんでした。しかし、これが後に起きるエルサレム陥落を預言していたとは、思いもよらないことでした。苦しみの真っ直中にある自分よりも、四〇年後に襲う大きな悲慘と苦しみを思って、あの方は人々のことを悲しんでおられたのです。

やがて私たちはゴルゴダの丘に着きました。重い横木を取り除かれた解放感を覚えながら私は丘の上によるめき倒れましたが、「あの方は？」と見ると、すでに兵士たちによって十字架に太い釘で手足を打ち付けられ、他の二人の強盗たちと並べて、その十字架が立てられるところでした。頭上には「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」との罪状書きが掲げられました。

人々は、この王なるイエスに、唾を吐き掛け、服をはぎ取り、口ぎたなく罵り続けたのです。しかも、隣りで一緒に十字架に架けられていた強盗たちさえも「おまえはキリストではないか。それなら、自分を救い、また俺たちも救ってみろ」と嘲ったのです。

「瀕死の身体で市中を引き回され、あげくの果てに晒し者にされている。どんなにか悔しいことだろう。俺も肌の色のことで馬鹿にされるたびに逆上し、あの二人の男たちのように、恨みつらみのこもった呪詛を吐いて、復讐の念に駆られたんだ」と思った瞬間、あの方の口から発せられた驚くべき言葉が聞こえてきました。

**「父よ 彼らをおゆるし ください
彼らは 何を して いるのか わからずに いるの です」**

あえぎあえぎでしたが、ひとことずつ、確かに、父なる神に捧げられた、私のためのとりなしの祈りでもありました。この期に及んで、なおも人々の赦しを請うこの方こそ、本当に神の御子・キリストに違いないと私は確信したのです。そのときです。それまで隣で罵っていた強盗のひとりが、主イエスの言葉を聞いて、雷に打たれたように叫ぶのが聞こえました。

「おまえは同じ刑を受けていながら、神を恐れないのか。
お互は自分のやった事のむくいを受けているのだから、
こうなったのは当然だ。しかし、このかたは何も悪いことをしたのではない」。
「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、
わたしを思い出してください。」

主イエスは彼にむかって、はっきりと、こう言われたのです。

**「よく 言って おくが あなたは きょう
わたしと 一緒に パラダイスに いるで だろう」**

なんという、おごそかで愛に溢れた言葉でしょうか。ご自分が今にも絶命するという、いまわの際に発せられた、主イエスの権威に満ちた約束でした。両手両足を釘で打ち付けられ、身動きできない十字架の上にさえ、悔い改めたひとりの魂のために、パラダイスの門が開かれるのを私は目撃したのです。もし、この強盗がもっと早く悔い改めていたら、彼の人生はどんなにか素晴らしいものになっていたことだろうと思われたことでした。しかし、悔い改めるに遅すぎることは決してないのだ、ということを知りました。十字架の上にさえパラダイスへの門はあったのですから。



やがて昼の十二時ころ、太陽は急に光を失い、全地が暗くなって三時に及んだとき、十字架の上から静かで細い呻き声が聞こえました。「エリ エリ ラマ サバクタニ…」。それが「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という、有名なダビデの詩篇の中の一節であることは、私にも分かりました。しかし、それがこんなも悲哀と寂寥感に満ちた、深い響きをもったものだと、その時はじめて知ったのです。神が神を見放す。

そんなことがあり得るでしょうか。しかし、確かにこの時の主イエスの呻きは、どんな人間も知り得ない、深淵のような深い絶望を表していると思ったのです。私自身も暗い海の底に沈んでいくような思いがしました。この深い絶望感、三日後に起きた主の復活によって希望と歓喜に変えられるのですが、その時は、全地を覆い尽くした暗闇の中で、私もただただ怯え震えているばかりだったのです。それから暫くして、大きな叫び声が聞こえました。

**「父よ、わが 魂を 御手に 委ねます。」
「成し遂げられた！」**

それなり、主イエスはこうべを垂れ、息を引き取られました。すると突然、全地を揺るがすような大地震が起き、周りにいた群衆は一斉に恐怖の叫び声を挙げました。「神がお怒りになった！この世の終わりだ！助けてくれ！」右往左往の大騒ぎでしたが、それは世の終わりではありませんでした。

何が「成し遂げられた」のかが明らかになったのは、三日後の復活を目撃してからのことでした。実にそれは、神の御子イエス・キリストによる、十字架の贖いと復活を通して始まった、新しい時代の黎明を告げる言葉だったのです。

主の十字架を背負ったクレネ人シモン。彼はその後、どのように生きたのでしょうか。パウロが書き送った「ローマの信徒への手紙」末尾に次のような一節があります。

**主にあって選ばれたルポスと、彼の母とに、よろしく。
彼の母は、わたしの母でもある。(ローマ16・13)**

使徒パウロは、まだローマを訪れたことがなかったにもかかわらず、ローマ教会員のルポスと彼の母に挨拶を送っています。「彼の母は、わたしの母でもある」と言うのですから、パウロの信仰にとって、育ての親とも言うべき女性だったのではないのでしょうか。かつて親しく交わり、いま息子のルポスと共にローマの教会に集う彼女への深い感謝が伝わってくるようです。そして彼女の息子ルポスは、クレネ人シモンの息子と同名であるばかりか、実は、同一人物だと言われています。

主の代わりに、その十字架を背負って、ゴルゴダの丘まで運んだクレネ人シモンがルポスの父親であり、シモンの妻がパウロにとって信仰の母だったとすれば、いったいどこでパウロはシモン家の人々と出会ったのでしょうか？

ペンテコステ

五旬節の日、エルサレムに初めてキリストの教会が誕生した聖霊降臨の場に、クレネの人々がいたことが記されています(使徒2・10)。また、ダマスコ途上での回心後、パウロの信仰を育んだのはアンテオケ教会でしたが、ルカはこの町に福音を宣べ伝えた伝道者たちの中に、無名のクレネ人がいたことを伝えています。

**さて、ステパノのことで起った迫害のために散らされた人々は
ピニケ、クプロ、アンテオケまでも進んで行ったが、ユダヤ人
以外の者には、だれにも御言を語っていなかった。ところが、
その中に数人のクプロ人とクレネ人がいて、アンテオケに行ってから
ギリシヤ人にも呼びかけ、主イエスを宣べ伝えていた。そして、主の
み手が彼らと共にあったため、信じて主に帰依するもの数が多かった。**

(使徒11・19-21)

そして、やがてこの群れに奉仕する人々の中に、サウロ(後のパウロ)の名前が現れます。

**さて、アンテオケにある教会には、バルナバ、ニゲルと呼ばれる
シメオン、クレネ人ルキオ、領主ヘロデの乳兄弟マナエン、
およびサウロなどの預言者や教師がいた。** (使徒13・1)

興味深いのは「ニゲルと呼ばれるシメオン」という人物です。シメオンとはシモンと同じであり、ニゲルとはラテン語で「黒い、黒人」という意味です。実際の黒人をニゲルとは呼ばないはずですから、シメオンは膚の色の濃い人だったのでしょう。北アフリカの暑い太陽で日焼けした、ガッシリとしたたく体躯のニゲル・シモン。ダマスコ途上で復活の主イエスに出会ったサウロ青年に、もしこのシメオンが、自分の目撃した主イエスとその十字架の出来事を話したのだとしたら、かつてキリストの迫害者サウロ、後に異邦人宣教の使徒となるパウロは、どんなにか深く魂を揺さぶられたことでしょう。そしてさらに、私たちをこれまで導いてきた福音書記者ルカは、そのパウロによって信仰の目を開かれた人だったと伝えられているのです。

57. 「よみがえりの命」 (ルカ23・50-24・43)

知り合いの息子でミッション・スクールに通っている高校生が言いました、「千田のおじちゃん、復活なんてバカなこと、言わないよね」。彼は必修科目の「キリスト教学」の時間に、イエス・キリストが死から甦ったということを聞き、驚いたというのです。「もちろん、信じているよ」と私が言うと、彼は押し黙ってしまいました。そうなのです。「復活」は神話やお伽^{ときばなし}、あるいは、リセット・ボタンのあるゲームの中でなら許せても、実際に起きたという、「そんなバカな」と思われがちなのです。私も信仰を持つ前は長い間、復活など非科学的で信じられないことだ、とっていました。

なぜ復活は、非科学的で信じられないことなのでしょう。それは、現代の科学では死人を生き返らせることができないので、実験などによって証明できなければ科学上の真理とは認めないからです。しかし、キリストの復活は歴史上の出来事なので、もう一度実験して証明するということはできません。歴史の検証にあたっては、文献記録をよく調査することが大切であるように、復活についても、当時の記録や、特に目撃者の証言である聖書をよく調べるのが、真否を確かめるのにふさわしい方法なのです。では、いくつかの観点から検討してみましょう。

第一に、四つの福音書が、キリストは十字架上の死から三日目の朝に復活したと記しています。比較して気づくことは、この四つの証言が大筋においては一致しながら、細かい点になると必ずしも合致していないという事です。たとえば、週の初めの日の早朝、墓に行ったのは数人の女性たちだったと言うのはマタイ(28・1、二人のマリヤ)、マルコ(16・1、三人の女性)、ルカ(24・1、女たち)ですが、その人数が一致しません。しかも、ヨハネはマグダラのマリヤが一人で行ったように書いています(ヨハネ20・1)。こう聞くと「ほら、やっぱり怪しい」と思うのは実はシロウト考えで、捜査・裁判のプロになると、数人の証言が細かい点まで判を押したように一致する時にこそ「クサイ」と直感するそうです。口裏を合わせた可能性が高いからです。この点で福音書記者の証言は、むしろ合格すると言えます。

第二に、イエスは復活したのではなく、その遺体が盗まれたのではないかとの疑問を持つ人がいるかもしれません。イエスを葬った墓は確認されており、そこは埋葬後に封印され、ローマ兵によって嚴重な番をされていたのです。ところが、日曜日の朝、その封印は破られ、墓は空になっていたというのですから、誰かが盗んだと考えるのが自然です。もし犯人がいるとすれば、次の3グループのうちのどれかに属することになります。

- ①イエスの弟子たち、あるいは、その周辺の人々(イエス派)
- ②ユダヤ教の指導者、あるいは、その一派(反イエス派)
- ③たとえば、ローマ兵といった誰かのいたずら(中立派)

もし復活が起きたのではなく、誰かがイエスの遺体を盗んだのだとすれば、第一の候補者は、①イエス側の内の誰かです。これは常識的には一番ありそうで、ユダヤ教側ではそのように主張しています。この辺りの事情について、マタイは次のように記しています。

**祭司長たちは長老たちと集まって協議をこらし、兵卒たちに
たくさんの金を与えて言った、『弟子たちが夜中にきて、
われわれの寝ている間に彼を盗んだ』と言え。万一このことが
総督の耳にはいっても、われわれが総督に説いて、あなたがたに
迷惑が掛からないようにしよう』。そこで、彼らは金を受け取って、**

教えられたとおりにした。そしてこの話は、今日に至るまで ユダヤ人の間にひろまっている。 (マタイ28・12-15)

しかし、キリスト教の歴史は迫害の歴史と言われるほどですが、その最大の殉教者であった使徒たちが、どうして自分が嘘と分かっていることに、真剣に命を投げ出していくことができたのでしょうか。「人間は利益のためにウソをホントだと言い張ることはある。だがウソとわかっていながらそのウソに命をかけるということは不可能である。」(千代崎秀雄)。こうしてみると、弟子達もしくはそのグループの誰かではありえないことになります。

では、ほかの人が遺体を盗んだという可能性はどうでしょうか。このうち②の反イエス派は全く問題になりません。なぜなら、イエスの弟子たちが「キリストは復活した！」と主張した時に、イエスの死体を持ち出せば、それで事は何の造作も無く一件落着くからです。それをしなかったということは、遺体盗みに関して、反イエス派は完全に無罪ということになります。

また、③の中立派やローマ兵のいたずらということもありえません。なぜなら、いたずらの動機は単に人を驚かせる事にありますから、盗んでいたとしたら、早晩、遺体を持ち出してきてアッと驚かされたに違いないからです。

このように考えてくると、誰かがイエスの遺体を盗んだということはありませんが、実は単なる推論からではなく、実際上それが不可能だったことを示す聖書の記述があるのです。

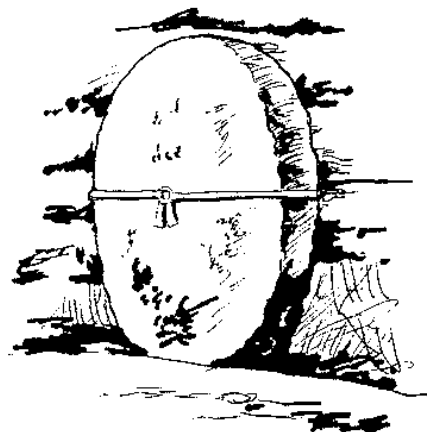
ピラトは埋葬後、厳重な墓の警備を要求するパリサイ人たちに「番人がいるから、行ってできる限り、番をさせるがよい」と言いました(マタイ27・65)。この「番人」と訳されている言葉、カストディアンは、良く訓練された兵士十六人からなる、ローマ軍の「方陣」を構成する一単位でした。この無敵を誇る方陣戦術がローマの世界帝国建設を推進したのです。戦闘機械のように訓練されていたカストディアンを破って押し入ることは不可能に近く、墓はこうして厳重に警備されていたのです。その彼らが「居眠り」(マタイ28・13) していて警備を破られたりすれば、軍規により死刑でした。これが、祭司長がローマ兵に言った「万一このことが総督の耳にはいっても、われわれが総督に説いて、あなたがたに迷惑が掛からないようにしましょう」という言葉の背景だったのです。このように、墓から遺体を盗み出すなど、不可能だったことがわかります。



ところで、マタイ27・66にはローマ当局によって、墓には「封印」の施されたことが記録されています。この封印は墓泥棒を防ぐためであり、粘土の上に公印が押されたものでした。ナザレで発見された大理石の破片にはギリシア語で「カイザルの詔勅... 墓を破壊もしくは納められているものを移し替え、または封印を外した者は直ちに裁判に付し... 有罪の場合は死刑に処すべきである」と記されていました。この大理石の破片はキリストの十字架以後の時代のものであることが確認されていますが、墓に関する犯罪はローマ法上、従来は罰金刑だったのに、なぜ死刑という極刑に変えられたのでしょうか。この疑問に答え得るものは、キリストの復活です。

さらに、マタイ27・60とマルコ16・4に、墓の入り口に転がしてあった石は「非常に大きかった」と書かれています。どのくらい大きかったのかについて、ベーズという新約聖書の古代写本には「男20人で

も動かすことができないほどだった」と記されています。昔のイスラエルのお墓は洞窟が多く、その入口には円形の切り石を転がして蓋にするのが普通でした。男20人でも動かせない大きさの石といえますと、少なくとも1.5～2トンの重さのものだそうです。道理で早朝に墓に急いでいたマリヤたちが「誰が石を動かしてくれるでしょうか」(マルコ16・3)と話し合っていたわけです。これらの事からわかるのは、ある人たちが言うような、「キリストは気絶していたのであり、後で意識が戻って、中から石を動かして出て、警備兵の間を見て逃げたのだ」などということはありません。



以上のことから、キリストが復活したのは、疑い得ない事実だということがわかります。キリスト教信仰は、イエス・キリストの十字架による死と三日目の復活という、この歴史的事実に立っているのです。しかし重要なのは、それが私たちとどのような関係があるのかということです。

こんなふうに言う人がいるかも知れません。「キリスト教はなぜそんなことにこだわるのか。宗教というものは高い道徳・倫理・深い真理を示して人間を救いに導くためのものではないのか？それに、二千年も前の十字架や復活がどうして、今を生きる力になるというのか？」これは大切な疑問です。ただ、宗教とは何かを論じることがここでの目的ではなく、復活の意義が問われているのです。

復活は「論じ」ても「存じ」ても力になりません。「信じる」ときに生きる力となるのです。ところが、主イエスの弟子たちでさえも、はじめは復活が信じられなかったということが伝えられています。この日、二人の弟子がエマオ村に行きながら、復活について議論している最中に、復活した当の主イエスが一行に加わったにもかかわらず、なかなか気づけなかったのです(ルカ24・13-32)。また以前、主イエスが病死したラザロを復活させる際のマルタとの会話を、ヨハネは次のように伝えています。

マルタはイエスに言った、「主よ、もしあなたがここにいて下さったなら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょう。しかし、あなたがどんなことをお願いになっても、神はかなえて下さることを、わたしは今でも存じています」。

イエスはマルタに言われた、「あなたの兄弟はよみがえるであろう」。マルタは言った「終りの日のよみがえりの時よみがえることは、存じています」。

イエスは彼女に言われた、「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか」。

マルタはイエスに言った、「主よ、信じます。あなたがこの世にきたるべきキリスト、神の御子であると信じております」。(ヨハネ11・21-27)

マルタは神の全能と終わりの日の甦りのことを「存じ」ていました。しかし、主イエスは「信じる」ことを求めたのです。このように、復活は「論じ」ても「存じ」ても力にならず、「信じ」る時に力になるのです。

では何を信じるのでしょうか。パウロは「コリント人への第一の手紙」第15章で、復活信仰について詳しく述べていますが、その神髄を次のように記しています。

もしキリストがよみがえらなかつたとすれば、あなたがたの信仰は空虚なものとなり、あなたがたは、いまなお罪の中にいることになる。

そうだとすると、キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまったのである。

もしわたしたちが、この世の生活でキリストにあって単なる望みをいただいているだけだとすれば、わたしたちは、すべての人の中で最もあわれむべき存在となる。

しかし事実、キリストは眠っている者の初穂として、死人の中からよみがえったのである。それは、死がひとりの人によってきたのだから、死人の復活もまた、ひとりの人によってこなければならぬ。アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである。 (第一コリント15・17-22)

かつてはキリスト教への過激な迫害者だったサウロが、復活の主イエスに出会って自分の罪の重さを知り、十字架の贖いによる罪の赦しを知って新生を体験し、この福音を遠く異邦の地へ伝える使徒パウロに変えられたのです。救いによる甦りの命を心から求める人々に、キリストは今も出会ってください。マルタに語られた主の御言葉をもって結びます。

「わたしはよみがえりであり、命である。

わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。

また、生きていて、わたしを信じる者は、

いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか。」

58. 「未完の福音書」 (ルカ24・36-53)

エルサレムにはイエスの墓と呼ばれる場所が二つあります。一つはその上に壮麗な「聖墳墓教会」が建っている所ですが、当時の面影はありません。もう一つは1883年にイギリスの元将軍ゴードン卿が発見した「ゴードン卿のカルバリ」と呼ばれる所です。考古学的には聖墳墓教会のある場所のほうが正しいと言われていますが、ゴードン卿のカルバリのほうが、遠くから見ると本当にラテン語の「カルバリ」が意味する「されこうべ」に見え、丘の下に小さな洞穴もあって、主が急いで葬られた場所はここだったのではないかと思われたことでした。その墓の内部を見て外に出ようとした瞬間、木のドアに書かれている言葉が目に飛び込んできました。「**HE IS NOT HERE FOR HE IS RISEN**」(「その方はここにはおられない。よみがえられたのだ」)ルカ24・6にある言葉です。不意を衝かれた私に「御使いが女性たちに告げた通りだ」という思いと共に、感動が湧き上がってきました。



復活の四十日後に天に帰られるまで、主イエスが為されたことを辿ってみると、その足跡は、肉体にあった時よりも遙かに精力的かつ縦横無尽です。空の墓の前で泣くマгдаラのマリヤに優しく声をかけた主は(ヨハネ20・16)、その日の午後、エマオに向かう二人の弟子たちに夕暮れまで同行しています(ルカ24・29)。そのすぐ後に10km以上離れたエルサレムで、弟子たちが隠れ集まっている所に現れました(ヨハネ20・19)。八日後、復活を信じられなくて悩むトマスに御自身を現した後(ヨハネ20・26)、直線距離でも百キロメートル以上離れた故郷のガリラヤに戻った弟子たちが、テベリヤ湖で漁をしている最中に現れ、岸辺で彼らと一緒に食事をしています(ヨハネ21・1)。この食事の後、ペテロに三度「あなたはわたしを愛するか」とお尋ねになったのです(ヨハネ21・15)。

マタイ、マルコ、ルカの「共観福音書」は、いずれもその末尾に、主イエスが弟子たちに語った「大宣教命令」または「大委任」と呼ばれる言を記しています。このうち、マタイの伝える御言葉がとても興味深く思われます。

**「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。
それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、
父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、
あなたがたに命じておいたいっさいの事を守るように教えよ。
見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。」**

(マタイ28・18-20)

ここには五つの命令文(行きなさい、…弟子としなさい、バプテスマを施しなさい、…守りなさい、教えなさい)があると言われます。ところが、このうち「弟子としなさい」だけが唯一の本動詞で、他はそのために「行って、…施して、…守ることを教えながら」というように、手段や方法などを表す分詞(英語で言えば ~ingの形)等で書かれているのです。これは何を意味しているのでしょうか？

実は、このことについて思い出があります。神学校卒業を間近に控えていた私には悩みがありました。それは、「宣べ伝えるべきはイエス・キリストの福音」という確信はあったのですが、「どのようにして宣べ伝えたいのかが分からない…」という思いでした。もちろん、どこかの教会の牧師として伝道牧会をすることは大切なことですが、「主イエスの宣教方法はどうだったのだろう…」と考えあぐねていたのです。そのとき、改めてこの聖書の箇所を学び直して、「弟子としなさい」という御言葉に鍵を得たように思い、このことに関する卒論を書いて卒業しました。やがて仙台での開拓伝道に遣わされた当初の手痛い体験については、第31回「光の中を生きる」に述べました。この体験を通して、「伝道は人間の業ではなく、主の業なのだ」ということを学んだのですが、その後、主がああ経験を通して教えようとされた事は、他にもあったのではないかと思われてきました。

主イエスは三年の公生涯を通して、たくさんの方を為されましたが、その中でも十二弟子を育てたということは、とりわけ大きなことでした。世界各地に派遣された彼らを通して、主が福音宣教を行なわれたからこそ、今日のキリスト教があるのです。私はこのことから「弟子訓練」こそが、宣教の重要な方法だと考えたのでした。しかし、これは間違いではなかったにしても、一つの危険性をはらんでいたと思うのです。それは一言で言えば「訓練という名の調教」の危険です。主イエスは弟子たちをご自分の意のままに働く奴隷のように調教したわけではありません。主は次のように言われました。

**あなたがたにわたしが命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。
わたしはもう、あなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人のしていることを知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼んだ。わたしの父から聞いたことを皆、あなたがたに知らせたからである。
あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。
そして、あなたがたを立てた。それは、あなたがたが行って実をむすび、
その実がいつまでも残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって
父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである。これらのことを
命じるのは、あなたがたが互に愛し合うためである。(ヨハネ15:14-17)**

「大委任」と言いますが、主イエスは何を・誰に委ねたのでしょうか。それは「行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ」ということを、御自身の友に委ねたとされるのです。しかし、いったい誰がこのような大役を果たすことができるだろうかと思われるかもしれませんが、この言葉には素晴らしい約束が続いています。

「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」

(マタイ28:20)

キリストは「インマヌエルと呼ばれる」ということがイザヤ7:14に預言されており、これは「我らと共にいる神」を意味しています。その名の通り、復活された主は、肉体にあった時とは比べものにならないほど縦横無尽に行き巡り、弟子たちを力づけました。インマヌエルの主は私たちがどこへ行くにも、どんな時にも、共にいて下さるお方です。主イエスの言葉は、その昇天される時の様子を伝える「使徒行伝」冒頭で、さらに次のように詳しく語られています。

イエスは苦難を受けたのち、自分の生きていることを数々の確かな証拠によって示し、四十日にわたって、たびたび彼らに現れて、神の国のことを語られた。そして食事を共にしているとき、彼らにお命じになった、「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい。ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう」。

さて、弟子たちが一緒に集まったとき、イエスに問うて言った「主よ、イスラエルのために国を復興なさるのは、この時なのですか」。彼らに言われた、「時期や場合は、父がご自分の権威によって定められるのであって、あなたがたの知る限りではない。ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」。

こう言い終ると、イエスは彼らの見ている前で天に上げられ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなった。イエスの上って行かれるとき、彼らが天を見つめていると、見よ、白い衣を着たふたりの人が、彼らのそばに立っていて言った、「ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう」。（使徒1・3-11）

この再臨預言の力強さに比べると、四つの福音書の終わり方はいずれも、どことなく「未完」の印象を与えます。しかし、実はそれでよいのです。なぜなら、イエス・キリストは永遠の救い主であり、その生涯を伝える福音書は、現代にも、また将来にも、主とその救いを求める人の内に、新たな生命とドラマを生み出してやまない「未完の福音書」なのだからです。「福音」は完成していますが、「福音書」は私たちひとりひとりに主が完成して下さいます。どうか、皆さんお一人お一人が、讚美と感謝をもって、主からの祝福に満ちたご自身の人生という福音書を綴ってください。主はいつも私たちと共にいてくださると約束しておられます。

「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである。」



「あとがき」

「全国各地の教会をまわりながら、多くの方々から受けたのが『福音書をやさしく読める本がほしい』という要望です。協力していただけますか？」と、大阪聖書学院の柴田理事長から相談を受けたのは一年半ほど前のことでした。

聖書については、既に良い註解書や信仰の手引書が数多くあるので、私が新たに書き加えるべきものはないと常々考えていましたので、返事にはしばらくの猶予をいただきました。企画の趣旨を更にお尋ねすると、学究的専門書や釈義よりも、具体的で身近な事柄として福音を読みたいという切実な思いからの要望であることが分かり、私も大いに共感するところでした。何千年も前の遠い異邦の地での出来事が、実は今の私たちの日常に直結しているということを発見するのは大きな喜びであり、それを分かち合うことは伝道者の喜びだからです。

幸い、五年ほどかかり百二十回で「ルカによる福音書」の講解説教をしたものがあったので、これを要約して文字化すれば可能ではないかと思い、異邦人記者ルカに基づく『私たちへの福音』を書き始めたのです。事がそう容易でないことはすぐに痛感され、改めて御言葉の広さ・深さ・高さに碎かれる思いの連続でした。しかし、主の御言はいつも慈しみに溢れ、その豊かさに励まされ、いったん書き始めると、楽しさにペンが進みました。その結果、当初考えていたものよりも随分とページ数が増えました。私には本を書いた経験がありませんでしたが、このような機会を与えられたことに、心から感謝しています。

この企画を進めてくださった柴田理事長はじめ、出版された大阪聖書学院に感謝いたします。岸本学院長からは励ましの言葉のみならず、「推薦の言葉」まで戴き恐縮しております。多くの方々の祈りと励ましによって本書があります。お読み下さる方々にとって、私たちの主イエス・キリストの福音をご自分のものとする助けになることができますなら、幸いこれに過ぎるものではありません。

感謝をもって

二〇一〇年七月 千田俊昭

著者 千田 俊昭

【略歴】

1951年、岩手県生まれ

1973年、東北学院大学法学部卒業

1988年、シンシナティ聖書神学校卒業

現在、旭ヶ丘キリストの教会牧師(宮城県仙台市)

【ホームページ】<http://church.ne.jp/AsahigaokaCC/>

【メールアドレス】xpistosi@k3.dion.ne.jp

【翻訳書】

ジョン・R・W ストット 著 ティンデル聖書注解「ヨハネの手紙」(いのちのことば社, 2007)

D・A・カーソン、ダグラス・J・ムー「新約聖書の基本」共訳:池田基宣(いのちのことば社, 2024)

「私たちへの福音」

2010年7月31日 初版発行

著者 —— 千田 俊昭

発行 —— 大阪聖書学院

〒535-0001 大阪市旭区中宮4-2-11

<http://church.ne.jp/obs/>

◆本書中では、日本聖書協会の「口語訳聖書」を使わせていただきました。